慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	河上公章句『老子道徳経』古活字版本文系統の考索(中)
Sub Title	Comparative study of the early printed editions of the Kajoko-Shoku text of the Roshidotokukyo (2)
Author	山城, 喜憲(Yamashiro, Yoshiharu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2000
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.35 (2000.) ,p.1- 160
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000035-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

河上公章句『老子道徳経』　古活字版本文系統の考索（中）

山城喜憲

古鈔本との系統関係

諸本との系統関係の概観

古活字版の本文は、刊行以前より日本に見在していた、所謂本邦伝来本を継承していると考えなければならない。其の祖本としては、版行当時、即ち近世初期慶長年間に見存していた伝写本即ち今日に言う古鈔本が、先ず想定されるであろう。

現存する河上公注本の伝本には、古鈔本系の他に、宋刊本、道蔵本及び、敦煌本の系統がある。宋刊本は、鎌倉時代末頃には既に舶載されていたことが、一杏Ⅰ一等の古鈔本に見られる「才」本との校異の書入れによって明かである。しかし、本邦所伝の宋版は未だ確認されておらず、古活字版の底本である可能性は薄い。道蔵本は、其の淵源は隋唐以前に遡るであろうし、唐鈔本も存在したであろう。また、現今通行の明正統刊本は宋蔵に拠るとも言われる。[1] しかし、中古中世以来の伝来本は知られず、当時日本に舶載されていたとは考え難い。敦煌本は、唐写本として、本文系統上の繋がりは想定されるとしても、それは、日本伝来の古鈔本を介して明かになることで、古活字版との直接の継承関係は考えられない。

要するに、古活字版の祖本としては、古鈔本以外を、想定することは難しい。只、此れは、あくまでも伝本状況の概観に基づいた、推測の域を出ない憶見と承知すべきであろう。

古活字版の本文を諸本と比較するとき、古鈔本とのより近縁な関係が予想される。しかし、古鈔本の一本を以て古活字版と対校すれば、両本間の相違はけっして少なくはない。又、別の一本を以て比較すれば、さらに別の異同が認められる。「諸本異同表」に示された通り、古鈔本諸本の間でも既に多くの異同が存在している。其の異同は、伝写に伴う譌脱に起因するもの、或いは助字の有無、通用別体等異体字使用による相違に止まらず、明かに異文と認められる事例が少なくないのである。

伝写の間に、異本が意識されていた事は、本文に伴って相承されてきた諸家の校異の書入れによって明らかである。本文の揺れは、主として其処に、即ち、複数の異本の存在に起因していると観ぜられる。或本にとっての異本は決して単一ではなく、伝写に際し異文が意図的に取り込まれ、又無意識の内に混入されてもいよう。結果として、現存する古鈔本相互の間には、本文上、複雑に淆錯した関係が窺測されるのである。

古活字版と古鈔本との関係にも同様の事態が認められ、数多の異同個所に於いて、一致する本としない本が、それぞれに異なり交雑した様相を示している。さらには、古活字版のみが孤立し、何れの伝本とも異なる本文も見られる。現存する古鈔本の限りでは、古活字版の直接の祖本と見做し得る程に接近した伝本は、存在しないと言わなければならない。

しかしながら、古活字版は伝来の古鈔本を襲う、という武内義雄の洞察について、現在の伝本状況を以てしても、疑義の介入する余地は無いと言える。繰り返し述べるが、祖本としては、古鈔本以外には考えられないのである。

しからば、祖本と想定されるにも関わらず、其の想定に不審を生み、或いは、否定的要因ともなり得る、古活字版と諸古鈔本との間に存在する数多の異同を、如何に説明すればよいのであろうか。その為にはやはり、本文異同の実態を、諸本との関繋に於いて把握し、個々に検証しておく必要がある。

内容構成上の同異の諸相

〔東急〕を例外として、古活字版と古鈔本諸本とは、内容構成面での大きな違いは無く、諸伝本の淵源は、同所に存すると言えよう。即ち、「老子経序」を冠し、道経を上、徳経を下とする二巻に仕立てられ、上巻三十七、下巻四十四に分章し、通じて八十一章とする（〔東急〕は分章せず章毎の改行段落も無い）。河上公注は、経文を適宜に分句し、句下に割注として配

置されている。此の構成は、古活字版、古鈔本共に同じである。しかし、仔細に比較すれば、古鈔本諸本の間、或いは古活字版と古鈔本との間に、必ずしも微少とは言えない形式上の差異が認められる。本文の検討に先立ち、本書構成上の異同を明らかにし、諸伝本の中での、古活字版の異相を確認しておきたい。

分巻の次第

古活字版は「老子道經上」「老子徳經下」の二巻としている。上下二巻の構成は、四巻本の〔道蔵〕を除けば諸本同じであるが、伝本の内には各巻を更に二分する構成を持つ本がある。〔斯Ⅰ〕はその顕著な例で、巻上巻頭内題「老子道経」の次行に「河上公章句第一」と題し、第十七章章題前行に「河上公章句第二」と、巻下内題「老子經下」次行に「河上公章句第三」と、第六十章章題前行に「河上公章句第四」と題され、第一章から第十六章、第十七章から第三十七章、第三十八章から第五十九章、第六十章から第八十一章と全巻が四分されている。此の巻立区分の次第は〔宋版・世徳〕と一致し、四巻本〔道蔵〕の区分次第とも符合している。〔敦Ⅰ・敦Ⅱ・敦Ⅲ〕も残簡部分の様態から同じ体式と推定される。此の各巻二分の体式を、一部崩れた形で部分的に継承している古鈔本が伝存している。

〔聖語〕は、冒頭第一行に「河上公章句第三」と題され、又、第六十章首は章題「居位第六十」の前に一行を取り、「河上公章句第四」と題署してある。これは〔斯Ⅰ〕の体式と同じである。同軸は、首尾料紙が欠損しているようで、内題、尾題は不明であるが、上下二巻の内の下巻であることは明白である。従って、各巻を二分する形式の伝本と見做される。

また、〔東急〕は、上巻は首に「老子道經（隔六格）河上公章句」と題し、第十七章首には小題は無く、二分されてはいない。しかし、下巻は、首「老子徳經下（隔三格）河上公章句第三」と、第六十章首は「老子徳経（隔四格）河上公章句第四」と題し、二分されている。上巻下巻で分巻の次第が異なっており、所拠の底本が別系本の取合わせであったと推測される。

この様に、〔斯Ⅰ〕及び、〔聖語〕（存巻下）、〔東急〕の巻下は、〔道蔵〕等の四巻本の原状を彷彿させる伝本として、古鈔本の中でもやや特異な様相を呈している。現存する各巻二分構成の古鈔本は以上の三本に止まるが、〔梅沢〕の淳風弟十七章題右旁の「老子道經　河上公章句弟二イ」との書入れ、又〔無窮〕の第六十章首行右側行間に見える「老子徳經　河上公章句第四イ本」との書入れが注目され、異本として、当時、必

ずしも希な存在では無かったものと考えられる。

更に、「弘文・斯Ⅱ」は、各巻二分されてはいないが、巻上巻頭に「河上公章句第一」、巻下巻頭に「河上公章句第三」と題し、「杏Ⅰ・書陵・龍門・足利・慶Ⅱ」は、巻上巻頭に「河上公章句第一」と題し（「足利」は巻下首部分が欠落、「慶Ⅱ・龍門」は欠巻下、「杏Ⅰ」は存巻上零本であり下巻巻頭の原状は不明）、「無窮」は巻上巻頭「河上公章句第一品」と題している。この「第一（品）」「第三」という小題下の次数標記は、各巻を二分する伝本の形式の残影と見做されよう。

この「第一」或いは「第三」の標記の有無に就いて、複数の古鈔本に校異の書入れが見られ、早くから、異本、別本の認識を伴って双方共に相承されたことは明らかである。「杏Ⅰ」には「第一」の右旁に「已上二字家古本无又或本／第一下有品字」の書入れが有る。同様の書入れが「足利・慶Ⅱ・書陵・東洋（青筆）」及び東洋文庫蔵古活字版に見られる。「杏Ⅰ」の奥書に拠れば、その本は清家相伝の本であり、「東洋」に移写された本奥書も清家の書写識語であることは上記（本稿上68頁、64頁）の通りで、此の書入れは清原家家説として伝えられた校異の注説であろう。そうであれば、「家古本」とは清原家の旧本ということになり、その本には「第一」の二字は無かったことが明かとなる。旧本に対して当然、「第一」の二字が加えられた新本が存在しなければならず、その本が、取りもなおさず「杏Ⅰ」等の本文ということになろう。尚、此の書入れに見える「品」字を有する「或本」は「無窮」と吻合する。

又、「第三」に就いて、「東洋」及び東洋文庫蔵古活字版には「句」字下に小圏を付し「第三中本」と、「弘文」は「第三」下に「二字無古本」との書入れが見える。「弘文」書入れの由来は明らかでないが、「第三中本」の校異注は、前例同様清家相伝の注説と考えられる。字面通りならば、中原家本には「第三」の両字が有り、清原家本には無いという事になろう。

そして、「陽Ⅰ・筑波・杏Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋」諸本及び古活字版は、「第一」「第三」の次数は無く、純然とした二巻の巻立構成を取っている。

以上、分巻の次第について、諸本を概観したのであるが、現存古鈔本の様態を整理すれば、

A、各巻二分した構成を持つ本「斯Ⅰ・聖語・東急（巻下）」、

B、二分されない本「陽Ⅰ・書陵・杏Ⅰ・龍門・無窮・筑波・斯Ⅱ・足利・弘文・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急（巻

上)」に大別され、Bには、

BA、各巻二分構成の体式を一部残存した本、即ち、「第一」「第三」の次数標記を残す「書陵・龍門・杏Ⅰ・無窮・斯Ⅱ・足利・弘文・慶Ⅱ」の諸本と、

BB、純然とした二巻本の形式に整えられた「第一」「第三」の次数標記の無い「陽Ⅰ・梅沢・筑波・東大・慶Ⅰ・大東・東洋・東急(巻上)」の諸本が含まれ、古活字版は此のBBの形式を持つ。

BA諸本が存在することで、伝本の形態上の推移としてA⇩BA⇩BBの変遷過程が図式的に捉えられるように思われる。しかしながら、先に指摘した「杏Ⅰ」等の清家の書入れから明らかなように、実際の伝写の経緯は、BB⇩BAである場合も認められ、個々の現存伝本に即して見るとき、本文内容に及んで、A⇩BA⇩BBの系統が確認される訳ではない。

河上公注本の原初の形態はどの様な巻立であったのか、原本或はそれに近い本が発見されない限り、推測の域を出ず論証は難しい。ただ、『經典釋文敘録』が「河上公章句四巻」を著録し「道蔵」が四巻であることは、唐以前より四巻本が存在したことを裏付ける。一方で、『隋書經籍志』『舊唐書經籍志』『唐書藝文志』は何れも二巻と著録し、唐代には二巻本が主流であったことも、また想像に難くない。我が国では、『日本國見在書目録』に「老子二周柱下史李耳撰漢文時河上公注」と著録され、平安時代初期以降二巻本が伝承されたことは疑いなく、遣唐使以来、日宋、日元の交流の間に四巻本等が新たに将来された経緯も充分に予想される。二巻本、四巻本、或は、各巻二分構成の本が、平安時代から併存し、主に博士家において相伝されたのであろう。大江、中原、清原等博士家に、家本が授受相承されていたことは、古鈔本に写し継がれた書入れに、「江本」「中本」或いは「宣賢本」との標記の校異が存することに拠って明らかである(本稿上45頁)。諸家家本の実態は、その寥々たる書入れに拠って窺知されるに過ぎず、全貌を窺うことは不可能である。家間の交流に伴い、訓釈音義等の家説のみならず、各家本の本文も、混交、交雑した様相を累加して行ったように思われる。現存する古鈔本の殆どが、本文においても錯綜した様相を示し、伝本間の関繋は極めて複雑である。

巻立構成の相違について部類した、A、B、あるいはBA、BBの類別も、必ずしも本文上の親疎の関係を反映してはおらず、古活字版と共にBBに含まれる諸本間でも、例えば古活字版と「東洋」との関係は、「陽Ⅰ」と比較して著しい隔たりが認めら

れ、又、BAの「書陵」との関係より遥かに疎遠である。

分章次第

道徳経八十一章の章立ては河上公章句に始まる、と言われてきた。此の通説の起りとその真偽については、未だ充分に納得のいく説明はなされていない。只、八十一分章の起源は河上公章句の成立とともに、後漢時代に遡る可能性があるとの指摘がある[2]。我が国往時に於いて、この説が行われた証跡は具にし難いが、一つに『老子虞齋口義』の影響が認められる。その「発題」に「然河上公分爲八十一章、乃上經法天、天數奇、其章三十七、下經法地、地數偶、其章四十四」と見え、『虞齋口義』が普及し始めた室町後末期当時には周知されていたであろう。清原宣賢講とされる『老子経抄』には「然トモ、河上公分テ、八十一章ニスル也、天数奇卅七也、故ニ道經卅七章ニ分也、地数偶四十四也、故ニ徳經四十四章ニ分也」と、又、「河上公ハ、八十一章ニ分テ、註ヲ作也」と見え、『虞齋口義』を踏まえた講説と思われる。

此の通説を以てすれば、河上公章句本は当然八十一章分章本のはずであり、事実、古活字版はもとより伝本の殆どは此の構成を取っている。しかし、本邦伝来の現存古鈔本の中で、「東急」のみは此れと異なり、各章間には章次数標記も段落改行も無く連続して書写されている。かかる形態の伝本が八十一分章本と並んで、古くより伝承されてきたのか、八十一章本が改変された本なのか、論證に資する根拠に乏しい。しかし、この形式が、敦煌出土の河上公注本（S三九二六）に近似している点は、諸本の伝流を考察する上で特に留意されるべきであろう。

本邦伝来本の内、「東急」に、古活字版等とは径庭した此の特異性が見られる点を、此処に、確認しておきたい。

章題の有無と標記の相違

古鈔本には、各章頭に於いて、章題章次数の標記が有る本と、無い本があり、標記の有る本には、二字句を以て章題とする本と、章頭の字句を取って章題とする本がある。第一章について諸本章題の程式を表示すれば以下の如くである（上1オ23）。

A體道■■第一「活Ⅰ・活Ⅱ・天理・陽Ⅰ・梅沢・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵」
A′□□■章□□「武内・東大・東洋」
B道可道章□□「慶Ⅰ・大東・仁和・筑波・弘文・慶Ⅱ」
C■■■■■■■■「書陵・龍門・無窮・足利・斯Ⅱ・東急・杏Ⅰ・六地・陽Ⅱ」

下巻のみを存する「聖語」はA、「杏Ⅱ」はCの体式である。「筑波」は、多くはB式の章題であるが、皈根章第十六、淳

風章第十七、俗薄章第十八、還淳章第十九、異偽章第廿、反朴章第二十八の如きはA′の形式を取っている。

〔弘文〕は、第七十五章以下はA形式の章題に変わっている。〔梅沢〕は、第六十二から第六十九までは章頭前一行を空白にしたまま未題、〔聖語〕も第六十三以下、同様に未題である。

B式に従う諸本の章題は、採用する章頭字句に長短詳略が有って、一様で無い。第二章に於いて、〔慶Ⅰ・大東〕が「天下章第二」とし、〔筑波・弘文・慶Ⅱ〕が「天下皆章第二」と題する如くで、その外、詳細は「異同表」に示した通りである。

現存伝本に因る限り、此の、三様或いは四様の形式が、河上公注本の本文系統を端的に反映しているとは言えない。A類に属する古活字版は、同類の〔梅沢・斯Ⅰ・聖語〕よりも、本文上遥かにC類の〔書陵・龍門・無窮〕に近い。本文上径庭の最も甚だしい〔宋版・世徳・道蔵〕と同形式であることは、伝本系統の複雑さ、それを解明することの困難さを象徴している。

此の章題の有無、或いは形式の相違についても、伝写の過程において早くから異本として認識されていたことは、次の書入れによって明らかである。

〔杏Ⅰ〕には、本文冒頭第一句の右旁、眉上より行間にかけて「□□□□第一」（後の例に拠り欠字部分は「道可道章」の四字である）と墨書され、其の下に「以後此勘物无古本」との注説が見え、又、左旁には「一本云體道第一」と朱の書入れが有る。此の両様の章題は、同零巻中に残存する章頭部分に同様に標記されている。〔足利〕にも〔杏Ⅰ〕と殆ど同様に「道一章一以後此勘物无」「一本云體道才一」の書入れが有る。

また、同意の書入れとして、〔書陵〕も同所に「此章名家古本无」と（〔書陵〕は章名を題しないので「此章名」に対応する本文は無いが、次章以下の例から、「道可道章第一」六字の脱落と判明する）あり、同文の書入れ（青筆）が〔東洋〕にも見られる。更に、東洋文庫蔵古活字版の経文第一句「道可道」右旁に「道可道章第一イ中」と有って、その右に接して「此章名家古本无」と〔書陵・東洋〕と同文の書入れが存する。これらの書入れは、清原家説と見られ、清家古本には、章題標記は無く、章頭句を章題とするのはイ本、また中原家本であり、別に「體道」等二字句を章題とする一本も存在した。古活字版は其の一本を形式上踏襲したと言える。ABCの各体式が、平安時代より長期間にわたって併存し、伝写相承されてきたのであり、その間に本文の交雑が進行し、章題標記の相違に応じた本

文上の特徴は湮滅して行ったものと考えられる。

古活字版が襲用しているA′A型二字句の題名で、諸本によって以下の如く若干の異同が存する。

第十二章「撿欲」を「陽Ⅰ」が「撿慾」に作り（上9オ6 448）、第十六章「歸根」を「天理・筑波」が「皈根」に作り（上13オ2 657）、第三十三章「辨德」を「斯Ⅰ・宋版・世德・道蔵」が「辯德」に作り（上27ウ1 1509）、第四十三章「徧用」を「梅沢・道蔵」が「偏用」に作り（下6ウ1 283）、第四十六章「儉慾」を「梅沢・武内・東大・東洋・聖語・斯Ⅰ・宋版・世德・道蔵」諸本が「儉欲」に作り（下8オ5 378）、第四十八章「亡知」を「梅沢・東大・東洋・聖語・斯Ⅰ・宋版・世德・道蔵」が「忘知」に作る（下9オ6 419）等の異同は、何れも通用字の使用によるもので、題意において相違は無い。

第二十章「異俗」を「筑波」が「異偽」に作り（上15ウ3 828）、第二十五章「象元」を「陽Ⅰ」が「象無」に作り（上20オ4 1684）、第五十二章「歸元」を「陽Ⅰ」が「滞無」に作る（下12オ4 557）。これらは、書写字体の近似に因り、伝写に伴って生じた異同と見做されよう。しかし、第二十章章題については、「慶Ⅱ」眉上に標記された別題は、行草体で判読に苦しむが「異俗」より

は「異偽」と読め、「筑波」と同じ「異偽」と題する本も行われていたと考えられる。また、第二十五章の「象元」「象無」の異同も、「梅沢」の「元」字右旁に「无イ」の書入れが存し、「象无」或は「象無」と題する本が室町期以前から行われていたことが判明する。更に、「弘文」の章題「有物混成章第廿五」下に「一本云象無第廿五」と墨書され、「大東」題下に「象无章」と、「慶Ⅱ」眉上に「象无ー」との書入れが有り、「筑波」は題下に「或象無元章」と別題を記し「無」字に見消ちを付している。また、清原宣賢講とされる『老子経抄』の清家文庫本は「象無」とし、同書京都大学文学部蔵本は「象元」に作る如く、近世初に及んで両題名の混乱が見られる。五十二章の「滞無」についても、清家文庫本『老子経抄』に「題号ヲ、皈元ト云ハ、ナクメ、滞無トシタル本、在之」（京都大学文学部蔵本には此の文は無い）の一文が見え、「滞無」と題する本が行われていたに相違なく、此れも、「陽Ⅰ」に限った誤写とは考えられない。

第四十八章で「武内」が「志知」に作る（下9オ6 419）のは「忘」を「志」に誤ったのであろう。

第二十四章「苦恩」を「梅沢・武内・東大・東洋」は「善思」

と題している（上19ウ2 1041）。此れも、元来は書写字体の近似に起因する異同と考えられる。しかし、古活字版の他〔陽Ⅰ・天理・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕が「苦恩」と題しているが、何れが本来の章題なのか明らかでない。清家文庫本『老子経抄』は、該章頭「善思章第二十四」と題し、其の左行間に「本経ニハ、苦恩章トアリ、以異本ニ勘也」の注記が見られる（京都大学文学部蔵本には無い）。異本の「善思」を是として採用したのであろうか。何れにしても、「苦恩」「善思」の両題名が、併存して行われていたことは確かである。

第五十七章「淳風」を〔東洋〕は「淳朴」としている（下16ウ2 755）。〔東洋〕に限っての此の異題は、誤写と見做されておかしくはない。しかし、〔東洋〕は、毎章首に章題の所以について注説の書入れが有るが、本章には「此章者、真人无為道者、明下以質素淳朴一為上徳也、然則道素而徳朴者、非天徳一哉、故以淳朴一次玄徳一者也」と見え、誤写ではなく、確かな由来の有る章題として認められなければならない。因に、第十七章章名も「淳風」であり、両章同題であることは不審である。むしろ「淳朴」が本来の題名と観るべきなのかもしれない。

その外、B、C型章題の諸本で、本題に旁記された別題、或いは校異の書入れとして記された章題には、古活字版等と異なる二字句の名号が認められる。

第一章の「體道」は〔弘文〕に「時通」と見え、第六章「成象」は〔斯Ⅱ〕に「故象」と、第十三章「厭耻」は〔大東〕に「猒取」と、第十四章「賛玄」は〔弘文・大東〕に「替玄」と、第二十二章「益謙」は〔筑波・慶Ⅱ〕に「尽謙」と、第二十四章「苦恩」は〔斯Ⅱ〕に「吉恩」と、第二十七章「巧用」は〔慶Ⅱ〕に「功用」と、第三十六章「微明」は〔弘文〕に「微妙」と、第三十七章「爲政」は〔弘文〕に「若政」と、第四十四章「立戒」は〔大東〕に「玄戒」と、第四十五章「洪德」は〔筑波〕に「洪聴」と、第四十八章「亡知」は〔筑波〕に「玄知」と、第五十五章「玄符」は〔筑波〕に「玄府」と、第五十八章「順化」は〔弘文〕に「顕化」と、第五十九章「守道」は〔慶Ⅰ〕に「守人」と、第六十章「居位」は〔杏Ⅱ〕では本題下に「君位章／居位章」と両題が併記され、第六十三章「恩始」は〔弘文〕に「恩德」と、〔大東・杏Ⅱ〕に「思始」と、第六十四章「守微」は〔無窮〕に「玄微」と、第六十六章「後己」は〔弘文〕に「後也」と、第七十四章「制惑」は〔弘文・大東〕に「制或」と、〔無窮〕に「制戒」と記されている。

これらの異同は、第五十九章の「道」「人」の違いを除けば、何れも字形の近似、或は音通に因る誤写の蓋然性が高い。しかし、此処に挙げた異題を尽く伝写の譌として不問に付すのは危険であり、やはり検証が必要である。

第二十二章は「益」「盡」（尽）の字形の類似が認められる。しかし、〔梅沢〕は、「益謙」と題し、「益」字右旁にイ本との校異の書入れが有る。その校字は判読が難しいが「盡」或は「盖」、恐らくは「盡」と看取される。とすれば、「益謙」「盡（尽）謙」の双方共に章題として両存していたことになる。

第六十三章の「恩始」「思始」の異同も「恩」「思」字形の近似に因るとは容易に推測がつく。しかし、どちらが本来の題名であるか、決定は難しい。現存の古鈔本のうちに「思始」と題した本が無いという理由で、「恩始」を是とし、「思始」を誤写として排除することは危険である。『老子経抄』では「思始章」の題を掲し「始ハ道也、思ハ道」との講述がある。従って、「恩始」「思始」の両題が併存していた事が確認される。

第五十九章の「道」「人」の顕著な相違は別題が行われたことを示唆する。事実〔杏Ⅱ〕には、本題下に添記された二字句題「守道章」の「道」字左旁に「人イ」と校異の書入れが見られ、「守人」と題する異本が存在した事は確かである。

以上、二字句章題の異同の実態について検証した結果、管見の古鈔本に限っても多くの異題が確認され、それが同時或は通時的に併存して伝えられた実状が判明した。古活字版は、この異文併存の状況に在った伝来本の章題を選択踏襲したと想定される。しかし、同じA型として部類される諸本の内には〔宋版・世徳・道蔵〕が含まれ、古鈔本よりも寧ろ近い様相が認められる。此の事実をどのように理解すべきか、現存伝本に制約された検証では、説明する事は困難である。只、古活字版の各章個々の章題は尽く既に古鈔本に存した名号であり、本邦に於ける河上公注本伝流の過程で、摺本即ち宋刊本の本文が介在した事実も知られている。従って、本文上部分的に宋刊本により近い古鈔本が存在していたと仮定してもよいのではないか。この場合、章名題署の体式に於いて、〔宋版〕に極近い古鈔本が嘗て存在したと想定し、古活字版は、その古鈔本の章題を襲用したと考えるのが最も妥当であろう。

本文の同異

異同量から見た、諸本との親疎の関係

附表1～3は、「活Ⅰ」から見た諸本の異同量の一覧である。附表1・2の各枡は各本章毎の異同量の総計を、列最下段に各章の量数を累計し本毎の総量を表し、下方欄外に、異同総量をグラフ化して、視覚的に比較対照し易いようにしてみた。

附表1は、巻上部分（第一章至第三十七章、「老子經序」部分の異同は除外した）の異同量を示す。対校本は、表の最上行に掲出した通り、「活Ⅱ・天理（存巻上）・陽Ⅰ・書陵・無窮・龍門（存巻上）・足利・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・弘文・慶Ⅱ（存巻上）・筑波・梅沢・武内・東大・東急・東洋・斯Ⅰ・世徳・宋版・道蔵・杏Ⅰ・敦Ⅰ・六地・陽Ⅱ・治要」の二十七本であり、「仁和」は調査未了の為に割愛した。「杏Ⅰ・敦Ⅰ」は零本、「治要」は節略本、「六地・陽Ⅱ」は無注本であるので、巻上経注全文に就いての比較は出来ない。残りの二十二本の内「活Ⅱ」即ち異植字版との関係は上述した通りであり、「天理」は、寛永四年成立書写の注釈書で、祖本如何が問われる此処での対象からは除外されよう。「天理」「通考」の両後出本との関繋については「古活字版以後の本文」として章を更めて詳述する。

「活Ⅱ」「天理」を除いた、二十本「陽Ⅰ・書陵・無窮・龍門・足利・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・弘文・慶Ⅱ・筑波・梅沢・武内・東大・東急・東洋・斯Ⅰ・世徳・宋版・道蔵」を比較すれば、古鈔本諸本に比べ「世徳・宋版」の異同量は遥かに大きく、「道蔵」は更に突出した量数を示している。此の事実は、古活字版の本文は「世徳・宋版・道蔵」と径庭乖離し、逆に古鈔本諸本とは近接した関係にある事を、明瞭に顕している。

古鈔本の中では「陽Ⅰ」が最も古活字版に近く、「書陵」がそれに次ぎ、「斯Ⅰ」が最も隔絶した様相を呈している。

附表2は、巻下部分（第三十八章至第八十一章）の異同量を表している。掲出した対校本は、「活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・足利・杏Ⅱ（存巻下）・筑波・弘文・武内・無窮・梅沢・斯Ⅰ・慶Ⅰ・大東・東大・斯Ⅰ・東洋・聖語（存巻下）・東急・世徳・宋版・道蔵・敦Ⅱ（存巻下首欠）・六地・治要」の二十四本である。「陽Ⅱ・敦Ⅲ」は対校未了の為に割愛し、「六地・治要」は巻上と同様の理由で対象から除外した。残りの二十二本に就いて、「活Ⅰ」との比較が可能である。只、「足利」は第三十八章、「梅沢」は第三十八章及び第三十九章の一部に欠損があり、また、「敦Ⅱ」は第三十八章と、三十九章の前半が失われているために、その分量数は少なくなっているが、総量に対する割合は小さく、異同量への影響は相対的に微少である。比較の結果は、巻上の場合とほぼ同じで、

「世徳・宋版・道蔵・敦Ⅱ」との乖離、「陽Ⅰ」との近接した様相が明らかである。また、古鈔本のうちでは、「斯Ⅰ・東洋・聖語・東急」が他本に比べ、古活字版とは可成疎遠な関係にあることが窺知される。

附表3は、巻上下通じての異同量の総計を表示している。掲出本は巻上下両巻具備する「活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・梅沢・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・世徳・宋版・道蔵」の十九本であるが、附表1、附表2に示された結果がその儘反映され、「世徳・宋版・道蔵」と乖離し、「陽Ⅰ・書陵」と近接し、「東洋・東急・斯Ⅰ」とやや疎隔した関係が、如実に顕れている。

この様に、異同量の対比の結果判明する事実として、古活字版と諸本との関係において少なくとも次の二点が指摘される。一つは、古鈔本各本は、それぞれ相応の異同量を示しながらも、「世徳・宋版・道蔵」或いは敦煌本と比較するとき、古活字版と相対的により近接した関係にある。この事実は、先に、伝本状況から推察し、古活字版の祖本は古鈔本であるとした想定を、輔翼するものと言えよう。

古活字版と「陽Ⅰ」との近接した関係

第二点として、管見の古鈔本の内では、「陽Ⅰ」が、古活字版と最も近接した関係にある。六二三という異同量は、「足利」の一二二五の約半数、「東洋」の一八二〇の約三分の一に当たり、古活字版と「陽Ⅰ」との隔たりは、それぞれの、二分の一、或いは三分の一程に少ない事を示唆している。此の近親性を裏付ける本文として、以下の事例が指摘される。即ち、古活字版が、古鈔本の内「陽Ⅰ」とのみ一致する本文である。

① 能爲第十経文「專氣致柔」下注「形體能應物而柔順也」の「物」、「書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・杏Ⅰ・東急・斯Ⅰ」は「之」に作り、「敦Ⅰ・宋版・世徳・道蔵」も同じ。但、「天理」「通考」は、古活字版「陽Ⅰ」に同じで「物」に作る（上7ウ5b360）。

② 無用第十一経文末句「無之以爲用」下注「故曰虚無能制有形」の「能」、「書陵・龍門・無窮・梅沢・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・斯Ⅰ」はこの字を欠き、「足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・東急」は「者」に作る。「敦Ⅰ」は「書陵」等と同じで「能」「者」共に無い。「宋版・世徳・道蔵」及び「天理」「通考」は古活字版「陽Ⅰ」と同じで「能」字が有る（上9オ5a446）。鄭校は、「敦Ⅰ」の無「能」、「斯Ⅱ」の作「者」を指摘し

「皆非」と。是非については暫く慎重でありたい。

③　賛玄第十四経文「能知古始是謂道紀」の「能」、〔書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ〕は「以」に作り、〔敦Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕も同じ。此処も、〔天理〕「通考」は古活字版、〔陽Ⅰ〕に同じで「能」に作る（上11ウ7 591）。なお、現行の王弼注本[3]、虞斎口義本[4]は「能」に作っている。島邦男『老子校正』[5]（以下、島校と略す）は河上公注本を「能」に、王弼注本を「以」に校正している。しかし、「能」「以」の異同は、河・王・林各本の別とは関わり無く認められ、伝本系統と関連付けることは、現在知られている諸本に拠る校勘だけでは難しい。

④　歸根第十六経文「王乃天」下注「能王則徳合神明與天通也」の「與」字の上に〔書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ〕には「乃」が有り、〔敦Ⅰ・道蔵・宋版・世徳〕も同じ。此処も〔天理〕「通考」は、古活字版、〔陽Ⅰ〕と一致し「乃」が無い（上13ウ5b 714）。鄭校は脱字と見做している。

⑤　任成第三十四冒頭経文「大道氾兮」下注「言大道氾氾若浮若沈若有若無視之不見説之難殊也」の「若浮若沈」を〔書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・杏Ⅰ〕は「若沈若浮」に作り、〔道蔵〕も同じ。〔宋版・世徳〕〔天理〕「通考」は、古活字版〔陽Ⅰ〕と同じである（上28オ3a 1541）。

⑥　亡知第四十八経文「取天下常以無事」下注「治天下常當以無事不當勞煩也」の下句、諸本間で次のように異同が多い。

不當勞煩■也〔活Ⅱ・陽Ⅰ・道蔵〕
□□□□民□〔書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・治要〕
□□□□□之□〔無窮・東急〕
□□□煩勞■□〔宋版〕
□□畜煩勞■□〔世徳〕
□□煩勞■■■〔聖語・斯Ⅰ・敦Ⅱ〕

〔書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・治要〕は「勞煩」下に「民」、〔無窮・東急〕は、「之」の一字が多い。〔聖語・斯Ⅰ〕は「勞煩」を転倒して「煩勞」とし、「也」字が無い。「通考」及び〔道蔵〕は、古活字版、〔陽Ⅰ〕と同じである。〔宋版〕は「不當煩勞也」に、〔世徳〕は「不畜煩勞也」に作り、〔敦Ⅱ〕は「不當煩勞」とあって〔聖語・斯Ⅰ〕と一致する（下9ウ4b 440）。鄭校は、〔斯Ⅱ〕の「民」を衍と見做している。

⑦　守微第六十四経文「學不學」下の注文「聖人學人所不學」の「不」字下に、一書陵・無窮・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・治要一は「能」字が有り「不能學」に作り、一慶Ⅰ一は「學」が無く「不能」に作る。一宋版・世徳・道蔵一は一書陵一等に同じく、また、一敦Ⅱ一は「能」字を「不學」の下に置いている。但、「通考」は古活字版、一陽Ⅰ一と同文である（下23オ7a1107）。

鄭校は、「通考」一陽Ⅰ一を正とし「能」を衍字と見做す。

以上七例は異同字句として比較的顕著な事例であるが、その他、通用字、或は字形の類似に起因する諸本間の異同で、古活字版が一陽Ⅰ一とのみ一致する例を挙げるならば、虚用第五経文「天地之間」下の注文「清五臓」（上4ウ4b202）、成象第六経文「谷神不死」下の注文「神謂五臓之神也」（上5オ2b218）及び「五臓盡傷」（上5オ3b221）、無用第十一経文「三十輻共一轂」下の注文「使五臓空虚」（上8ウ5a417）の「臓」字は、諸本全て「蔵」に作っている。但、「清五臓」の例だけは、一道蔵一が古活字版、一陽Ⅰ一と一致する。尚、一天理一「通考」は全て古活字版、一陽Ⅰ一と同じである。

又、成象第六経文「是謂玄牝」下の注文「爲形體骨肉」の「體」字は、諸本並びに「骸」字に作る。但、一天理一「通考」は、古活字版、一陽Ⅰ一に同じ（上5オ6a235）。

又、異俗第二十経文「如嬰兒之未孩」の「孩」字を一書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ一は「咳」に作り、一宋版・世徳・道蔵一は「孩」に作る。一天理一「通考」は、古活字版、一陽Ⅰ一と同字である（上16オ4863）。

又、象元第二十五経文「周行而不殆」下注文「在陽不燋」の「燋」は、一書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ一は「焦」字に作り、一宋版・世徳・道蔵一も同じ。一天理一「通考」は、古活字版、一陽Ⅰ一に一致する（上20オ7b1098）。

又、爲政第三十七経文「無名之樸亦將不欲不欲以静」の「樸」を、一書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・陽Ⅱ・六地・東急・斯Ⅰ一（一大東一はこの部分脱落）は「朴」に作る。一天理一「通考」は、古活字版、一陽Ⅰ一に同じである。一宋版・世徳一は一書陵一等に同じく「朴」、一道蔵一は古活字版と同じで「樸」に作っている（上30オ5 1663）。

又、淳風第五十七経文「人多技巧奇物滋起」及び注文の「多

技巧」の「技」字、〔書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・六地・治要〕は「伎」に作る。「通考」は古活字版、〔陽Ⅰ〕と同じである。〔宋版・世徳〕は〔書陵〕等と、〔道蔵・敦Ⅱ〕は古活字版と一致する（下17オ2 774）（下17オ2b 776）。

さらに、先に指摘した二字句章題標記の異同で古活字版と〔陽Ⅰ〕とのみ一致する題名を挙げるならば、第四十六章の「儉慾」と、第四十八章の「亡知」がある。「儉慾」は〔梅沢・武内・東大・東洋・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕諸本は「慾」を「欲」に作り（下8オ5 378）、「亡知」は〔梅沢・東大・東洋・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕が「亡」を「忘」に、〔武内〕が「志」に作っている（下9オ6 419）。

〔陽Ⅰ〕が、他の古鈔本と比較し、異同量において際立って近接した関係を示していることは、以上のような本文上の一致が反映された結果といえる。此の近接した関係に着目し、現存伝本の内に古活字版の底本を想定しようとするならば、その候補として〔陽Ⅰ〕が最も期待されよう。しかし一方で、相対的に少ないとは言いながら相当数の異同量が計測されている。次の問題として、此の〔陽Ⅰ〕を以て、古活字版の直接の底本、或いは古活字版の底本と緊密な関係にある同系本と見做す事が可能なのかどうか、考証が要請される。その為には、六二三という量数に示された異同の実態について、個々に検証する必要があろう。それに拠って、古活字版と古鈔本との関繋の傾向一般がより具体的に把握されるはずである。

〔活Ⅰ〕と〔陽Ⅰ〕の本文異同の実態

両本間の本文異同の要因は、概ね以下の六類に分けられる。

Ⅰ、〔活Ⅰ〕の誤植に起因する異同

Ⅱ、〔陽Ⅰ〕の誤写、衍脱に起因する異同

Ⅲ、異体字、通用字使用に起因する異同

Ⅳ、助字の有無、通用に起因する異同

Ⅴ、其の他、本文字句の異同

Ⅵ、内題、章題の異同

両本間の全ての異同を此の六類に分け、各類毎の異同量数とともに、個々の異同字句を具体的に示し、両本文の相違の実相を確認する。「老子經序」部分の異同も取り上げてあるが、附表1～3に対応させるため量数の計上は行わない。掲出本文は〔活Ⅰ〕に拠り、必要に応じて、〔陽Ⅰ〕の異文を示した。

Ⅰ、〔活Ⅰ〕の誤植に起因する異同　異同量五

先に指摘した（本稿上76頁）一活Ⅰ一の誤植七例の内、③（上15オ3a789）を除く（序4オ5 74）（上12ウ3b628）（上15オ6a805）（上26オ4a1435）（下27ウ5a1339）（下33ウ1a1637）の六例で、何れも字形の類似に起因している。一陽Ⅰ一を肇め諸本は全て正しく作り、此の六例は諸本とは無関係に古活字版の誤謬として孤立的に生じた異同である。従って、一陽Ⅰ一との親疎の関係を検討するに際し、本文系統上特に問題とする事例とはなり得ない。此の類の異同が総量六二三の内に占める量は五と少ない。

Ⅱ、一陽Ⅰ一の誤写、衍脱に起因する異同　異同量十九

（第2章）（上2ウ3b94）不辞謝而逆止也　止、作「上」
（第3章）（上3オ4b124）珠玉捐於淵也　淵、作「関」
（第4章）（上3ウ6a156）道渕深不可知也　深、作「除」
（第8章）（上6ウ5a307）壅之則止　止、作「上」
（第13章）（上10オ2a477）問何謂寵　寵、重写、衍
（第15章）（上13オ1b656）謂貴功名者也　貴、作「責」
（第17章）（上14オ2a732）上古無名之君　君、作「若」
（第20章）（上15ウ7b843）畏不絶学之君　君、作「若」
（第31章）（上26ウ2b1459）害無辜之民　辜、作「事」
（第33章）（上27ウ7a1531）目不妄視　目、作「日」
（第39章）（下3オ4a105）王相囚死休廢　休、作「体」
（第41章）（下4ウ3a183）聞道治身以長存　聞、作「開」
（第43章）（下6ウ2 284）馳騁天下之至堅　馳、重写、衍
（第56章）（下16オ1a731）結恨不休　休、作「体」
（第58章）（下18オ3b845）失正以來　失、作「矢」
（第64章）（下23オ1b1081）故無壊敗也　壊、作「懐」
（第69章）（下27ウ1b1323）侵取不休　休、作「体」
（第74章）（下30オ4b1463）治身者　治、作「活」
（第80章）（下34オ6b1683）不徴召奪民良時　召、作「占」

以上、衍字の二例を除けば、何れも、字形の相似、行草書写字体の近似に因る誤写と見做した。しかし、休、作「体」の如きは、本書所出の「休」字は全てで四字有り、其の内の三字迄が「体」に作ってある。書写者の筆癖で誤写と見るべきでは無いのかもしれない。止上、君若、失矢、召占等も、同様に考えるべきであろうか。

此の類の異同も、諸本との本文系統上の関連は無く一陽Ⅰ一に孤立的に生じた譌字であり、Ⅰ類と同様の意味で、あらためて検討するには及ばないであろう。

Ⅲ、異体字、通用字使用に起因する異同　異同量二七九

校勘の作業において文字の異同を問題とする場合、異体字の取り扱いに腐心するのが常である。写本の場合、往々にして字形の弁別に苦しみ、現今、異体字として認識通用されている字形との比定が困難なことも少なくない。また、本文の同異を検討する上で、異体字使用に伴う字義文義の相違は通常は生じないわけで、苦労昏迷して煩瑣な作業を行うだけの効用が有るのか否か、疑念も生まれる。殊に、写本と刊本の対比においては、文字表記の手段が根本的に異なり、古活字版の場合は、当然活字種の字形の制約を受け、底本の字形にどれだけ忠実であったのか疑わしく、写本に対して、異体、別体字を異同字として扱うことは意味を成さないようにも思われる。しかしながら、逆の場合、即ち、古活字版の伝写本であれば、転写に際して古活字版の字形に影響されることは充分に考えられることであろう。写本間の関係においても、伝写者の底本に対する忠実さの度合いによっては、異体字もその儘に伝写され、伝本系統を考察する上での肯綮ともなり得るであろう。伝存する古写本には、異体字を異本の異文とする校異の書入れが少なくなく、古人の異字に接する態度は決して疎かではない。従って、異体字を一律に校合の対象外に置くことは慎まざるを得ない。

附載の「諸本異同表」は、凡例に記したように、極一般的に現今使用されている略体、正体等の異体字は取り上げていない。しかし、上記したところに鑑みて、異同字として扱い量数①を与えた場合も有る。「浄」「淨」、「静」「靜」の違いは無視したが「浄」「静」は異同字と見做した如くである。古活字版と「陽Ⅰ」との間において、異体字、通用字使用に起因する異同として、以下の事例を認めた。

浄、作「静」（序3オ1 53）

序の「無爲自化清浄自正」句内の一字で、諸本の中「武内」のみは古活字版に同じく「浄」に作り、「陽Ⅰ」初めその他の古鈔本は「静」に作る。此れを、古活字版、「武内」の譌とは言えないであろう。「淨」「瀞」、「淨」「瀞」、「靜」「竫」の通用は諸字典に載るが、「浄」「静」も字義通用する場合を認めて良いのではなかろうか。古活字版の「浄」字の使用は、この箇所に限られるが、「静」或いは「靜」を古鈔本が「浄」「淨」に作る例は他見する。（上3オ4b125）（上13オ3b663）（上13オ4a666）（上21オ4a1157）（上30オ6b1668）（下8オ3373）（下9オ1a403）（下29オ1b1402）（下34ウ1a1694）は其の例である。唯、何れも古活字版の「清静」を「清浄」に作る場合で、「陽Ⅰ」は全て古活字

版に同じく「清静」とする。従って、古活字版が標記の箇所において「清浄」に作るのは異例に属し、まさに、その所において、〔陽Ⅰ〕との異同が生じている。

太、作「大」（序3オ2 54）

「太史公」を〔陽Ⅰ〕は「大史公」に作る。〔筑波・慶Ⅰ・大東〕が〔陽Ⅰ〕に同じ。〔書陵・龍門・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ〕は古活字版に同じで「太」に作る。

庵、作「菴」（序4オ1 68）

「草庵」を「草菴」に作る。〔無窮・足利・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・陽Ⅱ〕が〔陽Ⅰ〕に同じ。〔書陵・龍門・筑波・弘文・慶Ⅱ・武内・六地〕は古活字版に同じく「庵」に作る。尚、〔書陵〕は「庵」字で、眉上に「本作菴」の書入れがあり、異文として認識されている。

階、作「陛」（序4オ3 70）

「階下」を「陛下」に作る。〔武内〕は古活字版に同じ。他の古鈔本は〔陽Ⅰ〕に同じ。「階」「陛」は字義通じ、〔慶Ⅰ・大東〕の「陛」字左旁には「階也」の書入れが有る。

楊、作「揚」（上16ウ4a 896）

「飛楊」を〔陽Ⅰ〕は「飛揚」に作る。「楊」「揚」は字義においても通用される。〔書陵・龍門・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・慶Ⅱ・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・天理〕が〔陽Ⅰ〕に同じ。〔無窮・足利・梅沢・大東・武内〕は古活字版と同じで「楊」に作る。此の通用字の使用例として他に一例（上2オ4a 74）「自揚巳美」が認められる。そこでは両本共に「揚」字であり、古活字版は「楊」「揚」混用している。

辯、作「辨」（上3オ2a 115）

「辯口」を〔陽Ⅰ〕は「辨口」に作る。〔龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・大東・慶Ⅱ・斯Ⅰ〕が〔陽Ⅰ〕に同じ。〔書陵・慶Ⅰ・東急・宋版・世徳・道蔵・天理〕は古活字版と同じ。〔武内・東大・東洋〕は「弁」に作っている。尚、「辨口」の語は（下35オ4a）にも見え、そこでは古活字版、〔陽Ⅰ〕とも「辨」字で、古活字版は両字混用している。

辨、作「辯」（下7ウ7 359）

洪徳第四十五経文「大辨若訥」の「大辨」を〔陽Ⅰ〕は「大辯」に作る。〔杏Ⅱ・慶Ⅰ・大東・聖語・東急・斯Ⅰ・六地・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕が〔陽Ⅰ〕に同じ。〔書陵・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・武内・東大・東洋・治要〕は古活字版に同じく「辨」

に作る。しかし、直下の注文では古活字版、〔陽Ⅰ〕ともに「大辨」に作り、〔陽Ⅰ〕は混用している。「辯」「辨」は字義字音において通用。「辯」「辨」の使用例は他に（上27ウ1 1509）「辨徳」（第三十三章章題）、（下25ウ2a 1221）（同2b 1222）（同3a 1227）の「辨惠」、（下35オ2 1726）（同2b 1729）の「不辨」、（同3 1731）（同3a 1732）の「辨者」が有るが、古活字版、〔陽Ⅰ〕とも全て「辨」字で、異同は無い。

欲、作「慾」（上9オ6 448）

第十二章章題「撿欲」を〔陽Ⅰ〕だけが「撿慾」に作る。古活字版の「欲」の使用箇所は一二〇を越え、「慾」は（下4ウ4b 190）の「多慾」、（下8オ5 378）の「儉慾」（第四十六章章題）の二例と少ないが、其の何れも〔陽Ⅰ〕との異同は無い。

隳、作「隳」（上24ウ2a 1344）

無為第二十九経文「或載或隳」下注「隳危也」の「隳」字で、諸本間で次のように異同が多い。

隳危也〔活Ⅱ・梅沢・東大・六地・宋版・世徳・道蔵・天理〕
隳□□〔陽Ⅰ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ・武内〕
隳□□〔慶Ⅰ・大東・東洋・斯Ⅰ〕
隳□□〔書陵〕
隳□□〔東急〕
隨□□〔龍門〕

「隳」は略体であろうが、「隳」「隳」「堕」等の異同字との関連で立項した。伝写に伴う字形の混乱が窺われる。尚、経文「或載或隳」の同字は古活字版、〔陽Ⅰ〕共に正体を使用するが、〔書陵〕は「隳」に作り、左旁に「隳イ」の書入れを見る。

掛、作「樹」（上24ウ4a 1349）

「臺掛」、〔陽Ⅰ〕は「臺樹」に作る。〔慶Ⅱ〕を除く諸本は全て「樹」に作り〔陽Ⅰ〕と同じ。〔慶Ⅱ〕は「撤」に作る。手偏と木偏は、校・挍、楊・揚、揵・楗の如く混用される。書写字体、特に行草体では判別は難しいが、此処では古活字版は明らかに手偏に作る。誤植と見做す必要は無いと判断した。

戴、作「載」（下25オ1a 1187）

後己第六十六経文「是以聖人處上而民不重」下注「故民戴仰不以爲重也」の「戴」、〔陽Ⅰ〕の他、〔書陵・武内〕が「載」に作る。〔書陵〕は「イタヽキ」の訓を付し、眉上に「載」字の加筆が有る。「戴」「載」は字義において通用される。

身、作「躬」（下25ウ7a 1241）

三寶第六十七経文「儉故能廣」下注「身能節儉」の「身」字、〔陽Ⅰ〕の他に〔書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋〕等「躬」に作る。只、〔梅沢〕は「躬能」

を「能躬」と転倒。「無窮・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要」は古活字版に同じ。「身」「躬」は、同義にして通用。

踈、作「疏」（下30オ1 1453）

任爲第七十三経文「天網恢恢踈而不失」の「踈」字、「陽Ⅰ」は「疏」に作り、「書陵・東急・聖語・六地・敦Ⅱ・治要」が同じ。「杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵」等諸本の多くは古活字版に同じ。「踈」は「疎」の譌字、「疎」「疏」は同字。只、同経文下の注「雖踈遠」、制惑第七十四経文「常有司殺者」下注「踈而不失者」の「踈」は古活字版に同じく「踈」に作り、「踈」「疏」は同写本内で混用されている。

吁、作「呼」（下33ウ5a 1648）

任契第七十九経文「安可以爲善」下注「一人吁嗟」の「吁」字、「陽Ⅰ」は「呼」に作る。「書陵・足利・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・東急・聖語・斯Ⅰ・敦Ⅱ」が「陽Ⅰ」に同じ。「杏Ⅱ・無窮・筑波・弘文・大東・武内・東大・東洋・宋版・世徳・道蔵」は古活字版と同じ。「吁」「呼」は近音同義にて通用、「吁嗟」「呼嗟」両語も同義である。

耶、作「邪」（序2オ3 27）（上6オ2 269）

序の「吾今日見老子其猶龍耶」の「耶」字、「陽Ⅰ」の他「梅沢・東急・六地・陽Ⅱ」が「邪」、また、韜光第七経文「非以其無私耶」の「耶」は「六地・宋版・世徳」が「邪」で「陽Ⅰ」に同じ。「耶」「邪」は疑問・不定の助辞で通用。古活字版は、法本第三十九経文では「此非以賤爲本邪」と「邪」字が使用され、「耶」「邪」混用している（下3ウ5 140）。

師、作「帥」（上2ウ2a 90）（下6ウ5a 302）

（上2ウ2a 90）は、養身第二経文「行不言之教」下注「以身師導之也」の「師」字、「陽Ⅰ」の他「弘文・東大・斯Ⅱ」が「帥」に作る。「東洋」は「師」に見消ちを付し字旁に「帥」字を加筆。（下6ウ5a 302）は、偏用第四十三経文「不言之教」下注「法道不言師之以身也」の「師」、「陽Ⅰ」と「無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・武内・東大」が「帥」に作る。しかし、任成第三十四経文「故能成其大」下注「聖人以身師導」では「陽Ⅰ」も古活字版と同様「師」に作っており、「師」「帥」混用されている。「師」「帥」は字義において通用。

特、作「恃」（上2ウ4 97）（同4b 98）

養身第二経文「爲而不特」及び其の注「道所施爲不特望其報也」の「特」字、「陽Ⅰ」は「恃」に作る。伝本の多くは「陽

Ⅰ」の如く「恃」であるが、「大東・慶Ⅱ」の経文、「書陵・弘文・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ」の注文は「特」に作り、古活字版と同じで、古活字版の誤植、或いは「大東・慶Ⅱ」等の誤写とは考え難い。「爲而不特」「爲而不恃」の両様が、相伝されていたと判断される。「特」「恃」両字の字義通用説は聞かないが、説文には「特牛也、从牛寺聲」とあり音通と考えられる。鄭校は「通考」の「特」字を指摘し「特與恃、古通」と見做している。

恃、作「持」（上7オ1 313）（同1a 315）

運夷第九経文「恃而盈之不如其已」及び其の注「恃滿必傾不如止也」の「恃」字、「陽Ⅰ」は「持」に作る。また、異植字版「活Ⅱ」は経文の「恃」を「特」に作る。経注共に「書陵・龍門・足利・筑波・慶Ⅰ・大東・武内・東洋・杏Ⅰ」が「活Ⅰ」と同じ「恃」、「無窮・梅沢・東大・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵・天理」が「陽Ⅰ」に同じで「持」、「弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ」は「特」に作る。尚、経文「恃」字の左旁に「杏Ⅰ」は「持オ乍」、「東洋」は「持或本」、「大東」は「持イ」との書入れが有り、「持」字が異文として認識されている。虞齋口義本は「持」に作るが、これら書入れの「オ」「或本」「イ」共に、虞齋口義本を意味するのではあるまい。清原宣賢撰とされる『老子經抄』は此の字に就いて「恃ト云ヲ、句義ニハ、テヘンニカク、余本ニハ、リツシンヘンニ書、イツレカ、善ナルヘキトハ、不分明也」と、虞齋口義本との異同に注目しているが、指摘したように、河上公注諸本の間でも同様の異同が見られる。経文の異同については、本稿上「両種古活字版本文の相違」で既に検討した（86頁）。参照されたい。

轂、作「穀」（上8ウ4 410）（同6a 424）

無用第十一冒頭経文「三十輻共一轂」及び経文「當其無有車之用」下注「轂中空虚」の「轂」字、「陽Ⅰ」は「穀」に作る。「轂」「穀」は通用。（上8ウ4 410）では、「穀」に作るのは「陽Ⅰ」一本、（同6a 424）は、他に「東洋」だけであるが、誤写と看るわけにはいかない。同じ経文「三十輻共一轂」下注の「共一轂者」「轂中有孔」では「陽Ⅰ」も古活字版等諸本と同じで「轂」に作り、「轂」「穀」は混用されている。

摶、作「搏」或「摶」（上11オ2 531）（下15オ2 682）

賛玄第十四経文「摶之不得名曰微」の「摶」字を、「陽Ⅰ」は「搏」に作り、「世徳・道蔵」が同じ。「龍門・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・東大・東洋・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ・敦Ⅰ・宋版・天理」は「摶」字で、共に「搏」の俗字と見られる。「書陵・筑波・慶

Ⅰ・大東・武内・東急」は、古活字版と同じ「摶」に作る。「摶」「搏」は別字であるが通用される。古活字版は此の経文下の注では「不可搏持而得之也」と「陽Ⅰ」と同じく「搏」字を用い、「摶」「搏」混用されている。

本章経文の「摶」「搏」の異同について予てより論議がある。易順鼎は、「搏」は「摶」の誤とし、馬敘倫はその説を輔翼し、蔣錫昌は否定、朱謙之は肯定補足している。鄭校は「宋版」の「搏」に従い、易、馬、蔣の説を並録、「摶」に作る元林志堅撰『道徳眞經註』及び「通考」の校異を示す。王校は、底本「宋版」の「搏」を改め「摶」字に作る。今、両字の正否の判断は保留し異文として両存させるのが穏当であろう。古鈔本の訓点は「摶」「搏」「搏」の異同に関わり無く、どの本も「トレドモ」であり、異文に拠る解釈上の相違は生じていない。

玄符第五十五経文「攫鳥不摶」の「摶」字、「陽Ⅰ」は「搏」に作る。「活Ⅱ」は「活Ⅰ」と異なり、「陽Ⅰ」に一致、また「書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・大東・東大・東洋・聖語・六地」が「陽Ⅰ」に同じ。「筑波・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵」は「搏」に作る。「慶Ⅰ・武内・東急」は「摶」に作り「活Ⅰ」に同じ。此処も、管見の古鈔本は全て異同字に関係なく「ウタス」と訓んでいる。

漂、作「澌」（上16ウ3 893）（同4a 895）

異俗第二十経文「漂兮若無所止」及び其の注「我獨漂漂」の「漂」字を、「陽Ⅰ」は「澌」に作る。諸本経文の異同を表示すれば次のようである。

漂兮「活Ⅰ・活Ⅱ・筑波・武内・東大・東洋・宋版・世徳・道蔵・天理」
澌□「陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ」
瀏□「慶Ⅰ・大東」

注文「漂漂」の場合も同じ（無注の「六地・陽Ⅱ」を除く）。「漂」「瀏」は同字。「瀏」「澌」も「罰」「罰」と同例で同字別体と見做される。此の両三字の相違には、伝写相承の間に早くより注意が払われている。「書陵」の経文「澌」字左旁に「音漂又乍漂」と、「東洋」の同「漂」字左旁に「匹摽反又作潭音票又曰飄兮」、眉上に「澌／匹遥反述乍漂」と、又、「大東」「瀏」字右旁に「漂与同也」、「慶Ⅰ・大東」左旁に「輕之皃」、眉上に「瀏才乍飃述作一匹遥切匹摽切王乍膠音力出切梁氏乍飄矣」等の校異の書入れが有り、伝写の過程において、「漂」字と「澌」若しくは「瀏」とが、異文として注目されていたことは明らかであろう。伝来の河上公注本に、「漂」或いは、「澌」

若しくは「瀏」に作る本とが並存していたと推察される。又、賈大隠の『老子述義』に標掲されていた河上公本の本文は「漂」或いは「瀏」であったらしい。才本即ち後に舶載される宋元刊本は「飂」に作り、王本（恐らく王弼注本と思われる）は「膠」に（現行本は「飂」に作る）、「梁氏」は（『日本国見在書目録』著録の「老子義疏八梁武帝撰」或いは「老子私記〔十巻　梁簡文帝撰〕」と推測される）「飄」に作る等、河上公本以外の所伝諸本との異同も指摘されている。此の字に、渡来する以前既に唐土において異同が有ったことは、『経典釈文』老子道経音義の「梁作飄」「河上淵兮」との校記から明らかであり、傅奕本は「飄」、景龍碑は「漂」、開元幢、唐強思齊撰『道徳眞經玄徳纂疏』[6]は「寂」（所引の河上公注文は「我獨漂漂」に作る）、現存敦煌出土五千字文系諸本（P二五八四・P二二五五・P二三二九・S六四五三・S七九八）も「寂」に作る等、異体通用の範囲を越え、顕著な異同が認められる。我が国においては、「漂」字と、「澍」若しくは「瀏」の両異文が伝写相承された。しかして、「漂」に作る古活字版と、「澍」に作る〔陽Ⅰ〕とには、此の字句に由る限り、別の伝本系列の要素を認めなければならない。

掘、作「堀」（上21オ2b1145）（下7オ5b326）（下35オ3b1735）

象元第二十五経文「人法地」下注「掘之得甘泉」の「掘」字、〔無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・天理〕は古活字版に同じ。〔書陵・龍門・梅沢・慶Ⅱ〕が〔陽Ⅰ〕と同じで「堀」に作る。

立戒第四十四経文「多藏必厚亡」下注「死有發掘之患也」の「掘」字、〔無窮・筑波・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・聖語・宋版・世徳・敦Ⅱ・道蔵・治要〕は古活字版に同じ。〔書陵・足利・梅沢〕が〔陽Ⅰ〕と同様「堀」字に作る。〔慶Ⅰ・斯Ⅱ〕は「拙塚」に作る。諸本この字の前後で異同が激しいが古活字版と〔陽Ⅰ〕とは、此の通用字以外に相違は無い。尚、〔東洋〕には「掘」の右旁に「堀」字の書入（青筆）が有る。

顯質第八十一経文「辨者不善」下注「土有玉掘其山」の「掘」、〔杏Ⅱ・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・東大・東急・東洋・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕は古活字版と同じ。〔陽Ⅰ〕は「堀」に作り〔書陵・足利・慶Ⅰ〕が同じ。此処も〔東洋〕の「掘」の左旁に「堀」の書入（青筆）が有る。〔大東・武内〕は「握」に作る。「掘」「堀」は同音同義にて通用。

倡、作「唱」（下20オ2b936）（下25ウ6b1236）（下27オ3a1297）

謙德第六十一経文「天下之牝」下注「柔和而不倡也」の「倡」字、「杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・道蔵」は古活字版と同じ。「書陵・無窮・梅沢・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・敦Ⅱ」が「陽Ⅰ」と同じで「唱」に作る。「宋版・世德」は「昌」に作っている。

三寶第六十七経文「三曰不敢爲天下先」下注「執謙退不爲倡始也」の「倡」、「書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・東大・斯Ⅰ・宋版・世德・道蔵」は古活字版と同じ。「無窮・梅沢・武内・東洋・聖語・東急・敦Ⅱ・治要」が「唱」に作り「陽Ⅰ」と一致する。「梅沢」「唱」字左旁には「倡」の加筆が見られる。

玄用第六十九経文「而爲客」下注「和而不倡」の「倡」、「書陵・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・東大・宋版・世德・道蔵」は古活字版に同じ。「杏Ⅱ・無窮・梅沢・武内・東洋・東急・斯Ⅰ・敦Ⅱ・治要」が「陽Ⅰ」と同じで「唱」に作る。此処も「梅沢」には「唱」字左旁に「倡」の加筆が有る。

「倡」「唱」は同音にて通用。古活字版は、養身第二「音聲之相和」の注では「上唱下必和也」と、能爲第十「能爲雌乎」の注でも「和而不唱也」と「唱」字が使用され、「倡」「唱」両字混用している。

罰、作「罰」（下30オ5a 1467）（同6a 1469）（下30ウ1b 1481）

制惑第七十四経文「奈何以死懼之」下注「人君不寛其刑罰教人去情欲奈何設刑罰法以死懼之也」及び、同経文「而爲奇者吾得執而殺之孰敢矣」下注「傷時王不先道德化之而先刑罰也」の都合三箇所の「罰」字、「書陵・足利・筑波・弘文・武内・無窮・梅沢・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・東大・斯Ⅰ・東洋・聖語・東急・敦Ⅱ・治要」は古活字版と同じく「罰」に作る（「斯Ⅰ」だけは、「而先刑罰」の「罰」は「罰」に作っている）。「杏Ⅱ・宋版・世德・道蔵」は「罰」で「陽Ⅰ」と同じ。古鈔本の多くは「罰」が使用され（但、「聖語・宋版・世德・道蔵・敦Ⅱ」は、「設刑罰法」の「罰」字が無い）、本により使用字体の傾向が窺われるが、此れによって本文系統を云々できる訳ではない。しかし、伝写に際しての底本の字体の影響もまた窺測される。もっとも、「斯Ⅰ」の様に同一本の中で混用されてもおり、「陽Ⅰ」でも同章「民不畏死」下の注では「刑罰酷深」と古活字版と同じ「罰」に作っている。「罰」は俗字とされる。

嬰、作「攖」或「殻」（上1オ5a 13）（上7ウ6 362）（同6a 363）（上16オ4 862）（上23オ5 1263）（同5a 1266）（下9ウ2a 431）

體道第一経文「非常名」下注「如嬰兒之未言」の「嬰」、「陽

Ⅰ」は「瓔」に作る。「斯Ⅰ」及び「宋版」が「陽Ⅰ」に同じで、その他の諸本は古活字版と同様「嬰」に作る。「杏Ⅰ」の「嬰」字左旁に「瓔才」の書入れがある。

能爲第十経文「能如嬰兒乎」及び其の注「能如嬰兒」の「嬰」、「陽Ⅰ」は「瓔」に作り、「杏Ⅰ・斯Ⅰ」及び「宋版・世德」が同字。その他の諸本は「嬰」で古活字版に同じ。

異俗第二十経文「如嬰兒之未孩」の「嬰」、「陽Ⅰ」は「瓔」に作り、「斯Ⅰ」及び「宋版・世德」が同字。その他の諸本は「嬰」で古活字版に同じ。

反朴第二十八経文「復歸於嬰兒」及び其の注「復當歸志於嬰兒」の「嬰」字、「陽Ⅰ」は「瓔」に作る。「宋版」が同字で、「世德」は「瓔」に作る。「斯Ⅰ」は経文は「瓔」、注は「嬰」に、その他の諸本は古活字版と同様全て「嬰」に作る。

亡知第四十八経文「以至於無爲」下注「當恬如嬰兒無所造爲也」の「嬰」、「書陵・杏Ⅱ・無窮・筑波・弘文・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ」は古活字版に同じ。「陽Ⅰ」は「瓔」に作る。「足利・梅沢・大東」が「陽Ⅰ」に同じく「瓔」、「慶Ⅰ・斯Ⅱ」及び「宋版・世德」は「瓔」に作る。

此の七箇所において、古鈔本の多くは古活字版に同じで「嬰」に作り、「陽Ⅰ」の異体字は古鈔本としては異例の感がある。「武内・慶Ⅰ・大東」眉上に「王云（略）瓔於盈反」との書入れが見える。「王云」とは此の三本の書入れ内容から「王弼」或いは「王雱」と考えられるが検討を要する。ともあれ、往時伝来の宋刊本、又、河上公注本以外の別系本の影響が窺測され、伝写の過程の或る段階において、藍本の字体が影響し、それが書承された可能性は否定できない。「陽Ⅰ」書写者が恣意的に選択した字体とは考えにくい。此の異同字に拠っても、古活字版とは別系本の要素が窺える。「嬰」「瓔」は同字、「瓔」は「瓔」の別体字と見做される。

無、作「无」（上2ウ7b112）（上3オ4b126）（上4オ1b164）（上4ウ5a207）（上5ウ2b250）（上6オ2269）（同3a270）（同3b273）（上6ウ6b310）（上7ウ5b358）（同6a364）（上8オ2a376）（同2b378）（同6a395）（同7a401）（上8ウ6a422）（同7428）（上9オ5a445）（上9ウ1b454）（上10ウ2a501）（同2b503）（同6b521）（上11オ1a523）（同1a524）（同2a527）（同2a529）（同3a532）（同3a533）（同4b538）（同4b539）（同4b540）（同7b552）（上11ウ2b562）（同3a565）（同4a568）（同5a577）（同6a581）（上12ウ1a613）（同2b623）（同3b627）（上13オ5a672）（同6a678）（上13ウ3b699）（同4b704）（同4a708）（同7b720）

（同7b721）（上14オ2a731）（上14ウ7b781）（上15オ3a789）（同3b794）（同4b796）（同4b798）（同6b810）（上15ウ4b832）（上16オ2b856）（同5b869）（上16ウ2a887）（同4a897）（同5a901）（上17オ1a912）（同4a924）（同4a925）（同6a931）（上18オ7b989）（上18ウ2b999）（上19ウ6 1065）（上20オ2b1080）（同5a1087）（同6a1090）（同6b1092）（同6b1094）（同7a1097）（上20ウ1a1099）（同4a1114）（同4b1115）（同4b1116）（同5b1120）（同5b1121）（同6a1122）（同7a1130）（同7a1132）（同7b1134）（上21オ1a1137）（同3b1154）（同5a1160）（上22オ2b1194）（同3 1196）（同3b1199）（同6 1214）（上22ウ2 1225）（同6a1240）（同6a1241）（上23オ5b1268）（同7a1274）（上23ウ1 1284）（同2b1289）（上24オ1a1313）（上25ウ4b1405）（上26ウ2b1459）（同5b1471）（同6a1475）（上27オ3a1491）（同3b1493）（上27ウ3a1513）（同4a1518）（上28オ1a1534）（同4b1546）（同7 1561）（同7b1566）（上29オ4a1605）（同6b1613）（上30オ2 1645）（同2a1646）（同4a1653）（下1オ3a4）（同3b5）（同7b19）（同7a21）（下1ウ2a27）（同3b31）（同4b38）（下2ウ5b84）（下3オ2a98）（同3b102）（同3 104）（同4b106）（同4 108）（同5b110）（同6 112）（下3ウ6 147）（同7b152）（下4オ7a176）（同7a177）（下4ウ7b203）（下5オ5 220）（同7 227）（同7 229）（同7b231）（下5ウ5a242）（下6ウ3b288）（同3a292）（同3b293）（同4a294）（同4b298）（同5b300）（同6a305）（同7a311）（同7b312）（下7ウ4b344）（同5b351）（下8オ1a361）（同3b377）（同7b385）（下8ウ4a395）（下9オ5a415）（同5a416）（下9ウ2 430）（同2b432）（同3 434）（同3b436）（同3b437）（同4 438）（同4b439）（同7 445）（同7b447）（下11オ5 515）（同5 516）（同6a517）（同6b518）（下11ウ4a534）（下12オ7b565）（下12ウ6b586）（同6 587）（下13オ3b597）（同7b616）（下13ウ1a623）（同7b642）（下14オ4b652）（同5b656）（下15オ2b685）（下16オ1a727）（同4a742）（同4b743）（下16ウ4a763）（下17オ5 789）（同5b791）（同7 796）（同7a797）（下17ウ1 800）（同1a802）（下18オ1 834）（同1a835）（同1a836）（下18ウ5 875）（同6b878）（同6 879）（下19オ4a892）（下19ウ2a910）（下20オ5a948）（同6b949）（下20ウ5b966）（下21オ3b986）（下21ウ1a1006）（同1b1008）（同4a1013）（下22オ5a1041）（下23オ1 1075）（同1 1076）（同1b1081）（同2b1085）（同2b1086）（下25オ2a1191）（同3b1195）（同4a1198）（同5a1202）（下25ウ1b1216）（下26ウ2b1271）（下27オ6b1309）（同6b1312）（下27ウ7b1346）（下28オ1b1355）（下28ウ1a1377）（下29オ3a1408）（下30オ2b1458）（下30ウ4b1495）（下31オ7a1538）（下33オ3a1615）（下33ウ6b1653）（下34オ1a1661）（同2 1664）（同2a1666）（下34ウ1a1695）（同3b1703）（下35オ7b1751）（下35ウ1b1754）

一陽Ⅰ一に限らず古鈔本及び一宋版一を含め伝本の殆どは「無」「无」両字が混用されているが、古活字版では「无」字の

使用例は皆無である。「無」字に統一しようとした方針ないしは意図が窺われる。古活字版の底本或いはその同系本に混在していたであろう両字の別は全て無視されたと考えられる。従って、「無」「无」の一致不一致の多寡は、古活字版と諸本との親疎の実相を正しく反映してはいないと見られる。勿論、古活字版の如く「无」字を使用しない写本が嘗て存在し、同様の伝本が底本とされた可能性が完全に否定される訳ではない。只、此の異同字について個々の検証は要しないと思われる。

此の両字に因って生じた異同量数は二三六と全量の三分の一を遥かに越えている。個々に最低量数①を与えた結果であるが、異同の実相を表す数量として相当であるか甚だ疑わしい。しかし、緒言で述べたように、本来、量数そのものに合理性を期待するものではなく、相対的比較おいて、其の量数の内実が把握されていれば、諸本間の関係を理解する上で有効性は充分に期待出来ると考える。此処の場合、古活字版と〔陽Ⅰ〕との異同量の内、「無」「无」の異同に因る量数が三分の一を優に越えている事実の認識が重要であり、諸本との対比に際して、この認識が有功に作用する筈である。

Ⅳ、助字の有無、通用に起因する異同　異同量一五八

河上公本が、使用助字の多少によって詳略二系統に分けられることは、早く武内義雄の炯眼によって提唱された[7]。略本、詳本が派生したのは、中国南北朝時代の風俗言語の地理的な差によるもので、語気が急な北方河北では助語辞が刊落され、緩やかな南方江南では逆に加増されて、二種のテキストが生じたという提言を基に、敦煌出土本は北方系の略本であり、此れに対して本邦所伝の旧鈔本は南方系の詳本と見做された。此の大局的図式的な理解が正鵠を射たものであるか否かは、個々の伝存本に即して、さらに詳密な検証が必要と思われるが、助字の有無多少が、テキスト系統に深く関わる問題であることに留意される。しかし、助字使用の実態は、詳本とされる古鈔本の間でも一様ではなく、諸本間の相違は少なくない。古鈔本系とされる古活字版と〔陽Ⅰ〕との間でも次のような異同が指摘される。諸本の異同字句と対比させて表示し、〔陽Ⅰ〕の異文上に当該異同字に対する量数を冠した。標出字句内での当該字以外の異体字・誤字等の異同字については、原則として不問とする。

(1)文末の助字「也」「之也」「者也」等の有無異同

也—古活字版に有り、〔陽Ⅰ〕に無い例

養身第二経文「萬物作焉」下注（上2ウ3b 92）

各自動作也〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・東大・斯Ⅰ・天理〕

②□□□■□〔宋版・世徳〕
□□□□■〔陽Ⅰ・武内・東洋・東急・治要・道蔵〕

〔龍門〕及び東洋文庫蔵古活字版の「也」字左旁に「オナ」、〔東洋〕の「作」字の左下旁に「也」の書入れが有る。

同、経文「而不辭」下注（上2ウ3b 94）

不辞謝而逆止也■〔活Ⅱ・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・東大・天理〕

②□□□□上■〔陽Ⅰ〕
□□□□□■〔書陵・龍門・武内・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕
□□□□□之■〔筑波〕
□□□□□之〔梅沢〕
□□□□□之也〔治要〕

東洋文庫蔵古活字版「也」右旁に「オナ」、〔東洋〕「止」下旁「也オナ」、〔武内〕同字下旁に「之也」と書入れ有り。

安民第三経文「使夫知者不敢爲也」下注（上3ウ2b 143）

不輕言也■〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・東大・杏Ⅰ・東急・天理〕

②□□□■■〔陽Ⅰ・書陵・龍門・武内・東洋・敦Ⅰ・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕
□□□□之〔梅沢〕

〔杏Ⅰ〕「也」字左旁に「中ナ」の書入れがある。此れによって中原家証本には「也」字が有ったことが判明し、「也」字の無い他家の本との別が確認される。

無源第四経文「同其塵」下注（上4オ2b 171）

不當自別殊■也〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・杏Ⅰ・天理〕

②□□□□□之□〔東急〕
□□□□□■〔陽Ⅰ・書陵・龍門・梅沢・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□□□殊別■〔道蔵〕

〔杏Ⅰ〕「也」字左旁に「才无」、〔梅沢〕「殊」字下旁に「也ィ」の書入れが有る。

成象第六経文「綿綿乎若存」下注（上5ウ2b 250）

復若■無有■也〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・杏Ⅰ・東急・斯Ⅰ・天理〕

②□□■□之□〔梅沢〕
□□□■□□□■■■〔陽Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵〕

〔杏Ⅰ〕「也」字左旁に「才无中ナ」、東洋文庫蔵古活字版には「オナ」の書入れが有る。管見の古鈔本の内〔陽Ⅰ〕のみ「也」が無い。しかし、誤脱と見做すことは出来ない。

易性第八経文「故幾於道矣」下注（上6ウ1b 286）

幾■與道同也〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・東急・天理〕

②□于□□□□〔慶Ⅰ・大東〕
□■□□□■〔陽Ⅰ・書陵・龍門・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵〕

厭耻第十三経文「寵爲上」下注（上10オ3b 483）

②寵爲尊榮也〔活Ⅱ・筑波・弘文・天理〕
□□□□■〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ〕

〔敦Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕は此の経注文を欠く。〔梅沢〕は、此の経注文は本行に脱して行間に書写され、挿入符を以て次経文の上に補入されている。

同、経文「辱爲下」下注（上10オ3b484）

辱爲下賤也■〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東急・天理〕
②□□□□□□之〔梅沢〕
□□□□□■■〔陽Ⅰ・東洋・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵〕

賛玄第十四経文「復歸於無物」下注（上11ウ2b562）

於無質也〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東〕
②□□□□■實□〔天理〕
□□□■〔陽Ⅰ・書陵・龍門・梅沢・慶Ⅱ・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ〕
无於□■
以□□■武内〔道蔵〕

顯徳第十五経文「孰能濁以静之徐清」下注（上12ウ5b640）

自清也■〔活Ⅱ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・天理〕
②□□□之〔梅沢〕
□□■■陽Ⅰ・敦Ⅰ・道蔵〕
□□■■之無窮〕

淳風第十七経文「信不足焉」下注（上14オ5b745）

君信不足於下■也〔活Ⅱ・無窮・慶Ⅰ・大東・東大・東洋・天理〕
②□□□□□■■〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ・武内・東急・斯Ⅰ・敦Ⅰ・道蔵〕
□□□□□之□〔梅沢〕
■■■■■■■■〔宋版・世徳・治要〕

異俗第二十経文「我獨悶悶」下注（上16ウ3a887）

無所割截也〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・東急・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・天理〕
②□□□□■■〔陽Ⅰ・筑波・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□□截割■〔道蔵〕

益謙第二十二経文「不自矜故長」下注（上18オ6b986）

不危也〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・天理・治要〕
②□□■〔陽Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

管見の古鈔本で「也」字が無いのは〔陽Ⅰ〕だけであるが、此処も〔陽Ⅰ〕の誤脱と見るのは控えたい。

偃武第三十一経文「物有悪之」下注（上25ウ4b1406）

不悪之■也〔活Ⅱ・武内・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・東大・梅沢・天理〕
②□□□者□〔東洋・東急〕
□□□■■〔陽Ⅰ・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

聖徳第三十二経文「天亦将知之」下注（上27オ5b1500）

將自知之■也〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・東大・天理〕
②□□□□者□〔東洋〕
□□□□■■〔陽Ⅰ・武内・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

仁徳第三十五経文「視之不足見」下注（上29オ4b1607）

②可得見之也〔活Ⅱ・天理〕
□□□□■〔陽Ⅰ・龍門・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ〕
□□□■□〔書陵・無窮・足利・筑波・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

〔足利〕は「也」字に見消ち、左旁に「之」字を加筆。文末「之也」に作るのは古活字版と〔天理〕「通考」のみ。諸本の多くは「也」に作り、〔陽Ⅰ・龍門・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ〕は「之」の一字で「也」は無い。〔足利〕の書入れからも両様の本が相伝されていたことが明らかである。此の異同については、古活字版に特異な異文として後述する。

論徳第三十八経文「而無以為」下注（下1ウ 1a 21）

無以名號爲也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・道蔵・治要〕
②□□□□□■〔陽Ⅰ・書陵・宋版・世徳・敦Ⅲ〕

同異第四十一経文「明道若昧」下注（下4ウ 7b 203）

無所見■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・聖語・斯Ⅰ〕
□□□知□〔道蔵〕
无□□者□〔東洋〕
②□□□■■〔陽Ⅰ・書陵・東急・宋版・世徳・敦Ⅱ〕

道化第四十二経文「三生萬物」下注（下5ウ 5b 240）

天施地化人長養之也〔活Ⅱ・書陵・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□□□□□□□■□〔東大・東急〕
②□□□□□□□□■〔陽Ⅰ・杏Ⅱ・東洋・道蔵〕
■■■■■■■■■〔敦Ⅱ〕

〔東洋〕は「之」字下に小圏を施し、其の左旁に「也」字を加筆（青筆）。

洪徳第四十五経文「大成若缺」下注（下7ウ 3a 339）

謂道德大成之君也〔活Ⅱ・無窮・聖語・斯Ⅰ・治要〕
②□□□□□□□■〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕

同、経文「大直若屈」下注（下7ウ 6a 353）

正直如一也〔活Ⅱ・無窮・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕
②□□□□■〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・敦Ⅱ〕

益證第五十三経文「是謂盜夸」下注（下13ウ 2b 629）

親戚并隨之也〔活Ⅱ・無窮・梅沢・武内・治要〕
□□□□■□〔杏Ⅱ・筑波・東大・東洋・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕
②□□□□□■〔陽Ⅰ・書陵・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・東急・敦Ⅱ〕

〔杏Ⅱ〕の「也」字左旁に「之イ」、〔東洋〕は左旁に見消ち及び「之」の校異書入れ（青筆）が有る。

玄德第五十六経文「言者不知」下注（下15ウ 6b 723）

多言多患■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大〕

②□□□□□□■■之□〔東洋〕〔陽Ⅰ・書陵・筑波・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ・道蔵〕

〔大東〕の「也」字は「患」字下の小書であり、書写者自らの脱字補入か、後の加筆か、判別は難しい。

同、経文「解其忿」下注（下16オ1a 731）

不休也〔活Ⅱ・道蔵〕

□□■〔書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・斯Ⅰ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ〕

②□体■〔陽Ⅰ・弘文〕

淳風第五十七経文「以無事取天下」下注（下16ウ5a 764）

使取天下爲之主也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東〕

②□□□□□□■〔陽Ⅰ・書陵・武内・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕

取使□□□□■〔東大〕

爲道第六十二経文「有罪以免邪」下注（下21オ7b 1003）

妄行刑誅也〔活Ⅱ・無窮・斯Ⅰ〕

②□□□□■〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕

三寶第六十七経文「不敢爲天下先」下注（下26オ1b 1243）

不敢爲天下首先也〔活Ⅱ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急〕

②□□□□□□■■〔陽Ⅰ・斯Ⅰ・宋版・世徳〕

□□□□□■〔敦Ⅱ〕

〔道蔵〕には、此の注文は無い。

同、経文「舍後且先」下注（下26オ3b 1255）

爲人先也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・筑波・梅沢・大東・東大・聖語〕

②□□□■〔陽Ⅰ・書陵・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・武内・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ・治要〕

務先人■〔道蔵〕

戒強第七十六経文「是以兵強則不勝」下注（下31ウ7b 1561）

故不勝也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・聖語・道蔵〕

②□□□■〔陽Ⅰ・書陵・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅱ・宋版・世徳・敦Ⅱ〕

任契第七十九経文「有德司契」下注（下34オ1b 1659）

司察契信而已也〔活Ⅱ・無窮・梅沢〕

□□□□□■□〔弘文〕

②□□□□□■〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要〕

□□□□□耳■〔武内〕

〔聖語〕はこの部分料紙破損のため不明。

顯質第八十一経文「美言不信」下注（下35オ2a 1722）

②□□■□□■華辭也〔活Ⅱ・無窮〕

〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・敦Ⅱ〕

□□■□詞■〔斯Ⅰ・宋版・世徳〕

□□之美□■〔道蔵〕

也―古活字版に無く、〔陽Ⅰ〕に有る例

體道第一経文「無名天地之始」下注（上1オ7a 24）

始者道■■■〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・杏Ⅰ・仁和・天理〕

②□□□■■■也〔陽Ⅰ・東洋・東急・斯Ⅰ〕

□□□■本也〔宋版・世德〕

□□□之本也〔道蔵〕

〔杏Ⅰ〕には、「道」字下左旁に「本也オナ」の校異の書入れ、〔東洋〕の「也」字左旁には見消ちが有る。

偃武第三十一経文（上26オ2 1426）

勝而不美■〔活Ⅱ・無窮・梅沢・東洋・東急・斯Ⅰ・陽Ⅱ・宋版・世德・道蔵・天理・治要〕

②□□□□也〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・六地〕

〔梅沢〕は「美」字下に「也」を小書、校異の書入れと見做した。〔東洋〕は「美」字下字間に小圏、左旁に「也オ」と書入れ（青筆）が有る。

聖德第三十二経文（上27オ7 1504）

猶川谷之與■江海■〔活Ⅱ・無窮・慶Ⅰ・大東・東洋・東急・斯Ⅰ・杏Ⅰ・宋版・世德・道蔵・天理〕

□□□□■海江■〔東大〕

□□□□■■■梅沢・陽Ⅱ〕

②□□□□■■□也〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・斯Ⅱ・慶Ⅱ・武内・六地〕

□□□□□於□□也〔弘文〕

〔杏Ⅰ〕「海」字の下左旁に「也オ」と、東洋文庫蔵古活字版の同字下右旁に「也オナ」と校異の書入れが有るが、〔宋版〕と一致しない点注目される。〔陽Ⅰ〕等の「也」は、逸失した舶載宋刊本の影響を彷彿させる事例でもあろう。

之也―古活字版の「也」を、〔陽Ⅰ〕が「之也」に作る例

韜光第七経文「天地所以能長且久者以其不自生」下注末句（上5ウ6b 259）

奪人以自與也■〔活Ⅱ（與譌作輿）・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・大東・天理〕

□□□與自□■〔東急〕

②□□□□之也〔陽Ⅰ・書陵・龍門・筑波・慶Ⅰ・慶Ⅱ・武内・東大・東洋〕

□□□□□□□之〔梅沢〕

□□□□□□矣■〔道蔵〕

□□□□□■■〔斯Ⅰ・宋版・世德・敦Ⅰ〕

東洋文庫蔵古活字版には「與也」の字間に「之」字、其の左旁に「本有」と、「也」字左旁に「一本ナ」と朱書入れ、また〔東洋〕「也」字左旁にも「一本ナ」の書入れが見られる。

苦恩第二十四経文「跨者不行」下注（上19ウ4b 1054）

使不得行■也〔活Ⅱ・梅沢・武内・東大・東洋・東急・天理〕

②□□□之□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・斯Ⅰ〕

□□□□■■〔宋版・世德・道蔵〕

同異第四十一経文「建言有之」下注末句（下4ウ6b 201）

②當如下句■也〔活Ⅱ・無窮・聖語・東急・斯Ⅰ・道蔵〕
□□□□之□〔陽Ⅰ・書陵・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東〕
□□□□■■〔杏Ⅱ・武内・東大・東洋・宋版・世徳・敦Ⅱ〕

同、経文「夷道若類」下注末句（下5オ1b 208）

若多比類■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕

②□□□□之□〔陽Ⅰ・書陵・梅沢〕
□□□□■■〔道蔵・敦Ⅱ〕

道化第四十二経文「故物或損之而益」下注（下6オ2b 260）

必還■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋〕

②□□之□〔陽Ⅰ・書陵・梅沢〕
□□■■〔聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要〕

〔東洋〕は「還也」字間に小圏を付し其の左旁に「之」字の書入れ（青筆）が有る。

任徳第四十九経文「不善者吾亦善之」下注末（下10オ2b 454）

使■善■也■〔活Ⅱ・無窮・武内・東大・東洋・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

②□■□之□■〔陽Ⅰ・書陵・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東〕
□■□□■□之■〔杏Ⅱ〕
□■□為■□■〔東急〕
■■□□■■■矣〔敦Ⅱ〕
■■■為□■■■■〔治要〕
■■■■■■■■■〔梅沢〕

〔東洋〕は「善也」字間に小圏を付し、右旁に「之」字の書入れ（青筆）が有る。

同、経文「不信者吾亦信之」下注末句（下10オ4b 464）

使■信■也〔活Ⅱ・無窮・梅沢・武内・東大・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕

②□■□之□〔陽Ⅰ・書陵・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東〕
□□■■□者□〔東洋〕
□□■□□之■〔杏Ⅱ〕
□為□■■■■■〔敦Ⅱ〕

〔東洋〕は「者」左旁に見消ち、右旁に「之」字の書入れ（青筆）が有る。

同、経文「徳信矣」下注（下10オ5b 467）

聖人爲信■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・斯Ⅰ〕

②□□□□之□〔陽Ⅰ・書陵・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋〕
□□□□之■〔聖語〕
□□□□■■■〔東急・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕

養徳第五十一経文「徳畜之」下注（下11ウ2b 529）

一主布氣而畜養■也〔活Ⅱ・無窮・聖語・斯Ⅰ〕

②□□□□□之□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋〕
□□□□□□□之■〔梅沢・東急・敦Ⅱ〕
□生□□□□■■■〔宋版・世徳・道蔵〕

王校は、〔敦Ⅱ〕等に拠り、「之」一字を補う。

同、経文「是謂玄徳」下注（下12オ3b 556）

不可得見■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・武内・東大・聖語・斯Ⅰ・治要〕
□□謂□■□〔無窮〕
②□□□□之□〔陽Ⅰ・書陵・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・東洋〕
□□□□■■〔東急・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕

帰元第五十二経文「終身不勤」下注（下12ウ2b 572）
不勤苦■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・聖語・斯Ⅰ〕
②□□□之□〔陽Ⅰ・書陵・梅沢・武内・東大・東洋〕
□□□■■〔東急・宋版・世徳・敦Ⅱ・道蔵〕

淳風第五十七経文「我無爲而民自化」下注（下17オ6b 792）
而民自化成■也〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
②□□□□□之□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・梅沢・武内・東大・東洋〕
□□□□□■■〔道蔵・敦Ⅱ・治要〕

同、経文「我好静而民自正」下注（下17オ7b 795）
民皆自忠正■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ（無自）・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕
②□□□□□之□〔陽Ⅰ・書陵〕
□□□□□者□〔東洋〕
□□□□□■■〔敦Ⅱ〕

〔東洋〕は「者」左旁に見消ち、右旁に「之」を加筆（青筆）。

淳徳第六十五経文末句「乃至大順」下注（下24ウ1b 1167）
■順■天■理■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
②■□■□■□之□〔陽Ⅰ・書陵〕

■□■□■□■■〔敦Ⅱ〕
■□■□之□■■〔東急〕
■■之■■□■□〔聖語〕
大□者□■□■□〔道蔵〕

〔東洋〕は、「理也」の字間に小圏を施し、左旁に「之」字を加筆（青筆）。

玄用第六十九経文「而爲客」下注（下27オ3b 1299）
而後動■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・梅沢・東大・聖語・東急・治要〕
②□□□之■〔筑波〕
□□□之□〔陽Ⅰ・書陵・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内〕
□□□者□〔東洋〕
□□□■■〔斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕

〔東洋〕は「者」左旁に見消ち、右旁に「之」を加筆（青筆）。

制惑第七十四経文「希有不傷其手矣」下注（下30ウ6b 1506）
還受其殃■也〔活Ⅱ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・梅沢・武内・東大・東急・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
②□□□□之□〔陽Ⅰ・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東〕
□□□□者□〔東洋〕
□□□□■■〔敦Ⅱ〕
反□□□■■〔道蔵〕

〔東洋〕は「者」左旁に見消ち、右旁に「之」を加筆（青筆）。

之也—古活字版の「之也」を、〔陽Ⅰ〕が「也」に作る例

賛玄第十四経文「視之不見名曰夷」下注（上11オ1b 526）
不可得視而見之也〔活Ⅱ・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・天理〕
②□□□□□□■□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・筑波・梅沢・慶Ⅱ・東急〕

□□□□□□□■〔斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ〕
□□□而視■□矣〔道蔵〕

同、経文「聴之不聞名曰希」下注（上11オ2b 530）
不可得聴而聞之也〔活Ⅱ・無窮・天理〕
②□□□□□□■□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急〕
□□□□□□□■〔斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□□□□□□■■〔敦Ⅰ〕
□■□□□□□矣〔道蔵〕

同、経文「此三者不可致詰」下注（上11オ5b 543）
問而■得之也〔活Ⅱ・無窮・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□□■□□■〔慶Ⅱ・天理〕
②□□■□■□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋〕
□□能□■□〔道蔵〕
□□■□■■〔敦Ⅰ〕

顯徳第十五経文「猶兮若畏四隣」下注（上12オ7b 610）
畏四隣知之也〔活Ⅱ・無窮・梅沢・東洋・斯Ⅰ・宋版・世徳・天理〕
②□□□□■□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大〕
□□□□□■〔敦Ⅰ・東急〕
□□□□己■〔筑波〕
□□鄰之知■〔道蔵〕

任徳第四十九経文「以百姓心爲心」下注（下10オ1b 449）
因而從之■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大〕
②□□□■■□〔陽Ⅰ・斯Ⅰ〕
□□□□者□〔東洋〕
□□□□■■〔書陵・聖語・東急・宋版・世徳・敦Ⅱ・道蔵・治要〕

〔東洋〕「之者」両字の左旁には見消ち（青筆）が有る。

守微第六十四経文「執者失之」下注（下22ウ7b 1073）
推讓反還之也〔活Ⅱ・無窮・東洋〕
②□□□□■□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・弘文（反作返）・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・武内・東大・聖語・東急〕
□□□返■□〔大東〕
□□□■■□〔筑波〕
□□□□■■〔斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ・治要〕
□□還及■■〔道蔵〕

〔東洋〕は「之」字左旁に見消ち（青筆）有り。

任爲第七十三経文「孰知其故」下注（下29ウ4a 1430）
不犯之也〔活Ⅱ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・梅沢・慶Ⅰ・大東・東大・東洋・道蔵〕
②□□■□〔陽Ⅰ・斯Ⅱ〕
□□□■〔武内・東急・敦Ⅱ〕
□□□由〔聖語〕
□□■■〔斯Ⅰ・宋版・世徳〕

王校は〔敦Ⅱ〕に拠り「之」字を補う。

者也—古活字版の「也」を〔陽Ⅰ〕が「者也」に作る例

苦恩第二十四経文「日餘食贅行」下注末句（上20オ2b 1078）
爲貪行■也〔活Ⅱ・無窮・筑波・武内・東大・東急・天理〕
②□□者□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・東洋〕
□□■■〔斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

同異第四十一経文「道隱無名」下注（下5ウ1b 232）
無能指名■也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・梅沢・慶Ⅰ（指作旨）・大

東（指作旨）・武内・東大・東洋・東急・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳〕

②□□□□者□〔陽Ⅰ・書陵・弘文・斯Ⅱ（指作旨）〕
□□□□■■〔筑波・道蔵・敦Ⅱ〕

之者也―古活字版の「之也」を〔陽Ⅰ〕が「之者也」に作る例

苦恩第二十四経文「物或悪之」下注（上20オ3b 1081）

②□□□□□□□者□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文（無有）・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋〕
故物無有不畏悪之■也〔活Ⅱ・無窮・東急・天理〕

□□□□□■■■□〔斯Ⅰ・世徳〕
□□□□□□□□□〔道蔵〕
□□□□□□□□地■■■■〔宋版〕

東洋文庫蔵古活字版は、「之」字下に小圏、其の右旁に「者」字を加筆。又「也」字下旁に「オナ」と。王校は「地」を「之者」に校改。

矣―古活字版に無く〔陽Ⅰ〕に有る例

儉武第三十経文（上25オ3 1370）

善者果而已■〔活Ⅱ・無窮・梅沢・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・陽Ⅱ・宋版・世徳・道蔵・天理・治要〕

②□□□□□矣〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・六地〕

〔梅沢〕は「已」字と下注頭の間の余白に「矣」字が小書され、校異の加筆と見られる。此の句末の「矣」字は、現行の王弼注本には無く、虞齋口義本には有る。しかし、武英殿版王弼注本の紀昀の校注に拠れば、『永楽大典』所載本には「矣」が有り、王弼注本も此の字が有る本と無い本があったらしい。島校は「故善者果而已矣」と校正している。古鈔本の「矣」字は、虞齋口義本の影響とも考えられるが、恐らくはそうではなく、河上公注本自体にこの字が有る本と無い本の二系が伝承されていたのであろう。従って、此の「矣」字の有無は、古活字版と〔陽Ⅰ〕との異本性を示す異同と考えられる。

(2)其の他の助字[8]の有無

者―古活字版に有り、〔陽Ⅰ〕に無い例

厭耻第十三経文「故貴以身爲天下者則可以寄於天下矣」（上10ウ3 505）

爲天下者〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・陽Ⅱ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵・天理〕

②□□□■〔陽Ⅰ・書陵・龍門・弘文・六地〕

東洋文庫蔵古活字版の書入れは「者」字右旁に「イ无」と。現行の王弼本は「者」が無く、P二三七〇、P二五八四、S六四五三等敦煌出土五千字本系諸本にも無い。河上公本は「者」字の有無に因って両系が想定される。

同、経文「愛以身爲天下者乃可以託於天下矣」（上10ウ4 513）

爲天下者〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・陽Ⅱ・六地・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵・天理〕

②□□□■〔陽Ⅰ〕

〔陽Ⅰ〕以外の管見の本には全て「者」が有るが、唐強思齊『道徳真經玄徳纂疏』所引、P二三七〇、S六四五三等の敦煌出土五千字本系諸本また王弼注本には無い。前句とも対応し〔陽Ⅰ〕の誤脱と見ることは出来ないであろう。河上公注本にも「者」字が無い伝本の系統が想定される。

顯質第八十一経文「美言不信」下注（下35オ2a 1723）

不信者〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・筑波・弘文・梅沢・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕

②□□■〔陽Ⅰ・書陵・足利・斯Ⅱ・慶Ⅰ〕

〔東洋〕には「者」字左旁に見消ち（青筆）がある。

者―古活字版の「者」を〔陽Ⅰ〕が「則」に作る例

守微第六十四経文「爲者敗之」（下22ウ6 1066）

爲者■敗之〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・梅沢・武内・東大・東洋・東急・聖語・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要〕

②□■則□□〔陽Ⅰ・書陵・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・六地〕

□□則□□〔斯Ⅰ〕

鄭校は〔陽Ⅰ・斯Ⅱ〕の「則」字を「蓋音近而誤也」と見ているが、「則」に作る古鈔本は此の二本に限らず、〔斯Ⅰ〕の如く「者則」に作る本もある。次句「執者失之」との対応を重く見れば「者」が勝ると言えるが、誤写との予断は慎まれる。順接の助字として文義上の相違は生じない。この句において、標出のように両三様の異文が伝承されたことは明らかで、古活字版と〔陽Ⅰ〕とに別系の異本性が認められる。

之―古活字版に有って、〔陽Ⅰ〕に無い例

顯德第十五経文「孰能濁以静之徐清」下注（上12ウ5a 637）

②□水之濁止〔活Ⅱ・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・天理〕

②□■□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急〕

任德第四十九経文「故聖人之在天下怵怵焉」（下10オ5 468）

②聖人之在天下〔活Ⅱ・無窮・梅沢〕

②□□■□□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・六地・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕

伝本の多くは「之」字が無い。現行の王弼本にも無いが、紀昀校に「人下各本有之字」とあり、武内義雄「道徳經析義」は傅奕本に拠って「之」字を補入している。河上公注本にもこの字が有る本と無い本の両系があって、古活字版と〔陽Ⅰ〕はそれぞれ別系に属している。

守微第六十四経文「民之從事常於幾成而敗之」下注（下23オ3a

1089）

②民人之爲事〔活Ⅱ・無窮・聖語〕
□□■□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・宋版・世徳・敦Ⅱ・治要〕
□■□□□〔斯Ⅰ・道蔵〕

鄭校は、「人」は字形の近似に因る「之」字の譌と見ている。王校は〔宋版〕の「人」を〔道蔵〕等に拠って「之」に校改している。しかし、古活字版等の様に「人之」に作る伝本が存在している事実を勘案するならば予断は許されない。

之―古活字版に無く、〔陽Ⅰ〕に有る例

偏用第四十三経文「天下希及之」下注（下6ウ7a 311）

道■無爲〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・梅沢・武内・東大・東洋・東急・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕
②□之□□〔陽Ⅰ・書陵・筑波・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東〕
■■无□〔敦Ⅱ〕

〔東洋〕には、「道无」の間に小圏を付し其の左旁に「之」の書入れ（青筆）が有る。

守微第六十四経文「復衆人之所過」下注（下23ウ2a 1115）

復■者〔活Ⅱ・杏Ⅱ〕
②□之□〔陽Ⅰ・書陵・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要〕

鄭校は「通考」に「之」が無いの「脱」と見ているが、古活字版、〔杏Ⅱ〕の例から断定は慎みたい。

於―古活字版に有って、〔陽Ⅰ〕に無い例

偃武第三十一経文「戰勝以喪禮處之」下注（上26ウ3b 1464）

比於喪也〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・宋版・世徳・道蔵・天理・治要〕
②□■□□〔陽Ⅰ〕
□□□■〔斯Ⅰ〕

鄭校は、〔陽Ⅰ〕の譌脱と見る。或いは従うべきか。

爲政第三十七経文「侯王若能守之萬物將自化」下注（上30オ3b 1650）

效於己也〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・天理・治要〕
②□□□
□■□■
■□□■
□□□■
□□□□〔弘文〕〔陽Ⅰ〕〔書陵・龍門〕

〔東洋〕は「於己」二字に見消ち（青筆）が有る。鄭校は、〔陽Ⅰ〕の譌脱とする。しかし、〔東洋〕の書入れと〔書陵・龍門〕の例と合わせ考えれば、断言は危ぶまれる。

於―古活字版に無く、〔陽Ⅰ〕に有る例

微明第三十六経文（上29ウ5 1633）

②魚不可脱■淵〔活Ⅱ・天理〕
□□□□於□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・

梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ・宋版・世徳〕

□□■□於□〔道蔵〕

此の異同も古活字版に特異な異文として後述する。

玄用第六十九経文「輕敵幾喪吾寶」下注（下27ウ2b 1329）

近喪■身〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕

②□□於□〔陽Ⅰ・書陵・敦Ⅱ〕

□□吾□〔聖語〕

〔東洋〕は、「喪身」の間に小圏を施し左旁に「於」と校異の書入れ（青筆）が有る。〔敦Ⅱ〕に〔陽Ⅰ・書陵〕と同じく「於」字が有ることは注目される。本邦での伝写の間に生じた異同ではなく、唐写本に遡源する可能性を示唆している。

任契第七十九経文「而不責於人」下注（下33ウ7b 1657）

不責■人〔活Ⅱ・無窮・梅沢・慶Ⅰ・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ・道蔵・治要〕

②□□於□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・大東・武内・東大・東洋〕

而―古活字版に有って、〔陽Ⅰ〕に無い例

養身第二経文「生而不有」下注（上2ウ4a 96）

生萬物而不有也〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・天理〕

□□□□■東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕

②□□□■□□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・梅沢・慶Ⅱ〕

鄭校は、〔陽Ⅰ〕の脱字とする。

以―古活字版に有って、〔陽Ⅰ〕に無い例

同異第四十経文「弱者道之用」下注（下4オ5a 170）

②所以常用〔活Ⅱ・無窮〕

□■□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ・道蔵〕

以―古活字版に無く、〔陽Ⅰ〕に有る例

爲道第六十二経文「美言可以市」下注（下20ウ7a 975）

獨■可■於市〔活Ⅱ・無窮・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕

□以□■□□〔杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋〕

②□□以□□〔陽Ⅰ・書陵・梅沢・敦Ⅱ（無獨）〕

■■□以■□□〔道蔵〕

東洋文庫蔵古活字版には「可於」間に「以」字の校異の書入れが見られる。

以―古活字版の「以」を〔陽Ⅰ〕が「乃」に作る例

知病第七十一経文「夫唯病病是以不病」下注（下28ウ1a 1375）

是以■不自病〔活Ⅱ・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ〕

②□■乃□□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・筑波・弘文・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語〕

以是乃□□□

□則■□□□〔足利・斯Ⅱ〕

■■■■■■■〔無窮〕

〔道蔵〕

〔無窮〕は「則」に作り、〔足利・斯Ⅱ〕は「是以」を「以是

乃」三字に作る。鄭校は「以是」は誤倒と見做す。〔道蔵〕にはこの句無し。

V、其の他、本文字句の異同　異同量一五七

老子經序「謂諸弟子曰」（序1ウ7 23）

〔陽Ⅰ〕は「諸」が無く、諸本と異なる。或いは誤脱か。

同、「乘風雲而上」（序2オ3 25）

乘風雲而上〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東洋・斯Ⅰ〕
□雲風□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・梅沢・東大・東急・六地・陽Ⅱ〕

〔足利〕の「風雲」左旁には「雲風本作」との校異、又、東洋文庫蔵古活字版の左旁には「下上」と転倒符の書入れが有る。

同、「吾今日見老子」（序2オ3 26）

〔陽Ⅰ〕は「吾」が無く、諸本と異なる。或いは誤脱か。

同、「以五乗九故世四十五」（序3ウ2 62）

故世四十五〔足利・弘文・斯Ⅱ〕
□■□□□〔陽Ⅰ・活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・慶Ⅱ・東洋・斯Ⅰ・六地〕
□■冊　□〔筑波・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東急・陽Ⅱ〕

「世」字の有無による伝本間の相違については〔活Ⅰ〕と〔活Ⅱ〕の異同を検証した際に既述した（上85頁）。

同、「故法備因而九之」（序3ウ3 63）

故法備〔活Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内〕
■□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ〕

同、「忽然而舉上高七百餘丈而止」（序4オ4 73）

高七百餘丈〔活Ⅱ・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・陽Ⅱ〕
□■□□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・東急・斯Ⅰ・六地〕

〔梅沢〕は、「七」字右旁に「イ无」と、〔東大〕は「イニナシ」との書入れがあり、〔東洋〕はこの字を□で囲んでいる。此の校異の書入れは「七」の無い異本の存在を示す。「七」字の有無で伝本は二分され、古活字版は〔陽Ⅰ〕とは別系の本文を継承している。

體道第一経文「有名萬物之母」下注（上1ウ1b 31）

天地含氣〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・杏Ⅰ・斯Ⅰ・仁和・宋版・世徳・道蔵・天理〕
①□□合□〔陽Ⅰ〕

諸本並びに「含」に作り、或いは〔陽Ⅰ〕の誤写か。只、唐強思斉『道徳真経玄徳纂疏』所引は「合」に作っている。鄭校は「形近而譌也」と断じているが、「合」に作る一類の本が存在した可能性は否定できない。

同、経文末句「衆妙之門」下注（上2オ1a 70）

②天□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・東急・斯Ⅰ・仁和〕 ■□〔慶Ⅱ〕

鄭校は「誤作天氣」と記すが、古鈔本は「天氣」に作る本がむしろ多く、誤写とは見做し難い。〔東洋〕は「稟」字左旁に見消ち、字下欄脚に「天」字の校異書入れが有る。

養身第二経文末句「是以不去」下注（上2ウ6b108）

不言不可知〔活Ⅱ・無窮・梅沢・大東・東洋・宋版・世徳・道蔵・天理〕

②□□□□和〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・慶Ⅱ・武内・東大・東急・斯Ⅰ〕

〔梅沢〕はもと「和」に作り、「知」字を重書きしているようである。右旁に「和江家本也」と書入れが有って注目される。〔大東〕は「知」左旁に「和イ」の書入れが有る。『老子経抄』には「不レ言不レ知（和の誤写と思われる）者也、知ルト云本モアリ、イツレモヨキ也」との講述が見える。

易性第八経文「而不争處衆人之所惡」下注（上6オ7b282）

水獨静流居之〔活Ⅱ・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵・天理〕

②□□争□□□〔陽Ⅰ・無窮・梅沢・東急〕
□□弾□□□〔書陵・龍門・足利・筑波・斯Ⅱ〕
□□殫□□□〔弘文・慶Ⅰ・大東〕

〔梅沢〕は、「争」右旁に「静イ」、〔筑波〕は「弾」左旁に「静也」、〔大東〕は「殫」左旁に「静イ」の書入れが有る。鄭校は、「弾」は「非也」、「争」は「誤作」と看做し「静」を是とする。しかし、古鈔本にはこの句において三様或いは四様の伝本が有り、「静」は「シツカニ」、「争」は「アラソヒ」、「弾」「殫」は「コトコトク」（〔書陵〕の別訓は「ヒキ」）と訓まれて、本句の解釈に影響が及んでいる。此の異文にも古活字版と〔陽Ⅰ〕との異本性が認められる。

同、経文末句「故無尤」下注（上6ウ6b311）

無有怨尤水者也〔活Ⅱ・慶Ⅰ・無窮・足利・梅沢・大東・杏Ⅰ・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵・天理〕

②□□悪□□□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急〕

〔杏Ⅰ〕は「怨」字左旁に「悪本乍」の書入れが有る。鄭校は、「怨」を是とし、「悪」は「疑形近而誤也」としているが、「悪」に作る伝本の系統が認められ、誤写ではあるまい。

運夷第九経文「功成名遂身退天之道」下注（上7オ6b335）

①□□□哀〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・杏Ⅰ・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵・治要〕

樂極則哀〔活Ⅱ・天理〕

此の異同字に就いては、古活字版に孤立した特異な異文として後に言及する。

能爲第十経文「天門開闔」下注（上8オ3b383）

③治身■■■■天門謂鼻孔〔活Ⅱ・無窮・慶Ⅰ・大東・天理〕
□□□□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・敦Ⅰ・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
於身■□□□□〔東急〕
治身之□□□□□〔道蔵〕

〔活Ⅱ・無窮・慶Ⅰ・大東・天理〕は「天門」上の「治身」の二字が無い。「通考」にも無く、鄭校は「奪」と看做す。しかし、〔陽Ⅰ〕等とは異なった「治身」二字の無い本が伝承されていたことは明らかで、古活字版は其の本文を継承している。

厭耻第十三経文「及吾無身吾有何患乎」下注（上10ウ2a502）

體■道自然〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・道蔵・天理〕
②□■■□□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門〕
□通□□□〔斯Ⅱ〕
□得□□□□〔宋版・世徳・敦Ⅰ〕

〔陽Ⅰ〕は〔書陵・龍門〕と同じで「道」が無い。〔斯Ⅱ〕は「體通道自然」に、〔宋版・世徳・敦Ⅰ〕は「體得道自然」に作る。鄭校は底本〔宋版〕に従い、〔陽Ⅰ〕を「得道」の脱と看做す。しかし、〔書陵・龍門〕の例から「體自然」に作る伝本が存在したことは明らかで、〔陽Ⅰ〕はその本に従い、別に「體道自然」に作る伝本も有って、古活字版はそれに拠っている。此の異文も〔陽Ⅰ〕と古活字版との乖離を示している。

賛玄第十四経文「迎之不見其首」下注（上11ウ6a582）

②末不可■□□〔活Ⅱ・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・天理〕
未■□□〔陽Ⅰ〕
□■□□〔弘文・斯Ⅱ・武内・東大〕
□□□〔書陵・龍門・無窮・足利・筑波・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・東洋・東急・敦Ⅰ〕

注文「一無端末不可預待也」中の両三字であるが、〔陽Ⅰ〕には「末」字が無い。〔弘文〕等は「不」が無く、〔書陵〕等は、「末」無く、「不」を「未」に作る。未末の字形の近似、未不の字義の相似に因り、次句の「預」「須」の異同も加わり諸本間で本文の混乱が顕著である。しかし、此の注文は〔陽Ⅰ〕の加点では「一（ハ）・端无（シ）。預メ待ツ可（カラ）不〔也〕」と訓読され〔斯Ⅰ・天理〕との違いは「端无（シ）」が「端末無（シ）」となるに過ぎず文義の上での隔たりは無い。因みに「未」に作る〔書陵〕等諸本は「未」は下句に付き、上句は「一ハ端無シ」と訓まれ、その限りで〔陽Ⅰ〕と一致する。

〔陽Ⅰ〕の此の句は、「末」字の脱落と見ることも出来ようが、豫断を慎んで、異文の一つと見做しておきたい。尚、鄭校は此の異同についての言及は無い。

同、経文「執古之道以御今之有」下注（上11ウ7b589）

②以御■物〔活Ⅱ・斯Ⅰ・宋版・世徳・天理〕
□□■■〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・敦Ⅰ〕
□□萬□〔道蔵〕

鄭校は、「物」字が無いのは「非也、當據補」と言うが、古鈔本の殆どにこの字が無く、〔敦Ⅰ〕にも無い。本句に於いて「物」字の無い伝本の一系を認めるべきであろう。

顯徳第十五経文「孰能濁以静之徐清」下注（上12ウ5a635）

③■孰誰也〔活Ⅱ・宋版・世徳・道蔵・天理〕
■■■〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・東急・敦Ⅰ〕

此の三字、〔陽Ⅰ〕は経文次句「孰能安以久之徐生」下注の冒頭に在る。〔書陵〕等の古鈔本諸本も同じである。

同、前掲注文に連接（上12ウ5a636）

誰能知〔活Ⅱ・宋版・世徳・天理〕
③□□■■如〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・東急・敦Ⅰ〕
道蔵〕

此の三字、古鈔本諸本には無い。〔宋版・世徳〕と一致する本文として後述。

同、経文「孰能安以久之徐生」下注（上12ウ6a643）

■■■〔活Ⅱ・宋版・世徳・道蔵・天理〕
③孰誰也〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・敦Ⅰ〕

前々項で指摘したように、古活字版と〔陽Ⅰ〕等古鈔本諸本とは此の注文三字の配置が異なる。以上の三項は、古活字版に孤立した特異な本文として、後に検討するが、此処では、古活字版と〔陽Ⅰ〕との異同としてのみ注目しておく。

歸根第十六経文（上13ウ3696）

①知常曰容〔活Ⅱ・東大・陽Ⅱ・敦Ⅰ・天理〕
□□日□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・六地〕
□□■□〔東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

「曰」「日」の字形を判別することは困難な場合が多い。この箇所古活字版は明らかに「曰」であり、〔陽Ⅰ〕はこの句の前行及び前々行の経文「知常曰明」「復命曰常」の「曰」字と比較すれば「日」と判断され、加点に従えば「常を知（レ）は日に容ナリ」と訓まれ、「日」字であることは間違いない。又、〔大東〕の「日」字左旁には「曰イ」と、右旁には「ーレー曰レーイ」と書入れが有り、〔無窮〕は「日」に見消ちを付し右旁に「曰」字が傍書されている。これらの書入れからも、「曰」「日」の両文がそれぞれに相承されていたことが明らかであろう。古活字版が「曰」に従い、〔陽Ⅰ〕が「日」に従うところに、両本の伝系の相違が窺われる。

淳風第十七経文「有不信焉」下注（上14オ5a748）

③君信不足於下■■■■■■〔活Ⅱ・無窮・天理〕〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵・治要〕

此の経注文と直前の経文句「信不足焉」及び其の注文は、諸本間で異同が甚だしい。本文の遷移の実相を窺い系統関係を考察する上で、この部分の雑糅交雑した本文の解明は重要で、別に改めて検証を必要とする。此処では古活字版と〔陽Ⅰ〕の異同を指摘するに留める。尚、〔宋版〕は此の経文四字を脱し、此の六字以下の注は前経文「信不足焉」下注に接続している。

異俗第二十経文「我獨若遺」下注末句（上16オ7b876）

以於不足也〔活Ⅱ〕

②似□□□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・天理〕

似□□□者〔東洋〕

似我□□□□足利〕

古活字版のみ「以」に作り、〔陽Ⅰ〕等管見の古鈔本は全て「似」に作っている。只、「通考」は古活字版に同じで「以」に従い、鄭校は此れを「蓋形近而譌也」とするが、「以」に作る伝本系を想定することも可能であろう。此の異文は古活字版に孤立した本文として改めて詳述したい。

虚心第二十一経文「道之爲物唯恍唯忽」下注（上17オ3a919）

獨恍忽〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・天理〕

独恍急〔慶Ⅱ〕

②■□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門（恍作恍）〕

〔陽Ⅰ〕には「獨」字が無く〔書陵・龍門〕が同じである。鄭校は脱字と見て非と見做している。しかし、「獨」字の無い伝本の群類を想定することは可能であろう。

同、経文「恍兮忽兮其中有物」下注（上17オ5a929）

道唯恍忽〔活Ⅱ・無窮・梅沢・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・天理〕

②□□忽恍〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ（恍作恍）〕

鄭校は〔陽Ⅰ・斯Ⅱ〕の「忽恍」を「疑非」とするが、〔梅沢〕の「恍忽」右旁に「忽恍ィ」と校異の書入れが有る。両様の伝本が存在していたことは明らかである。

益謙第二十二経文「夫唯不爭故天下莫與之爭」（上18オ6988）

莫■與之爭〔活Ⅱ・慶Ⅱ・世徳・天理〕

②□能□□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ・宋版・道蔵・治要〕

「能」字の有無に就いて、〔東洋〕該行眉上、及び東洋文庫蔵古活字版該句左旁の書入れに「能一本有之清中二家无之」とあ

り注目される。清原、中原両家本には「能」字が無かった事が判明し、古活字版と〔慶Ⅱ〕が此れと吻合している。伝本の多くは「能」字が有り、両家本以外の本文を継受していると見なければならない。尚、〔慶Ⅱ〕は「莫與」の字間に小圏を付し、右旁行間に「能」字を傍書している。

虚無第二十三経文末句「有不信」下注冒頭（上19ウ1a 1036）

■■■■■■■■〔活Ⅱ・宋版・世徳・道蔵・天理〕
③下即應君以不信也〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ〕
下則應君以不信也〔武内・東大・東洋〕
下則應君以不信■■〔斯Ⅰ〕
下■應君以不信■〔東急〕

直前の経文「信不足焉」下に、諸本並びに「下則應君以不信也」と同文の注があり、鄭校は此の注文を衍文と見做している。管見の古鈔本の全てが重出していることを考えれば、一概に衍文とするには慎重にならざるを得ない。此の異同に就いても、古活字版に特異な異文として改めての検討が必要である。

苦恩第二十四経文「自是者不彰」下注（上19ウ6a 1062）

衆人共蔽之〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・天理・治要〕
②□■□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・慶Ⅰ・大東・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

「人」字の有無で伝本は二系に分かれる。古活字版には有り、〔陽Ⅰ〕には無く、此の異同において両本は別系と見られる。

象元第二十五経文「周行而不殆」下注末句（上20ウ1b 1100）

不危■殆〔活Ⅱ・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・天理〕
②□□不□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ・梅沢・東大・東洋・東急〕
□殆不危〔筑波・慶Ⅰ・大東・武内〕

〔陽Ⅰ〕は「危殆」の間に「不」が有って、古活字版と異なる。東洋文庫蔵古活字版の書入れは両字の間に小圏を付し左旁に「不」を傍書してある。鄭校は衍字としているが、〔斯Ⅰ〕以外の古鈔本には「不」が認められ、衍字と見るのは難しい。

同、経文「遠曰反」下注（上20ウ6a 1125）

不超絶〔活Ⅱ・筑波・武内・東洋・天理〕
②□起□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東〕
□越□〔無窮・足利・弘文・梅沢・慶Ⅱ・東大・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

鄭校は「通考」の「超」は「越」と同義とし、〔陽Ⅰ・斯Ⅱ〕の「起」字は「蓋形近而誤也」と看ている。〔書陵〕等が同文であり、誤字とは見做し難い。少なくとも誤写とは考えられず相承された異文が伝写されたものと見るべきであろう。

同、経文「故道大天大地大王亦大」下注（上20ウ7a 1130）

無■不容〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・梅沢・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・天理・治要〕
②□所□□〔陽Ⅰ・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

「不」上に「所」字が有るのは、古鈔本としては異例である。〔治要〕を含め諸本に「所」は無い。両様の伝本が有ったことは確かで、鄭校の如く「所」の脱と断定するのは穏当ではない。

同、経文「天法道」下注（上21オ4a 1156）

③
天當法道以清静〔活Ⅱ・天理〕
▩道□▩□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・道蔵〕
▩▩▩□▩□□〔梅沢・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
▩▩▩▩▩□□〔治要〕

〔陽Ⅰ〕は「道法清静」に作る。此の事例についても、古活字版に特異な異文として後に詳述する。

反朴第二十八経文「爲天下式常德不惑」（上23オ7 1278）

②
常德不惑〔活Ⅱ・足利・天理〕
□□□戓〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ・治要〕
□□□戓〔梅沢〕
□□□弌〔東洋〕
□□□戚〔東大〕
□□□弌〔宋版・世徳・道蔵〕

同、経文「爲天下式常德不惑」下注（上23ウ1b 1282）

②
差惑也〔活Ⅱ・足利・天理〕
□戓□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東急・斯Ⅰ・治要〕
□戚□〔東大〕
□戓□〔梅沢〕
□弌▩〔東洋〕
□弌▩〔宋版・世徳・道蔵〕

同、経文「復歸於無極」下注（上23ウ1a 1286）

②
不差惑〔活Ⅱ・足利・天理〕
□□戓〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東急・斯Ⅰ〕
□□弌〔東洋〕
□□戓〔梅沢〕
□□戚〔東大〕
□□戉〔慶Ⅱ〕
□□弌〔宋版・世徳・道蔵〕

鄭校は、「通考」の「惑」を「非也、蓋形近而譌也」とする。

しかし「惑」に作る伝本の系類が存在していたことは明らかで、〔陽Ⅰ〕は、この異同字からみても古活字版とは別系である。

無為第二十九経文「執者失之」下注（上24オ7b 1331）

②
失其情▩實〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・世徳・天理・治要〕
□▩精▩□〔道蔵〕
□□倩▩□〔宋版〕
□□□欲□〔東急〕
□□▩▩□〔陽Ⅰ・書陵・龍門〕

〔陽Ⅰ〕には「情」字が無く、鄭校は誤脱と見做している。しかし、「失其實」に作る〔陽Ⅰ・書陵・龍門〕と同類の伝本が他にも存在したことは十分に予想される。

同、経文「執者失之」下注（上24オ7b 1333）

「生詐偽也」の「詐偽」を〔陽Ⅰ〕は「奸偽」に作る。諸本の同異は、以下の如くである。

詐偽〔活Ⅱ・宋版・世徳・道蔵・天理〕
□譌〔治要〕
②姧□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東急・斯Ⅰ〕
姦□〔東洋〕

東洋文庫蔵古活字版の校異の書入れに「姧イ」とある。

倹武第三十経文「大軍之後必有凶年」下注（上25オ2b 1367）「五穀盡則傷人也」の「五穀」、〔陽Ⅰ〕には「五」字が無い。鄭校は脱としている。諸本間の同異は次の如くである。

五穀〔活Ⅱ・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・宋版・世徳・道蔵・天理〕
②■□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・慶Ⅱ・斯Ⅰ〕

〔治要〕は此の注文句は無い。〔足利〕は上句「害五穀」の「穀」字を受けて畳字「〻」に作るが、此の「穀〻」の字間の空所に更に「〻」が加筆されている。

偃武第三十一経文「戰勝以喪禮處之」下注（上26ウ3a 1461）

居喪主■之位〔活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・天理・治要〕
②□□■礼□□〔陽Ⅰ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ〕
□□□禮□□〔宋版・世徳・道蔵〕

〔梅沢〕は「主」字の右旁に「礼」字を傍書。鄭校は〔宋版〕等を是として〔陽Ⅰ〕に「主」、〔斯Ⅱ〕に「禮」字が無いのを「並非、當據補」としているが、予断は慎みたい。

任成第三十四経文「愛養萬物而不爲主」下注（上28オ7a 1560）

有所収取〔活Ⅱ・足利・筑波・杏Ⅰ・斯Ⅰ・道蔵・天理〕
②□□□聚〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急〕
□□□集〔梅沢〕
□□放□〔宋版・世徳〕

〔杏Ⅰ〕は「取」字左旁に「集中本乍聚」と、又眉上に「本乍聚」と書入れが有る。また、〔梅沢〕「集」字左旁には「聚イ」とあり、中原家本は「集」に作り、他に「取」「聚」に作る本が異本として認知されていたことが判明する。古活字版と〔陽Ⅰ〕とは、此の「取」「聚」両字の違いからも、別系の要素が認められる。鄭校は、〔宋版〕の「放」は「收」に作るべしと、王校は〔道蔵〕等に拠って「收」に校改している。

同、経文「萬物歸焉而不爲主」下注（上28ウ1b 1571）

人主有所禁止〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・梅沢・東大・東急・斯Ⅰ・杏Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・天理〕
②□■□□□□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東洋〕
■■□□□□〔慶Ⅱ〕

〔杏Ⅰ〕は「主」字の左旁に「本无」と校異の書入れが有り、〔大東〕は「人有」字間に小圏を施し左旁に「主」字を傍書する。〔慶Ⅱ〕には右旁に「人主」二字が加筆されている。

仁徳第三十五経文末句「用之不可既」下注（上29オ6a 1612）

國富民昌〔活Ⅱ・書陵・無窮・筑波・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・道蔵・天理〕

③□安□□〔斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□■■□〔陽Ⅰ・龍門・足利・東急〕
富民国□〔弘文〕

〔足利〕は「昌」を塗抹し右旁に「富民昌」と加筆する。鄭校は〔陽Ⅰ〕に「富民」両字が無いのを「非、當據補」とするが、「國昌」二字に作る別系異本の存在が確認される。

論徳第三十八経文「上徳無爲」下注（下1オ7b19）

無所改爲〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・筑波・弘文・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅲ・道蔵・治要〕

①□□攻□〔陽Ⅰ・書陵・斯Ⅱ〕

〔無窮〕は「改」字左旁に「政イ」の書入れが有る。鄭校は〔斯Ⅱ〕の「攻」（〔陽Ⅰ〕の同字には触れない）を非とし、「蓋形近而譌也」と言う。〔陽Ⅰ・書陵〕は「オサメ」の訓を付し、「攻」に作る伝本が相承されていた事は明らかである。

同、経文「失義而後禮」下注（下2オ2a54）

言義衰則〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東洋・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅲ〕

②■□□□〔陽Ⅰ・書陵・東大・東急〕

鄭校は「言」が無いのは「疑非」とするが、根拠は不明。

法本第三十九経文「天得一以清」下注（下2ウ3a79）

③言天得一故能垂象清明也

此の注文の配置に相違がある。即ち〔陽Ⅰ〕は経文次句「地得一以寧」下の注文「地得一故能安静不動揺也」の前にある。従って、経文「天得一以清」「地得一以寧」の両句は分断されずに連続している。〔書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅲ・治要〕の諸本が〔陽Ⅰ〕と同じで、古活字版と一致するのは〔無窮〕の一本に過ぎない。只、王校は古活字版と同じに分断、校改されているが、依拠本は明らかでない。

同、経文「地得一以寧」下注（下2ウ4a82）

言地得一故能安静〔活Ⅱ・無窮・聖語・斯Ⅰ〕

②■□□□□□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅲ・治要〕

〔足利〕は、この部分の料紙が破損し、何れか不明。

同、経文「萬物無以生將恐滅」下注（下3オ6b114）

但欲常生〔活Ⅱ・無窮・筑波・大東〕

□□■□□〔宋版・世徳・道蔵〕
■□□當□〔弘文・慶Ⅰ〕
■□□□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・斯Ⅱ・梅沢・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・敦Ⅲ・治要〕

②

「但欲」二字の有無に由って諸本は二分され、古活字版と

〔陽Ⅰ〕とは別類に属している。鄭校は、〔陽Ⅰ・斯Ⅱ・聖語〕に就いて、二字の脱落と見ている。

同、同上経文下注（下3オ6b115）

③無已時〔活Ⅱ・無窮・東洋・宋版・世徳・道蔵〕
■■■〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・聖語・東急・斯Ⅰ・敦Ⅲ・治要〕

鄭校は「無已時」三字の無い〔斯Ⅱ・陽Ⅰ〕を「非、當據補」と校勘する。しかし、同じ対校本の〔聖語・敦Ⅲ〕にも無い。此の両本については校記を欠く。

同異第四十一経文「上士聞道勤而行之」下注（下4ウ2b181）

竭■力而〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・筑波・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ〕
□■功□〔梅沢〕
□□■□〔道蔵〕
②□心□■□〔陽Ⅰ・書陵・足利・弘文〕

東洋文庫蔵古活字版には「竭力」の右旁に「心イ」と校異書入れが有る。鄭校は〔陽Ⅰ〕の「心」字を衍字と見ている。

道化第四十二経文「或益之而損」下注（下6オ3a262）

■貪冨■者〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・筑波・弘文・梅沢・慶Ⅰ・大東・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ・治要〕
■□□■〔斯Ⅱ・武内〕
■□富貴□〔道蔵〕
②故□□■□〔陽Ⅰ・書陵・足利〕

東洋文庫蔵古活字版は「貪」上に小圏を施し右旁に「故」字を傍書。鄭校は〔陽Ⅰ〕の「故」字を衍字と見做す。

同、経文「強梁者不得其死」下注（下6オ6a276）

■兵刃所伐〔活Ⅱ・無窮・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・敦Ⅱ・治要〕
■□刀□〔世徳〕
■□□加〔道蔵〕
②為□□□□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・梅沢・武内・東大・東洋〕

「為」字の有無によって伝本はほぼ二分され、伝写相承された異文と見做される。鄭校は衍字と見ている。

洪徳第四十五経文「大巧若拙」下注（下7ウ7b358）

亦不敢見其能〔活Ⅱ・東大・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕
②示□□□□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東洋・治要〕
■□□□□□〔梅沢・敦Ⅱ〕

東洋文庫蔵古活字版は「亦」右旁に「示イ」の書入れが有る。鄭校は〔陽Ⅰ・斯Ⅱ〕及び『道徳眞經玄徳纂疏』所引の「示」字を指摘し「蓋形近而誤也」とし「亦」に従い、王校は『道徳眞經玄徳纂疏』所引及びP二六三九に従い底本〔宋版〕の「亦」を改めて「示」に作っている。「亦」或いは「示」に作るか、字が無いか、三様の本が早くから存在していたことは明らかで、何れが是か非か、文義よりしても俄には決し難い。

任徳第四十九経文「爲天下渾其心」下注（下10オ6b472）

渾■濁其心〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

② □ゝ□□□〔陽Ⅰ・書陵・弘文〕
□■■□□〔敦Ⅱ〕

〔東洋〕の書入れ（青筆）は「渾濁」両字間に小圏、其の右に「渾」字を傍書する。鄭校は此の畳字を、「非、當刪」とするが、〔書陵・弘文〕も同様であり、直ちには従えない。

同、経文末句「聖人皆孩之」下注（下10ウ1a479）

孩育■■赤子〔活Ⅱ・無窮〕
□弃■■□□〔宋版・世徳〕
□攖■■□□〔敦Ⅱ〕
□兒■■□□〔聖語・斯Ⅰ〕
攖孩■■□□〔道蔵〕
嬰孩■■□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急〕

③ ■■蠕虫□□〔梅沢〕
□□蠕虫□□

東洋文庫蔵古活字版には「孩育」右旁に「蝡（セン）虫」との書入れが有る。諸本間で異同が多いが、古鈔本の多くは〔陽Ⅰ〕に同じで「蠕虫」に作る。「蠕虫」に作るのは本邦伝来本に限られるのではなく、『道徳眞經玄徳纂疏』所引が同じで、王校に拠ればP二六三九も同じ。従って、両字の由来は古く唐鈔本に淵源していると言える。古活字版の「孩育」が何本に基づいたか不明であるが、両本の疎隔は明らかであろう。此の異同は、古活字版に特異な異文として後にも検討する。

貴生第五十経文「人之生動皆之死地十有三」下注（下11オ1b502）

反之十■三死地〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・筑波・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・聖語・東急・斯Ⅰ・敦Ⅱ〕

② □□□有□□□〔陽Ⅰ・書陵・足利・弘文・梅沢・武内・東大・東洋・道蔵〕
□□□■□□■〔宋版・世徳〕

東洋文庫蔵古活字版は「十三」間に小圏を付し左旁に「有」の書入れが有る。「有」の有無で伝本は二系に分かれ古活字版と〔陽Ⅰ〕は別類に属する。〔宋版・世徳〕は「地」字が無く誤脱であろう。王校は〔敦Ⅱ・道蔵〕に拠って「地」を補う。

歸元第五十二経文「復歸其明」下注（下12ウ6b586）

無使精神洩外〔活Ⅱ・書陵・杏Ⅱ・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東〕
□□□□泄□〔無窮・足利〕
□□□□外洩〔武内〕

② □□□□□■〔陽Ⅰ・梅沢・東大・東洋・敦Ⅱ〕
□□□□泄■〔聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

伝本は「外」字の有無によって二系に分かれる。掲出本の限りでは、「外」が有るのは古活字版と古鈔本であるが、『道徳眞經注疏』所引は「泄」下に「於外」二字が有る。此れも唐鈔本に既に生じていた異同と考えられる。

益證第五十三経文「大道甚夷」下注（下13オ5b603）

夷平■■■易也〔活Ⅱ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕

③□□也■■□□〔武内・聖語・斯Ⅰ〕
□□也■大□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・東大・東洋・東急〕
□□也高大□□〔弘文〕

東洋文庫蔵古活字版には、「平易」字間右旁に「也大」の書入れが有る。古活字版が管見の古鈔本の何れとも一致しない点で注目されよう。此の異同も、古活字版に特異な異文として後に検討する。尚、鄭校は〔宋版〕に従い、〔陽Ⅰ・斯Ⅱ〕及び『道徳眞經玄德纂疏』所引が「夷平也大易也」に作るのを「疑並非、當據正」としているが、根拠は示されていない。

同、経文「而民好徑」下注（下13オ5b608）

而民好從邪徑〔活Ⅱ・梅沢・聖語・斯Ⅰ・宋版・世德・道蔵〕
□□□□耶徑〔無窮・敦Ⅱ〕
□□□□□■〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋〕
②□□□耶■足利
□□□也□□東急
□人□□耶■治要〕

「徑」字の有無によって、伝本は二系に分かれ、古活字版と〔陽Ⅰ〕とは、別類に属している。

修觀第五十四経文「故以身觀身」下注（下14ウ1b664）

孰存孰亡也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・聖語・斯Ⅰ〕
②□亡□存□〔陽Ⅰ・書陵・梅沢・武内・東大・東洋・東急・宋版・世德・道蔵〕
熟□■■■〔敦Ⅱ〕

〔敦Ⅱ〕を除き、伝本はこの句においても二類に分かれ、古活字版と〔陽Ⅰ〕とは別類である。

淳風第五十七経文「以奇用兵」下注（下16ウ4b761）

■用兵〔活Ⅱ・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・斯Ⅰ〕
②使□□〔陽Ⅰ・無窮・東急・宋版・世德・道蔵〕
必□□□〔書陵〕
令□□□〔敦Ⅱ〕

〔東洋〕は「用」字上の字間に小圏を付し左旁に「使」の書入れ（藍筆）が有る。東洋文庫蔵古活字版の書入れも同じ。

同、経文「我無事而民自富」（下17オ7796）

我無事而〔活Ⅱ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・慶Ⅰ・大東・斯Ⅱ・梅沢・東大・武内・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・六地・宋版・世德・敦Ⅱ・道蔵・治要〕
②□□爲□〔陽Ⅰ〕

〔陽Ⅰ〕のみ「事」を「爲」に作る。右旁に「事」の加筆が有るのは、異文の旁記と考えられ、誤写とは見做し難い。蔣錫昌『老子校詁』に拠れば明太祖御註道德眞經も「爲」に作る。

守道第五十九経文「莫若嗇」下注（下18ウ3a863）

嗇愛也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・筑波・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・道蔵〕
②□貪□〔陽Ⅰ・書陵・無窮・足利・弘文・梅沢・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世德・敦Ⅱ〕

〔杏Ⅱ〕は「愛」右旁に「貪イ」と、又、〔足利〕は眉上に「愛ィ」と書入れが有る。鄭校は「疑當作愛」と、王校は『道德眞經注疏』所引により「嗇愛惜也」と校改している。しかし、此処は、二様の伝本の相承を認め、両存させるべきであろう。

同、経文「有國之母可以長久」下注（下19オ2a 886）

人■能保身中之道〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕
□■□□□□■□〔大東〕
②□常□□□□□□〔陽Ⅰ・書陵・足利〕

〔東洋〕は「人能」字間に小圏を付し右旁に「常」の書入れ（青筆）が有る。鄭校は「常」を衍字と見るが、此の字の有る本、無い本の両様が伝承されていたことは明らかである。

居位第六十経文「非其神不傷人聖人亦不傷人」下注（下19ウ3a 915）

非■鬼神不能傷害■人〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東洋・東急・宋版・世徳・治要〕
□■□□□□□□於□〔道蔵〕
□其□□□□□□■□〔敦Ⅱ〕
②□■■□□□□□■□〔陽Ⅰ・書陵・梅沢・東大・聖語・斯Ⅰ〕

〔東洋〕は「鬼」左旁に見消ち、「神」右旁に「或乍鬼神」の書入れ（青筆）が有る。鄭校は〔陽Ⅰ・聖語〕に「鬼」字が無いのを「疑非、當據補」と見る。此処も両三様の異文が伝承されてきたと承知すべきであろう。

謙徳第六十一経文末「各得其所欲大者宜爲」（下20ウ1 958）

■■■〔活Ⅱ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・六地・敦Ⅱ〕
③夫兩者〔陽Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

〔陽Ⅰ〕は此の経文句頭に「夫兩者」三字が有る。〔宋版・世徳・道蔵〕の他、現行の王弼注本、Ｐ二三四七・Ｐ二三七五・Ｐ二三五〇・Ｐ二四一七・Ｓ六四五三等五千字文系の敦煌写本が同文であるが、管見の限りでは古鈔本としては異例である。本邦伝来本の本文系統の複雑な側面が窺われる。

同、同上経文下注（下20ウ2a 961）

各欲得其所■〔活Ⅱ・書陵・無窮・筑波・梅沢・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ〕
□□□□処■〔杏Ⅱ〕
□□□□□欲〔足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・道蔵〕
②□□■□□■〔陽Ⅰ〕

諸本には「得」が有り、鄭校は〔陽Ⅰ〕を脱字と見る。しかし、〔東洋〕の「得」左旁には見消ち（青筆）が有り、この字の無い本が異本として知られていた事は明らかである。

爲道第六十二経文「善人之寶」下注（下20ウ6b 969）

不敢違失也〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大

②□□□□□□□□之□□□□□□□□□□□□建■■■■■■■■■■■■東・斯Ⅰ〕〔東洋〕〔陽Ⅰ・書陵・梅沢・武内・東大・道蔵〕〔東急・宋版・世徳・敦Ⅱ・治要〕〔聖語〕

〔杏Ⅱ〕は「失」右旁に「无イ」と校異の書入れ、〔東洋〕は「之」左旁に見消ち（青筆）が有る。古鈔本は「失」字の有無によって二分され、有「失」字本は掲出本の範囲では古活字版・古鈔本に限られるが、『道徳眞經注疏』引河上公注も同文である。従って、此の異同も唐鈔本に淵源すると考えられる。

守微第六十四経文「爲者敗之」下注（下22ウ6b 1068）

②廢於仁恩〔活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東〕
□□□□□□□□思〔東洋〕
□□化□□□□□□□□□□□□反■■■■■■■■■■■■〔陽Ⅰ・書陵・武内・東大・聖語・東急・斯Ⅰ・道蔵・敦Ⅱ〕〔杏Ⅱ〕〔宋版・世徳〕

〔東洋〕は「思」左旁に見消ち（青筆）、〔杏Ⅱ〕は「化」上字間に小圏を標し、行間「異ニハ有二仁恩一字一无二化字一」の書入れが有る。古鈔本には「廢於仁恩」「廢於仁思」「廢於仁」「廢於化」の四様の異同があり、古活字版は「廢於仁恩」、〔陽Ⅰ〕は「廢於仁」に作って異なる。尚、『道徳眞經注疏』所引は「廢於慈仁」に作り、鄭校は此れを是とし、王校はP二六三九の「廢於仁慈」に従って〔宋版〕を校改している。

同、経文「聖人無爲故無敗」（下22ウ7 1074）

■■聖人〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要〕

③是以□□〔陽Ⅰ・書陵・足利・慶Ⅰ・六地〕

〔杏Ⅱ〕の「聖人」左旁に「聖人之上二有二是以二字一非也」と、眉上に「是以二字无異本也」と、〔慶Ⅰ〕眉上にも「是以二字異本无也」と、また東洋文庫蔵古活字版は「聖」字上辺に小圏を標し左旁に「是一以イ」と書入れが有る。P二三四七・P二三七五・P二三五〇・P二四一七・S六四五三の敦煌写本また、現行の王弼注本にも「是以」が有り、此れも唐鈔本以来伝承された異文と考えられる。

淳徳第六十五経文「民之難治以其智多」（下24オ1 1135）

以其智多〔活Ⅱ・無窮・武内・東大・東洋・聖語・東急・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕
②□□知□□□多智〔杏Ⅱ・治要〕〔陽Ⅰ・書陵・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・六地・斯Ⅰ〕

〔東洋〕は「其智」字間に小圏、右旁に「多」の書入れが有り、その左旁に見消ちを付す（何れも青筆）。標出本の限りでは「多智」に作るのは古鈔本の他に無いが、P二三四七、また景龍碑も同じで、此れも唐鈔本以来の異同と考えられる。

後己第六十六経文「以其不爭」下注（下25オ4a 1198）

②無厭聖人■■〔活Ⅱ〕
□□□□■時〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ〕
□□□□之時〔道蔵〕

東洋文庫蔵古活字版は「人」下の字間に小圏、右旁に「時」の書入れがある。古活字版にだけ「時」が無い。此れも古活字版に特異な異文として後に検討する。鄭校は「通考」に「時」が無いのを脱字と見ているが、今は異文と見て従わない。

三寶第六十七経文「儉故能廣」下注（下25ウ7b 1242）

民曰用寛廣〔活Ⅱ〕
□日□□□〔無窮・聖語〕
□日□■□〔斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕
□用日□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東急〕
③□用日■□〔東大・東洋・敦Ⅱ〕
□用日□■〔梅沢〕

此の異同も、古活字版に孤立した本文として後に検討する。此処では、古活字版と〔陽Ⅰ〕の本文系統上の相違を示唆する一異文と見做し挙例するに留める。

玄用第六十九経文「仍無敵」下注（下27オ6a 1311）

②雖欲■仍引之■〔活Ⅱ〕
□□■□□心〔陽Ⅰ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ〕
□□■扔□□心〔書陵〕
□□行□□□心〔道蔵〕

古活字版だけに「心」字が無いが、誤脱とは見做せない。東洋文庫蔵古活字版は「之」下字間に小圏、右旁に「心」の旁記が有る。此れも古活字版に孤立した異文として後に検討する。

同、経文「禍莫大於輕敵」下注（下27ウ1b 1324）

輕戰■貪財■〔活Ⅱ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ・治要〕
③■□□□□者〔東洋〕
■□□■□弘文〕
■□而■□賤■〔道蔵〕
□□□□□寶■〔陽Ⅰ〕

〔陽Ⅰ〕にのみ「輕戰」の二字が無い。鄭校は「非、當據補」とする。しかし、異文とも見做し得る。因みに、〔陽Ⅰ〕の訓点に従い、此の章句全文「夫禍乱之害莫大於欺輕敵家侵取不休貪財也」を読み下せば、

夫（レ）禍乱（ノ）〔之〕害は敵家を欺キ輕シ（・）侵シ取ルこと休マ不（・）財を貪（ル）より大ナルは莫シ

であり、文脈上甚だしい破綻は生じていない。

知難第七十経文「天下莫能知莫能行」下注（下27ウ6a 1342）

人惡■柔弱〔活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・梅沢・武内・東大・東洋・東急・斯

□慈■　I・宋版・世徳・敦Ⅱ
□不好■□□　聖語
□□□□　道蔵
□□□□　陽Ⅰ・書陵・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・治要

②悪人■

鄭校は〔陽Ⅰ・斯Ⅱ〕の「悪人」を誤倒と見ている。しかし、王校によれば、P二六三九は「悪人」に作り、標示のように〔治要〕も同様であり、唐写本以来の異文と考えられる。

同、経文「知我者希則我者貴矣」下注（下28オ2b 1360）

則知我者爲貴也　活Ⅱ
③故■■■□□　陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要
（文末助字の異同は不問）

古活字版だけが「則知我者」に作る。「通考」も同じで、鄭校は「此四字疑係傍記之詞、傳寫者誤入注文也」と校勘している。しかし、誤写と断定することは控えたい。此の異同も古活字版に孤立した異文として後に検討する。

知病第七十一経文「聖人不病以其病」下句（下28ウ1 1376）

以其病■　活Ⅱ・弘文
②□□□□　筑波
□□□□病之　陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・六地・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ

東洋文庫蔵古活字版は「病」字下の余白に小圏を記し右旁に「病」の書入れが有る。伝本の多くは「以其病病」に作り、「病」一字の脱落とも見做されるが、〔活Ⅰ・活Ⅱ・弘文〕を含む「以其病」に作る同系伝本を想定することも可能であろう。

制惑第七十四冒頭経文「民不畏死」下注（下30オ5a 1466）

民不■■畏　活Ⅱ
②□□知■□　陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・聖語・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ
■□□知所□　道蔵
□知■□□　治要

諸本は「不畏」の間に「知」字が有る。只、「通考」は古活字版と同じであって、鄭校は脱字と見做している。此の異同も古活字版に孤立した異文として後に検討する。

同、経文「而爲奇者吾得執而殺之孰敢矣」下注（下30ウ1a 1478）

乃應王法　活Ⅱ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要
②□□平□　陽Ⅰ

諸本「王」に作り、管見では〔陽Ⅰ〕のみが「平」に作る。或いは誤写か。鄭校は「乎」字と見做して「疑係王之壞字」と。

貪損第七十五経文「是以飢」下注（下31オ2a 1517）

化上■爲貪　活Ⅱ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・聖語・東急・道蔵・敦Ⅱ
□□■■□　梅沢・東洋・斯Ⅰ

②□□■□矣〔宋版・世徳〕
□□生□□〔陽Ⅰ・書陵〕

東洋文庫蔵古活字版は「上爲」字間に小圏を標し右旁に「生」（乎古止点付）の書入れが有る。鄭校は衍字と見ているが、伝写相承された異文と考えてよいと思われる。此の章句「人皆化上生爲貪叛道違德故飢也」を〔陽Ⅰ〕は、

人皆・上に化シ、生して貪を爲シ道を叛イ（て）德に違（フ）（。）故に飢フ〔也〕

と訓み、〔書陵〕も概ね同様である。

Ⅵ、内題、章題の異同　異同量七

内題、章題の体式及び題名に、古活字版と〔陽Ⅰ〕との基本的な相違は無いが、僅かに以下の如き異同が指摘される。

(1)　巻下首の内題は、古活字版は「老子德經下」と題しているが、〔陽Ⅰ〕には「下」一字が無い。諸本間の異同を対照して標示すれば次の如くである。

老子德經■■下〔活Ⅱ・書陵・杏Ⅱ・無窮・筑波・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東洋・六地・陽Ⅱ・東急・宋版・世德・敦Ⅲ〕
□□□□■■■〔陽Ⅰ〕
□□■□■■□〔弘文・斯Ⅰ〕
□□■□巻之□〔東大〕
■■■■■■■〔聖語〕
道德眞經註巻之三〔道藏〕

伝本の殆どに「下」字が有る。しかし、その故を以て〔陽Ⅰ〕の誤脱と決めつけることはやはり危険であろう。

(2)　第十二章章題「撿欲」を〔陽Ⅰ〕は「撿慾」に作る。先にⅢ異体字、通用字使用に起因する異同で指摘した通りである。

(3)　第二十五章章題は、〔活Ⅰ〕等は「象元」であるが、〔陽Ⅰ〕は「象無」に作り（上20オ4 1084）、同題の伝本は他に無い。此の異同については先述した通りで、「元」「无」の字形の類似による〔陽Ⅰ〕の誤写とは見做されない。

(4)　第五十二章章題は、〔活Ⅰ〕は「歸元」である。此れを〔陽Ⅰ〕は諸本とは異なり「滯無」と題している（下12オ4 557）。「歸」「滯」の草体の類似、「元」「无」の字形の類似に起因する異同と思われるが、この異文に就いても、〔陽Ⅰ〕に限った誤写とは見做されないこと、先述した如くである。

以上、異同量六百余という量数に示された〔活Ⅰ〕と〔陽Ⅰ〕との異同の全容を、諸本の本文をも視野に入れて条列した。その内、Ⅰ、Ⅱに部類した誤植、誤写に伴う異同は、諸本とは関繋なく孤立した状況で生じており、伝本系統上の問題は無く、検証は要しない。只、他の異同例と選別する意味で挙例した。

量数は合わせて二四、全体からすれば少数である。

Ⅲに挙げた異体字、通用字使用に起因した異同は、殊に写本と刊本との対比であれば、本文の系統関係とは関わりなく生じる場合が予想され、「無」「无」の異同例等、書写者或いは刊行者の恣意の関与が推量された。しかし、それは蓋然性に基づく予断として慎重に対処すべきであろう。その一方で、先行伝本の影響下にあって選択使用され、その結果生じたと想定される異同例も存在した。（上7オ1 313）（同1a 315）の「恃」「持」、（上16ウ3 893）（同4a 895）の「漂」「瀰」、（上1オ5a 13）（上7ウ6 362）（同6a 363）（上16オ4 862）（上23オ5 1263）（同5a 1266）（下9ウ2a 431）の「嬰」「瓔」「瓔」の異同に就いて、個々に指摘した通りである。伝鈔者の別体字に対する用意と、其の異字を異文とする認識は、異なった伝本系の存在を裏付ける。両本間の異体字使用に因る異同は、その伝本系が複雑に錯綜関連した状態の下に顕在し、そこに両本の異本性が窺知される。異同量数二七九は、「無」「无」の相違に因る量数を勘案しても、相応の意味内容を孕んでいよう。

さらに、Ⅳの助字の有無、Ⅴに挙例した字句の異同に就いてみれば、其の殆どが、諸本との複雑に淆錯した関繋を内包しつつ、古活字版との関繋において、乖離した実相を顕かに示している。一五〇を上回る異同例と三〇〇を越える異同量は古活字版と一陽Ⅰ一の本文の懸隔を示すに少ない数とは言えない。

此の異同の実態を注視すれば、両本の同本性は希薄となり、その間の径庭は、異本としての認識を助長する。古活字版の底本を、管見の古鈔本の内に求めようとするならば、諸本に比し遥かに近接した本文を有する一陽Ⅰ一を置いて他に無い。然るに、其の同本性が否定されれば、古活字版の底本を特定することは当面見合わせざるを得ない。

再三述べるように、古活字版が本邦所伝の古鈔本を継承するのであるならば、本文における諸本との異同は、基本的には、古活字版に孤立した異文ではあり得ず、何れかの古鈔本とは必然的に一致を示すはずである。しかし、実際には、古活字版に孤立した特異の本文が少なからず見受けられるのである。次に、此の特異と見られる本文について検証されなければならない。

古活字版に孤立した特異の本文

古活字版の本文は、「異同表」に明らかなように諸本間の異同に於いて、殆どの場合何れかの古鈔本と一致している。此の

事実は、とりもなおさず、古活字版と古鈔本との近接した関係を保証するものであろう。しかし、個々の伝写本に即して、異同文辞を対比校讐すれば、両本間には、軽視出来ない隔たりがある事実も、認めなければならない。古活字版と「陽Ⅰ」との異同の検証によって顕かに示された如くである。

更に、注意を引くのは、古活字版には、刊行に先行すると見られる伝本の何れとも相違する異文が認められ、又、対校古鈔本の全てと相違しながら「宋版・世德」とは一致している本文が認められる点である。此の言わば古活字版に孤立した異文は、古鈔本が古活字版の祖本と想定されることに対して、否定的な要因となろう。従って、斯かる本文に就いては個々に検証し、異同を生起した事由を明かにする必要がある。当然ながら、此処で挙例する異文は全て、前述した「活Ⅰ」と「陽Ⅰ」との異同の内に含まれるが、視点を変えて改めて検討したい。

Ⅰ、古活字版の本文が、先行諸本の何れとも相違する事例

該当する全異文を章次を追って掲出し、異文字句には傍点を施した。全巻通じて、以下の十二条の異文が確認される。同系先行と推定される管見諸本全てと相違する異文であり、誤植或いは衍脱、又、恣意の改変に因ると思量される異同もある。しかし、予断は慎むべきで、やはり、個々に検証しておかなければならない。

(1)運夷第九経文「功成名遂身退天之道」下注（上7オ6b 335）

樂極則衰也　活字字形は「衰」、諸本並作「哀」

章句全文は「譬如日中則移月満則虧物盛則衰樂極則衰也」とあって、「衰」は「哀」の異体字と見られる。先行の諸本は全て「哀」に作る。例えば「斯Ⅰ」の加点に従えば、

譬ヘハ日中ニシテ〔則〕移リ・月満テハ〔則〕虧ケ・物盛ニシテハ〔則〕衰ヘ・樂極マリテ〔則〕哀フカ如シ〔也〕

と訓まれる。「哀」の訓点は諸本間で一定しないが、概ね「カナシフ」或いは「カナシム」の訓点が見られる（「武内」は「ウレイシム」）。「衰」「哀」は字形が近似し、また送り仮名「フ」が混同を誘発したとも考えられ、文義上「衰」は「哀」の譌とみなされよう。しかし、「天理」「通考」が共に古活字版と同文であることに注意される。「天理」は振り仮名送り仮名が無く、どう訓読されたのかは明かでないが、「通考」は、

譬ハ日ノ中ル（寸ハ）〔則〕移リ月ノ満ル寸ハ〔則〕虧ル（カ）如シ物盛ハ〔則〕衰フ樂極テ〔則〕衰フナリ〔也〕

と訓まれ、「衰」字が本文として落ち着き収まった感がある。

〔天理〕「通考」の事例により、古活字版の此の「衰」字は、譌字であったとしても、直ちに誤植と見做すのは適切ではない。現在は伝わらないが、古活字版と同文を有った先行伝本の譌字をその儘に踏襲した結果と考えられる。

(2)異俗第二十経文「我獨若遺」下注（上16オ7b 876）

以於不足也　諸本並作「似」

章句「我獨如遺棄以於不足也」の下半句で、章句全文は〔書陵〕の点に従えば、

我（れ）獨・遺（レ）棄てたる如し〔於〕足（ラ）不ルに似たり〔也〕

と訓まれる。諸本も大差なく、「似」は字義通りに「ニタリ」或いは「ノレリ」と訓まれている。この異同も字形の近似に因ると考えられる。しかし、「通考」は「以」字に作り、

我獨リ遺（レ）棄（テタルカ）如シ〔於〕不足ヲ以テナリ〔也〕

と訓んでいる。鄭校は「通考」の「以」字について「蓋形近而譌也」と見做しているが、古活字版と同文であることを考慮に入れれば、敢えて「以」字を譌と断定するのは憚られる。

(3)象元第二十五経文「天法道」下注（上21オ4a 1156）

天當法道以

諸本の異文を対比して挙げれば、

■天當法道以〔活Ⅰ・活Ⅱ・天理〕
■道□■■〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・道蔵〕
■■■■■■□■■〔梅沢・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
〔治要〕

の如くである。古活字版の章句全文は「天當法道以清静不言陰行精氣萬物自成也」であって、下半句は〔治要〕が「陰行精氣」の四字と末の「也」字を欠き、〔道蔵〕が末句を「萬物自然生長」に作る他は諸本間に於いて違いは無い。此の上半句の異同は、本章句全文の解釈に甚大な影響を及ぼしている。

標示の如く〔陽Ⅰ〕等は「道法清静不言」に作り、〔梅沢〕等は「道清静不言」に作る（尚、〔武内・東大・斯Ⅱ・宋版・世徳・道蔵〕は「静」を「浄」に作る）。前者、例えば〔慶Ⅰ・大東〕は、

道ハ清静ニメ言ハ不ルニ法ル・陰（ヒソカ）ニ精気ヲ行フ・万物自成（ヲナ）レリ〔也〕

と、訓んでいる（〔慶Ⅱ〕大同）。同じ前者でも〔武内〕は「道ノ清浄ニメ言（イ）ハ不ルニ法ル」と、〔斯Ⅱ〕は「道清浄ニ法テ言（モノイ）ハ不」（〔無窮〕大同）と、解釈に相違が認められ、「法」字の

主客の捉え方、即ち主格を「天」と見るか「道」と見るかに於いて加点者の苦慮が窺える。後者は「法」字が無いために「斯Ⅰ」の如き「道ハ・清静ニメ言（ハ）不」と、経文「天法道」の「道」の注釈として下文にも連繋して整った文脈となっている。そこで、「法」を衍字とする見方もあり、鄭校は「疑渉経文天法道而衍」とする。

しかし、此処で、古活字版の本文が注目される。諸本の中で特異な本文であるが、「天理」「通考」とは同文である。両本とも、此の章句を経文「天法道」全文意の注釈と捉えて、「道」字の義注とは見做していない。「通考」は、

天ハ當ニ道ニ法（ル）「當」シ以テ清静ニメ言（ハ）不メ陰（ヒソカ）ニ精氣（ヲ）行テ万物自（ラ）成レリ〔也〕

と訓じ、「天理」は、

天ニメ當ニ道ノ以テ清静ニメ言（モノイ）ハ不陰（ヒソカ）ニ精気ヲ行テ万物自（ヲ）（ラ）成（ル）ニ法ル「當」（シ）〔也〕

と訓じている。「通考」は「以テ清静ニメ」以下の主格が曖昧であるが、「天理」は、訓読に詰屈した憾みが残るものの全文に対して理路は通り、苦心の跡が認められる。

更に「梅沢」の字旁書入れが注目される。本行は上記の如く「道清静不言」であるが、「道」の上に挿入符の小圏を施し右旁に「天」字を、又、同字下にも小圏があり、右に「法」字が加筆されている。此の書入れに執着すれば、「法」を衍字と見做すのは躊躇され、又、「天」字の存在によって、古活字版本文との脈絡が窺われる。此れは古活字版の衍文ではなく、先行本文が継承されたか、それに影響されて生じた異文と考えられる。本文の諸相を考察する上で、看過出来ない異文である。

(4) 仁徳第三十五経文「視之不足見」下注（上29オ4b 1607）

可得見之也　諸本作「之」或「也」

章句「道無形非若五色有青黄白黒赤可得見之也」の句末の助字の用法の相違で、諸本間の異同は次の如くである。

可得見之也「活Ⅰ・活Ⅱ・天理」
□□□「陽Ⅰ・龍門・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ」
□□□「書陵・無窮・足利・筑波・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵」

「天理」「通考」は、此処も古活字版と一致する。「足利」は「也」に見消ち、左旁に「之」の加筆が有ることについては、先に「陽Ⅰ」との異同の指摘に伴い既述した。「之」若しくは「也」の衍字では無く、此の文末を「之也」に作る古活字版等を含む伝本の一群類を想定すべきであろう。

(5)微明第三十六経文（上29ウ5 1633）

魚不可脱淵　「脱淵」之間諸本並有「於」字

魚不可脱■淵〔活Ⅰ・活Ⅱ・天理〕
□□□□於□〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ・宋版・世徳〕
□□■□於□〔道蔵〕

〔天理〕「通考」は、此処も古活字版と同じで「於」字が無い。蒋錫昌『老子校詁』、島校ともに「於」の無い本の指摘は無いが、譌脱と見做す根拠はない。古活字版とともに〔天理〕「通考」を含む同類の諸本が、一伝本系として想定される。

(6)任徳第四十九経文末句「聖人皆孩之」下注（下10ウ1a 479）

孩、育、赤子

章句の全文は「聖人愛念百姓如孩、育、赤子長養之而不責望其報也」であるが、特に此の「孩育」の二字は諸本間に異同が多い。其の異文を対比して挙げれば、次の如くである。

孩育■■赤子〔活Ⅰ・活Ⅱ〕
□弃■■□〔無窮〕
□櫻■■□〔宋版・世徳〕
□兒■■□〔敦Ⅱ〕
櫻孩■■□〔聖語・斯Ⅰ〕
嬰孩■■□〔道蔵〕
■■蠕虫■■□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急〕
□□蠕虫□□〔梅沢〕

〔無窮〕の「弃」は「育」の誤写と見られ、〔梅沢〕には「孩育」の二字が認められる。従って、現今では古活字版に特異と映る此の異同も、同文の先行伝本が曾て存在し、その本文が継承された結果と考えられる。又、「通考」は、此処でも古活字版と同文である。

(7)玄徳第五十六経文「解其忿」下注（下16オ1a 731）

忿結恨不休也、諸本無「也」字

「忿結恨不休也、當念道恬怕以解釋之也」の前半句句末の助字「也」は、〔道蔵〕を除く諸本には此の字が無い。しかし、「通考」は、此れも古活字版に同じで「也」字が認められる。

(8)後己第六十六経文「以其不爭」下注（下25オ4a 1198）

天下無厭聖人　「人」字下諸本並有「時」字

無厭聖人■■■〔活Ⅰ・活Ⅱ〕
□□□□■時〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ〕
□□□□之時〔道蔵〕

章句「天下無厭聖人是由聖人不與民爭先後也」の上句で、諸本は「人是」の間に「時」字が、〔道蔵〕には「之時」の二字が有る。〔斯Ⅰ〕の加点に従えば、

天下聖人ヲ厭フ時无コトハ是（レ）聖人ノ・民與（ト）先後ヲ争

ハ不（ル）ニ由テナリ〔也〕

と訓まれるが、〔東洋〕は「天下聖人ノ時ヲ厭（フ）丁无シ」と訓み、〔斯Ⅱ〕は「天下聖人ヲ厭（フ）丁無シ・時ニ是レ云々」と「時」字を下文に繋げて訓む等、「時」の訓み方に乱れがある。「通考」は、此れも古活字版に同じで、

天下聖人ヲ厭丁無ハ是レ聖人民與先後（ヲ）爭（ハ）不ルニ由ル〔也〕

と訓む。鄭校は「通考」に就いて「脱時字」と断定しているが、「時」字の無い異本が嘗て相伝されていたとも考え得る。

(9)三寶第六十七経文「儉故能廣」下注（下25ウ7b 1242）

民曰用寛廣也　「曰用」、諸本作「日用」或「用日」

章句「身能節儉故民曰用寛廣也」（〔聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ・道蔵〕は文頭に「天子」二字が有る）内の字句である。此の注文も諸本間に異同が多い（異同表下1240－1242参照）。「曰用」両字に就いても「日用」或いは「用日」の異文が認められる。諸本対比して挙げれば次の如くである。

曰用〔活Ⅰ・活Ⅱ〕
日用〔無窮・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕
用日〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・敦Ⅱ〕

〔東洋〕右旁には、「曰（或いは日）用或本」の校異の書入れ（青筆）が見られる。此の注を〔斯Ⅰ〕は、

天子・身能節儉ナルカ（別訓「ナリ」）故ニ・民日ニ用テ廣シ（「寛」「也」の二字無し）

と訓み（〔治要〕大同）、〔書陵〕（「身」作「躬」）は、

躬能く・節儉なり（。）故に民・用て日に寛廣なり〔也〕

と訓む（〔陽Ⅰ〕以下諸本大同、只、〔東大〕等「用て日に」を「用ル丁日ニ」と訓み小異有り）。さて、「通考」は、「日」は「曰」に作り、古活字版に同じであるが、「用」字が無く、

身能（ク）節儉故ニ民寛廣ナリト曰フ〔也〕

と訓でいる。古活字版の使用字に従えば「民・用ル丁（或いは「用テ」）寛廣ナリト曰フ」と訓めよう。また『老子経抄』は経文の「廣」を「廣ト云ハ、如此儉約ニアル故ニ、民用テ、イカヤウニモ、寛廣ニ、ナシ申シタキト思ホトニ、廣也」と河上公注に沿った講述があるが、「申シタキ」は「曰」に対応している。従って『老子経抄』の藍本は、古活字版と同様「曰用」に作っていたと推察され、「曰用」に作る本の相承が判明する。鄭校が「曰」を「日」の誤と見做すのは穏当ではない。

(10)玄用第六十九経文「仍無敵」下注（下27オ6a 1311）

雖欲仍引之　「之」字下諸本並有「心」字

雖欲■仍引之■〔活Ⅰ・活Ⅱ〕
□□■□□□心〔陽Ⅰ・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ〕
□□■扨□□心〔書陵〕
□□行□□□心〔道蔵〕

章句「雖欲仍引之若無敵可仍也」の上半句である。「通考」は、此処においても古活字版と同じで、「心」字が無い。此の章句は、次経文「執無兵」下の章句「雖欲執持之若無兵刃可持用也」と対応した構文と考えられ、「心」が無い方が、対句の関係がより明確である。鄭校は「心字疑不當有、乃與下注雖欲執持之句法一律」と指摘する。因に、〔斯Ⅰ〕の加点に従えば、

仍（キ）引マク欲スル〔之〕心アリト雖（モ）・敵ノ仍（ク）可（キ）无カ若（シ）〔也〕

と訓め、諸本多くは上句を「仍キ引クニ〔之〕心ヲ欲スト雖モ」或いは「仍キ引ク〔之〕心ヲ欲スト雖モ」と、「欲」を「心」に懸けて訓んでいるが、何れもやや牽強の憾みがある。「通考」は「之ヲ仍（キ）引ント欲スト雖モ」と、「心」字が無いために自然な訓読となっている。この場合も、古活字版自体の脱字、或いは校改ではなく、既に「心」の無い伝本が存在していて、その本文が伝承されたと考えるべきである。明危大有撰『道徳眞經集義』引く河上公注には此の字が無く傍証となろう。王校はその本に拠り底本の「心」を刪去校改している。

(11) 知難第七十経文「知我者希則我者貴矣」下注（下28オ2b 1360）

則知我者爲貴也　諸本、「則」作「故」、無「知我者」三字

則知我者爲貴也〔活Ⅰ・活Ⅱ〕
故■■□□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要〕
（文末助字の異同は不問）

章句「唯達道者乃能知我則知我者爲貴也」下半句の異同である。諸本は、「知我者」三字が無く、「故」字で結句の「爲貴也」（「也」、〔東洋〕作「之也」、〔敦Ⅱ〕作「矣」、〔杏Ⅱ・道蔵〕無「也」）を上句に接続させている。古鈔本の訓読は概ね同様で、例えば〔斯Ⅰ〕では、

唯道ヲ達スル者ノハ・乃（シ）能（ク）我ヲ知（ル）・故ニ貴トシト爲（ス）〔也〕

と訓んである。この場合、「貴」の主格は「道ヲ達スル者ノ」或いは「我ヲ知ル〔者〕」と認められるが、我を知るものが道に達するのであるから、我は「貴」なのであると理解し、「我」

を主格と捉える事も出来よう。此の構文上の曖昧さが、実は、経文の解釈に影響を及ぼしている。即ち〔斯Ⅰ〕は、此の経文（下28オ2 1356・1357）を

我ヲ知者ノ希ナルコトハ（別訓「スクナキコトハ」）・〔則〕我カ貴ケレハナリ〔矣〕（下の「者」字無し）

と、後者の解釈に沿って訓じ、〔東急・東大〕が此れと同類である。それに対して、〔治要〕では、

我を知レル者の・稀シ（別訓「マレナリ」）、我に則レハ・貴シ〔矣〕（同右）

と訓まれ、〔梅沢・杏Ⅱ〕が同類で、前者の解釈に沿っている。又、「我貴」の間に「者」字が有る本、例えば〔書陵〕の如き

我を知（ル）者のは希シ・我に則る者のは貴し〔矣〕

の訓に見られるように、前者の訓釈としてより明確で、〔斯Ⅱ・大東・東洋・慶Ⅰ・弘文・足利〕も同様である（〔大東〕の「貴」字左旁には「道ヲ知者◇也」と書入れが有る）。また〔武内〕は、右旁は後者、左旁は前者に沿った加点で、双方の訓を伝えている。古活字版の異文に依り、此の注文の曖昧さは解消される。「通考」は、やはり、古活字版と同文であって、

唯道ニ達（スル）者ノ乃シ能ク我ヲ知ルトキンハ〔則〕我ヲ知ル者ヲ貴ト爲ス〔也〕

と訓む。此の異文もまた先行写本の本文が、古活字版によって伝承されたと考えるべきである。鄭校の「疑係傍記之詞、傳寫者誤入注文也」との校勘には従えない。

(12)制惑第七十四冒頭経文「民不畏死」下注（下30オ5a 1466）

民不畏之也　「不畏」之間諸本並有「知」字

民不■■畏之也〔活Ⅰ・活Ⅱ〕
□□知■■□□□〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・聖語・宋版・世徳〕
□□知■□□■〔東洋・東急・敦Ⅱ〕
□□□知■□□□〔斯Ⅰ〕
□□□知所□■■〔道蔵〕
■□□□□□■□〔治要〕

章句後半文「治身者嗜欲傷神貪財殺身民不畏之也」の結句である。「通考」は此処も古活字版に同じで、鄭校は「脱知字」と見ているが、此の「知」の有無で文意に大きな違いは生じ無い。脱字と見る必要はなく、前掲諸条と同じく、先行伝本の異文が踏襲されたものと理解される。

(1)(2)(9)は、元来は字形の類似から生じた異同であろう。諸本使用の字がより優れていると認められるが、古活字版の使用字でも文意は疎通し、直ちに譌と断ずる事は躊躇される。

(5)(7)(8)(10)(12)は、諸本と対比すれば本版の脱字或いは衍字と見

倣される。しかし、何れの場合も、該字の有無に関わらず文脈は破綻無く通じている。

古活字版に孤立した異文の存在は、祖本を古鈔本とする想定を妨げる要因として懸念された。しかし、先行諸本の何れとも相違する十二例の悉くが、「通考」とは一致若しくは近似している。また、巻上部分では、〔天理〕と符合する場合が多い。「通考」の底本は明らかではないが、古活字版が直接の底本ではないことについては、後述する所である。とすれば、古活字版、〔天理〕、「通考」と同様の異文を有する現在では失われた伝本の群類を想定せざるを得ないであろう。其の群類の一伝写本が古活字版の底本であったと仮定すれば、異文の孤立性と共に、危惧された阻害要因は消滅する。

Ⅱ、古鈔本諸本と相違し、且つ〔宋版・世徳〕と一致する事例

管見の何れの古写本とも相違しながら、〔宋版・世徳〕とは一致している個所が見られる。それらの異文は、古鈔本との疎遠な関係、〔宋版〕との近縁な関係を印象づけ、古活字版が古鈔本系であるとの命題を否定する要因とも成りかねない。従って、其の本文についても、同様に検証しておく必要がある。

(1)顕徳第十五経文「孰能濁以静之徐清」下注（上12ウ5a 635・636）

孰誰也誰能知〔活Ⅰ・活Ⅱ・天理・宋版・世徳・道蔵（知作如）〕
■■■■■■〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・敦Ⅰ・東急〕

章句「孰誰也誰能知水之濁止而静之徐徐自清也」冒頭の六字で、上三字は経文「孰」字の義釈である。古鈔本はこの三字を次の経文「孰能安以久之徐生」下に配している。実は、上の経文に「孰能」の二字が有る本と、無い本とが存在し（異同表上633参照）、此の異同が下の注文と関連して本文に顕著な相違が生じている。〔書陵・龍門・無窮・筑波・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東洋・東急・敦Ⅰ〕には経文の二字が無く、従って、「孰誰也」の注を含む此の六字が無くて当然である。〔陽Ⅰ・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ・東大・斯Ⅰ〕はこの二字が有るにも関わらず、注の上三字が無いが、次の経文下に具わっているのであるから、両経文の「孰能」を合わせての注釈とみれば、この三字に関しては過不足は無い。但、接続する「誰能知」三字の有無と、注文の配置の相違をともなう異同は、伝本系統を考えるとき、古活字版と古鈔本とのテキスト上の隔たりを印象づける。しかし、此の異同についても、〔天理〕及び「通考」は古活字版と完全に一致しているのである。従って、此の異文に於いて、古活字版の如

く〔宋版〕と一致する古鈔本の群類が、曾て存在したものと想定される。

(2)虚無第二十三経文末句「有不信」下注冒頭（上19ウ1a 1036）

■■■

の講述内容から推定される。同書に、

夷ハ平也、大易也(イナリ)トアルヲ、夷ハ平ニメ、大ニ易ナリ(タイラカ)トヨム、余本ニ、中ナル也ノ字ハ、ナキト也、一睦ハ大易也ト云三字ハ、心得ヌトテ、アソバサヌ也

と見え、文面通りであれば、余本は「夷平大易也」に作っていた事になるが、実は、古活字版と同文であったのではなかろうか。余本とは、清家或いは宣賢所持の一本と考えられるが、そのような伝本は未だ管見に入らない。然るに、「通考」は又、古活字版と同文で「夷ハ平-易也」と訓んでいる。

以上、少ない事例ではあるが、所見の古鈔本の全てと相違し、且つ、一宋版一とは一致するという、古活字版と古鈔本との近接した関繋が否定され兼ねない本文の実態が窺知される。しかし、どの例も、「通考」とは一致し、巻上の範囲では一天理一とも一致している。更に、(4)の事例では、『老子経抄』の講述内容から、古活字版と同文の伝鈔本が曾て伝存した事実が判明した。従って、先にIで示した先行諸本の全てと相違する十二の例と同様に、古活字版、一天理一「通考」を包摂する同類の伝本群が想定され、その内の、現在は失われた或る伝写本の本文が古活字版に伝承された結果生じた異文と理解することが可能である。さすれば、古鈔本から古活字版へと繋がる伝本系統に抵触するかに思えるこれら異文に因って生じる表面上の矛盾撞着は悉く解消されるであろう。

要約

古活字版と古鈔本とは、それ以外の伝存する河上公章句諸本、即ち宋刊本、道蔵本、敦煌本各系伝本と伝流状況に照らして対比すれば、系統上、相対的に最も緊密な関係に在り、古活字版の底本は古鈔本の内に求められると予察された。しかし、一方で古活字版を含め古鈔本各本の間で、本書構成上、分巻・分章の次第、章題標記の形式に於いて、同系との認識を妨げかねない乖反する幾つかの諸異相が認められた。此れには、波状的に齎されたであろう唐鈔本が本来単一のテキストではなかったこと、また後れて舶載された宋刊本の影響、更に伝存古鈔本相互の複雑な書承関係が反映されていると思われる。

本文の同異についても、「異同表」に導かれた異同量数の所見から、相対的に古鈔本との近親な関係が窺測される。古鈔本の内、一陽I一に最も近接し、管見の伝本の内に底本を期待するのであれば一陽I一が先頭候補と見做され、両本の本文同異

の検証が要請された。両本の近親な関係を印象づける「陽Ⅰ」とのみ一致する本文が所見されると共に、異体字使用、助字、その他字句において両本背反する異文も少なくはなく、また、此の異同には、管見諸本の全てと異なる古活字版に孤立した特異な本文、古鈔本諸本とは相違しながら逆に「宋版・世徳」とは一致している本文も含まれる。この異文全条の検証の結果、両本の同本性は希薄と判断され、それによって、「陽Ⅰ」が古活字版の直接の底本であることは否定された。

しかし、古活字版に孤立した特異な本文、「宋版・世徳」と一致する本文の殆ど全条が「通考」と一致し、巻上部分では「天理」とも一致し、又、その他の異文も此の両本と吻合する場合が多い。従って、「通考」「天理」及びその底本、又古活字版、更に現在は逸失した同類の古鈔本を包摂する伝本の群類と伝系が想定され、その中の或る本を古活字版の底本と推定することが可能であろう。

古活字版と個々の古鈔本の間には、系統関係が否定されかねない種々の異相が指摘された。しかし、此の仮設に拠れば、古活字版の本文は古鈔本の本文を襲うとの命題は生きる。勿論、その前提として、古活字版を含め古鈔本間に存在する雑糅した本文同異の実態と淆錯した伝本系統関係への認識が要請される。

宋版との関係―通行本〔宋版〕との乖離の諸相

古活字版の本文は、古鈔本の本文を襲う、という命題は、古活字版の本文は、宋刊本とは系統が異なる、との命題を、通念として内包する。しかし、此の命題の前提として、古鈔本の本文と宋刊本の本文とは系統が異なる、との命題が必要である。そして、これらの命題を立証する為には、古活字版の本文、古鈔本の本文、宋刊本の本文とは何であるかが明らかにされておかなければならない。

古活字版の本文については、異植字版が存するものの、その間の限られた異同を考慮に入れれば、現存伝本に即して認識把握することは比較的容易である。

古鈔本の本文と言えば、些か事情が異なる。伝存する各本が、それぞれに異文を有ち、伝本として固有の特徴を示している。一異文について、或本が〔宋版〕に一致し、或本は一致しないという例は少なくなく、別の異文においては、其の或本と或本の関係が逆転することも屢々認められる。「古鈔本の本文」という概念には、諸伝本の異文が外延として含まれ、古鈔本は単一の本文ではあり得ない。現存古鈔本の一本を以てしては、例えその本が由緒正しい伝本であっても、古鈔本の本文を代表させることは無理である。「古鈔本の本文」が伝本系として実体を有つ為には、対峙する別の伝本系が確認されなければならない。別系本と認められる為には、古鈔本諸本間の異同とは別に、形態上の差異とともに、相当量の異文の存在が要件となろう。其の別系本として、宋刊本の本文が先ず想起されるのである。

宋刊本の本文とは、古鈔本と対比する場合、現状では虞氏建安刊本即ち〔宋版〕に限られてよい。[9] 実は、此の〔宋版〕に先行する宋刊本の存在が想定されるが、未だ確認されていない。鎌倉時代には渡来したであろう宋刊本が〔宋版〕その物なのか、或いは別宋版なのか明らかにする事は難しいが、〔杏Ⅰ〕に見える摺本との校合書入れは、〔宋版〕の本文に吻合する場合が多い。〔宋版〕は先行宋刊本の本文を継承する本であると仮定し、当面はこの本を宋刊本の本文として扱っても、阻害となる問題は生じないと思われる。

一般に、宋刊本は、それ以後の通行諸本の祖本であるという意味で、伝本史上のみならず、広く学術文化史の面から重要視される。中国においては、宋代以降、出版事業の隆盛に伴い刊本の普及はめざましく、写本が古典籍の本文を担う役割は殆ど

亡くなったと言える。『老子道徳經』についても例外ではなく、明世德堂刊本をはじめとし、後代の刊本は全て宋刊本を祖とし、時代の需要と用途に応じて重校再刊或いは改編された本である。その刊行に際して、宋刊本以前の本に拠る校勘の作業が行われた形跡は窺われない。従って、本書においても本文伝承に関わって、宋刊本の果たした役割は甚大であったと言えよう。

しからば、本書宋刊本の本文は、どの様にして整定され刊行されたのであろうか。通常、宋刊本は新校本と見做され、それ以前の写本時代の伝本とは一線を劃して扱われる。此の一般的な認識があって、古鈔本の本文は宋刊本の本文とは系統が異なる、との命題の存立が可能となる。しかし、宋刊本刊行に際して行われた校勘作業の具体的な経緯内容については、使用底本、対校本、校訂の方針態度等、一切明らかではない。ただ、幸いにして〔宋版〕そのものが現存し、その校勘の成果として整定本文の全容が伝わっている。宋刊本が、古鈔本諸本とは系統が別であることを明らかにする方法としては、此の〔宋版〕本文を古鈔本と対比検証して、相互に隔絶した本文の実相を把握する以外に無い。そうする事によって、新校宋刊本の校訂の是非優劣も窺知されるであろう。

此処で、注意を要するのは、幸いにして伝存する〔宋版〕は、本書宋刊本の内の一本に過ぎないのであって、宋校訂刊本の精善さを必ずしもその儘に伝えるものではない可能性がある点である。〔宋版〕は虞氏建安刊本として、其の本文の優劣は、宋刊本一般とは別の水準で、特殊性が考慮されなければならない面もある。しかしながら、先に述べたように、古鈔本と対比するに相応しい宋刊本としては〔宋版〕が最善であり、当面はこの本を宋刊本の本文として代表させざるを得ない。

〔宋版〕は、現在最も普及通行しているテキストとして、その本文の諸般に与える影響は極めて深長である。従って、本文の是非優劣の論定は緊要な課題である。しかし、本論は、古活字版本文の実態の解明を目的とし、〔宋版〕本文の評価については更めて別途に考察したい。ただ、行論の過程での本文の比較に伴い、本邦所伝の諸本に比べ〔宋版〕は必ずしも優れているとは言えない諸相が、自ずと顕かになるであろう。

古活字版の本文は古鈔本の本文を襲う、という命題が成り立つ要件として、諸本間に異同が有る場合、刊行者の私意による改変が無い限り、誤植を除けば所伝の何れかの古鈔本との一致が要請されよう。管見の伝本を比校した結果、古活字版に孤立

した本文一六例が認められる事は既述の通りであるが、逸伝した或本を想定することで、其の矛盾は解消された。

此の要件が満たされた上で更に、古活字版の本文が、現今通行している宋版系ではなく、古鈔本の系統である事実を立証する為には、宋刊本の本文が古鈔本の本文とは系統が異なる事実を、明らかにする必要がある。その為には、〔宋版〕には、古活字版及び古鈔本の何れとも一致しない本文が、同系とは認め難い程に、甚だ多い実態を指摘すれば、充分のはずである。

本書編成上の相違

〔宋版〕と古鈔本系諸本との間に認められる、内容構成上或いは編成面での違いとして次の四点が確認される。

一、巻首の序文が相違している。この点については、従来論議があることでもあり、鄙見としては更めて後述したい。

一、注末に、音釈を付す。古鈔本には、本文中の音注は一切無く、〔宋版〕編校者の用意による増入と見做される。多くは、『経典釈文』老子音義と符合するが、第五章経文「多言數窮」下注尾には「數王弼注音雙遇反謂理數也明皇注音朔」の音義注が見え、王弼注、唐玄宗注も引載されている。

一、音釋以外にも、王弼注を混入している。第二十五章経文「域中有四大」下に、「四大道天地王也凡有稱有名則非其極也言道則有所由有所由然後謂之爲道然則是道稱中之大也不若無稱之大也無稱不可得而名曰域也天地王皆在乎无稱之内也故曰域中有四大者也」の長文の注は明かに王注の竄入である（現行の王弼注本とは異同が有る。現行本は「凡有」の間に「物」、「也天」の間に「道」が有り、「内也故」の「也」が無い）。古活字版、古鈔本、〔道蔵〕諸本には此の注文は無く、一方、現存宋刊本二種（注9参照）をはじめ〔世徳〕以下、〔宋版〕系統の通行本は此の誤竄を踏襲している。

一、次のように、章句注文の配置に相違が見られる。

(1)還淳第十九（上15ウ2）

古活字版及び古鈔本諸本は、経文「少私」下に注「正無私也」を、次の経文「寡欲」下に注「當知足也」を配している（但、〔斯Ⅰ〕は「少私」下の注を欠く）。

〔宋版・世徳〕は、経文は「少私寡欲」と連続し、両注文は其の下に纏められ、各文頭に「少私者」「寡欲者」の主格を置き「少私者正無私也寡欲者當知足也」の十四字に作っている。

尚、〔道蔵〕は〔宋版〕に同じく、〔敦Ⅰ〕は古活字版等に同

じ（但、両「也」字は無い）。

(2)異俗第二十（上15ウ6～16オ1）

古活字版及び古鈔本は、経文「人之所畏」下に注「人謂道人也人之所畏者畏不絶學之君也」を、次経文「不可不畏」下に注「近令色煞仁賢也」を配す（掲出文は古活字版に拠る）。

〔宋版・世徳〕は、経文両句連続し、両注は其の下に合わせられ、下文頭に「不可不畏」の経文同文の四字を主格として加増している。尚、〔道蔵・敦Ⅰ〕は古活字版・古鈔本と同じ。

(3)爲政第三十七（上30オ2）

〔宋版・世徳〕は、経文「道常無爲」句下に注「道以無爲爲常也」を配する。古活字版及び古鈔本諸本は、次経文「而無不爲」句下に配し、経文両句は連続している。〔道蔵〕は古活字版・古鈔本に同じである。

以上の四件の編成上の相違は、本文系統の隔たりを示唆し、諸本の伝系を考察する上で、重要な視点となり得るであろう。しかし、風袋は違っても、中身は大同である可能性もあり得る。更に、本文内容の異同の実態を検証する必要がある。

本文字句の異同

古活字版と〔宋版〕との本文上の隔たりは、「異同表」から導かれた古活字版と諸本間の異同量において、諸本と比較して〔宋版〕が突出して多い事実に拠り推知される。其の実態を検証する事で、系統上の疎隔の実相を確認する事が可能であろう。その為には、古活字版を含む何れの古鈔本とも相違している〔宋版〕に特異な本文を明示しておく必要がある。

然るに、異同量の比較から容易に察知される事であるが、其の〔宋版〕に特異な本文は、決して少数ではない。現今の通行本文は、四部叢刊影印本の普及もあって、事実上〔宋版〕本文そのものと言え、古鈔本、或いは古活字版との異同の多さに直面してみれば、河上公注本の未整定で不備な現状を慨嘆せざるを得ない。此の不確かな本文字句を逐一指摘しておくことは、今後の本文研究にとって、回避できない須要な手続きと思われるので、煩を厭わず異同の全条を整理して掲出しておきたい。

異文を、Ⅰ〔宋版〕の誤脱・衍文、Ⅱ文末の助字の有無・相違、Ⅲその他助字の有無・相違、Ⅳ通用別体字使用に因る相違、Ⅴ其の他の異文の五類に分け、各々章次を追って列挙する。

掲出経注文句は、古活字版に拠る。従って、個々の古鈔本の本文とは一致しない場合がある。章題下に一括して、該章内掲

出句の順次に従い、異文の箇所及び、異同表該条の通し番号を示す。掲出句下に〔宋版〕の異同を記す。また、〔杏Ⅰ〕等古鈔本に見られる摺本との校合書入れを付記した。

Ⅰ、〔宋版〕の誤脱・衍文

〔宋版〕の誤文、脱文、衍文に因る異同の多くは字形字音の類似に起因する譌字、或いは不用意の衍脱である。伝抄者の誤写等先行写本の誤脱の継承と、刊行時に新たに生じた譌謬が考えられる。いずれにせよ校訂の不備が露顕したものと言える。

誤文、衍脱と見做す要件は、第一に〔宋版〕の字句が孤立して諸本全てと異なる本文、第二に、本文上〔宋版〕と極めて近い関係にあると認められる〔世徳〕を除く全ての諸本と相違する異文である。此の二件の何れかを満たす異文を候補とし、文義の齟齬不通、是非優劣を考慮して判断した。〔宋版〕に孤立した異文であっても、古鈔本に見える摺本との校異の書入れに吻合する場合は、誤文とはせず、竝行して伝承された異文と見做し、Ⅴ其の他の異文として扱う。

上巻　體道第一（1オ6b18）

外如愚頑者也　「愚頑」誤作「愚頭」

無源第四（3ウ7b160）

當挫止之　「止」誤作「上」

虛用第五（4ウ1b193）

不責望其報也　「責」誤作「貴」

成象第六（5オ6b241）

主出入於人口與地通　「與地」間有「天」、衍、〔世徳〕同

韜光第七（5ウ5b257）

施不求報　「求」誤作「榮」

易性第八（6ウ2a288）

在草木之上即流而下　脱「在」字、〔世徳〕同

運夷第九（7オ3a323）

夫富當賑貧　「夫」誤作「大」

能爲第十（7ウ2a344）（8オ5a390）

腐人肝肺　「肝」誤作「膵」

言道明白　「道」誤作「達」、〔世徳〕同

無用第十一（8ウ5b420）

弱共扶強也　「扶」誤作「使」、〔世徳〕同

厭耻第十三（10オ6b493）

何故畏大患至身也　「大患至身」誤作「人若身」、〔世徳〕同

顯德第十五（12ウ4a629）

渾者守本真　「本」誤作「擧」、一世德一同

歸根第十六（13ウ2 692）（13ウ3a 698）（13ウ5b 714）（13ウ7a 718）

不知常妄作凶　「妄」誤作「萎」、一世德一同

能知道之所常行則去情欲　脱「則」字、一世德一同

德合神明與天通也　「天通」誤作「天子」、一世德一同

能公能王通天合道　「能王」誤作「能天」、一世德一同

淳風第十七（14オ4a 741）（14オ5 747）（14オ6b 753）

禁多令煩不可歸誠　「煩」誤作「須」

有不信焉　脱此経文四字

舉事猶猶貴重於言　脱「猶」一字、一世德一同

俗薄第十八（14ウ6a 772）

六紀廢絶親戚不和　「六紀廢絶」誤作「六絶絶」

異俗第二十（15ウ6a 837）

善者称譽悪者諫諍也　「称譽」誤作「和譽」、一世德一同

益謙第二十二（17ウ6b 957）

人謙下德歸之也　「謙」誤作「則」

虚無第二十三（19オ7b 1034）

下則應君以不信也　「不信」誤作「不足」、一世德一同

苦恩第二十四（20オ2a 1076）（20オ3a 1081）

日賦斂餘祿食　「日賦」誤作「曰然」、一世德一同

物無有不畏悪之也　「之也」誤作「地」

象元第二十五章（20ウ4a 1113）（20ウ6b 1126）

強曰大大者高而無上　脱「大」一字、一世德一同

乃復反在人身也　脱「反」字、一世德一同

重德第二十六（21ウ6a 1184）

王者輕淫則失其臣　「淫」誤作「滔」

巧用第二十七（22ウ1b 1220）（22ウ3a 1228）

欲以救人性命也　「性」誤作「在」、一世德一同

是謂襲明大道也　脱「是」字、一世德一同

反朴第二十八（23オ3a 1252）

去雄之強梁　脱「雄」字

無爲第二十九（24オ7b 1331）

失其情實生詐偽也（一陽Ⅰ・龍門・書陵一無「情」、東急「情」作「情欲」）　「情」誤作「倩」

儉武第三十（25オ5a 1380）

勿自伐取其美也　「勿」誤作「乃」

偃武第三十一（26オ7b 1451）

居右者以其主殺也　「以」誤作「言」、〔世德〕同

聖德第三十二（26ウ7b 1480）（27オ1a 1481）（27オ5a 1499）（27オ7a 1505）

從於德化也　脱「化」字、〔世德〕同

與天地相應合　脱「地」字、〔世德〕同

人能法道行德　「法」誤作「去」、〔世德〕同

譬言道之在天下　「譬」誤作「言」

任成第三十四（28オ7a 1560）（28ウ2b 1574）

不如人主有所收取也　「收」誤作「放」、〔世德〕同

故可名於大也　「可名」誤作「不若」、〔世德〕同

任德第三十五（29オ4a 1604）

足得也　「得」誤作「德」

微明第三十六（29ウ1 1620）

將欲弱之必固強之　「欲」誤作「使」、〔世德〕同

下巻　論德第三十八（1ウ2a 27）

其仁無上　「無」誤作「爲」、〔世德〕同

同異第四十一（5オ3b 214）

若愚頑不足也　「頑」誤作「須」、〔世德〕同

道化第四十二（5ウ4a 239）

天地人共生萬物也　脱「人」字、〔世德〕同

鑒遠第四十七（8ウ7b 402）

天人相通精氣相貫　「天」誤作「大」

貴生第五十（10ウ4a 483）（10ウ7a 498）（11オ1b 502）（11オ4 512）（11オ4 514）（11オ5 515）

情欲出於五内　「於五」誤作「无」一字

精不妄施　「精不」間有「神」、衍、〔世德〕同

反之十三死地也　脱「地」字、〔世德〕同

入軍不被甲兵　「被」誤作「避」、〔世德〕同

兕無所投其角　脱「所」字

虎無所措其爪　脱「其」字

益證第五十三（13オ5a 607）（13オ7b 619）（13ウ2a 625）

大道甚平易　「甚」誤作「世」

貴外華也　「外」誤作「内」

百姓不足而君有餘者　脱「不足」二字

修觀第五十四（14オ7b 661）（14ウ3 670）（14ウ4a 671）

其德如是乃爲普博也　「博」誤作「傳」

吾何以知天下之然　脱「吾」字

吾何以知天下修道者昌　脱「以」字、〔世德〕同

玄符第五十五（15オ2a683）（15オ2b686）（15オ4b691）（15ウ3 716）

赤子不害於物　「子」誤作「鳥」

人無貴賤皆有仁心　脱「皆有」二字

以其意專心不移也　脱「專」字、一世德一同

物壯則老　「則」誤作「將」

玄德第五十六（15ウ7a724）（16オ1b733）（16オ4a742）

塞閉之者欲絶其源也　「閉」誤作「門」

以解釋之也　「解釋」誤作「挫止」

志静無欲　「欲」誤作「故」、一世德一同

淳風第五十七（17ウ1b804）

民則隨我爲質朴也　「爲質」間有「多」、衍、一世德一同

順化第五十八（17ウ6a826）

人遭禍而能悔過責己　「人」誤作「天」

守道第五十九（18ウ3a865）（19オ3b889）

當愛民財不爲奢泰　「財」誤作「則」

樹根不深則抜　「抜」誤作「枝」、一世德一同

居位第六十（19ウ2a911）

邪不入正　「邪」誤作「非」

謙德第六十一（20オ3b940）

以其安静不先求也　「静」誤作「盡」

爲道第六十二（20ウ6b971）（21オ2a983）

道者不善人之所保倚　脱「所」字、一世德一同

可以自別異於凡人　「自別異」誤作「凡異」

守微第六十四（22ウ6b1068）（23オ6b1102）（23オ7a1105）

有爲於義廢於仁恩　「廢」誤作「反」、一世德一同

人欲於色聖人欲於德也　脱上「於」字、一世德一同

不眩晃爲服　脱「晃」字、一世德一同

淳德第六十五（23ウ6a1124）（24オ7a1162）（24オ7b1164）

説古之善　「説」誤作「治」

深不可測　「測」誤作「則」

玄德欲施與人也　脱「欲」字、一世德一同

後己第六十六（24ウ4a1172）（24ウ5b1179）（25オ5a1201）

江海以卑下故衆流歸之　脱「下」字、一世德一同

欲在民之上也　脱「之」字、一世德一同

人皆爭有爲無與吾爭無爲　上「爭」、誤置「與」上、作「人皆有爲無爭與吾爭無爲」、一世德一同

三寶第六十七（25ウ6a1238）（26オ6b1265）

以慈仁故能勇於忠孝也　「慈」誤作「爲」、〔世德〕同

使能自營助也　「營」誤作「當」、〔世德〕同

知難第七十（27ウ7a 1345）（27ウ7b 1347）（28オ1a 1351）（28オ4a 1365）

事有君臣上下　「上下」誤作「天下」

心與我反也　「心」誤作「不」、〔世德〕同

夫唯世人也　「世人」誤作「聖人」、〔世德〕同

匿寶藏德不以示人也　「德」誤作「懷」、〔世德〕同

知病第七十一（28ウ2a 1379）

以此非人也　「此」誤作「比」

貪損第七十五（31オ2a 1517）

人皆化上爲貪　「貪」誤作「矣」、〔世德〕同

戒強第七十六（31ウ4b 1546）

故堅強也　「故」誤作「欲」

天道第七十七（32ウ5b 1602）

匿功不居榮名　脱「名」字、〔世德〕同

任信第七十八（33オ2 1609）（33オ6b 1630）

而攻堅強者莫之能勝　「之」作「知」、〔世德〕同

人君能受國之垢濁者　「受」誤作「愛」

任契第七十九（34オ1b 1662）

背其契信　「信」誤作「言」

顯質第八十一（35オ1a 1717）

信言者如其實也　脱「言」字、〔世德〕同

以上、凡そ九十六条が指摘され、その内五十三条は〔世德〕に継承されている。善本とされる〔宋版〕〔世德〕が必ずしも信頼されるテキストとではないことは、古活字版の誤植の少なさと対照的に明らかであろう。但、この多くは、鄭校或いは王校によって校勘されており、〔宋版〕使用に際し、両校の成果を参考すれば、衍脱誤文の弊害は一応回避することは出来る。

Ⅱ、文末の助字の有無・相違

上巻　體道第一（1ウ6b 59）（2オ2b 72）

有欲者亡身者也　無下「者」字、〔杏Ⅰ〕書入「才无」、〔世德〕同

謂知道要之門戸者也　「者也」作「也」、〔世德〕同

安民第三（3オ4b 124）

珠玉捐於淵也　無「也」字、〔杏Ⅰ〕書入「才无」、〔世德〕同

無源第四（3ウ5b 152）

其用在中者也　無「者也」二字、〔杏Ⅰ〕書入「二字才无」、〔世德・道藏〕同

成象第六（5ウ1b 247）

所従往来也　無「也」字、「杏Ⅰ」書入「才无」、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

韜光第七（5ウ7b 262）

先人而後己也　「也」作「者也」、「世徳」同

能爲第十（7ウ2 348）（7ウ6 362）（7ウ7 370）（8オ2 374）（8オ4 387）（8オ6 394）

抱一能無離乎　無「乎」字、「杏Ⅰ」書入「才无」、「世徳」同

能如嬰兒乎　無「乎」字、「杏Ⅰ」書入「才无」、「世徳」同

能無疵乎　無「乎」字、「杏Ⅰ」書入「才无」、「世徳」同

能無知乎　無「乎」字、「世徳」同

能爲雌乎　無「乎」字、「世徳」同

能無知乎　無「乎」字、「世徳」同

無用第十一（8ウ5b 420）（9オ1b 430）（9オ3b 436）

弱共扶強也　無「也」字、「世徳」同

故得有所盛受也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

是其用也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ」同

撿欲第十二（9ウ1b 455）（9ウ5b 470）（9ウ6b 472）

不能聽無聲之聲也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

泄精於外也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

取此腹之養性也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

厭耻第十三（10オ2b 476）（10オ4b 487）（10ウ1 500）（10ウ2b 504）（10ウ5 514）

故皆驚也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

富不敢奢也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

吾有何患乎　無「乎」字、「世徳・道蔵」同

當有何患也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

乃可以託於天下矣　無「矣」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

賛玄第十四（11オ7b 550）

不昧昧有所闇冥也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

顯德第十五（13オ1b 656）

新成者謂貴功名者也　無「者也」二字、「世徳・敦Ⅰ」同

歸根第十六（13オ3b 664）（13オ5b 673）（13ウ4b 706）（13ウ5b 714）（13ウ6b 716）

至於虛極也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ」同

無不皆歸復其本　「其本」下有「也」字、「世徳・道蔵」同

衆邪莫當也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

與天通也　無「也」字、「東洋」書入「才无」、「世徳・敦Ⅰ」

同、「道蔵」作「矣」

乃能長久也　無「也」字、「東洋」書入「才无」、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

俗薄第十八（14ウ4b 766）（14ウ5b 770）（15オ1b 786）

可傳道也　無「也」字、「世徳・道蔵」同、「敦Ⅰ」作「耳」

以為大偽奸詐也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

衆星失光者也　無「者也」二字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

還淳第十九（15オ4b 798）（15オ5b 801）（15オ7b 813）

農事修公無私也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

棄義之尚華言也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

文不足以教民也　無「也」字、「世徳・敦Ⅰ・道蔵」同

虛心第二十一（17オ5b 930）（17ウ3b 947）

因気立質也　無「也」字、「世徳・道蔵」同

非道不然也　無「也」字、「世徳」同

益謙第二十二（18オ4b 978）

故彰顕於世也　無「也」字、「世徳」同

虛無第二十三（19ウ1 1035）（19ウ1b 1039）

有不信　「信」下有「焉」字、「世徳・道蔵」同

火就燥也　無「也」字、「世徳・道蔵」同

苦恩第二十四（19ウ4b 1054）（19ウ6b 1063）（20オ3 1082）

使不得行也　無「也」字、「世徳・道蔵」同

使不得彰明也　無「也」字、「世徳・道蔵」同

故有道者不處　「不處」下有「也」、「世徳」同

象元第二十五（20オ7b 1095）（21オ2b 1149）（21オ3b 1150）

化有常也　無「也」字、「世徳・道蔵」同、「東洋」書入「オナ」、「宋版」と不合

勞而不怨　「不怨」下有「也」、「世徳」同

有功而不宣者也　無「者」字、「世徳・道蔵」同、尚、「宣」は「制」に作り、「道蔵」は「置」に作る

重德第二十六（21ウ5b 1180）

萬乘之主謂王者也　無「者也」二字、「世徳」同

反朴第二十八（23オ7b 1276）

則可以爲天下法式也　無「也」字、「世徳・道蔵」同

無爲第二十九（24オ6b 1328）（24ウ4a 1348）

則敗其質性也　無「也」字、「世徳・道蔵」同

謂服飾飲食也　無「也」字、「世徳・道蔵」同

儉武第三十（25オ1b 1362）（25オ3 1373）

田不修也　無「也」字、「世徳・道蔵」同

不敢以取強焉　無「焉」字、一世德・道藏一同

下巻　論德第三十八（1ウ5a38）

謂上禮之君其禮無上也　無「也」字、一世德・道藏一同

法本第三十九（3オ2b99）（3オ6a111）（3ウ6b144）（4オ1b155）

將恐分裂不爲天也　無「也」字、一世德一同

將恐枯竭不爲谷也　無「也」字、一世德・敦Ⅲ一同

以曉人也　無「也」字、一世德一同

故能成其貴也　無「也」字、一世德・敦Ⅱ一同

道化第四十二（6オ3b265）

去柔爲剛也　無「也」字、一世德・敦Ⅱ・道藏一同

洪德第四十五（8オ3b372）

熱者生之源也　無「也」字、一世德・敦Ⅱ一同

儉慾第四十六（8ウ4394）

常足矣　無「矣」字、一世德・敦Ⅱ一同

亡知第四十八（9ウ2b429）（9ウ2b432）

所以漸去之也（「之也」一東急・聖語・斯Ⅰ一作「也」、一東洋一作「之」）　無「之也」二字、一世德一同

無所造爲也　無「也」字、一世德・敦Ⅱ・道藏一同

任德第四十九（10オ2455）（10ウ2a481）

德善矣　無「矣」字、一世德・敦Ⅱ・道藏一同

而不責望其報也　無「也」字、一世德・敦Ⅱ・道藏一同

貴生第五十（10ウ5b488）

精神勞惑故死也　無「也」字、一世德・敦Ⅱ一同

養德第五十一（11ウ2b529）（11ウ4b535）

一主布氣而畜養也（「也」、一梅沢・東急一作「之」、一陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋一作「之也」）　無「也」字、一世德・道藏一同

無不盡驚動尊敬之也　無「之也」二字、一世德・道藏一同

歸元第五十二章（12ウ7b590）

是謂習修常道也　無「也」字、一世德・敦Ⅱ・道藏一同

益證第五十三（13オ3b597）

躬無爲之化也　無「也」字、一世德・敦Ⅱ一同

修觀第五十四（14オ3b649）（14オ7b661）

及於來世子孫也　無「也」字、一世德・敦Ⅱ一同

乃爲普博也　無「也」字、一世德・敦Ⅱ一同

玄符第五十五（14ウ7b677）（15オ2a684）（15ウ4b718）

謂含懷道德之厚者也　無「者」字、一世德一同

物亦不害之也　無「也」字、〔世德・敦Ⅱ・道藏〕同

老不得道者也　無「者也」二字、〔世德・敦Ⅱ〕同

玄德第五十六（16オ2b 736）

不使曜亂人也　無「也」字、〔世德・敦Ⅱ・道藏〕同

守道第五十九（19オ4b 892）

無使泄漏也　作「使無漏泄」、無「也」字、〔世德・道藏〕同

居位第六十（19オ6a 900）（19オ7b 905）

鮮魚也　無「也」字、〔世德〕同

精氣散去也　無「也」字、〔世德・敦Ⅱ・道藏〕同

謙德第六十一（20オ3b 941）（20ウ1b 957）

不先求也　「也」作「之也」、〔世德〕同

使爲臣僕也　無「也」字、〔世德・敦Ⅱ・道藏〕同

爲道第六十二（20ウ7b 973）

猶知自悔卑下也　無「也」字、〔世德・敦Ⅱ〕同

淳德第六十五（24オ4a 1151）

兩者謂智與不智也　「也」作「者」、〔世德〕同

後己第六十六（24ウ4b 1174）（25オ3b 1196）（25オ5b 1203）

若民歸就王者也　無「者也」二字、〔世德〕同

無有厭之者也（〔杏Ⅱ・筑波・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋〕無「之」、〔足利〕無「之」「也」両字、〔無窮・東急・斯Ⅰ〕作「無有厭足者也」、〔弘文・斯Ⅱ〕作「無有厭足者」）無「之者」二字、作「無有厭也」、〔世德〕同、〔道藏〕「無有厭之也」に、〔敦Ⅱ〕「無有厭之者」に作る、王校は〔敦Ⅱ〕等に従い「無有厭之者」に校改。

無與吾爭無爲者也　無「者也」二字、〔世德〕同

三寶第六十七（25ウ7b 1242）

民曰用寬廣也　「也」作「矣」、〔世德・道藏〕同

愛己第七十二（29オ6b 1417）

取此自知自愛也　無「也」字、〔世德・敦Ⅱ・道藏〕同

任爲第七十三（29ウ3b 1427）

殺身爲害也　無「也」字、〔世德・敦Ⅱ・道藏〕同

天道題七十七（32ウ3b 1595）

唯有道之君能行之耳（「之耳」、〔聖語〕作「之也」、〔東洋・梅沢〕作「之耳也」）「之耳」作「也」一字、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅱ〕等に拠り「之」字を補う

任信第七十八（33ウ2b 1640）

以爲反言也　無「也」字、〔世德・敦Ⅱ・道藏〕同

獨立第八十（34オ5a 1674）

不敢勞也　「也」作「之也」二字、一世德一同

文末の助字に限っても、以上の九十二箇所の異同が認められる。上（5ウ7b262）（13オ5b673）（19ウ1 1035）（20オ3 1082）（21オ2b 1149）、下（20オ3b941）（24オ4a 1151）（25ウ7b 1242）（34オ5a 1674）の九例以外は、助字が無いか、「者也」を「也」一字に作る等少ない例である。宋版系本文の特徴として、古鈔本系と比較し文末の助字が少ない点が指摘される。

Ⅲ、その他助字の有無・相違

上巻　養身第二（2オ6 80）

難易之相成　無「之」字、一世德一同

安民第三（3オ6 130）

是以聖人之治　無「之」字、一世德一同、一杏Ⅰ一書入「才无」

無源第四（4オ3 176）

不知其誰之子　無「其」字、一世德一同、一杏Ⅰ一書入「才无」

成象第六（5オ7 243）

是謂天地之根　無「之」字、一世德一同、一杏Ⅰ一書入「才无」

韜光第七（6オ3a 271）

人所以為私者　無「所」字、一世德・敦Ⅰ・道藏一同

厭耻第十三（10ウ3 506）

可以寄於天下矣　無「以」、一世德一同

贊玄第十四（11ウ4a 569）

而能為萬物設形象也　無「能」、一世德・敦Ⅰ・道藏一同、王校、『道德眞經注疏』引河上公注に拠り「能」を補う

歸根第十六（13ウ1a 688）（13ウ4a 708）（13ウ4b 709）

此乃道之所常行也　無「此」字、一世德・敦Ⅰ・道藏一同

公正無私則　無「則」字、一世德一同、王校一敦Ⅰ一等に拠り「則」を補入

可爲天下王　「可」字下有「以」字、一世德・道藏一同

俗薄第十八（14ウ3 760）（14ウ4 767）

大道廢焉有仁義　無「焉」字、一世德・敦Ⅰ・道藏一同

智惠出焉有大僞　無「焉」字、一世德・敦Ⅰ・道藏一同

象元第二十五（20ウ7a 1132）（20ウ7b 1134）（21オ1a 1137）

天大者無不蓋　「無不」間有「所」字、一世德・道藏一同

地大者無不載　「無不」間有「所」字、一世德・道藏一同

王大者無不制也　「無不」間有「所」字、一世德・道藏一同

巧用第二十七（22オ2 1191）（22オ3 1195）（22オ4 1201）（22オ5 1207）（22オ6 1213）

善行者無轍跡　無「者」字、一世德一同

善言者無瑕謫　無「者」字、〔世徳・道蔵〕同
善計者不用籌策　無「者」字、〔世徳・道蔵〕同
善閉者無關楗而不可開　無「者」字、〔世徳〕同
善結者無繩約而不可解　無「者」字、〔世徳〕同
　儉武第三十（24ウ6 1356）
不以兵強於天下　無「於」字、〔世徳〕同
　偃武第三十一（25ウ3 1400）
夫餝兵者不祥之器　無「者」字、〔世徳〕同、王校〔道蔵〕等に拠り「者」を補入
　任成第三十四（28ウ4b 1578）
故成其大也　「故成」間有「能」字、〔世徳・道蔵〕同
巻下　法本第三十九（3オ7b 119）
屈已下人　「已下」間有「以」字、〔世徳〕同
　道化第四十二（6オ5a 270）
強梁者謂不信玄妙　無「者」字、〔世徳〕同、王校〔道蔵〕等に拠り「者」字を補入
　偏用第四十三（6ウ3 290）
無有入於無間　無「於」字、〔世徳〕同、王校〔治要〕等に拠り「於」字を補入
　立戒第四十四（7オ6b 330）
財利不累於身　無「於」字、〔世徳〕同、王校〔道蔵〕等に拠り「於」字を補入
　鑒遠第四十七（8ウ6 397）（8ウ7 401）
不出戸以知天下　無「以」字、〔世徳〕同、王校〔治要〕等に拠り「以」字を補入
不闚牖以見天道　無「以」字、〔世徳・道蔵〕同、王校〔治要〕等に拠り「以」字を補入
　歸元第五十二（12オ7a 564）
已知其一　無「其」字、〔世徳・敦Ⅱ〕同
　順化第五十八（18オ4a 846）
其日固久也　「日固」間有「已」字、〔世徳〕同
　居位第六十（19オ7 906）（19ウ5a 921）
以道莅天下者　無「者」字、〔世徳・道蔵〕同
夫兩不相傷則人得治於陽　無「則」字、〔世徳・道蔵〕同、王校〔敦Ⅱ〕等に拠り「則」字を補入
　謙德第六十一（20オ3a 938）
女所以能屈男　「能」作「勝」、〔世徳〕同、王校、〔敦Ⅱ〕等に拠り「能」字に校改

爲道第六十二（21オ4b988）

欲使教化不善人也　「善人」間有「之」、一世徳・道蔵一同

三寳第六十七（26オ1a1243）

不敢爲天下首先也　無「敢」字、一世徳一同、王校、『道徳眞經注疏』引河上公注に拠り「敢」を補う

配天第六十八（26ウ3 1278）

善用人者爲之下　無「之」字、一世徳・敦Ⅱ・道蔵一同

制惑第七十四（30ウ5 1497）

希有不傷其手矣　無「其」字、一世徳一同

任信第七十八（33オ3 1613）

其無以能易之　無「能」字、一世徳・敦Ⅱ一同

獨立第八十（34オ6a 1682）

而不用者　無「者」字、一世徳一同、王校一敦Ⅱ一等に拠り「者」字を補う

古鈔本系本文と比較すれば、一宋版一本文の特徴として総じて助字が少ない点が指摘される。特に経文において、この傾向が顕著である。文末の助字を除くその他の助字について、古活字版に比べ一宋版一に助字が少ない例を字毎に纏めてみる。

「之」字が無い例　上（2オ6 80）（3オ6 130）（5オ7 243）、下（26ウ3 1278）

「其」字が無い例　上（4オ3 176）、下（12オ7a 564）（30ウ5 1497）

「所」字が無い例　上（6オ3a 271）

「能」字が無い例　上（11ウ4a 569）、下（33オ3 1613）

「此」字が無い例　上（13ウ1a 688）

「焉」字が無い例　上（14ウ3 760）（14ウ4 767）

「者」字が無い例　上（22オ2 1191）（22オ3 1195）（22オ4 1201）（22オ5 1207）（22オ6 1213）（25ウ3 1400）、下（6オ5a 270）（19オ7 906）（34オ6a 1682）

「於」字が無い例　上（24ウ6 1356）、下（6ウ3 290）（7オ6b 330）

「以」字が無い例　上（10ウ3 506）、下（8ウ6 397）（8ウ7 401）

「則」字が無い例　上（13ウ4a 708）、下（19ウ5a 921）

「敢」字が無い例　下（26オ1a 1243）

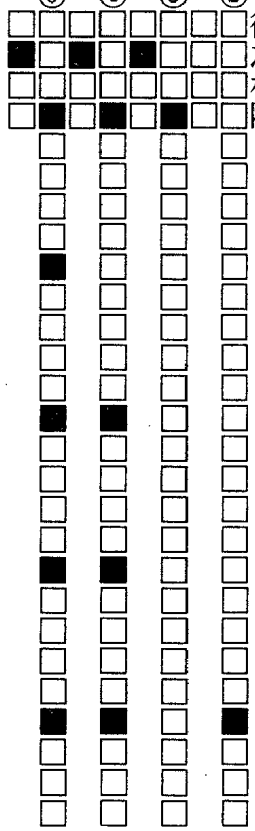
逆の例が無い訳ではない。上（13ウ4b 709）（20ウ7a 1132）（20ウ7b 1134）（21オ1a 1137）（28ウ4b 1578）、下（3オ7b 119）（18オ4a 846）（21オ4b 988）は一宋版一に助字が多い。しかし、この中には經文は含まれず、また挙例された四十項の内の八例と無い例に比べればはるかに僅少である。

一宋版一に助字が少ない傾向は実は、此処に示された以上に

顕著である。古鈔本の何れか一本に〔宋版〕と同様に助字が無い場合には、挙例していない事に因る。第二章及び第十八章の経文を例として、助字の有無による諸本間の違いを対比してみれば、此の傾向はより明白に示されよう。

養身第二（上2オ5～2ウ1）

①故有無之相生難易之相成長短之相形高下之相傾音聲之相和前後之相隨



①は、〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内（成誤作生）・東洋・六地・陽Ⅱ・東急・天理〕の本文で、全六句の全て、「相」字の上に「之」が有る。⑤は、〔宋版・世徳〕の本文で、六句の全てに「之」字が無い。③は〔道蔵〕で第二句から五句に「之」が有り、第一、第六句には無い。②は〔東大〕で第五句に「之」が無いのは伝写の際の脱落であろう。④は〔斯Ⅰ〕、第二句を除いて「之」字が無い点で〔宋版・世徳〕に近く、古鈔本としては特異な様態にある。②③④を除き、①⑤を対照させてみれば、古鈔本と〔宋版〕の本文の違いが、助字の有無に関してより明白である。

俗薄第十八（上14ウ3～14ウ6）

①大道廢焉有仁義智惠出焉有大僞六親不和焉有孝慈國家昏亂焉有忠臣

①は〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文（和作知）・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東洋（和作知）・天理〕の本文。⑤が〔宋版・世徳〕の本文で、〔敦Ⅰ・道蔵〕は同じである。②は〔六地〕、③は〔斯Ⅰ〕、④は〔梅沢・東急・陽Ⅱ〕であり、古鈔本の間で異同も認められるが、①⑤を対比すれば、此の経文四句の各句「有」字上の「焉」字の有無は、古鈔本と〔宋版〕の本文の相違を対照的に示している。

僅か二例の提示であるが、このような〔宋版〕に助字が少ない傾向は、全本文に渡る特徴として捉えることが出来る。古鈔本と〔宋版〕の本文系統の別を証する、有効な論拠となるであ

ろう。助字の多寡による著しい懸隔は、伝写、或いは刊行に際しての脱落に因るのではなく、両種本の伝系の別に起因していると考えられる。[10]

Ⅳ、通用字別体字使用に拠る相違

上巻　體道第一（1オ4b9）（2オ1a68）

含光蔵暉滅跡匿端　「跡」作「迹」、一世徳一同

得錯亂濁辱則生貪淫也　「濁」作「汚」、一世徳一同

養身第二（2ウ5104）（2ウ5a105）

夫唯弗居　「唯」作「惟」、一世徳・道蔵一同、一東洋一書入「惟才作」

夫唯功成不居其位也　「唯」作「惟」、一世徳・道蔵一同

無源第四（3ウ6155）（3ウ7a159）（4オ2172）（4オ5a183）

淵兮似萬物之宗　「兮」作「乎」、一世徳一同、一杏Ⅰ一書入「乎才乍」

人欲鋭情　「情」作「精」、一世徳一同、一杏Ⅰ一書入「精才乍」

湛兮似或存　「或」作「若」、一世徳・道蔵一同、一杏Ⅰ一書入「若才乍」

至今存者　「存」作「在」、一世徳・敦Ⅱ一同

成象第六（5ウ2b252）

不當急疾勤勞也　「勤」作「懃」、王校は一道蔵一等に拠り「勤」に校改

能爲第十（7ウ7a367）

當洗其心使潔清也　「清」作「淨」、一世徳一作「靜」

撿欲第十二（9ウ1a457）（9ウ2b459）

爽妄也　「妄」作「亡」、一世徳・敦Ⅰ・道蔵一同

人嗜於五味則口妄言　「妄」作「亡」、一世徳・敦Ⅰ・道蔵一同

厭耻第十三（10オ2a477）（10オ5b490）（10オ6a491）

問何謂寵　「謂」作「爲」、一世徳一同、王校一道蔵一等に拠り校改

解上得之而驚　「而」作「若」、一世徳・道蔵一同

失之而驚也　「而」作「若」、一世徳・道蔵一同

贊玄第十四（11ウ4571）

是謂忽怳　「謂」作「爲」、一世徳一同

顯德第十五（12ウ5b638）（12ウ7649）（13オ1a651）

水之濁止而靜之（一東大一「靜」作「清」）「靜」作「淨」、王校、一道蔵一等に拠り「靜」に校改

故能弊不新成　「弊」作「蔽」、〔世徳〕同

能守弊不爲新成　「弊」作「蔽」、〔世徳〕同

還淳第十九（15オ6a 808）

上化公正　「正」作「政」、〔世徳〕同、王校、〔道蔵〕等に拠り「正」に校改

異俗第二十（15ウ6a 838）（16オ4 863）

悪者諫諍也　「諍」作「爭」、〔世徳・道蔵〕同、王校〔敦Ⅰ〕等に拠り「諍」に校改

如嬰兒之未孩（〔書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ〕「孩」作「咳」、〔書陵〕書入「咳イ」）「孩」作「孩」、〔世徳・道蔵〕同

虛無第二十三（19オ3a 1019）（19オ3b 1023）（19オ4b 1027）

所爲與道同也　「爲」作「謂」、〔世徳〕同、王校〔道蔵〕等に拠り「爲」に校改

所爲與德同也　「爲」作「謂」、〔世徳〕同、王校〔道蔵〕等に拠り「爲」に校改

所爲與失同也　「爲」作「謂」、〔世徳〕同、王校〔道蔵〕等に拠り「爲」に校改

苦恩第二十四（19ウ6b 1066）

所爲輙自伐取其功美　「爲」作「謂」、〔世徳〕同、王校〔道蔵〕等に拠り「爲」に校改

偃武第三十一（26オ5 1439）（26オ6 1441）

吉事上左　「上」作「尚」、〔世徳・道蔵〕同、〔書陵〕書入「尚才乍」

凶事上右　「上」作「尚」、〔世徳・道蔵〕同

聖德第三十二（27オ1b 1482）

天則下甘露善瑞也　「則」作「即」、〔世徳〕同

任成第三十四（28オ4b 1551）

萬物皆待道而生也（〔弘文・斯Ⅱ〕「待」作「得」）「待」作「恃」、〔世徳〕同、王校〔道蔵〕等に拠り「待」に校改

爲政第三十七（30オ4b 1655）

萬物已化　「已」作「以」、〔世徳・道蔵〕同、王校〔武内〕等に拠り「已」に校改

下巻　法本第三十九（3ウ3a 131）

猶築墻造功因卑成高　「墻」作「牆」、〔世徳・敦Ⅱ・道蔵〕同

同異第四十一（4ウ4a 186）（5オ4b 217）

惑於情欲　「惑」作「或」、〔世徳・敦Ⅱ〕同、王校〔道蔵〕

等に拠り「惑」に校改

若可揄引使空虚也　「揄」作「偸」、〔世徳・道蔵〕同、王校〔敦Ⅱ〕等に拠り「揄」に校改

洪徳第四十五（8オ1a 361）

大辨知無疑也　「知」作「智」、〔世徳・道蔵〕同

鑒遠第四十七（9オ4 414）

不爲而成　「不」作「無」、王校〔治要〕等に拠り「不」に校改

養徳第五十一（11ウ7b 544）

乃復養長成熟（「熟」、〔武内・無窮・東急〕作「就」）　「熟」作「孰」

歸元第五十二（12ウ1 569）

閉其門　「閉」作「閑」、王校〔道蔵〕等に拠り「閉」に校改

淳風第五十七（16ウ4a 760）

使詐僞之人用兵也　「僞」作「爲」、〔世徳〕同、王校〔敦Ⅱ〕等に拠り「僞」に校改

謙徳第六十一（20オ2b 936）

柔和而不倡也（「倡」、〔陽Ⅰ・書陵・無窮・梅沢・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・敦Ⅱ〕作「唱」）　「倡」作「昌」、〔世徳〕同、王校〔敦Ⅱ〕等に拠り「唱」に校改

恩始第六十三（22オ5b 1042）

由避害深也　「由」作「猶」、〔世徳〕同、王校〔敦Ⅱ〕等に拠り「由」に校改

後己第六十六（24ウ5 1178）（25オ3a 1193）

是以聖人欲上人　「上人」作「上民」、〔世徳・敦Ⅱ・道蔵〕同

視民若赤子　「若」作「如」、〔世徳・道蔵〕同

三寶第六十七（25ウ5a 1234）（26オ2 1248）

賦歛若取之於已也　「歛」作「儉」、王校〔敦Ⅱ〕等に拠り「歛」に校改

今舍慈且勇（〔筑波・大東・弘文・六地・道蔵〕「舍慈」之間有「其」字）　「舍」作「捨」、〔世徳〕同、王校〔敦Ⅱ〕等に拠り「舍」に校改

知難第七十（28オ1a 1350）（28オ2a 1359）

夫唯世人也　「唯」作「惟」、王校〔道蔵〕に拠り「唯」に校改

唯達道者　「唯」作「惟」、〔世徳〕同

知病第七十一（28ウ3a 1383）

託於不智者　「智」作「知」、〔世德・敦Ⅱ・道蔵〕同
　愛己第七十二（29オ1a1400）（29オ1b1402）（29オ3a1408）
以有精神　「以」作「爲」、〔世德〕同、王校〔道蔵〕等に
　拠り「以」に校改
喜清静（〔筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・斯Ⅰ〕「静」作「浄」）
　「静」作「浄」、〔世德〕同、王校〔道蔵〕等に
　拠り「静」に校改
恬怕無欲（「恬怕」〔武内〕作「軒泊」、〔聖語〕作「恬怡」）
　「怕」作「泊」、〔世德・道蔵〕同
　任信第七十八（33オ1b1606）
壅之則止　「壅」作「擁」、〔世德・道蔵〕同、王校〔敦Ⅱ〕
　等に拠り「壅」に校改
　獨立第八十（34オ6b1683）（34ウ2a1697）
不徵召奪民良時也　「民」作「人」、〔世德〕同、王校〔敦Ⅱ〕
　等に拠り「民」に校改
不好出入遊娛也　「遊」作「游」、〔世德〕同、王校〔敦Ⅱ〕等
　に拠り「遊」に校改
以上、五十四箇所に、假借、別体等通用字使用に因る異同が見られる。其の使用字の是非優劣については、個々の文脈に沿って検討されなければならないが、此処では其の異同の多さを指摘するに留める。〔宋版〕使用字が〔世德〕等後代の通行刊本に継承されるに伴い、古鈔本系の本文とは隔絶した宋版系本文としての特徴を生起している事が察せられる。

V、其の他の異文

上巻　體道第一（1オ5a13）（1オ7a24）（1ウ1a27）
　（2オ1b71）
當如嬰児之未言　「當」作「愛」、〔世德〕同、〔杏Ⅰ〕書入「愛
　才作」、王校〔道蔵〕等に拠り「當」に校改
天地始者道　「道」下有「本也」二字、〔世德〕同、〔杏Ⅰ〕
　書入「本也才ナ」
有陰陽有柔剛　無上「有」字、〔世德・道蔵〕同、〔杏Ⅰ〕書入
　「才无」、王校『道德眞經注疏』引河上公注に拠り
　「有」を補う
除情欲守中和　「除情欲」作「除情去欲」、〔世德〕同
　養身第二（2ウ3b92）
各自動作也　無「作」、〔世德〕同、王校、〔道蔵〕等に拠り
　「各自動作」に校改
　安民第三（3オ4a122）（3オ6b132）

言人君不御好珎　「珎」下有「寶」、〔世德・道藏〕同、〔杏Ⅰ〕書入「寶才ナ」

治國猶治身也　作「治國與治身同也」、〔世德〕同、王校、〔道藏〕等に拠り「同」字を刪る、〔杏Ⅰ〕書入「與才乍」「同才ナ」

無源第四（4オ1a163）（4オ1b167）（4オ2a168）（4オ3a173）（4オ4a179）

紛結恨也　「恨」作「根」、〔世德〕同、〔杏Ⅰ〕書入「根才乍」、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「恨」に校改

雖有獨見之明當如闇昧　「如」作「知」、〔世德〕同、〔杏Ⅰ〕書入「知才乍」、王校、〔道藏〕等に拠り「如」に校改

不當以曜亂人也　「曜」作「擢」、〔杏Ⅰ〕書入「擢才乍」、王校、〔道藏〕等に拠り「曜」に校改

道湛然安靜　「道」作「當」、〔世德〕同、〔杏Ⅰ〕書入「當才乍」

道似存天帝之前　「似存」作「自在」、〔世德・道藏〕同、〔杏Ⅰ〕書入「自才乍」「在才乍述乍」、王校〔敦Ⅰ〕に拠り「似在」に校改

虛用第五（4ウ4b206）（4ウ5b208）

故能有聲氣也　「故」作「人」、〔杏Ⅰ〕書入「人才乍」、王校〔敦Ⅰ〕等に拠り「故」に校改

時揺動之益出聲氣也　「揺動」作「動揺」、〔世德〕同、〔杏Ⅰ〕書入「動揺才乍」

成象第六（5オ3a223）（5オ6b240）

言不死之道在於玄牝　「道」作「有」、〔世德〕同、〔杏Ⅰ〕書入「有才乍」、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「道」に校改

主出入於人口　無「人」、〔世德・道藏〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「主出入人口」に校改

韜光第七（6オ1a264）

先以為官長也　無「官」字、〔世德・道藏〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「官」字を補入

能爲第十（7ウ2b346）（7ウ5b357）（7ウ5a359）（8オ2b377）（8オ4387）

魄安修德延年也　「修德」作「得壽」、〔世德・道藏〕同、〔杏Ⅰ〕書入「得壽才乍」

一之爲言至一無二也　「至」作「志」、〔世德・道藏〕同、〔杏Ⅰ〕書入「志才乍」

専精氣使不亂　「專精」之間有「守」、〔世德・道藏〕同、〔杏Ⅰ〕書入「守才ナ」

治國者布德施惠　「布德施惠」作「布施惠德」、〔世德〕同、〔杏Ⅰ〕書入「惠」下「德才ナ」

能爲雌乎　「爲」作「無」、〔世德・道藏〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「爲」に校改

無用第十一（8ウ6a425）（8ウ6b426）（9オ3a437）

輪得轉行　作「車得去行」、〔世德〕作「車得其行」、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「輪得轉行」に校改

人得載其上也　「得」作「能」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「得」に校改

物利於形　作「利物也利於形用」、〔世德〕同、〔道藏〕作「利物也利形於用」

撿欲第十二（9ウ2a458）（9ウ2b460）

人嗜於五味　「於五味」作「五味於口」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に従い「人嗜於五味」に作る

口妄言失於道也　「道也」之間有「味」、〔世德・道藏〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「味」を衍として刪去

厭耻第十三（10オ4a486）（10オ7b495）（10ウ2a502）（10ウ3a508）

如臨危也　「臨危」之間有「深」、〔世德〕同、〔梅沢〕書入字間右旁「深イ」

坐吾有身　「坐」作「爲」、〔世德・道藏〕同

體道自然（〔陽Ⅰ・龍門・書陵〕無「道」字）「體道」之間有「得」、〔世德・敦Ⅰ〕同

人君自貴其身　無「自」、〔世德・道藏〕同

贊玄第十四（11オ5b542）（11ウ1a553）（11ウ1b555）（11ウ1b557）（11ウ4a568）（11ウ4a572）（11ウ5b579）（11ウ6b586）（11ウ7a588）

不可強詰問而得之也　無「強」、〔世德・敦Ⅰ・道藏〕同

一非色也　「一非」作「非一」、〔世德・敦Ⅰ・道藏〕同

一非聲也　「一非」作「非一」、〔世德・敦Ⅰ・道藏〕同

一非形也　「一非」作「非一」、〔世德・敦Ⅰ・道藏〕同

言一無物質　無「言」、〔世德・道藏〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「言」字を補入校改

言一忽忽怳怳　無「言」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「言」を補入

不可得而隨也（〔書陵・龍門・無窮・筑波・慶Ⅱ・東大・東洋・東急〕

無「不」）　「隨也」作「看」、〔世德・敦Ⅰ〕同、〔道藏〕作「見」

一自歸己也　「己」作「之」、〔世德・道藏〕同

執守古道主一　「主」作「生」、〔世德・敦Ⅰ・道藏〕同

顯德第十五（12オ7a612）（12ウ2b624）（12ウ3b628）（13オ1b656）

若客因主人　「因」作「畏」、〔世德〕同

外無彩文也（〔東急〕「彩」作「采」）「彩文」作「文采」、〔世德〕同、〔道藏〕作「文彩」

無所不包容也（古活字版「容」誤作「客」）無「容」字、〔世德・道藏〕同

新成者謂貴功名者也　無「謂」字、〔世德・道藏〕同

歸根第十六（13オ3a660）（13オ5b673）（13オ7683）

道人捐情去欲　「道人」作「得道之人」、〔世德〕同

萬物無不皆歸復其本（〔武内・梅沢・東大・東洋〕「歸復」作「復歸」）　無「復」字、〔世德・敦Ⅰ・道藏〕同

靜曰復命　「靜曰」作「是謂」、〔世德・敦Ⅰ〕同

淳風第十七（14オ5a745）（14ウ1b758）

君信不足於下也　無此七字、〔世德〕同

反以爲自當然也　「爲自」之間有「只」字、〔世德〕同、〔道藏〕「只」作「己」、王校、〔道藏〕等に拠り「只」を「己」に校改

俗薄第十八（14ウ7a778）（15オ1a782）（15オ1a783）（15オ1b785）

匡救其君　「匡救」作「匡正」、〔世德〕同

各自潔已不知貞　無「自」字、〔世德・道藏〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「自」字を補入

大道之世仁義没　「世」作「君」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「世」字に校改

猶日中盛明衆星失光者也　「明」作「時」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「明」字に校改

還淳第十九（15オ3a791）（15オ5b801）（15ウ2b821）（15ウ2b823）

五帝畫象　「畫象」作「垂象」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「畫象」に校改

棄義之尚華言也　「華言」作「華信」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「華言」に校改

當見其質朴　「質朴」作「篤朴」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅰ〕

等に拠り「質朴」に校改

以示下法則也（〔斯Ⅰ〕「下法」之間有「故下」二字）「下法」之間有「故可」二字、〔世德・敦Ⅰ〕同、〔道蔵〕有「可」一字

異俗第二十（16オ1a847）（16オ1b849）（16オ5 865）（16オ5a868）（16ウ4a896）（16ウ5a902）

言世俗人荒亂　「言」上有「或」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅰ〕等に拠り「或」字を删去

欲進學文　「學文」間有「爲」字、〔世德〕同

儡儡兮其若無所歸　「儡儡」作「乘乘」、〔世德・道蔵〕同

我獨儡儡　「儡儡」作「乘乘」、〔世德・道蔵〕同

若飛楊無所止也　「飛楊」間有「若」字、〔世德・道蔵〕同

似鄙若不逮也　「似鄙」作「鄙似」、〔世德・道蔵〕同、王校、『道德眞經注疏』所引に従い「似鄙」に校改

虛心第二十一（17オ4a925）（17オ4b926）（17オ6a933）（17オ6b934）（17ウ3b946）

忽怳無形無形之中　無「無形」二字、〔世德・道蔵〕同（〔道蔵〕「之」作「其」）、王校、〔道蔵〕に拠り「忽怳無形其中」に校改

獨爲萬物設法象也　無「設」字、〔世德・道蔵〕同、王校、〔道蔵〕に拠り「獨有萬物法象」に校改

言道精氣　「道」作「存」、〔世德〕同、王校、〔道蔵〕等に拠り「道」に校改

神妙甚真　「神妙」作「其妙」、〔世德〕同、王校、〔道蔵〕等に拠り「神妙」に校改

人動作起居　無「人」字、〔世德〕同

益謙第二十二（17ウ5b949）（17ウ7a962）（18オ1a966）（18オ6b985）（18ウ1b992）（18ウ2a997）

不自專則全也（〔慶Ⅱ・斯Ⅰ〕「全」下有「身」）「全也」之間有「其身」二字、〔世德〕同、〔梅沢〕「其身」二字加筆

自得少則得多也（〔梅沢・武内・東大・東洋・東急〕上「得」作「受」）　「得少」作「受取少」、〔世德〕同

財多者惑於守身　「守身」作「所守」、〔世德・道蔵〕同

故能長久不危也　無「長」字、〔世德〕同、王校、〔道蔵〕等に拠って「長」字を補入

正言非虛空也（〔筑波・弘文・大東・武内・東大・東洋・天理〕「空」作「言」）　「虛空」作「虛妄」、〔世德〕同

實全其肌體　無「全」字、〔世德・道藏〕同

虛無第二十三（18ウ4a 1002）（19オ6 1032）（19オ7b 1033）

希言謂愛言也　「謂」作「者是」、〔世德〕同、王校、〔道藏〕等に拠り「是」を「謂」に校改

同於失者失亦樂得之　「得之」作「失之」、〔世德〕同

與失同者失亦樂得之也　「得之」作「失之」、〔世德〕同

苦恩第二十四（19ウ7b 1069）（19ウ7b 1072）（20オ1 1074）

失功於人也　「失功」間有「有」字、〔世德・道藏〕同

不可以久長也　「久長」作「長久」、〔世德〕同

其於道也日餘食贅行　「日」作「曰」、〔世德・道藏〕同

象元第二十五（21オ2a 1143）

人當法地安靜和柔也　「和柔」作「柔和」、〔世德〕同、王校、〔道藏〕等に拠り「和柔」に校改

重德第二十六（21ウ2 1169）（21ウ2a 1172）（21ウ7a 1188）

是以君子終日行不離輜重　「君子」作「聖人」、〔世德・道藏〕同

君子終日行道　「君子」作「聖人」、〔世德〕同

王者躁疾則失其君位　「者躁」間有「行」、〔世德・道藏〕同

巧用第二十七（22ウ2a 1222）

所以常教民順四時者　無「常」字、〔世德・道藏〕同（〔道藏〕無「教民」二字）、王校、『道德眞經注疏』引河上公注に拠り「常」字を補入

反朴第二十八（23オ2b 1250）（23オ5a 1264）（23オ6b 1271）（23ウ4b 1295）

雖自知其尊顯　「自知」作「知自」、〔世德〕同、王校、〔道藏〕等に拠り「自知」に校改

復當歸志於嬰兒（〔斯I〕「當」作「常」）「復當」作「常復」、〔世德〕同、王校、『道德眞經注疏』引河上公注に拠り「當復」に校改

雖自知昭昭明達　「明達」作「明白」、〔世德〕同

德乃常止於己也　無「常」字、〔世德・道藏〕同、王校、『道德眞經玄德纂疏』引河上公注に従い「常」字を補入

儉武第三十（25オ3a 1371）（25オ7b 1395）

行善者　「行善」作「善兵」、〔世德〕同、王校、〔道藏〕に拠り「用」字を補い「善用兵者」に校改

強者不可以久也　「久也」作「壯」、〔世德〕同、王校、〔道藏〕等に拠り「久」に校改

偃武第三十一（26オ1a 1420）（26オ2b 1428）（26オ6a 1445）（26ウ3a 1461）（26ウ3b 1465）

遭衰逢亂　「逢」作「逆」、〔世德〕同

不以爲利美也　「利美」作「利己」、〔世德〕同、王校、『道德眞經集注』所引に拠り「己」を「美」に校改

而居左者　「左」作「陽」、〔世德〕同

將軍居喪主之位（〔梅沢〕「主」字旁に「礼」字を加筆〔陽Ⅰ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ〕「喪主」作「喪礼」）「主之」間有「禮」、〔世德・道藏〕同

〔宋版〕本章注末に「知後世用兵不已故悲痛之」の一文十一字が有る。〔世德・道藏〕同（〔道藏〕は「悲痛」の間に「而」、末に「矣」が有る）。古鈔本、古活字版には無し。

聖德第三十二（27オ7b 1508）

如川谷與江海流相通也　「流相通」作「相流通」、〔世德・道藏〕同

辨德第三十三（27ウ2b 1510）（27ウ7b 1529）

是智也　「是智」間有「爲」、〔世德〕同

則可以長久也　無「長」字、〔世德・道藏〕同、王校、『道德眞經注疏』引河上公注等に拠り「長」字を補入

任成第三十四（28オ4a 1545）（28オ7a 1565）

道可左可右　作「道可左右」、〔世德〕同、王校、〔道藏〕等に拠り「可」字を補入

怕然無爲　「怕然」作「恒然」、〔世德〕同

仁德第三十五（29オ1a 1588）（29オ3b 1603）

國家安寧而太平矣　「國家安寧」作「國安家寧」、〔世德〕同

五味有酸鹹甘苦辛也　「甘苦」作「苦甘」、〔世德〕同

微明第三十六（29ウ5a 1634）（29ウ6a 1637 1638）

魚脱入於淵　無「入」字、〔世德・道藏〕同

利器者謂権道也　無「者謂」二字、〔世德〕同、王校、〔道藏〕等に拠り「者謂」二字補入

爲政第三十七（30オ7 1670）（30オ7b 1671）

天下將自正　「正」作「定」、〔世德〕同

將自正安定也　無「安」字、〔世德・道藏〕同

下巻　論德第三十八（1オ7a 18）

言法道安静　「言」作「謂」、〔世德〕同

法本第三十九（2ウ7 89）（3オ6a 113）（3オ6b 114）（3ウ1a 121）（3ウ1 124）（3ウ4 134）（3ウ7a 148）（3ウ7a 149）

侯王得一爲天下正（〔杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・陽Ⅱ〕「一爲」之間有「以」字）　「爲天下正」作「以天下爲正」、王校、〔敦Ⅲ〕

等に拠り「以爲天下正」に校改

萬物當隨時死生　「死生」作「生死」、一世德・道藏一同

不可但欲常生（一陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・斯Ⅱ・梅沢・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ一無「但欲」二字、一慶Ⅰ・弘文一「常」作「當」）　無「常」字、一世德・道藏一同、王校、『道德眞經注疏』引河上公注に拠り「長」字を補い「不可但欲長生」に作る

不可但欲貴高於人　無「貴」字、一世德一同、王校、一敦Ⅲ一等に拠り「貴」字を補入

故貴必以賤爲本　無「必」字、一世德一同、王校、一敦Ⅲ一等に拠り「必」字を補入

是以王侯自稱孤寡不穀　「稱」作「謂」、一世德一同、王校、一治要一等に拠り「稱」字に校改

一宋版一経文「故致數車無車」下注文冒頭に「致就也」三字有り、一世德・敦Ⅱ・道藏一同、古鈔本、古活字版は三字無し。

人致就車數之　無「致」字、一世德・敦Ⅱ・道藏一同

去用第四十（4オ4b168）（4オ5b171）

道之所以動生萬物　「動」下重有「動」字、一世德・道藏一同

故能久長也　「久長」作「長久」、一世德・道藏一同

同異第四十一（4ウ6b196）（5オ4218）

不足名以爲道也　「名以」作「以名」、一世德一同

質直若渝　「直」作「眞」、一世德・道藏一同、一書陵一書入「述乍真」、王校、一敦Ⅱ一等に従い「直」に校改

道化第四十二（5ウ4a237）（5ウ5b244）（6オ2b259）（6オ3a261）

陰陽生和清濁（「和清濁」一聖語・斯Ⅰ一作「和氣清濁」）「和清濁」作「和氣濁」、一世德一同、王校、一敦Ⅱ一等に従い「和清濁」に校改

廻心始就日也（「始」、一活Ⅱ・杏Ⅱ・筑波・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・聖語・斯Ⅰ一作「如」、一梅沢一作「而如」）「始」作「而」、一世德・敦Ⅱ・道藏一同

推讓必還也（「推讓」一聖語・斯Ⅰ一作「推讓之」）「推讓」作「推之」、一世德・道藏一同

增高者速崩　無「速」字、一世德・敦Ⅱ一同、王校、一道藏一等に拠り「增高者致崩」に校改

偏用第四十三（6ウ7b312 313）

無爲之治治身治國也　無「無爲之治治」五字、一世德・敦Ⅱ一同

立戒第四十四（7オ7a332）

則終身不危殆也　無「終」字、〔世德〕同、王校、〔治要〕等に拠り「終」字を補入

洪德第四十五（8オ3a374）

能清能静則爲天下長　「能清能静」作「能清静」、〔世德〕同、王校、〔治要〕等に拠り「能」一字を補入

儉慾第四十六（8ウ2a389）

好色淫也（「色淫」〔東急〕作「婬色」）　「色淫」作「淫色」、〔世德〕同

鑒遠第四十七（9オ2b408）

所知益少也（「知」〔無窮〕作「見知」二字）　「知」作「見」、〔敦Ⅱ・道蔵〕同、〔世德〕作「用」

亡知第四十八（9ウ2a431）

當恬如嬰兒無所造爲也　「恬」下有「惔」字、〔世德・道蔵〕「惔」作「淡」

任德第四十九（10ウ1a479）

如孩育赤子（「孩育」〔陽Ⅰ・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急〕作「蠕虫」、梅沢作「孩育蠕虫」）「孩育」作「孩瓔」、〔世德〕同

貴生第五十（10ウ6b494）（10ウ6b495）（10ウ7500）（11オ7a523）（11オ7b526）

鼻不妄臭（「臭」〔無窮・東急〕作「香」）　「臭」作「香晁」、〔世德・敦Ⅱ〕作「晁」、王校、『道德眞經注疏』引河上公注等に拠り「鼻不妄嗅」に校改

口不妄言　「言」作「言味」、〔世德・敦Ⅱ・道蔵〕同、王校、『道德眞經注疏』引河上公注等に拠り「口不妄言」に校改

動皆之死地十有三　無「皆」字、〔世德・道蔵〕同

以其不犯上十三之死地也　無「上」字、〔世德・道蔵〕同、王校、〔敦Ⅱ〕等に拠り「上」字を補う

此物不敢害人也　無「人也」二字、〔世德・敦Ⅱ・道蔵〕同

養德第五十一（11ウ7b543）（12オ3a554）

復養長成熟　「養長」作「長養」、〔世德・敦Ⅱ・道蔵〕同

以爲利用也　無「用」字、〔世德・道蔵〕同

歸元第五十二（12オ6a562）

既知得道　無「得」字、〔世德・道蔵〕同

益證第五十三（13オ5b609）（13オ6b613）

民好從邪徑不平正也　無「不平正」三字、〔世德・敦Ⅱ・道蔵〕同

農事廢不耕治失時也　無「失時也」三字、〔世德・敦Ⅱ〕同

玄符第五十五（15ウ1 705）（15ウ2a 712）（15ウ2b 713）

知常日明　「日」作「曰」、一世徳・道蔵一同、一書陵一書入「曰イ」、王校、南宋劉氏刊『音註河上公老子道徳經』に拠り「日」に校改

心當專一爲和柔　無「爲」字、一世徳・道蔵一同

而神氣實内　無「神」字、一世徳一同、王校、一道蔵一等に拠り「神」字を補う

玄徳第五十六（16オ1b 732）（16オ2b 736）

當念道恬怕　「恬怕」作「無爲」、一世徳一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「恬怕」に校改

不使曜亂人也　無「人也」二字、一世徳・道蔵一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「人也」二字を補入

淳風第五十七（16ウ3 756）（16ウ3a 757）（17オ2a 776）（17オ2b 777）（17オ2b 778）（17オ3b 782）

以正之國　「之」作「治」、一世徳・道蔵一同

之至也　「之」作「以」、一世徳・道蔵一同

多技巧　「多技」間有「知」、一世徳・敦Ⅱ一同、王校、一治要一に拠り「知」を刪去

刻畫宮觀　「刻」上有「謂」字、一世徳・道蔵一同

彫琢章服　「章服」作「服章」、一世徳一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「章服」に校改

日以滋起也　「滋起」作「滋甚」、一世徳・道蔵一同

順化第五十八（18オ5b 851）

正已以割人清已以害人也（一東急一無「清已以」三字）無「割人清已以」五字、一世徳・道蔵一同、一敦Ⅱ一無「割人」二字

守道第五十九（19オ4a 892）

無使泄漏也　作「使無漏泄」、一世徳・道蔵一同、一敦Ⅱ一作「无使漏泄」、王校、一敦Ⅱ一に拠り「無使漏泄」に校改

居位第六十（19オ7b 905）（19ウ3 914）

治身煩則精氣散去也　「精氣散去也」作「精散」二字、一世徳・道蔵一同

聖人亦不傷人　無下「人」字、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「人」字を補入

爲道六十二（21オ4b 988）

欲使教化不善人也　「不善人」作「不善之人」、一世徳・道蔵一同

恩始第六十三（21ウ4a 1015）

豫設備除煩省事也　「設」作「有」、〔世德〕同、王校『道德眞經注疏』所引等に拠り「豫有備」を「不預設備」に校改

淳德第六十五（23ウ7b 1130）（24オ1a 1137）（24オ4b 1152）

明知姧巧也　「姧巧」作「巧詐」、〔世德・道藏〕同

以其智大多　無「大」字、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅱ〕等に拠り「太」字を補入

常能知智者爲賊　無「知」字、〔敦Ⅱ〕同、王校、〔道藏〕等に拠り「知」字を補入

後己第六十六（24ウ3 1170）（24ウ7b 1186）（25オ1a 1187 1188）（25オ2b 1191）

以其善下之故　無「故」字、〔世德・道藏〕同

不以尊貴虐下　「虐」作「虛」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅱ〕等に拠り「虐」に校改

民戴仰不以爲重也　作「民戴而不爲重」、〔世德〕同、王校、『道德眞經取善集』引河上公注に従い「民戴仰而不以爲重」に校改

無有欲害之者也　「者」作「心」、〔世德・道藏〕同

三寶第六十七（25ウ1a 1212）（26オ4a 1257）

夫獨名德大者　「夫獨」作「唯獨」、〔世德〕同

動入死道也　「死道」作「死地」、〔世德〕同

配天第六十八（26ウ2 1272）（26ウ3b 1275）（26ウ5a 1283）（26ウ6b 1291）

善勝敵者不與　「敵」作「戰」、〔世德〕同、王校、〔道藏〕等に拠り「敵」に校改

不與敵戰　「戰」作「爭」、〔世德・道藏〕同

是乃不與人爭鬪之道德也　無「鬪」字、〔世德〕同

是乃古之極約要道也（「極約要道」〔斯Ⅰ〕作「約要道」、〔聖語〕作「極道」）　無「約」字、作「極要道」、〔世德・道藏〕同

玄用第六十九（27オ7b 1321）（27ウ2b 1328）

愍不忍喪之痛也　無「不」字、〔世德・敦Ⅱ・道藏〕同

欺輕敵家近喪身也　「敵家」作「敵者」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅱ〕等に拠り「敵家」に校改

知難第七十（28オ1b 1354）

窮微極妙故無知也　「窮微極妙」作「窮極微妙」、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅱ〕等に拠り「窮微極妙」に校改

愛己第七十二（28ウ7a 1392）（29オ3a 1407）

當愛精養神　無「養」字、〔世德〕同、王校、〔敦Ⅱ〕等に拠

り「養」字を補う

洗心垢濁　「垢濁」作「濯垢」、一世徳一同

任爲第七十三（29ウ6b 1441）（30オ1a 1454）

萬物自動以應時也　「以應」作「應以」、一世徳一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「以應」に校改

天所羅網恢恢甚大　「羅網」作「網羅」、一世徳一同

制惑第七十四（30ウ2b 1487）（30ウ3b 1489）（30ウ4a 1490）

踈而不失者是也　無「者是」二字、一世徳一同

天道至明司殺有常（「有」一斯Ⅰ一作「者有」）「有」作「者」、一世徳一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「有」字に校改

春生夏長秋成冬藏　「成」作「收」、一世徳・道蔵一同

貪損第七十五（31オ1a 1511）（31オ5a 1529）

人民所以飢寒者　「寒」作「深」、一世徳一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「寒」字に校改

人民所以輕犯死者　無「所以」二字、一世徳・道蔵一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「所以」二字を補入

天道第七十七（32オ6b 1580）（32ウ4b 1598）

天地之道也　無「地」字、一世徳・敦Ⅱ・道蔵一同

不恃望其報也　無「望」字、一世徳一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「望」字を補う

任信第七十八（33オ5a 1621）（33オ6a 1629）

知柔弱者久長　「久長」作「長久」、一世徳一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「久長」に校改

人君能受國之垢濁者　無「人」字、一世徳一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「人」字を補う

任契第七十九（33ウ5a 1646）

必有餘怨及於良民也　無「餘」字、一世徳一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「餘」字を補う

獨立第八十（34オ4b 1673）（34ウ6 1714）

民雖衆猶若寡之（「之」一無窮・斯Ⅰ一作「小」）「之」作「少」、一世徳・敦Ⅱ一同

民至老死不相往來　無「死」字、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「死」字を補う

顯質第八十一（35オ1a 1721）

美言者（一斯Ⅰ一作「滋美言者」）作「滋美之言者」、一世徳・道蔵一同、王校、一敦Ⅱ一等に拠り「美言者」に校改

以上、その他の異文として、百九十箇所に及ぶ異同が認められた。中には、一宋版一の衍脱譌字かと疑われる字句も少なか

らず含まれている。例えば、上（1オ5a13）（2オ1b71）（2ウ3b92）（3オ6b132）（4オ1a163）（4オ1b167）（4オ2a168）（4オ3a173）（4オ4a179）（4ウ4b206）（5オ3a223）（6オ1a264）（7ウ2b346）（8オ4387）（8ウ6a425）（9オ3a437）（9ウ2a458）（9ウ2b460）（10ウ3a508）（11ウ4a568）（11ウ4a572）（12ウ3b628）（13オ5b673）（13オ7683）（14ウ1b758）（15オ1a782）（15オ1a783）（15オ5b801）（15ウ2b821）（16オ1a847）（16オ5865）（16オ5a868）（16ウ5a902）（17オ4b926）（17オ6a933）（17ウ7a962）（18オ6b985）（18ウ2a997）（18ウ4a1002）（19オ6 1032）（19オ7b1033）（22ウ2a1222）（23オ2b1250）（23ウ4b1295）（25オ7b1395）（26オ2b1428）（28オ4a1545）（29ウ6a1637 1638）（30オ7 1670）下（2ウ7 89）（3オ6b114）（3ウ1a121）（5ウ4a237）（6オ3a261）（6ウ7b312 313）（7オ7a332）（10ウ6b494）（10ウ6b495）（15ウ1 705）（15ウ2b713）（16ウ3a757）（17オ2a776）（17オ2b778）（21ウ4a1015）（24オ4b1152）（24ウ7b1186）（25オ1a1187 1188）（25ウ1a1212）（26ウ5a1283）（27ウ2b1328）（28ウ7a1392）（29ウ6b1441）（30ウ2b1487）（30ウ3b1489）（31オ1a1511）（32ウ4b1598）（33オ6a1629）（33ウ5a1646）（35オ1a1721）の七十九例に就いては、鄭校は〔宋版〕の譌脱と見做すか、〔宋版〕を疑い別本に従うべき旨校勘している。此れを先に掲出したⅠ〔宋版〕の誤脱と併せれば百七十五条に昇る。又別に、王校が校改している字句も有り、各条下に一々示した通りである。そして鄭校、王校の校勘は往々にして一致せず、両校の校譌を合わせれば、更に多くの箇所を誤脱と認めなければならないであろう。〔宋版〕本文に対する信頼性は保し難く、善本と言うにはほど遠い実態を認識せざるを得ない。只、両校の校勘結果の個々については疑義もあり、なお検討の余地があろう。

従って此処では、〔宋版〕が〔世徳〕を除く〔道蔵〕〔敦Ⅰ〕〔敦Ⅱ〕〔敦Ⅲ〕〔治要〕の何れかと同文である場合、経文については河上公本以外の何れかの本と一致する場合、また、文意に破綻が生じていない場合、或いは確証が得られない場合は、正否の判断を留保して、其の他の異文として掲出した。

逆に、古鈔本系の譌字脱文かと疑われる例も存する。しかし、個々の伝写の誤りを捨象すれば、総体としての古鈔本の譌脱は、〔宋版〕と比較すれば僅少と言ってよかろう。

古鈔本の譌脱と疑われる字句として、例えば、還淳第十九（上15ウ2b823）が挙げられる。鄭校は〔斯Ⅱ・陽Ⅰ〕及び「通考」に就いて「故可」二字の奪と校勘している。因みに掲出の字句は経文「抱朴」に対する章句「抱朴者當見其質朴以示下法則也」

の下半句である。此の章句全体では、上半句の「見」を「抱」に作る本〔無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・敦Ⅰ・天理〕、「質」を「篤」に作る本〔宋版・世徳〕、下半句でも他に、「下」を「天下」に作る本〔書陵・梅沢・道蔵〕、「也」字の無い本〔武内・東洋・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅰ〕等と異同が多く、全て古活字版と一致するのは〔陽Ⅰ・龍門〕である。今、〔陽Ⅰ〕の加点に従って全文を訓読すれば、

朴を抱とは〔者〕・當（に）其（の）質朴を見（シ）（・）以て下に法則を示す「當」シ〔也〕

と訓める。しかし、字句の異同とは別に、諸本に訓読の違いも認められる。「當」字の支配を上句に限り「當（ニ）其（ノ）質朴ヲ抱（ク）「當」（シ）」と訓む本〔斯Ⅱ〕、下句の「下」乃至「天下」また「法則」の解釈を異にし「以テ下ノ法則ヲ示スベシ」と訓む本〔弘文・東洋・天理〕がある。〔天理〕は「下法則者、少私寡欲」、即ち「下ノ法則」とは経文次句の「少私寡欲」と注釈している。「以示下法則」の難解さに因る異読と思われる。〔宋版〕の如く「下法」の間に「故可」が有れば、

朴ヲ抱トハ〔者〕・當ニ其ノ篤朴ヲ見シ、以テ下ニ示スベシ。故ニ法則トス可シ。

と訓読されようが、依然「故可法則」句の曖昧さは払拭しきれない。「故可」二字の有無の優劣は俄には決め難いように思われる。尚、〔斯Ⅰ〕は「故可」を「故下」に作り、

朴ヲ抱ト云ハ〔者〕・當ニ其ノ質朴ヲ抱テ・以テ下ニ示ス。故ニ下法リ則ル

と訓んでいる。或いは此れを最も穏当とすべきかも知れない。

また、苦恩第二十四（上19ウ7b1069）の事例では、鄭校は〔斯Ⅱ・陽Ⅰ〕及び「通考」について、「有」字の譌脱と見做す。該句は、経文「自伐者無功」下の章句「所爲輙自伐取其功美則失功於人也」の末句で、全文は〔陽Ⅰ〕に拠れば、

爲（ス）所輙チ・自ラ其（ノ）功美を伐リ取（ル）ときは・〔則〕功を〔於〕人に失（フ）〔也〕

と訓まれ、諸本の訓点も殆ど変わりない。必ずしも「功」の上に「有」が在る必要は無く、何れが優るかの判定は難しい。

又、居位第六十（下19オ7b905）の例は、鄭校は旁記書入れの字句が本文に竄入した衍文と見做す。問題の句は、冒頭経文「治大國若烹小鮮」の章句末句で、古活字版は標出の如く「治身煩則精氣散去也」とある。此れは、上句「治國煩則下亂」と

対応し、上句の「下亂」二字に対しては「精氣散去」の四字よりは、〔宋版〕等の様に「精散」二字に作るほうが対句としてより明瞭である。但、〔治要〕は「精去」、〔敦Ⅱ〕は「氣散」に作り、此の三様の二字句から一句を正と断定するのは困難である。〔東急〕は又異なって「精散去」と三字に作っている。〔聖語〕以下の古鈔本の殆どが「精氣散去」四字に作り、古鈔本によって独自に伝承された異文として注目され、此処は寧ろ〔宋版〕との異同相として捉えることの方が肝要であろう。

また、Vその他の異文の内には、同義類義の異字異句の使用に拠る異同が含まれる。上（8ウ6a425）の「輪得轉行」と「車得去行」、（26オ6a1445）の「居左」と「居陽」、（30オ7 1670）の「自正」と「自定」、下（1オ7a18）の「言」と「謂」、（3ウ4 134）の「稱」と「謂」、（9オ2b408）の「所知」と「所見」、（21ウ4a1015）の「設備」と「有備」、（23ウ7b1130）の「姧巧」と「巧詐」、（26オ4a1257）の「死道」と「死地」、（26ウ3b1275）の「戰」と「爭」、（30ウ4a1490）の「秋成」と「秋收」等の異同はその事例として挙げられる。

同類の異同として、二字句が上下転倒して使用されている例がある。「揺動」と「動揺」（上4ウ5b208）、「彩文」と「文采」（上12ウ2b624）、「久長」と「長久」（上19ウ7b1072）（下4オ5b171）（下33オ5a1621）、「和柔」と「柔和」（上21オ2a1143）、「甘苦」と「苦甘」（上29オ3b1603）、「死生」と「生死」（下3オ6a113）、「色淫」と「淫色」（下8ウ2a389）、「養長」と「長養」（下11ウ7b543）、「章服」と「服章」（下17オ2b778）、「羅網」と「網羅」（下30オ1a1454）等がその例である。

更に、四字句の配字が異なる例として「布德施惠」と「布施惠德」（上8オ2b377）、「國家安寧」と「國安家寧」（上29オ1a1588）、「窮微極妙」と「窮極微妙」（下28オ1b1354）等が認められる。

これらの異同例は、文意に於いて殆ど同義であり、解釈上齟齬を生じることは無いが、諸本の系統関係を考察するに当たっては、古鈔本系本文と対峙する異文として検討の対象となろう。

その外、文義に於いて微妙な、時には微妙とは言えない乖差を生じている異文も多い。上（1オ7a24）（1ウ1a27）（3オ4a122）（3オ6b132）（4オ4a179）（7ウ5a359）（10オ4a486）（10オ7b495）（10ウ2a502）（11オ5b542）（11ウ1a553）（11ウ1b555）（11ウ1b557）（11ウ5b579）（11ウ6b586）（12オ7a612）（13オ1b656）（14ウ7a778）（15オ1b785）（15オ3a791）（16オ1b849）（16ウ4a896）（17オ6b934）（18オ1a966）（18ウ1b992）（18ウ4a1002）（21ウ2 1169）（21ウ2a

1172）（21ウ7a 1188）（23オ5a 1264）（23オ6b 1271）（25オ3a 1371）（26ウ3a 1461）（26ウ3b 1465）（27ウ2b 1510）（29ウ5a 1634）（30オ7b 1671）、下（3ウ1 124）（3ウ7a 149）（4オ4b 168）（5オ4 218）（5ウ5b 244）（6オ2b 259）（9ウ2a 431）（10ウ1a 479）（10ウ7 500）（11オ7a 523）（11オ7b 526）（12オ3a 554）（12オ6a 562）（13オ5b 609）（13オ6b 613）（15ウ2a 712）（16オ1b 732）（16オ2b 736）（16ウ3 756）（17オ2a 776）（17オ2b 777）（17オ3b 782）（18オ5b 851）（24オ1a 1137）（24ウ3 1170）（25オ2b 1191）（26ウ6b 1291）（27オ7b 1321）（29オ3a 1407）（31オ5a 1529）（32オ6b 1580）（34オ4b 1673）（34ウ6 1714）の異文は、軽重の差はあっても本文の解釈に影響を及ぼす。個々について、是非、或いは優劣の比較検証が必要となろう。しかし、一概に、一方は採って、一方を棄てることは慎み、各伝本を特徴づける異文として両存、相承されるべきである。一宋版一と、古鈔本系の本文との相違を顕然と示す事例として注目される。

以上、Ⅰ一宋版一の誤脱・衍文、Ⅱ文末の助字の有無・相違、Ⅲその他助字の有無・相違、Ⅳ通用別体字使用に拠る相違、Ⅴ其の他の異文に渡って、古鈔本と一宋版一の異同を挙例してきた。総数四七二条に及ぶ。

此処で挙げた異同例は、一宋版一の本文が、現存古鈔本及び古活字版のどの本とも相違している例である。従って、大半の古鈔本と相違が有っても、何れかの一本とさえ一致していれば取り上げていない。特に一斯Ⅰ一は、一宋版一と一致する場合が多く、古鈔本の内で特異な本文をもつ。此の一斯Ⅰ一の存在によって、選出された異文の総数は結果として大きく減少している。個々の一本、或いは古活字版とのみ対比した時には、異同個所の数量は殆ど倍増するであろう。

一宋版一と諸本との懸隔の度合いを数量化して比較する為に、視点を転換し、一宋版一から見た諸本の異同量を計測してみた。その数量の概数を考量することによって図式的な理解が可能である。附表6－8（宋版と諸本との異同量巻上、巻下、巻上下）を参照されたい。異同量の計測は、先に行った一活Ⅰ一から見た諸本の異同量と同様の方法を用い、各異同個所に於いて、付与するポイント数の基準も統一した。従って、一活Ⅰ一から見た一宋版一の異同量と、一宋版一から見た一活Ⅰ一の異同量は当然同量となる。ただ、一部の異文において諸本との関係でポイント数を調整したために、総量において微少の差異が生じている。しかし、諸本の比較において細数は捨象しても概数への影響は無い。附表8の比較対象諸本は、上下両巻ほぼ具備して

いる本を選択した。「梅沢」「足利」は巻下首部分に僅かながら脱簡があり、その部分が計上されない為に、附表7・8に於いて本来より少ない数量となっているが、大局的な理解に支障を及ぼす程ではない。

此の附表から理解される事として以下の五事が挙げられよう。

①「世徳」が、諸本に比し極端に「宋版」と近接している。

②古鈔本の内、「斯Ⅰ」が、顕著に「宋版」に近い。

③「斯Ⅰ」を除く古鈔本諸本は、ほぼ同程度に「宋版」と懸隔している。

④古活字版は「斯Ⅰ」を除く諸古鈔本より幾分「宋版」に近い。「聖語・陽Ⅰ」が古活字版に次いで「宋版」に近接している。

⑤「宋版」と「道蔵」との隔たりは、「斯Ⅰ」を除く古鈔本との隔たりと量的に格段の開きはない。

①に就いて、更に敷衍して言える事は、「宋版」と「世徳」の異同量三八五は、「活Ⅰ」と古鈔本との異同量、例えば、最も近い「陽Ⅰ」との六二三に比較しても顕著に少なく（附表3参照）、「宋版」と「世徳」とは、「活Ⅰ」と古鈔本との関係より遥かに近接した関係にある。従って、「活Ⅰ」が古鈔本を襲うと言えるならば、此の異同量の較差は、「世徳」が「宋版」を襲う同系上の本である事を立証する為の論拠となり得よう。「世徳」と、「斯Ⅰ」を除く古鈔本諸本との異同量の較差を③を前提として考えるならば、「宋版・世徳」が宋刊本系であるとすれば、古鈔本諸本は其れとは別系統と判断される。其の懸隔の程度は、「道蔵」と「宋版」との隔たりと同程度である事が⑤に拠って瞭然と明らかであろう。

要約

本章での考察の目的は、宋刊本の本文が、古鈔本の本文とは系統が異なることを論証することにあった。そのために、両本系の乖離の諸相について、「編成上の相違」を明らかにし、「本文字句の異同」を、Ⅰ「宋版」の誤脱・衍文、Ⅱ文末の助字の有無・相違、Ⅲその他助字の有無・相違、Ⅳ通用別体字使用に拠る相違、Ⅴ其の他の異文の五類に分けて挙例指摘してきた。その結果数多くの異文と、助字使用の多寡に見られるようにテキスト性格上の較差が確認された。更に、「宋版」から見た諸本の異同量を比較し、「世徳」の異同量が諸本に比し格段に少ないことから「宋版・世徳」の同本性が認められ、それに伴って、古鈔本諸本は「宋版」とは別系と判断された。以上の検証の結

果を以て、本章冒頭において提言した〔宋版〕と古鈔本と一致しない本文が、同系とは認め難い程に、甚だ多いことの立証は果たされたと考えたい。因って、宋刊本の本文と、古鈔本の本文とは系統が異なるという命題が成り立つ。

此の命題に因って、古鈔本の本文を襲う古活字版の本文は、宋版系ではない事実が確認される。故に、古活字版の本文は、現今通行している宋版系ではなく、古鈔本系の本文であるという命題が証明された。

此処では専ら、〔宋版〕と古鈔本とが相違する面を指摘してきた。しかし、各古鈔本の間でも〔宋版〕との異同量に等差があるのであって、或る一本を基準にしてみれば、より〔宋版〕に近い本が恒常的に存在する。宋刊本が我が国へ舶載されて以後、其の本文が、旧来の古鈔本系本文の内に漸々と浸潤して行った結果と想察されよう。古活字版の本文が、古鈔本に比べて〔宋版〕にやや近接した様相を示すのは、宋刊本系本文の影響をより多く被ったが為の現象と考えられる。

尚、〔斯Ⅰ〕が古活字版及び他の古鈔本諸本と比較して、極端に異同量が少ない事実は、〔斯Ⅰ〕が、古鈔本としては宋刊本と近接する特異な伝本である事を示唆している。本邦伝来本としての古鈔本本文の性格と特徴を考察する上で、此の特異性の由来と、本文同異の検証は、避けられない課題であるが、更めての検討必要事項として、後攷に委ねたい。

補説－「老子経序」について

〔宋版〕との編成上の相違として指摘した通り、古活字版首に冠せられた、葛洪を撰者名として題する「老子経序」は、我が国所伝本に特有の老子序として、早くから注目されてきた（本稿「緒言」48頁上段参照）。〔宋版・世徳〕にも首序があるが、この「老子経序」とは内容が全く異なっている。

〔宋版・世徳〕の首序は『老子道徳経序訣』の前半部分と一致していることが明らかにされている。〔宋版〕は、序題「老子道徳經序」、次行に「太極左仙公葛　玄造」とあり、内容は『老子道徳經序訣』全五段の内の第一段・第二段と吻合する[11]（〔南宋〕劉通判宅仰高堂刊『音註河上公老子道徳經』二巻、及び〔南宋建安〕刊『纂圖附釋文重言互註老子道徳經』二巻も同じ）。〔世徳〕は、宋景定元年龔士卨撰「老子道徳經序」に続き、「道徳經序」を載せ、此れは〔宋版〕序文の前半、即ち『序訣』の第一段と同文で、末に「太極左仙公葛玄譔」と題している。

〔宋版〕に冠せられた序文が、元来、河上公注老子道徳経の序文として存在し、それがその儘の形で宋代にまで伝えられたのか、従って本来の序文が後に『序訣』の第一・二段として編入されたものなのか、或いは逆に『老子道徳経序訣』が部分的に河上公注老子道徳経の序文として採用されて〔宋版〕の如き伝本が生じたものなのか、葛玄撰と題し河上公注老子道徳経の序として冠せられるに至った経緯は詳らかではない。

日本に伝来した同書古鈔本或いは古活字版に冠せられた序文は、〔宋版・世徳〕の葛玄序とは全く別文であって、中国所伝の老子諸本には、此の所謂葛洪序を有する本は無いと言われ、或いは邦人による仮託の序かとの疑惑すら生じている。

従って、本古活字版が此の序を冠する事実は、伝来の古鈔本を底本と推定する恰好の論拠とされる。しかしながら、この序の由来、或いは掲載伝本との関連については不明な面が多い。諸本の伝系を考える上で、序文の有無、内容は重大な意味を持つ。暫くこの件について詮索し、鄙見を整理しておきたい。

本邦所伝の古鈔本に特有の「老子経序」が、やはり唐土での作であり、その成立は唐代より古く、『老子道徳経序訣』に先行して河上公章句本に具わっていたであろうことに就いて、楠山春樹氏による論考がある。[12] 氏は、先ず、梁元帝撰『金楼子』、唐陸徳明撰『経典釈文敘録』、敦煌本『玄言新記明老部』等の記事佚文を論拠として、当時「現在は失われている『河上公注』序が、実は幾らも有ったらしい」と推定された。次いで、此の序における道徳経分章に関する、上篇三十六章、下篇四十五章との叙述が、古鈔本を含む現行本の三十七章、四十四章と食い違うことに注目された。此の矛盾について、宋董思靖『道徳眞經集解』序、宋謝守灝『混元聖紀』の所述及び敦煌文書S四六八一・P三二七七「老子李栄注」残簡の記事に拠り、唐代のある時期、上篇三十六章下篇四十五章とするテキストが行われていた事実を明らかにされ、その事実を本序の記述に関連づけることで、「鈔本序の、嘗ては中国の地で行われていた序であることが、ここに明らかに知られる」と結論された。

更に氏は、本序の河上公伝の内容を『老子道徳経序訣』第二段及び『神仙伝』河上公伝と比較検証することによって「鈔本序は、『河上公注』序としては、「序訣」に先行する古さをもつものではなかろうか」との提言をされている。

此の指摘は正鵠を射たものと思われるが、氏の「嘗ては中国の地で行われていた序である」との推論を補翼し得る証左が伝

来の古鈔本自体に存在している。

その一つは、是れも夙に武内義雄が経見の古写本及び古活字本の書入れに拠って指摘された事実である。氏は、瀧川君山所蔵の写本即ち〔武内〕には、序首に「老子經序　葛洪序　見述義」とあること、また、大阪図書館所蔵の古活字版（此の本は現在所在が明らかでない）の欄外書入れの「此ノ序ヲ葛洪ノ書トスルハ義述ニ見ユ、然ルトキ序ニアラザルカ發題ニ似タリ」との所述に留目され、この序は賈大隠の述義から取ったものらしいと推定された。更に、「本邦旧鈔本は皆賈大隠述義本から摘出した河上公本で慶長活字本も旧鈔本を襲ったものであろう」と言及されている[13]。

此の指摘推定に就いては、新たに加わった資料に拠って、些か補足並びに修正が必要である。

現在知られている、本書古鈔本の内、完本及び巻上を存する諸本の総てが、此の「老子経序」を冠している。その内に、序題下に「葛洪」と題する本〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵〕と、「葛洪序」と題する本〔無窮・筑波・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋〕、及び撰序者名を題しない本〔龍門・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ〕とが存在している。其の「葛洪序」と題する本には、「序」字の下に大字で「見述義」と書された本〔武内〕、及び「見述義二」と書かれた本〔筑波・慶Ⅰ・大東・東大〕が存する。「異同表」（序1オ12・3）を参照されたい。また、〔無窮〕は、「序」字下に小書きで「見述義二」とある。〔慶Ⅱ〕は、撰序者名を題しないが、「斯序者葛仙公作也見于述義」との書入れが有る（同文の書入れは〔慶Ⅰ・大東〕にも見える）。

更に、清原宣賢撰とされる『老子經抄』の冒頭に、

老子經序、此序ハ、葛洪カ書ト云義ハ、義述ニ見タリ、雖然、序サウニモナイソ、多クハ、發題ニ似タリ、然トモ、義述ニ見タルホドニサコソアルラメト也、（略）義述ト云ハ、老子經ノ末書也、葛洪ハ葛稚川也、仙人也、義述ノ二ノ巻ニ見タリ、葛ハ氏也、是レハコガキ也、故ニ葛洪序スト、下ニ書也

との講述が見える（武内義雄所引の大阪図書館蔵古活字本の書入れは、この『老子經抄』からの移写なのであろう）。

唐賈大隠撰『老子述義』十巻は、周知の如く『日本國見在書目録』に著録され、平安鎌倉時代を通じ、儒道釈家、神道家に及んで受用された。中国本土では宋代以後逸失し、日本でも〔武内〕の「老子經序」冒頭「見述義」右旁の書入れに「今世

ニハナシ」と見える事から、室町期には既に亡逸していたようである。近年佚文集成の試みは成されている[14]が、現在なお同書の全貌は明かでない。古鈔本の書き入れに引載された断片的な文辞の内容から、河上公注本に基づいてそれを祖述敷衍した老子注釈書であったと考えられる。

序文の冒頭撰序者名下に大字で書かれた「見述義二」については、二通りの解釈が可能であろう。一は、此の序文全体を指して、其の全文が述義の巻二に見えている事を示した注記と理解される。いま一は、直前の「葛洪序」三字の説明であって、この序は葛洪の作であるという注説が、述義に見えていることを示す注釈と解される。武内は、前者の如く解されたようであり、『老子經抄』の講者は、「此序ハ、葛洪カ書ト云義ハ、義述ニ見タリ」とあれば、後者の解釈を伝えたものと言えよう。

「見述義二」の四字は、諸本の書写の様態、及び関連する書入れの意味内容を勘案すれば、次のように理解する事が可能ではなかろうか。先ず一無窮一で、此の四字が「序」字下に小字で書かれているのは、元来は、何れかの家説を承けた書入れであったと考えられる。一武内一のこの句左旁の「小書也」との書入れは、それを裏付けているように思われる。更に、「葛洪」或いは「葛洪序」の題署も、一慶Ⅱ・慶Ⅰ・大東一に見られるような「斯序者葛仙公作也見于述義」との注説の書入れが相伝されていることに鑑みれば、元はこの題署は無く、撰序者が不明であったところに、述義の此の説が容認されるに至り、後に、氏名が題されるようになったと解されよう。『老子經抄』の「葛洪ハ葛稚川也、仙人也、義述ノ二ノ巻ニ見タリ、葛ハ氏也、是レハコガキ也、故ニ葛洪序スト、下ニ書也」という文脈は、字句に脱落が有るようで判然としないのであるが、この間の事情を伝えているように理解される。即ち、葛洪について、義注の書入れ「コガキ」がある、その説は述義の巻二に見えていて信頼出来る、それで、「葛洪序」と書かれている、とこの様に解読されるのではなかろうか。

要するに、当初は、一龍門・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ一の様に、撰序者名は無く、後に、述義の説が取り入れられて一陽Ⅰ・書陵一の様に「葛洪」と、或いは一無窮・筑波・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋一の様に「葛洪序」と題した本が生じ、更に一武内・筑波・慶Ⅰ・大東・東大一に見られるように、元来は書入れとしてあった「見述義」或いは「見述義二」の三・四字が、誤って大字本文として定着したと推察されるの

である。

古活字版は、撰序者氏名を題署し氏名下の「序」字が無い点において、現存古写本の内〔陽Ⅰ・書陵〕に近接する。此れは、「異同表」の異同量累計から導かれた結果とも吻合している。

何れにしても、賈大隠の『老子述義』巻二に、其の全文が載せられていたか否かは別として、該書該巻においてこの序の注釈が成されていた事は確かであろう。従って、此の序文は、賈大隠在世時以前、唐土において知られていたことは明らかで、また、此の序を備えた河上公注『老子道徳経』が存在したことも殆ど疑えない事実であろう。邦人の仮託かとの疑念を差し挟む余地は皆無と言えよう。其の序を具備した河上公注本は中国においては佚伝し、一方、唐より渡来した我が国において伝写相承され、古鈔本として現在にまで伝えられた。

「老子経序」の伝承に関連して、もう一つ考えておかなければならない問題がある。此の序文の本文は、諸本間で些少異同が有る。伝写に伴って生じた異同と解される場合が多いが、「異同表」（序4オ7 80）の序文末字「焉」の有無に関しては、単なる伝写の譌脱と見做すことは出来ず、注意を要する。

諸本の多く〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・筑波・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・東大・武内・東洋・梅沢・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ〕には「焉」字が有り、〔足利・弘文・慶Ⅱ〕には無い。この字の有無について、〔書陵・龍門・東洋〕及び、東洋文庫蔵古活字版には、字旁に「才ナ」と校異の書入れが存する。古鈔本の書入れの由来については、別途に考察されなければならないが、〔書陵〕の書入れは清家家説を伝えるとされている。他本も同説を相伝したものであろう。

「才」とは当然摺本、即ち当時舶載された宋刊本である。という事は、其の宋刊本に此の「老子経序」が具わっていたと解せざるを得ない。従って、此の序は、中国においても、宋代にまで伝存していたと理解されなければならない。

尚、古鈔本の書入れには「才本」との校異の書入れが少なくなく、それが現在通行の〔宋版〕と符合しない場合がある。宋代、現存の〔宋版〕とは異なる河上公注『老子道徳経』が刊行された事実と、それが日本に舶載され、同書誦読の資に供され、相伝の本文に影響を及ぼした事実、ともに看過出来ない面である。此の「焉」字に限ってみるならば、諸本の内大半が「才」に従っているのであって、唐写本系とされる本邦所伝の古写本の本文に与えた宋刊本の存在は思いの外大きい。其の宋刊本は

彼我に失われて現存せず、全容を窺い知る事は出来ない。古写本に散見する校異の書入れは、其の片鱗ながらも推知するに極めて重要である点を、併せて指摘しておきたい。師資相承されてきた注説として古鈔本によって伝承された書入れの価値は大きい。其の系統的な整理と内容の解明は今後の重要な課題であろう。

更めて、古活字版の伝本系統について触れておかなければならないが、如上の宋刊本の存在が想定されるのであれば、「老子経序」を冠する故のみを以て、本邦所伝の古鈔本を襲うものと直ちに断言する事は出来ない事態が生じる。此処で述べた事からも分かるように、古鈔本諸本間において既に本文の異相が確認される。古活字版は、此の異相とどのように対応するのか、或いは関繋するのか、限られた現存諸本の実相の究明とともに、上記の如き宋刊本をはじめ伝を逸した諸本も視野に入れ、本文の異同の実態に即したより細やかな対処が要請されるであろう。

古活字版以後の本文

本書古活字版の刊行の時期と相前後して、宋林希逸鬳斎口義の古活字版が四種五版も刊行されている事実は、本邦に於ける老子受容史上の転機を象徴している。慶長元和の近世初期を機に『老子道徳經』は、旧来の河上公注を墨守することなく、林希逸の注釈を取り入れそれを咀嚼することによって、より広く士庶の間に普及していったと言えよう。林羅山の加点と諺解はその趨勢を大いに助長したものと思われる。[15]

鬳斎口義本の弘通に伴って、河上公注本が利用される機縁は急激に減少したと見られる。古活字版に継ぐ和刻本漢籍[16]としては陳元贇の注を附増した『老子經通考』以外には遂に刊行されなかった事実は、そのことを雄弁に物語っていよう。しかし、河上公章句本の伝承が途絶えた訳ではないであろ。一部旧学を重んじる学者縉紳の間では、旧来通り伝来本の相承と伝写が重ねられたであ[17]ろうし、また、明清刊本も舶載され、相応に通行していた事情が、伝本の現存状況から窺測される。[18]

學問の普及浸透に伴う需要の拡大に因って、新たな明清刊本の舶載と、相次ぐ和刻本の刊行を誘発し、近世日本に於ける漢

籍の流布状況を一変させた。明何道全注『太上老子道徳經』、明釋德清撰『老子道徳經解』、明焦竑撰『老子翼』、明陳繼儒撰『老子辯』、清畢沅撰『老子道徳經攷異』等明清刊本の覆刻ないし翻刻[19]は、此の時代の趨向を反映している。明清の清新な学問が流入する一方で、虞齋口義も旧説と化し本流としての優位から離脱して行った。そして、新来の典籍に触発され、或いは其処に盛られた新知識を摂取醸成するように、日本人学者による独自の校訂注釈評論の述作が輩出した。其の多くが上梓刊行されて和刻本漢籍とともに都鄙の間に流通し、老子学の水準を引き上げ、思想の理解を広く促したと概言することが出来よう。

この様な近世という時代状況の下で、河上公注への関心と執着は、相対的に、薄れて行ったであろう。新たに齎来された明嘉靖一二年（一五三二）世德堂顧春刊六子全書本即ち「世德」は、善本とされながら、遂にその和刻本は刊行されるに至らなかった。江戸時代末期に渡来した清嘉慶九年（一八〇四）姑蘇王氏聚文堂刊『九子全書』或いは『十子全書』所収の『道德經評註』[20]もまた同様である。しかし、上に一言したように、わが国において河上公注本の伝系が途絶したわけではない。

近世に通行した河上公注本の伝本は、大きく二系に分けられるはずである。一系は、「世德」等新渡の明刊本の系統で、これは当然中国伝来の宋刊本を継承する。各所に伝存する明清刊本は此の一系が流通利用された事実を証明する。別の一系は、言うまでもなく、日本伝来の古鈔本系でなければならない。

近世以後、新たに出現した河上公注本本文は、新渡の明清刊本を除くならば、「天理」と、「通考」即ち『老子經通考』以外には知られていない。両書は、古活字版刊行以後の我が国に於いて編撰された河上公注に対する注釈書である。其処に標出された經本注本が、明刊本系であるのか、古活字版に継承された古鈔本系であるのか、此の両書の伝本系統の解明は、本邦伝来テキストの命運に関わって重要な課題であると言える。

これまでの、古活字版と古鈔本、「宋版」との関係の検証に於いて、「天理」、「通考」の本文がしばしば参考され、古活字版との近接した関係が窺われた。従って、此の両書掲出の本文が、古活字版或いは旧鈔本の旧来の本文を継承していることは殆ど明白であり、殊更の論証は要しないとも思われる。しかし、殊に、「通考」は河上公注の全容を伝える道德經和刻本として、唯一、江戸時代を通じて流布した本でありながら、其の底本如何に就いての論究は未だ充分にはなされていない[21]。此の両書の

底本として、先ず想起され、検証を要請されるのは、古活字版であろう。古活字版との本文同異の様相を確認し、改めて継承関係の有無を考証することで、両書に依って端なくも命脈が保たれたとも言える古鈔本系河上公注本の隠微に変異した内実が、古活字版以後の本文として明らかになる筈である。

〔天理〕と古活字版との近接した関係

〔天理〕については、拙稿「天理大学附属天理図書館蔵『老子道徳經河上公解〔抄〕』翻印並に解題（下）」（以下、「前稿」と略）において概述した通りであるが、改めて古活字版との関係を確認しておきたい。該書に標掲された經注本文即ち〔天理〕の底本如何を考察する過程で、次の様な結果が得られた。

標掲された經本注本は、書写当時に通行していたと考えられる諸本の内、古活字版、特に其の異植字版と最も近接した関係にあることが第一点。諸本と比べ、古活字版と咫尺しているのであるが、両本の異同個所の検証の結果、古活字版本文とは相違するテキストを参校したか、或いは、古活字版と近似する別の或本を底本としたと考えられ、古活字版からの直接の転写では無いと判断された事の二点である。

第一の点に関しては、前稿では〔天理〕からみた諸本との親疎の関係を、各異同箇所に一律に量数①を付与して数量化し、その総数を以て比較したのであるが、本稿での基準でみても、相対関係においては殆ど同様の結果が導かれる（附表9参照）。また、附表1（活Iと諸本との異同量　巻上）に拠っても、古活字版からみて、管見の古鈔本のどの本と比較しても〔天理〕が最も近いテキストであることは明らかである。即ち、異同量数の計測の結果として、附表9に拠り〔天理〕から見て古活字版が最も近い事実が示され、附表1に拠り古活字版から見て〔天理〕が最も近い事実が示された。因って、〔天理〕は、他のどの古鈔本よりも古活字版と近い関係に在ることが確認される。

此の関係を明瞭に示す同異の事例として、〔天理〕が古活字版とのみ一致している335 1156 1607 1633（以下、異同事例は「諸本異同表」巻上の通し番号で示す）が指摘されよう。

335は、運夷第九章句の末句「樂極則衰也」（上7オ6b）で、「衰」字は、古活字版と〔天理〕とを除く諸本は、何れも「哀」に作っている。

1156は、象元第二十五の経文「天法道」下章句冒頭の「天當法道以」（上21オ4a）で、諸本は「道法」の二字、或いは「道」一

字に作る。

1607は、仁徳第三十五経文「視之不足見」下章句末「可得見之也」（上29オ4b）の「之也」二字を諸本は「之」或いは「也」の一字に作る。

1633は微明第三十六経文「魚不可脱淵」（上29ウ5）で、諸本は「脱淵」の間に「於」字が有る。

異同内容の詳細と諸本との関係については、上記、古活字版に孤立した特異の本文、Ⅰ古活字版の本文が先行諸本の何れとも相違する事例（58頁）の(1)、(3)、(4)、(5)を参照されたい。

古活字版との近親な関係は、章題標記にも顕れている。本邦所伝の古鈔本の間で、章題標記の体式題名に相違が見られることは上述した通りであるが、「天理」は体式題名共に全て古活字版と一致している。

又、特に、古活字版の内、異植字版「活Ⅱ」とより緊密な関係に在ることが、附表9に拠って明らかであろう。此の事実は附表5（活Ⅰ活Ⅱの異同箇所における活Ⅱと諸本との一致の状況）にも反映されている。其れを象徴する異同例として、1516の事例、即ち辨徳第三十三経文「勝人者有力」の注「能勝人者不過以盛力也」に於いて、「活Ⅱ」は「活Ⅰ」と異なり「盛」一字が無いが、諸本の内「天理」のみが「活Ⅱ」に同じであることが指摘されよう（詳細は後述）。

更に、附表1及び附表9から、両本の親近さの程度は、諸本に比しやや極端であることが窺測される。此のことによって、『老子道徳經河上公解〔抄〕』が寛永四年（一六一八）の書写本で古活字版の刊行から差程時を隔てずして成立した注釈書であることを考慮に入れれば、「天理」が古活字版からの直接の転写本である可能性も念頭に置く必要が生じる。

第二の点については、凡そ九十八個所の「活Ⅰ」との異同箇所を検証することで、「天理」が、古活字版からの直接の転写ではないとの結論を得た。此処では、その結論を追認するために、その後に校合を済ませた「龍門」「大東」を含めて、異同の有る箇所について再度検証し、前稿での証例を補訂しつつ確認しておきたい。掲出辞句は「天理」本文に拠り、古活字版の該当箇所を補記する。

「天理」と古活字版との異同

「活Ⅰ」との異同は以下の一〇二箇所一〇三字句が認められる。数が前稿と合わないのは主として異同項目の立てかたに起因し、内実に変わりは無い。

11 12 39 69 97 98 100 104 125 174 196 197 233 313 315 403 416 418 426 427 434 443 455 475 511 543 545
559 561 562 586 592 611 628 657 673 677 681 717 723 731 742 743 762 789 793 803 805 818 820 821 846 867 870
876 896 915 958 992 994 997 998 1004 1029 1031 1033 1057 1088 1162 1173 1174 1188 1236 1238 1255 1262 1265 1283 1288 1293 1296
1298 1311 1329 1349 1369 1433 1435 1507 1516 1559 1568 1569 1583 1585 1587 1616 1619 1628 1631 1649 1672

異同字句を含む）

（427は二つの

此の内、39 233 731 789 793 803 820 1057 1236 1238 1435 1507 1516 1649の一四の箇所では、一活Ⅱ一とは一致している。

逆に、以上の他、212 226 259 324 730 912 950 1136 1148 1379 1398 1454の一二の箇所は、一活Ⅰ一とは一致しているが、一活Ⅱ一とは異同が有る。

以上の古活字版と一天理一との乖離を示す要素としての異文の中で、一天理一が古活字版の転写でない事実を実証するに足る異同例が認められるか否か、検証されなければならない。その為には、本文系統上の問題に関わりの薄いと思われる異同を消去し、残りの異文に就いて考量する方法が有効であろう。

両本間に異同が生じるに至った原因として、

(1) 一活Ⅰ一の誤植
(2) 一活Ⅱ一の誤植
(3) 一天理一の書写の誤り
(4) 異体字・別体字・通用字等使用字の相違
(5) 一天理一が古活字版を底本とした場合の別本参校
(6) 一天理一と古活字版の底本の相違

が考えられる。この内(1)(2)(3)の場合、一天理一は古活字版の転写本であるとの想定を否定する要因とはならない。明らかな誤字は転写に際して訂正されるのが一般的であり、伝写に誤写が伴うのは必定と考えられる。

誤植・誤写に因る異同

古活字版の誤植

(1) 一活Ⅰ一の誤植に拠って生じている異同として、628 789 805 1435が指摘される。これは巻上の範囲での一活Ⅰ一の誤植の全てで、一天理一は何れも正しく書されている。但、789は、一活Ⅰ一の誤植と見做すには疑問が残る（本稿上96頁参照、又後述125頁）。628 805は次の(2)の場合と重複する。

尚、一活Ⅰ一の誤植字に就いては本稿上76頁を参照されたい。

(2) 一活Ⅱ一の誤植に因る異同例として、212 226 259 324 628 730 805 912 1379 1398が挙げられ、一活Ⅱ一の誤植字全てが正しく書写されている。一活Ⅱ一の誤植字に就いては本稿上79頁参照。

一天理一の誤写

(3) 一天理一の書写の誤り、との認定が可能な箇所として、前

稿では、古活字版を含め対校旧鈔本全てと相違する二十六の異同を示した。しかし、その殆どの場合、文義文脈の上で齟齬破綻は無く、一概に誤写と断定するのは行き過ぎた臆断との危惧を伴う。唯、誤写誤脱の可能性がある以上、これらの異同からは、古活字版の転写であるとの仮設を積極的に否定はできないのであり、また古活字版以外の本が参校された可能性を期待することも難しい。誤写の可能性が大きい異同例として、前稿では古鈔本以外と一致する場合を含めたが、本稿ではそれも除外して、対校諸本の全てと相違している事例を、暫定的に「天理」の誤写と見做しておく。以下の二十の事例が認められる。

文末「也」字の欠落－11 1031 1033 1311

體道第一経文「名可名」下注（1オ5b 11）

謂冨貴尊栄高世之名－諸本、文末に「也」字が有る。

虚無第二十三経文「徳亦樂得之」下注（19オ6b 1031）

徳亦樂得之－「道蔵」を除く諸本、本句末に「也」字が有る。「道蔵」は此の句無し。但、鄭校に拠れば、『道徳眞經玄徳纂疏』引、『道徳眞經注疏』引、『道徳眞經取善集』引は「天理」と同じく「也」字が無い。

同、経文「失亦樂得之」下注（19オ7b 1033）

失亦樂得之－「道蔵」を除く諸本、本句末に「也」字が有る。「道蔵」は此の句無し。此れも鄭校に拠れば、『道徳眞經玄徳纂疏』引、『道徳眞經注疏』引、『道徳眞經取善集』引は「天理」と同じ。

反朴第二十八経文「聖人用之則為官長」下注（23ウ7b 1311）

百官之元長－諸本、此の句末に「也」字有り。鄭校に拠れば、『道徳眞經注疏』引、は「天理」と同じく「也」字が無い。

其の他文字の欠落－174 403 592 1173 1174 1619

無源第四経文「湛兮似或存」下注（4オ3b 174）

故長存不亡也－諸本「故長」の間に「能」字有り。

能為第十「為而不恃」下注（8ウ1b 403）

不恃其報也－諸本「其」字の上に「望」字が有る。

賛玄第十四経文「是謂道紀」下注（12オ1b 592）

謂道之綱紀也－諸本「謂道」両字の間に「知」字有り。

重徳第二十六経文「君子終日行不離輜重」下注（21ウ3a 1173）

君子終日行－諸本並びに「行」字下に「道」字が有る。

同、同文下注（21ウ3a 1174）

不離静與重也－「静」字の上、「活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・無窮・書陵・龍門・慶Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・斯Ⅰ・宋版・世徳・道

蔵」各本は「其」字が、「武内・東大・東洋・梅沢・東急」各本は「於」字が有る。「天理」の誤脱であろう。但、鄭校、王校に拠れば『道徳眞經注疏』引は「其」字無しと。

微明第三十六経文「将欲翕之必固張之」下注（29ウ1a 1619）

先開張之者極其奢淫也―諸本「極」字の上に「欲」字が有る。

衍字―1004

虚無第二十三「飄風不終朝驟雨不終日」下注（18ウ5b 1004）

言疾則不能長―諸本「則」字無し。「天理」の誤衍か。

二字句の転倒―434 1559 1631

無用第十一経文「當其無有室之用」下注（9オ2a 434）

人以得出入観視―「以得」諸本並びに「得以」に作る。

任成第三十四経文「愛養万物而不為主」下注（28オ6b 1559）

不如主人有所収取也―諸本並びに「主人」を「人主」に作る。

微明第三十六経文「柔弱勝剛強」下注（29ウ5a 1631）

柔弱者長久―諸本並びに、「長久」を「久長」に作る。

譌字―443 562 1162 1188 1329 1628

無用第十一経文「無之以為用」下注（9オ4a 443）

言虚無者、乃可用盛受物也―「虚無」、「活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・弘文・斯Ⅱ・梅沢・武内・東大・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵」各本は「虚空」に作る。「無窮・足利・筑波・慶Ⅱ・東洋」各本は「空虚」に作り、「慶Ⅰ・大東」は「室虚」に作る。「天理」のみ「虚無」に作る。

賛玄第十四経文「復皈於無物」下注（11ウ2b 562）

復當皈之於無實也―諸本並びに「實」字を「質」に作る。字形字音共に近似する為の誤写であろう。

重徳第二十六経文「重為輕根」下注（21オ7a 1162）

治身不重則去神―「去」字、諸本並びに「失」に作る。

同、経文「躁則失君」下注（21ウ7a 1188）

王者躁失、則失其君位―上「失」字、諸本並びに「疾」に作る。但、「斯Ⅱ」は此の経注文句無し。

無為第二十九経文「執者失之」下注（24オ7a 1329）

強執取之―「取」字、諸本並びに「教」に作る。

微明第三十六経文「将欲奪之必固與之」下注（29ウ4a 1628）

先與之者、欲使其貪心也―諸本並びに「使」字を「極」に作る。「天理」は直前の経文両句下の注「先強大之者、欲使遇禍患也」「先興之者、欲使其驕危也」の「使」字に影響されたための誤写と考えられよう。但、鄭校、王校に拠れば、『道徳眞經玄徳纂疏』所引は「欲使極其貪心也」に作る。

始めに危惧されたように、此の二十の異同例について、直ちに〔天理〕の誤写と見做す事は猶躊躇される。11 1031 1033 1311の「也」字の欠落は、〔天理〕の傾向として諸本に比し文末「也」字の使用例が少なく、そこには伝写者の意図も窺われ、必ずしも譌脱とは言えない面があろう。又、1174の「其」字の欠落は『道徳眞經注疏』所引の河上公注も同じであり、1628の「欲使」を「欲極」に作る例は『道徳眞經玄徳纂疏』所引の「欲使極」との近似に注目され、〔天理〕と同文の伝本が存在していた可能性を否定は出来ないであろう。此の二十の異文のどれを取り上げても、〔天理〕の誤写と断言できる例は無いとも言える。強いて挙げるならば、1619の「欲」字の欠落、562の「實」、1188の「失」の譌字であろうか。しかし、本論で校異の対象としている諸本の何れとも不一致である故を以て、誤写である蓋然性もやはり無くはない。従って、〔天理〕が古活字版の転写である可能性を否定する要因としては根拠に乏しいと言えよう。諸本との書承関係を穿鑿する上では、これらの異文について、これ以上の検討の必要性は無いものと考える。

(1)(2)(3)が原因と見られる異同は以上の通りであって、此れによって〔活Ⅰ〕との異同一〇二箇所の内二四箇所、〔活Ⅰ〕とは一致しながら〔活Ⅱ〕とは異同がある一二の箇所の内の八箇所が今後の検討対象から除外される。

別系本文の影響と想定され得る異文の検証

異体字・別体字・通用字使用に因る異同

(4)異体・別体・通用字等使用字の相違が所拠の底本の字体をどの程度反映しているかは、伝写者の書写の態度に左右されるであろう。〔天理〕の如き注釈書に掲出された本文の場合、字体にまで忠実に従っているとは必ずしも言えない場合が多い。従って、異体字使用による異同が多いという理由では、古活字版が底本であるとの想定、或いは、その転写の可能性を否定は出来ない。さりとて、底本の字体の影響が全くないとも断言できない。古活字版とは別の本が底本であって、その字体をその儘襲った結果生じた異同と考えられないではない。異体・別体・通用字等使用に因る異同として、次の事例が指摘される。

皈歸—418 559 561 586 657 673 677 681 742 867 870 958 994 998 1255 1262 1265 1283 1288 1293 1296 1298 1568 1569 1583 1587

巻上三七章の範囲で「歸」又は「皈」字が使用されるのは二九箇所であるが、古活字版はその全てが「歸」であり、「皈」を使用する例は無い。〔天理〕は混用されているが、此の二六

箇所は「皈」である。「歸」の使用例は體道第一経文「常有欲以観其徼」下章句「徼帰也、常有欲之人可以観世俗之所帰趣也」内の両字と、虚無第二十三経文「有不信」下章句「此言物類相帰、同聲相應、雲従竜、風従虎、水流湿、火就燥也」内の一字である。第一章の二字は「指趨」の義とし、第二十三章の一字は「ヨリ」の振り仮名があり、次句の「應」字とほぼ同義と解され、先の二六例の「帰還」の意とは字義に於いて異なり、使い分けられている。「帰」「皈」の混在は恣意的な乱用に因るのではないと言える。しかし、底本の用字を忠実に襲った結果なのか、〔天理〕編撰者の趣意に出るものなのかは明らかではない。唯、古活字版の単純な転写では無い事が窺測される。

特特持—97 98 313 315

「恃」「特」の通用は通常では考えられず、従って前稿では、97 98は其の他通例の異文と同様に取り扱った。しかし、古活字版、古鈔本では「恃」「持」字の所で「特」字が使用される場合が見られる。もとは字形の類似に発した誤用ではあろうが、通用されている実情に従った。尚、鄭校は「特與恃古通」と断じているが、その証例を聞かない。「恃」「持」の通用は通説であろう。

養身第二経文（2ウ4 97）

為而不恃〔天理・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ・宋版・世徳・道蔵・治要〕
□□□特〔活Ⅰ・活Ⅱ・大東・慶Ⅱ〕

古活字版と同じく「特」に作る本は稀である。河上公本以外でも「特」に作る本は聞かない。只、「通考」は「特」である。〔天理〕は古活字版とは異なる。しかし、〔大東・慶Ⅱ〕共に「不特」の和訓は「タノマス」（〔大東〕別訓「タモタス」）で、〔天理・陽Ⅰ〕等「不恃」の訓（〔東急〕及び〔慶Ⅰ〕別訓は「タモタス」、他は「タノマス」）と変わりない。

同、経文「為而不恃」下注（2ウ4b 98）

不恃望其報也〔天理・陽Ⅰ・龍門・無窮・足利・筑波・斯Ⅱ・梅沢・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・宋版・世徳・治要〕
□特□□〔活Ⅰ・活Ⅱ・書陵・弘文・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ〕
□□□□〔道蔵〕
□□■□〔東急〕
□□■□
■□□□
□□□□
□□□□
■■□□

此の経注文句は能為第十及び歸元第五十二に重見する。両所共に、古活字版は「恃」に作り（「異同表」上402 403、下550 551参照）、能為第十では〔天理〕との異同は無い。しかし、古鈔本には「特」に作る本も有り、〔梅沢〕は、能為第十経文は「為而不時」に作り、「時」字右旁に「特イ」の書入れが有る。「恃」

「特」が混同混用されてきた様相が窺われる。

運夷第九経文（7オ1 313）

持而盈之不如其已〔天理・陽Ⅰ・無窮・梅沢・東大・東急・斯Ⅰ・陽Ⅱ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵〕

恃□□□□□□〔活Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・慶Ⅰ・大東・武内・東洋・杏Ⅰ・六地〕

特□□□□□□□〔活Ⅱ・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ〕

〔杏Ⅰ〕の「恃」字旁に「持才乍」と、〔東洋〕に「持或本」と、〔大東〕に「持イ」と校異の書入れが有る。王校、島校共に「恃」「特」の異文を採録せず、鄭校は〔斯Ⅱ〕の「特」について「持」と古通とのみ記して「恃」字には触れ得ず、只、蔣錫昌『老子校詁』は宋司馬光『道徳眞經論』が「恃」に作ることを指摘する。この意味で、古鈔本の三様の異文は本邦伝来テキストの複雑さを象徴する異同例として看過出来ない。〔天理〕が次の注文も同様「持」に作り古活字版とは異なることは、其の一系を継承する爲と考えるべきであろう。また、此の経文は〔活Ⅰ〕〔活Ⅱ〕の間に異同があり、且つ、〔天理〕がその何れとも相違している点において注目される。尚、此の異文は、本稿上「両種古活字版本文の相違」で既に取り上げている（86頁）。又、上記〔活Ⅰ〕と〔陽Ⅰ〕の本文異同の実態Ⅲ」（21頁）を参照されたい。

運夷第九経文「持而盈之不如其已」下注（7オ1a 315）

持満必傾〔天理・陽Ⅰ・無窮・梅沢・東大・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵〕

恃□□□〔活Ⅰ・活Ⅱ・書陵・龍門・足利・筑波・慶Ⅰ・大東・武内・東洋・杏Ⅰ〕

特□□□〔弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ〕

不弗―100 104

養身第二経文（2ウ4 100）

功成而不居〔天理・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ〕

□□□弗□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・筑波・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ・宋版・世徳・道蔵〕

養身第二経文（2ウ5 104）

夫唯不居〔天理・道蔵〕

□□弗□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ・宋版・世徳〕

（〔斯Ⅱ〕は此の経文を欠く、「唯」「惟」の同異は不問）

此の経文両句の「不」「弗」の異同は経本であるが故に注目されてきた。河上公本以外の経本は両句共に「不」に作る本が多く、P二三七〇・P二五八四・P二五九六・貞一・P二三二九等敦煌写本も「不」に作る。蔣錫昌『老子校詁』は本書内での「不居」の用例で、他に「弗」字を使用するところが無い理由から、老子原本は「不」字であったと考證しているが、今は其

の是非は問わない。〔天理〕が、底本に忠実に「不」に作ったのかどうか鑑別は難しいが、古活字版とは異なっている。

芻蒭 — 196 197

虚用第五経文（4ウ2 196）

以百姓為芻狗〔天理・梅沢・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・陽Ⅱ・宋版・世徳〕
□□□□蒭□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・杏Ⅰ・六地・敦Ⅰ・道蔵・治要〕

虚用第五経文「以百姓為芻狗」下注（4ウ2b 197）

如芻草狗畜〔天理・梅沢・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□蒭□□□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・杏Ⅰ・敦Ⅰ・道蔵・治要〕

直前の経文で〔天理〕は「以萬物爲蒭狗」と、又、其の注文も「如蒭草狗畜」と「蒭」字が使用され、そこでは古活字版と一致する。所拠の底本の字の通りに伝写されたとは考えにくい。底本とは無関係に「蒭」「芻」両字が併用されているようである。唯、掲出の両句は古活字版と異なっている。

歿沒 — 717 723

皈根第十六経文（13ウ6 717）

歿身不殆〔天理・無窮・筑波・梅沢・慶Ⅰ・大東・陽Ⅱ〕
沒□□□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵〕

〔梅沢〕「歿」字旁に「没イ」の書入れが見られる。

皈根第十六経文「歿身不殆」下注（13ウ7b 723）

乃與天地俱歿〔天理・無窮・慶Ⅰ・大東〕
□□□□沒〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵（俱作同）〕

「歿」「没」両字も混用されながら、〔梅沢〕の書入れに見られるように異文として認識され、錯綜した本文系統に在って、それぞれに継受伝承されている。〔天理〕の「歿」字も、依拠本の同字が書承されたものと考えられる。

若如 — 611

顕徳第十五経文（12オ7 611）

儼兮其若客〔天理・筑波・梅沢・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・陽Ⅱ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵〕
□□□如□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・六地〕

〔天理〕は始め「如」と書し、それを塗抹して「若」を加筆している。「如」字に従うのは古活字版と標出した古鈔本に限られ、王弼注本を始め河上公本以外の経本でも「如」に作る本は知られていないようである。本邦伝来本に特異な異文として注目される。此れに因って伝本は二系に分かれる。古活字版に同じ「如」字から「若」に改められた理由は推知し難いが、伝

写に際して複数の本が参照されたことが具体的に知られ、古活字版の転写本との想定を否定し得る証例となろう。

樸朴－821

還淳第十九経文「見素抱朴」下注（15ウ2b 821）

當抱其質樸〔天理・梅沢・東急・敦Ⅰ〕
□□□□朴〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕
（「抱」「見」、「質」「篤」の異同は不問）

経文は「見素抱朴」と〔天理〕も「朴」を用い、古活字版と同字である。〔梅沢〕は注文と同じく「樸」に作り「朴ィ」の書入れが有る。〔天理〕の混用は底本の如何とは関わりは無いのかもしれないが、注文のこの字は古活字版と異なる。

殺敘－846

異俗第二十経文「不可不畏」下注（16オ1a 846）

近令色殺仁賢也〔天理・龍門・筑波・斯Ⅱ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・梅沢・東急・宋版・世徳・道蔵（仁賢作賢人）〕
□□□敘□□□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・足利・弘文・慶Ⅰ・斯Ⅰ・敦Ⅰ〕
□□□移□□■〔無窮〕
（文末助字の同異は不問）

「敘」は俗字また同字とされ、古活字版は「殺」「敘」併用されている。ただ巻上の範囲では「敘」字が使用されるのは此の注文に限られ、この一字に於いて〔天理〕と相違している。

揚楊－896

同、経文「漂兮若無所止」下注（16ウ4a 896）

若飛■揚〔天理・陽Ⅰ・書陵・龍門・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・慶Ⅱ・東大・東洋・東急・斯Ⅰ〕
□□■楊〔活Ⅰ・活Ⅱ・無窮・足利・梅沢・大東・武内〕
□□若□〔宋版・世徳〕
□□若場〔道蔵〕

「揚」「楊」は音・義に渡って通用される。古活字版も養身第二経文「天下皆知美之爲美」下注では「自揚已美」と「揚」を使用し〔天理〕と一致するが、本句に於いては異なる。上記「〔活Ⅰ〕と〔陽Ⅰ〕の本文異同の実態Ⅲ」（18頁）を参照。

榭搊－1349

無為第二十九経文「是以聖人去甚去奢去泰」下注（24ウ4a 1349）

謂宮室臺榭也〔天理・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮（無臺）・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕
□□□□搊□〔活Ⅰ・活Ⅱ・慶Ⅱ（作擻）〕
（也字の有無は不問）

手偏と木偏の混同は常例であるが、古活字版は手偏に作り、〔天理〕と異なる。なお、上記「〔活Ⅰ〕と〔陽Ⅰ〕の本文異同の実態Ⅲ」（19頁）を参照。

太大－1585

仁徳第三十五経文（28ウ7 1585）

往而不害安平太〔天理・龍門・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・斯Ⅰ・六地・宋版・世徳〕
□□□□□□大〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・足利・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・陽Ⅱ〕
□□□□□□泰〔道蔵〕

「太」「泰」は音通、「太」「大」は義通。此の三字の異同は、河上公注本に限らず、諸経本に渡って認められる。古鈔本は標示の如く「太」「大」両字でほぼ二分されるが、〔天理〕は「太」に作り、古活字版等とは異なる。

翕喻－1616

微明第三十六経文（29ウ1 1616）

將欲翕之必固張之〔天理・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・東洋・六地・陽Ⅱ・道蔵〕
□□喻□□□□□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・武内・東大・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕

此の異同も河上公本以外の諸経本に及んでいる。現行の王弼注本は「歙」に作る。異同の由来は古く『經典釋文』は「傒」字を標出し「簡作歙、又作給、河上本作喻也、許及反、顧云閉塞也」と注す。また、〔東洋〕の該部の眉上には「王作レ歙、顧作レ喻、陸作喻、一本作給、河上公作翕、々合也、盛也、歙ハ国名也」（句点は私設）の書入れが見られる（〔慶Ⅱ〕の書入れもほぼ同文）。〔大東〕の書入れには「給河」の間に「簡文乍歙」も見える。管見の古鈔本は「翕」或いは「喻」に作り、〔天理〕は古活字版とは異なって「翕」に作っている。この字の訓義に就いては早くから諸説がある。清原宣賢撰とされる『老子経抄』の「将欲（ニ）翕（アワセント）レ之必固張之ト云ハ、譬ヘハ、箱ニ先ツ蓋ヲセンスルト思フ時ハ、必ス蓋ヲ開ク者也、如此人ヲ滅スヘキト思時ハ、先ツ奢淫極メサセル也、奢極ル時ンハ、必ス滅ル也、是皆国ヲ治ヘキ、謀リ叉也、亦翕（ユルヘル）トモヨム也、翕（ヒラク）トヨムハ凶也、非学者ノ注ニ開張ト云ヲ、見アヤマツテ、ヒラクト点ヲ仰ル也、」との講述はその間の事情を示していよう。

「喻」に作る〔東大・東急・斯Ⅰ〕は「ヒラカント」と訓み、武内は「キフセント」と音読している（〔陽Ⅰ〕はこの部分には附訓が無い）。また、「翕」字は「ヒラカン」（〔書陵・無窮・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・六地〕）、「ヒカラン」（〔弘文〕、誤写であろう）、「ハラン」（〔無窮〕別訓）、「アワセント」（〔無窮〕別訓・〔大東〕別訓）、「トチント」（〔東洋〕）、「ユルヘル」（〔無窮〕別訓）、「スヘント」（〔梅沢〕別訓）等と訓まれ、『老子経抄』の講説を裏付ける。〔天理〕は「ユルヘント」と訓んで林

希逸注の「翕、斂也、弛也」を引く。字訓の別が「噏」「翕」の異同字に起因している訳ではないが、一天理一編撰者が旧来の訓と古活字版の別字に無頓着であったとは考え難い。此の字の異同からも、一天理一古活字版の書承関係は希薄であるとの心証が強まる。

以上、同字・略字・古字・通用字等異体字使用の範囲と思われる異同箇所に就いて検証を試みた。前稿では一天理一の「経注文が古活字版からの転写であることを否定する積極的な証拠とはなりえない」として、異同箇所を指摘するに止めて、個々の検討は怠った。しかし、如上のように、異体字といえども、諸本間の伝系を考察する上で、無視できない要件となる。

次に、一天理一と古活字版との異同の原因としての、(5)一天理一が古活字版を底本とした場合の別本参校、及び(6)一天理一と古活字版の底本の相違、の検証が要請される。実は、(5)に関しては、一天理一の底本が古活字版か否かの問題が未決である限り、該当異文の選択は不可能である。一天理一の底本如何の問題は、更に幾段かの手続きを経て、最終的に結論されるであろう。従って、以下の検証では(5)(6)の可能性を考慮しながら、これまでの(1)(2)(3)(4)で扱われなかった異文が全て検討されなければならない。実際には(1)(2)(3)(4)で取り上げられた異文も此処での対象として緩やかに包摂されることは当然である。しかしなお(5)(6)に関連して、古活字版が一天理一の底本として想定される余地が有るのかどうかに就いて、先ず、一天理一が一活Ⅰ一とは相違しながら一活Ⅱ一とは一致している例と、逆に一活Ⅰ一とは一致しているが一活Ⅱ一とは相違している例に就いての検証が必要であるように思われる。此の両例に該当する異文は、一活Ⅰ一と一活Ⅱ一とが相違するところと当然ながら符合する。従って、「両種古活字版本文の相違」(本稿上82頁)において、異文として既に検討された。更に、視点を改めて再度掲出し整理しておきたい。只、313は、一天理一が一活Ⅰ一一活Ⅱ一のどちらとも異なる為に、此処での事例からは除かれている(上記(4)異体字による相違120頁を参照)。

一活Ⅰ一と相違し、一活Ⅱ一と一致する事例

本章冒頭において指摘したように、一活Ⅰ一と相違し、一活Ⅱ一とは一致している事例として、39 233 731 789 793 803 820 1057 1236 1238 1435 1507 1516 1649の一四例が認められる。この内、1435は、上記、(1)一活Ⅰ一の誤植の為に生じた異同に含まれる。一活Ⅱ一は正しく植字されており、一天理一と一致する(115頁参照)。

體道第一経文「故常無欲以観其妙」下注（1ウ3a39）

可以観大道之要〔天理・活Ⅱ・無窮・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・武内・杏Ⅰ〕
□□□■□□□〔活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文（道下有々）・梅沢・慶Ⅱ・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・仁和・宋版・世徳・道蔵（無可）〕

〔杏Ⅰ〕は「大」字左旁に「才无」と、〔慶Ⅱ〕は「道」の右旁に「大ー」との校異の書入れが見られる。また、鄭校、王校に拠れば『道徳眞經注疏』所引には「大」が有る。本字句に於いて両様に伝承されたのであり、〔天理〕が〔活Ⅱ〕等の諸本と同じく、其の一方を相承している事は疑いなく、〔天理〕の底本或いは参校本を限定することの可能な異文として注目されよう。「大」字の有無について、衍脱の判断は難しい。

成象第六経文「是謂玄牝」下注（5オ6a233）

五味濁辱〔天理・活Ⅱ・無窮・梅沢・武内・東大・東洋・敦Ⅰ・東急・道蔵〕
□性□□〔活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・斯Ⅰ・杏Ⅰ・宋版・世徳〕

王校は〔敦Ⅰ・道蔵〕に拠り〔宋版〕の「性」を「味」に校改し、鄭校は上句「五氣清微」「天食人以五氣」の対応から、「地食人以五味」に対しては「五味濁辱」に作るべしと校勘している。正論と思われるが、古鈔本の多くが〔宋版〕と同じく「性」に作っていることに注意される。〔天理〕はそれと異なり〔活Ⅱ〕及び〔無窮〕等の古鈔本と同じく「味」に作り、「五味有體而重、故曰濁辱」との注釈を添えている。此の異文についても、所拠の底本に従った為で、其の底本は〔活Ⅰ〕等とは別系の要素を有った伝本と考えられる。

淳風第十七経文「太上下知有之」下注（14オ2a731）

無名號之君也〔天理・活Ⅱ・無窮・筑波・東洋・斯Ⅰ・道蔵〕
□□■□□□〔活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東急・宋版・世徳・治要〕
无為■□□■〔敦Ⅰ〕

（无無の同異、也の有無については不問）

鄭校、王校に拠れば、『道徳眞經玄徳纂疏』所引にも「號」字が有る。〔慶Ⅱ〕は「名之」字間に小圏を施し右旁に「号」字を加筆する。「號」字の有無で伝本はほぼ二分され、〔天理〕は〔活Ⅰ〕等とは別系類の本を襲うと考えられる。鄭校は、「號」は後人旁記の誤竄とするが、根拠は示されていない。

還淳第十九経文「絶聖」下注（15オ3a789）

反初守元〔天理・活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵〕
□□□无〔陽Ⅰ〕
□□□無〔活Ⅰ〕

先に〔活Ⅰ〕の誤植と見做したが、〔陽Ⅰ〕の例から必ずしもそうとは言えず、「無」に作る伝本系が想定されることにつ

いては既述した（本稿上96頁）。「天理」は「活Ⅰ」の「無」には従わず、「活Ⅱ・書陵」等諸本と同じく「元」に従っている。

同、同文下注（15オ3b793）

蒼頡造書「天理・活Ⅱ・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東」
□□作□「活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・筑波・梅沢・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵」
（倉蒼の同異に就いては不問）

鄭校に拠れば、『道徳眞經集註』所引、王校に拠れば宋陳景元『道徳眞經藏室纂微篇』所引は「造」に作る。「武内」の「作」字右旁には「造也」の書入れがある。「作」「造」同義で文意に変わりは無いが、伝本は此の両字に従って二分され、「天理」は、「活Ⅱ・無窮」等と同系に在ると見做される。

同、経文「絶巧」下注（15オ5a803）

絶巧言詐偽乱真也「天理・活Ⅱ・書陵・無窮・筑波・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋」
□□■□□□□□「活Ⅰ・陽Ⅰ・龍門・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅱ・東急・敦Ⅰ」
□□者□□□□□「斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵」
（也字の有無、本注の配置の相違に就いては不問）

鄭校、王校に拠れば、『道徳眞經玄徳纂疏』所引、『道徳眞經注疏』所引は「活Ⅰ」等に同じく「言」「者」何れも無い。「無窮」は「言」に見消ちを付し、右旁に「イ无」の書入れが有り、「慶Ⅱ」は「詐」を塗抹し右旁に「言」を、下の字間余白に更めて「詐」を加筆する。此の異文において、解釈と本文伝承上の混乱が窺われることに就いては既述した（本稿上88頁）。「天理」は「巧言詐偽ノ真ヲ乱ルヲ絶（ツ）〔也〕」と訓む。「斯Ⅰ」を例外として、古鈔本は「言」の有無に拠って両類に分かれ、各々に其の伝系が窺われる。「天理」は「活Ⅱ・書陵」等と「言」字の有る類系に属く。

同、経文「見素抱朴」下注（15ウ2a820）

當抱其質樸「天理・活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・敦Ⅰ」
□見□□□「活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・宋版・世徳・道蔵」
■見□□□□治要（本注上文「當」字まで無し）
（朴樸、質篤の異同は不問）

鄭校、王校に拠れば『道徳眞經玄徳纂疏』所引、『道徳眞經注疏』所引共に「抱」に作る。鄭校は「抱」を是とし、王校は「宋版」の「見」を「抱」に校改している。経文「見素抱朴」の注として上句「當見素守真（貞）」に照応し、「當抱其質樸」とあって然るべく、両校の校勘に無理は感じられない。しかし、「梅沢」の「當抱」字間に「見」の加筆が有り、また「大東」の経文「抱」字左旁に「本乍見」と、「慶Ⅰ」の眉上に「抱字本作見」との書入れが見える。「大東・慶Ⅰ」の書入れの出所は同源と思われるが、経文「抱」字を「見」に作る伝本は管見に

入らず不審である。或いは、注文「抱」字との混同とも考えられる。何れにしても、わが国において「見其質樸」に作る本が伝承されてきたことは明らかである。〔天理〕はその本とは別系で〔活Ⅱ・無窮〕等と同系の本文に従う。

苦恩第二十四経文「自見者不明」下注（19ウ5a 1057）

自見其所行以為應道〔天理・活Ⅱ・無窮・道蔵（應作人）〕
□□■□□□□□〔活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・治要〕

鄭校、王校に拠れば、『道徳眞經注疏』所引は「所」字が無く「其」字は有る。鄭校は「其」が有るのを是とし、王校もこの字を補っている。古鈔本の多くは「其」が無いが、〔天理〕は〔活Ⅱ・無窮〕等と同じく「其」の有る伝本系を継承する。

巧用第二十七経文「不善人者善人之資也」下注（22ウ5b 1236）

聖人猶教導使為善〔天理・活Ⅱ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□□獨□□□〔活Ⅰ・陽Ⅰ〕
■□□□□□〔治要〕
■□■□□□〔道蔵〕

（獨独、導道の異同は不問）

〔活Ⅰ〕は「獨」、〔陽Ⅰ〕は「独」に作り、両本のみ諸本と異なるが、此れが、誤植或いは誤写と認められないことは既述した（本稿上97頁）。本句に於いて「獨」に作る伝本の群類の存在が窺知される。〔天理〕は初め書写されていた文字を塗抹し、右旁に加筆訂正して「猶」に作る。塗抹下の元の文字の判読は困難であるが「獨」字が期待される。

同、同文下注（22ウ5b 1238）

得以為給用也〔天理・活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・治要〕
□□■□□□〔活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・慶Ⅱ・東急・宋版・世徳・道蔵〕

（也字の有無不問）

「為」字の有無で伝本は二系に分かれる。〔天理〕には「為」字が有り〔活Ⅱ・無窮〕等の伝系を引く。鄭校は「爲」は衍字と見做しているが、従えない。

聖徳第三十二経文「猶川谷之與江海」下注（27オ7b 1507）

如川谷之與江海■流相通也〔天理・活Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・東急・杏Ⅰ〕
□□□■□□□■□□□〔活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□□□■□□□之相流□■〔道蔵〕

（下半句の異同については不問）

〔杏Ⅰ〕には「川谷」下の「之」字左旁に「中ナ」の書入れが有り、中原家証本には「之」字が有ったことが知られる。管見の伝本は此の字の有無に因って二分される。〔天理〕は〔活Ⅱ・無窮〕等の伝本に属し〔活Ⅰ〕とは別系に在る。

辨徳第三十三経文「勝人者有力」下注（27ウ3b 1516）

不過以■力也〔天理・活Ⅱ〕
□□□盛□□〔活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・杏Ⅰ〕
□□□威□□〔梅沢・武内・東大・筑波・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・治要・慶Ⅱ？〕（也字の有無は不問）
□□有威□■〔道蔵〕

〔杏Ⅰ〕「盛」字左旁に「威一本」と、〔書陵〕に「威イ」と書入れが有り、〔足利〕は見消ちを付し「威」字を旁記する。又、〔東洋〕の「威」左旁に「一本盛」とある。此の句に於いて「不過以盛力也」「不過以威力也」の両異文が相承されたことが知られるが、〔天理・活Ⅱ〕には「盛」「威」何れも無い。両本孤立した感があり、誤脱と見做されかねない。しかし、「通考」は此れと同文であり、やはり、伝承された一異文と認めるべきであろう。鄭校は「通考」の脱字と見做している。

為政第三十七経文「侯王若能守之万物将自化」下注（30オ3a 1649）

言侯王若能守道〔天理・活Ⅱ・足利・筑波・梅沢・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□□□而□□□〔活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・道蔵・治要〕

鄭校、王校に拠れば『道徳眞經玄徳纂疏』所引、『道徳眞經注疏』所引は「而」に作る。〔東洋〕は「若」に見消ちを付け左に「而」字を旁記し（青筆）、また〔慶Ⅱ〕は「而能」字間に本文同筆で「若」の加筆が有り、伝写に伴う混乱が生じている。此の注文も、「若」「而」の違いに因って伝本ははっきりと二分され、本文系統の異相が窺われる。〔天理〕は〔活Ⅰ〕とは異なり〔活Ⅱ・足利〕等の系列に属している。

この様に、〔天理〕は、巻上の範囲での〔活Ⅰ〕と〔活Ⅱ〕との誤植を除いた異文一八例の内、一三例までが〔活Ⅱ〕と一致し、〔活Ⅰ〕との本文上の乖離を示している。〔活Ⅰ〕が〔天理〕の底本である可能性を否定する証例として注目されよう。

〔活Ⅱ〕と相違し、〔活Ⅰ〕と一致する事例

次に、〔活Ⅱ〕と相違し、〔活Ⅰ〕と一致している事例について検証しておきたい。

先に示したように、この事例としては、一二の箇所が認められるが、その内、212 226 259 324 730 912 1379 1398の八箇所は、既に指摘した(2)〔活Ⅱ〕の誤植の為に生じた異同で、此処での検証の対象からは除外される。残りの950 1136 1148 1454の四例が問題となる。

益謙第二十二経文（17ウ5 950）

抂則直〔天理・活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ・宋版・世徳・道蔵・治要〕

□□真〔活Ⅱ〕　　（抂枉狂の異同は不問）

象元第二十五経文「道大天大地大王亦大」下注（20ウ7b 1136）

王■大者無不制也〔天理・活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・治要〕

□亦□□□□□〔活Ⅱ〕（下句の同異は不問）

同、経文「人法地」下注（21オ2b 1148）

勞而不怨〔天理・活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・天理・治要〕

榮□□□〔活Ⅱ〕

偃武第三十一経文「言以喪禮處之」下注（26ウ1b 1454）

喪禮上右〔天理・活Ⅰ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・治要〕

□□尚□〔斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕

□□■□〔活Ⅱ〕

此の四例は共に、先に「両種古活字版本文の相違」に於いて「二、伝本間の異文に起因する異同」の内、「Ⅱ、乙版（即ち〔活Ⅱ〕）の文が現存古鈔本の何れとも相違している事例」として取り上げ、何れも「通考」とは一致し、同類の伝本が存在した可能性は否定できないとし、誤植と見做すことを躊躇した異文である（本稿上94頁参照）。〔活Ⅱ〕と「通考」との近接した関係を示す異文として注目されるが、〔活Ⅱ〕の誤脱と判断されても許容される範囲であろう。従って、書写者が底本の譌字或いは衍字脱字と見做し、別本に拠り校改した為に生じた異同と考えることは可能である。してみれば、此の四例は、〔活Ⅱ〕が底本であることを否定する根拠としては薄弱である。

以上、〔天理〕が〔活Ⅰ〕〔活Ⅱ〕の何れか一方と相違している異文の検証からは、〔天理〕が〔活Ⅰ〕の転写であるとの想定は殆ど成立しないと言えるが、〔活Ⅱ〕が底本である可能性は猶否定することは出来ない。

其の他の異文

次に(6)〔天理〕と古活字版との底本の相違を原因とする異文が有るのかどうか、残りの異同について検証されなければならない。対象となる異文は、12 69 125 416 426 427 455 475 511 543 545 743 762 818 876 915 992 997 1029 1088 1369 1433の二二箇所である。

文末助字の有無相違

その内、12 69 426 427 455 475 511 543 743 1029 1088の一一箇所は文末の「也」字の有無、或いは「也」「之」「之也」「者也」等の異同である。どれも、管見の諸本の少なくとも一本とは一致する場合で、別系本文の影響と想定され得る異文として、先の、誤写欠落の四事例と区別した。しかし、一致する本の有無を基準にしたあく

までも便宜的な措置で、蓋然性の高さを期待しての推断に過ぎない。誤写と見做した四例と、一本とのみ一致を示す12 511 543 1029とを区別する論拠は求め難い。他の七例も程度の差であって大同小異である。そうであってもなお、依拠本の様態を相承している可能性は、先の四例よりも大きいと考量される。此の異同は、古活字版の転写とする想定を否定するに、論拠としてやや薄弱であるが、無視はできないであろう。

體道第一経文「非常名」下注（1オ5a 12）

非自然常在之名■〔天理・道蔵〕
□□□□□□也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・杏Ⅰ・斯Ⅰ・仁和・宋版・世徳〕

鄭校に拠れば、『道徳眞經玄徳纂疏』引は「也」字が無い。前稿では脱字と見做したが、異文と考えることも可能であろう。

同、経文「玄之又玄」下注（2オ1b 69）

則生貪淫■〔天理・筑波・道蔵〕
□□□□也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・仁和・宋版・世徳〕

無用第十一経文「當其無有車之用」下注（8ウ7a 426）

人得載其上■〔天理・武内・足利・敦Ⅰ・道蔵〕
□□□□□也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・東大・東洋・東急・斯Ⅰ〕
□能□□□也〔宋版・世徳〕

鄭校に拠れば、『道徳眞經注疏』引、『道徳眞經玄徳纂疏』引は共に「也」字が無い。

同、経文「埏埴以為器」下注（8ウ7b 427）

為飲食之器■■〔天理・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕
□食飲□□□■〔敦Ⅰ〕
□食飲□□□也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急〕

鄭校に拠れば、前項とは逆に『道徳眞經注疏』引、『道徳眞經玄徳纂疏』引は古活字版等に同じく「也」字が有る。

撿欲第十二経文「五音令人耳聾」下注（9ウ1b 455）

不能聴無声之声■〔天理・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵〕
□□□□□□也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ〕（無无の異同は不問）

鄭校に拠れば『道徳眞經注疏』引には「也」字が有る。前稿では、一致する古鈔本が無い故を以て、誤脱と見做した。

厭耻第十三経文「寵辱若驚」下注（10オ1b 475）

身辱亦驚■〔天理・筑波・斯Ⅱ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵・弘文？〕
□□□□也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ〕

〔東洋〕の「也」字左旁には「オナ」の書入れが有る。此れ

は〔宋版〕とは合わない。

同、経文「則可以寄於天下矣」下注（10ウ4b 511）

不可以■久■〔天理・敦Ⅰ〕
□□□■□也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・梅沢・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□□□長□也〔無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ〕
□□■託也〔道蔵〕

鄭校に拠れば、『道徳眞經注疏』引、『道徳眞經玄徳纂疏』引共に「也」字は無い。前稿では誤脱の蓋然性に従ったが、〔敦Ⅰ〕等との一致を考慮した。

賛玄第十四経文「此三者不可致詰」下注（11オ5a 543）

問而■得之■〔天理・慶Ⅱ〕
□□□■□也〔活Ⅰ・活Ⅱ・無窮・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□□■□■也〔陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋〕
□□■■■〔敦Ⅰ〕
□□能□■也〔道蔵〕

鄭校に拠れば、『道徳眞經注疏』引、『老子道徳經古本集注』には「也」字が無く〔天理〕と同じである。

淳風第十七経文「其次侮之」下注（14オ5b 743）

故欺侮之■■〔天理・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵〕
□□□□■也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東急・治要〕
□□□□者也〔東洋〕

東洋文庫蔵古活字版の一本には「也」字旁に「才无」との書入れが見られる。

虚無第二十三経文「道亦樂得之」下注（19オ5b 1029）

道亦樂得之■〔天理・斯Ⅱ〕
□□□□也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ（無道亦）・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□□□■也〔弘文〕

（〔道蔵〕は此の注文無し）

鄭校に拠れば『道徳眞經玄徳纂疏』引、『道徳眞經注疏』引、『道徳眞經取善集』引には「也」字が無い。

象元第二十五経文「先天地生」下注（20オ5b 1088）

在天地之前■〔天理・慶Ⅰ・大東・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕
□□□□也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・東大・東洋〕
□□□■□也〔武内〕

其の他助字等（而・之・以・共・故）の有無

賛玄第十四経文「故混而為一」下注（11オ6b 545）

名之■為一也〔天理・敦Ⅰ〕
□□而□□□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□合而□□■〔道蔵〕

（文末助字の異同は不問）

〔敦Ⅰ〕の他、南宋劉氏刊『音註河上公老子道徳經』は「而」字が無い。前稿では誤脱として扱ったが、異文と見做す。

虚心第二十一経文「唯道是従」下注（17オ2b 915）

不随世俗之所行〔天理・武内・東大・東洋〕
□□□□■□□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕
□□□□■□■〔斯Ⅱ〕

偃武第三十一経文（26オ4 1433）

不可■得志於天下矣〔天理・慶Ⅰ・大東〕
□□以□□□□□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅱ・武内・東大・東洋（無矣）・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ・宋版・世徳・道蔵・治要〕

P二三七五、S七八三、P二五八四、S二二六七、貞二、P二二五五、S六四五三、S七九八は共に「以」字が無い。又、〔大東〕の本句左旁には「或可字ノ下ニ以字アリ」と、〔慶Ⅰ〕にもほぼ同文の書入れが有る。従って、〔天理〕の譌脱とは言えない。「以」字の有無によって伝本は二系に分かれ、〔天理〕は古活字版とは別系の本文を継承している。

無用第十一経文「三十輻共一轂」下注（8ウ4b 416）

故衆輻■湊之〔天理・道蔵〕
□□□共□□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・宋版・世徳・敦Ⅰ〕
□□■共□□〔弘文〕
□□□共□也〔斯Ⅰ〕

鄭校に拠れば、宋宋鸞『道徳篇章玄頌』所引にも「共」字が無い。前稿では、古鈔本諸本から孤立している故に、鄭校に倣い誤脱と見做したが、その確証は求め難い。古活字版等とは別系の本に従って生じた異同と見ることも出来る。

倹武第三十経文（25オ2 1369）

故善者果而已〔天理・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・陽Ⅱ・東急〕
■□□□□□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・斯Ⅰ・六地・宋版・世徳・道蔵・治要〕

S七八三、P二五八四、S二二六七、貞二、P二二五五、S六四五三、S七九八は並びに「故」字が有る。「故」の有無に拠って、諸伝本が両系に分かれ、〔天理〕は古活字版の類とは別の類の伝本と一致している。

字形類似字

安民第三経文「使民不為盗」下注（3オ4b 125）

上化清淨〔天理・東大・弘文・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕
□□□静〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・杏Ⅰ・東急・東洋・治要〕

鄭校、王校に拠れば『道徳眞經集注』所引は「静」に作る。〔杏Ⅰ〕は「静」左旁に「浄才 乍」の書入れが有る。字形の近似のため伝写の過程で夙に生じた乖反が、それぞれに継承され

た結果と考えられる。伝本は両字によって二類に分かれ、「天理」は古活字版を含む伝本系とは別系類の伝本に一致している。

還淳第十九経文「見素抱朴」下注（15ウ1b 818）

見素守貞「天理・無窮・筑波・慶Ⅱ・武内・東洋」
□□□真「活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・東大・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ・道蔵・治要」

元来は、字形の近似から生じた譌字と考えられるが、古鈔本には「貞」に作る一系の存在が認められる。「慶Ⅱ」はもとの「真」字を「貞」に訂正し「テイ」の振り仮名を付している。「天理」は古活字版と異なり「無窮・筑波」等の伝系に属す。

異俗第二十経文「我獨若遺」下注（16オ7b 876）

似於不足也「天理・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利（於作我）・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋（也作者）・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵」
以□□□□「活Ⅰ・活Ⅱ」

「以」に作るのは古活字版だけであるが、「通考」がそれと同文であり、「以」に従う伝本系の存在が想定される。上記「古活字版に孤立した特異の本文」Ⅰ(2)（59頁）参照。

益謙第二十二経文「誠全而皈之」下注（18ウ2a 997）

實全其飢體「天理・斯Ⅱ・宋版（無全）」
□□□肌□「活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・世徳（無全）・道蔵（無全）」

鄭校は「飢」は音が近い為の譌字と見做し、王校は「道蔵」等に拠って「肌」に校改している。しかし「飢」に作る「天理・斯Ⅱ」等の伝本系を想定することも可能であろう。尚、「梅沢」「肌」には「肥ィ」の書入れが見えるが、「肥」に作る伝本は未だ管見に入らない。

字音類似字

俗薄第十八経文「大道廃焉有仁義」下注（14ウ3b 762）

戸有忠臣「天理」
□□□信「活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ」
國□□信「道蔵」

「臣」字は諸本並びに「信」に作る。前稿では、同音に拠る「天理」の誤写と考えた。しかし、鄭校は『道徳眞經玄徳纂疏』所引が「國有忠臣」に作るのを是としている。「道蔵」が「國有忠信」に作り、「通考」が「天理」と同じく「戸有忠臣」と作っている等、この句の伝承に混乱が認めらる。「天理」の該章句に対する注釈は「大道之時、渾然樸未散、家々戸々、子不勉而孝、臣不慮而忠、仁義在大道之中而不見云々」（訓点省略）とあり、明らかに「臣」字が意識されており、「臣」を「信」の誤写と見做すことは出来ない。「通考」との一致も考慮され、

古活字版はじめ掲出諸本以外の、未だ管見に入らない伝本が参校された可能性を考えるべきである。

二字句の転倒他

無用第十一経文「埏埴以為器」下注（8ウ7b 427）

為飲食之器■〔天理・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵〕
□食飲□□也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・敦Ⅰ（無也）〕

鄭校に拠れば、『道徳眞經注疏』所引、『道徳眞經玄徳纂疏』所引は古活字版等に同じで「食飲」に作る。

益謙第二十二「豈虚言哉」下注（18ウ1b 992）

正言非虚言也〔天理・筑波・弘文・大東・武内・東大・東洋〕
□□□□空□〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・東急・斯Ⅰ〕
□□□空虚□〔慶Ⅱ〕
□□□□妄□〔宋版・世徳〕
□□□□■□〔道蔵〕

「虚言」と、「虚空」或いは「空虚」の字句の不同によって、旧鈔伝本が両系類に分かれ、〔天理〕は古活字版を含む系類とは別系と見られる〔筑波・弘文〕等の伝本と一致している。

〔天理〕の底本

以上、古活字版との異同量数一六二、或いは一五〇に反映された一〇二の異同箇所について、その異文の実態と諸本との関係について個々に検証してきた。古活字版の誤植、〔天理〕の誤写に因る異同を除けば、古活字版に対する〔天理〕の異文の多くは、諸伝本間で生じた何れかの異文を継承している実態が顕かになった。文末助字の有無、異体字使用による異同は、書写者の志向態度に左右され、伝承された諸本の本文の様態とは無関係に、孤立して生じる場合があり、伝本系統との関わりは希薄な面があろう。しかし、個々の異同の実態を集積総合し大観してみるならば、異文を介する諸伝本との系統関係は、複雑に淆錯し脈絡を辿ることは難しいが、慥に垣間見えている。

顕徳第十五経文611の例は、恐らくは底本に従って書された「如」が、同筆で「若」に書き改められている。これは、底本とは別の本が参校された事を意味していよう。また、写本としては、誤写衍脱が非常に少ない。誤写の事例として二〇例を挙げたが、それは、可能性を指摘したのであって、562 1188 1619の三例を除けば、必ずしも誤写とは言い切れない点、該所において添言した通りで、掲出本文の写定は思いの外厳格慎重になされた事実が窺われる。此の書写態度の厳格さを考慮するならば、所拠の底本は相当忠実に移写されたと考えてよいであろう。此の見解に立つならば、古活字版が底本とされたと仮定すれば、

〔天理〕の誤写として挙げた二〇例の存在は矛盾する。また、その他の異同が生じることも考えにくい。写本が藍本の場合には、書写字体の判読の難しさから誤読誤写も往々にして生じるが、古活字の判読の誤りは起こり得ないと思われる。従って、古活字版が底本であるとの仮説は成立しない。

〔天理〕と古活字版との異同は、古活字版を底本として其の本文が校改された為に生じたのではなく、或いはまた著者の見解に基づいた改訂に因るのでも無く、古活字版とは別に存在した底本に忠実に従った為と考量される。此処で取り上げた異同は、主として、依用された底本の相違に求められ、〔天理〕が古活字版の転写であるとの想定は、成立しないと考えなければならない。よって、〔天理〕の経注本文の底本は、古活字版とは別に求められる。

其の底本を特定することは、現状では不可能である。度々指摘されたように、管見の限りでは、古活字版以上に〔天理〕と近接する本文を持つ古鈔本は存せず、その範囲の中で底本を特定しようとするならば、古活字版以外には考えられない。それが否定されれば、未だ知られていない〔天理〕とより近接する伝本の存在が想定されなければならないであろう。

上古以来連綿として継続されてきた河上公注『老子道徳經』の伝写の営みは、旧来の異文を伝承し、或いは新たな異同を生起し、又、取捨を繰り返しながら、雑糅混淆したテキストが形成されていった。結果として古活字版に近い伝本を孳生したものと推察される。〔活Ⅰ〕、〔活Ⅱ〕、及び〔天理〕を含み、そして失われた〔活Ⅰ〕〔活Ⅱ〕の底本、また〔天理〕の底本、その他、現在は逸失した伝写本と、諸本と対比して顕かに古活字版の本文に近接した伝本の群類を想定することが可能であろう。此の群類に包摂される諸伝本は、個々に旧来の伝本との繋がりを保ちつつ、相対的に微小ではあるが、〔活Ⅰ〕、〔活Ⅱ〕、及び〔天理〕の間に見られたような異同を相互に示していたものと考えられるのである。此の推論は、先に本稿上（98頁）に於いて記した、異植字版の校改の経緯についての考察において、当時伝存し現在は逸失している〔天理〕「通考」に近似する本文を持つ伝本が想定されたことと軌を一にする。

要するに、〔天理〕の底本は、近接した同群類の伝本の中の現在は逸失したか未発見の一本である、という結論に導かれる。そして、その本は、〔活Ⅰ〕と〔活Ⅱ〕との異同に於いて、〔天理〕は〔活Ⅱ〕とより多く一致している故に、〔活Ⅰ〕より

「活Ⅱ」により近く、その他誤植誤写を除く古活字版との異文、さらには、「天理」の誤写として扱った異文の多くもその本文として含まれた伝本でなければならない。

「天理」と古活字版がこの同じ群類内の伝本であるという意味において、更めて、両者の近接した関係、特に「天理」と「活Ⅱ」との近親な関係が愈に確認されるであろう。

さらに、次に取り上げる「通考」も、「天理」と同様、同群類内の一本として、古活字版との近接した関係が認められる。

「通考」と古活字版との関係

「通考」所掲の経本注本は、古活字版以後に刊定された本文として、また本邦に於ける河上公注本の伝流史上、言わば掉尾を飾る近世唯一の流布版本として注目されるのであるが、其の本文の実相は未だ明らかにされていない。古活字版本文との関係の考察は、「通考」所掲経注本文の系統と底本如何を顕かにする肯綮となり、我が国所伝の河上公注本の諸相と、近世を通じて行われた流布本文の実態を窺う上で重要と思われる。

『老子經通考』書誌解題

先ず、初印本と思われる慶應義塾図書館所蔵本に拠って、書誌的事項について、概要を記しておく。伝本状況については、注22を参照されたい。

老子道德經

（題簽・序題「老子經通考」）四巻　漢河上公章句　明陳元贇注　闕名者点
延寳八（一六八〇）刊（京　板木屋久兵衛）
和大四冊

濃縹色表紙（二七・二×一九・五糎）、原題簽「河上公章句老子經通考」。見返し中央に大字で「道德經」、その左右にそれぞれ二行、計四行にわたり「大聖祖高上大道金闕／玄元天皇大帝素言／漢孝文帝受持李老／君變號河上公章句」の題辞が刻さる。

首に、「老子經通考序」（「庚戌（寛文十年〈一六七〇〉）之西候／大明　武林　既白山人陳　元贇拜撰」）及び「老子經序」（題下方に「葛洪」と題す、注釈付）を冠し、末に、闕名者撰の加点書跋一葉を附す。

本文巻頭「老子道經上（隔一〇格）河上公章句」と題し、第二行低二格に「體道第一」と章題がある。各巻内題は以下「老子道經上之末」「老子德經下之本」「老子德經下之末」と。尾題は各巻「老子道經上之本終」「老子道經上之末終」「老子德經下本終」「老子道經終」と題され、最終尾題は「道」字下「德」一字の誤脱であろう。

四周単辺（二一・六×一五・八糎）、無界、毎半葉十行行二十一字、章句低一格中字単行行二十字、注低一格小字双行行二十字。版心大黒口、魚尾無し。但、下象鼻黒口は上部に魚尾状の窪みがある。中縫の版心題「老子經一（巻次は第二十丁以下「上本」、「上末」「下本」「下末」と）（丁付）」。返点縦点送り仮名附刻。

加点書跋末次行低一格に、「延寳八庚申暦／　九月日」とあり、その下余白に「下立賣通千本西へ入町／　板木屋／　久兵衛板行」の刊記がある。「延寳八庚申暦　九月日」の紀年は、題署されている位置と、字様の相似から、跋文の撰述年月ともとれ紛らわしいが、刊行年月と見做して良いと思われる。

「□□／小川郁文堂／書林」（朱長円）、「讃州丸亀書林／小川屋萬五郎」（朱長方）の印記有り。

本書書名は、一般には外題或いは序題に従って「老子經通考」とされるが、後印本の外題は「老子道徳經通考」とあり混乱が生じることを虞れる。拠って原則通り、内題に従った。

巻数は、上下二巻とする見解もあろうが、内題尾題の数、及び内題題署に伴い四度丁付けが改まるに拠り、四巻と見做す。

注者陳元贇は、名を珣、字を義郁、又士昇と言い、碧雲軒、菊秀軒、昇庵、芝山、既白山人等と号す。明萬暦十五年（一五八七）の生、元和五年（一六一九）に渡日、長崎、京洛、防長、江戸と流寓を経、尾張藩の招聘に応じ、義直、光友両藩主に仕えた。同藩藩学の振興に寄与し、寛文十一年（一六七一）八十五歳で名古屋自邸にて没した。[23]

本書は、先ず經文を、章題を冠し八十一章に分かち大字を以て掲出する。従来経文句下に小字双行で分置挿入されていた河上公章句は、毎章経文後に中字を以て纏められている。経文中に挿入されていた章句を連綴し、前後文章の脈絡を保つため、適宜、経文の字句を主格として補い、或いは、逆に、重複する主語を省き、また、別の語句に変換し、更には接続辞を増損するなど、編撰者の私意による多少の改変が見られるが、章句本文は基本的には原状が保たれている。此の章句の後に、小字双行で陳氏の評注が付され、本来の河上公注本の体式とは大きく相違し、従って、陳氏編纂に係る老子注釈書と見做され、テキスト上、純然たる意味では河上公注本とは言えない。

しかし、古活字版刊行以後、江戸時代を通じて河上公注本の和刻本は存在せず、河上公章句の全容を備える通行本としては、本書以外には無い。逆に言えば、幕末に及んで河上公注の流布

を担ったのは本書であり、この意味で、陳氏の功績は甚大であったと言えよう。自序に「道徳之遺教凡五千余言、明乾坤之微妙、不少錙銖兮、盡萬境之事、爲大毫端、是故註家雖幾于百、猶不證實理矣、舊有河上公之章句、公是老子也、閣河公章句、而用希逸口義、是則非庸士理學之昏昧乎、初學爲欲求多解者、録于評論附註後、因題曰老子經通考」（訓点省略し、句点を附す）と本書撰述の意図が示されているように、陳氏は、当時盛行していた林希逸鬳斎口義を貶め、河上公注の舊に拠るべきと主張する。注後に付された氏の長文にわたる評注も、諸家説を批判し、河上公注を顕彰し其れを敷衍するものである。

「通考」と古活字版との近接した関係

此れまでの本文検証の過程において、屢々古活字版と「通考」との近似が指摘された。これは「通考」が現存古鈔本のどの本よりも古活字版と近い関係にある事実を示唆している。従って「通考」所掲経注本文の底本として本邦伝来の本が想定されるのであれば、先ず古活字版がその候補と目されるであろう。

古活字版との形式上の類似として、次の二点が指摘される。

第一点は、「老子經序」が同一であることである。此の序が宋刊本系諸本の所謂葛玄序と相違し、わが国伝来本に特有の序であることは上述した。其の序が冠せられていることは、「通考」所掲本文が本邦伝来本の系統である論拠とされる。

第二点は、標出された章題の体式、題名は、末二章を除き尽く一致している。末二章の相違は、題名下の「第」字が無いだけの、微少な違いである。本邦所伝の古鈔本の間でも、章題標記の体式に三様ないしは四様の異相が見られる事については既述した通りである。古活字版と「通考」は共に、上述のA式の章題を掲し題名も全て一致し、両本の近縁な関係が窺われる。

経注本文を巡っても両本の近接した関係は顕著である。

先ず、先に指摘した通り、「古活字版に孤立した特異な本文」として挙げた十六条の全てが、「通考」とは一致若しくは近似している（58～67頁参照）。

又、古鈔本中、本文上最も古活字版に近い〔陽Ⅰ〕と〔活Ⅰ〕との異同として、「V、其の他、本文字句の異同」で挙げられた七十九例（当然先の十六例が含まれる）の内、知病第七十一経文（下28ウ1 1376）の一例を例外として、「通考」は尽く〔活Ⅰ〕の文と一致している（40～56頁参照）。

更に、〔活Ⅰ〕、〔活Ⅱ〕間で異同の有る本文については、両版の誤植に因らない三十一の異同の内三十例までが、〔活Ⅱ〕

と一致し、残りの一例運夷第九（上7オ1 313）は、〔活Ⅰ〕「恃」、〔活Ⅱ〕「特」の相違で、「通考」は〔天理〕〔陽Ⅰ〕等諸本に同じく「持」に作り、〔活Ⅱ〕との差異は極微小と言えよう。特に、〔活Ⅱ〕が管見の古鈔本の全てと相違している八例が、悉く本書と一致している事から、〔活Ⅱ〕と本書との極めて緊密な本文上の関係が窺われる（本稿上84～96頁、及び附表5参照）。

「通考」と古活字版との異同

しかし、両本字字対校すれば、やはり一致しない字句が少なからず指摘される。編撰に伴って改変増損された字句は別として、多くは、異体字、通用字、誤字脱字脱文、衍字衍文の範囲にあるが、古活字版と相違し、他の本とは一致している次の異同例の如きは、明かに古活字版以外の本文の影響を認め得る。

①易性第八経文「居善地」下注（上6ウ2b 292）

有似於牝動而■下人■也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・足利・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・天理〕

□□□

諸本は古活字版と同じで「於」があり、〔宋版・世徳〕はこの句を「人嗜五味於口」に作る。鄭校は、注前句の「貪淫好色」「好聽五音」の句法と一律とみて「於」は衍字とし、王校は、逆に〔敦Ⅰ・治要〕に従い「人嗜於五味」と校改している。この句において伝本は三系に分かれ、「通考」は古活字版とは別系統に属すと見做されよう。

⑤厭耻第十三経文「是謂寵辱若驚」下注（上10オ6a 491）

失之而驚也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・敦Ⅰ・天理〕

□□■□□□〔無窮・斯Ⅰ〕

□□若□■〔宋版・世徳・道蔵〕　（文末助字の異同は不問）

「通考」は「而」字が無く、〔無窮・斯Ⅰ〕と同じ。他の古鈔本は古活字版に一致し「而」が有る。同注上句「得之而驚」との対応から、「通考」等の誤脱とも考えられるが、〔斯Ⅰ〕は上の「而」も無い。文義上、優劣は別として、両「而」字は無くとも疎通し、鄭校の如く一概に脱字と見るのは躊躇われる。

⑥賛玄第十四経文（上11オ7 551）

繩繩■不可名〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・六地・陽Ⅱ・宋版・世徳・天理〕

□□兮□□□〔無窮・筑波・武内・敦Ⅰ・道蔵〕

「通考」は、「繩繩」下に「兮」字が有り〔無窮〕等と一致し、古活字版等と異なる。此の経文句に於いて、河上公注本にも「兮」字が有る本と無い本の両系が認められる。此の「兮」字の有無は、河上公本と王弼本との相違として注目されているが、必ずしも両本を特徴づける異同とは見做し難い。[24]

⑦俗薄第十八経文「大道廢焉有仁義」下注（上14ウ3b 762）

戸有忠信〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅰ〕

國□□信〔道蔵〕

□□□臣〔天理〕

「通考」は「忠信」を「忠臣」に作り、〔天理〕と一致。諸本は「忠信」に作り古活字版に同じ。字音の近似による譌と見做されるが、〔道蔵〕は「戸」を「國」に作り、「國」に対応するのであれば「忠臣」が優る。鄭校は、唐強思斎『道徳真経玄徳纂疏』所引の河上公注が「國有忠臣」に作るを是としている。上記〔天理〕との近接した関係、別系本文の影響と想定され得る異文の検証、字音類似字」（133頁）参照。

⑧益謙第二十二「豈虚言哉」下注（上18ウ1b 992）

正言非虚空也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・東急・斯Ⅰ〕

□□□□言□〔天理・筑波・弘文・大東・武内・東大・東洋〕

□□□空虛□〔慶Ⅱ〕
□□□□妄□宋版・世德〕
□□□□■□〔道藏〕

「通考」は「虛空」を「虛言」に作り、〔天理・筑波〕等と一致している。〔陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・東急・斯Ⅰ〕は古活字版に同じ。〔慶Ⅱ〕は「空虛」に、〔宋版・世德〕は「虛妄」に、〔道藏〕は「虛」一字に作る等、異同が多い。鄭校は、〔宋版〕の「虛妄」に従い、他は皆非と見做しているが根拠は明らかでない。此の異同も上記〔天理〕との近接した関係、別系本文の影響と想定され得る異文の検証」に於いて既に指摘された（134頁）。

⑨偃武第三十一経文「言以喪禮處之」下注（上26ウ1a 1452）

上將軍於右〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・宋版・世德・天理〕
□□□居□〔道藏〕

「通考」は「於」を「居」に作り〔道藏〕と一致する。その外の諸本は、「於」に作っており、古活字版に同じ。伝本に両系が有ることを認めるべきであろう。鄭校に拠れば、『道德眞經注疏』所引も「居」に作り、王校は『道德眞經注疏』所引と〔道藏〕に従って「居」に校改している。

⑩爲政第三十七経文「天下將自正」下注（上30オ7b 1671）

天下將自正安定也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・龍門・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・慶Ⅱ・武内・東大・東洋・東急・斯Ⅰ・天理〕
□□□□

長生久視之道■〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・六地・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕
□□□□□也〔無窮・筑波・大東〕

「通考」は「道」下に「也」字が有り〔無窮〕等と一致し、古活字版他の諸本と異なる。鄭校は「也」は衍字と見ている。

⑬知病第七十一経文（下28ウ1 1376）

聖人不病以其病■〔活Ⅰ・活Ⅱ・弘文〕
□□□□□□□之〔筑波〕
□□□□□□□□病〔陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・六地・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕

「通考」は「其病病」に作り、〔陽Ⅰ〕等諸本と一致し、「其病」に作る古活字版〔弘文〕と異なる。

⑭愛己第七十二経文「無厭其所生」下注（下29オ1a 1406）

以有精神■〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・道蔵・敦Ⅱ〕
■□□□■■〔弘文〕
爲□□□■〔宋版・世徳〕
□□□□□也〔無窮〕

「通考」は句末に「也」字が有って〔無窮〕と一致し、古活字版等其の他の諸本と相違する。

⑮同、同文下注（下29オ2b 1405）

■爲伐本厭神〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・六地・宋版・世徳・敦Ⅱ〕

「通考」は句頭に「此」字が有り〔無窮〕と一致し、古活字版等諸本と異なる。〔道蔵〕は、爲字下に「此」が有る。

⑯任爲第七十三経文「下禪然而善謀」下注（下29ウ7b 1449）

善謀■慮人事〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ（慮作盧）・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要〕
□□修□□□〔無窮〕

「通考」は「謀」字下に「修」字が有り、〔無窮〕と一致し、古活字版等諸本と異なる。鄭校は「修」は衍字と見る。

⑰同、同文下注（下30オ1a 1450）

■修善行惡〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要〕
故□□□□〔無窮・東急〕

「通考」は句頭に「故」字が有り、〔無窮・東急〕と一致。古活字版等諸本は此の字は無い。鄭校は此れも衍字と見做す。

⑱同、同文下注（下30オ1b 1451）

各蒙其報■也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕

□□□□者□〔無窮〕
□□□□
□□□□
■■〔道蔵・敦Ⅱ・治要〕

「通考」は文末「者也」に作り〔無窮〕と一致し、古活字版等諸本と相違する。

⑲制惑第七十四経文「而爲竒者吾得執而殺之孰敢矣」下注（下30ウ1b 1481）

而先■刑罰■也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ・治要〕
■□■□罰■□〔杏Ⅱ〕
□□以□罰者□〔道蔵〕

（罰罰の異同、文末助字の異同は不問）

「通考」は「而」字無く、〔杏Ⅱ〕と一致し、古活字版等諸本と相違する。鄭校は脱字と見做す。

⑳同、経文「夫代大匠斲希有不傷其手矣」下注（下30ウ6a 1499）

猶■拙■人代大匠斲■■〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・大東・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳〕
□■□夫■□□□□■■〔杏Ⅱ・慶Ⅰ・武内・東大・東洋〕
□□■□■□□木■■〔書陵・無窮・梅沢〕
□□■夫■□□□□□敦Ⅱ〕
□代□夫□□□□□木■〔聖語〕
□■□夫■□□□□□木也〔道蔵〕

「通考」は「斲」下に「木」字が有り、〔書陵・無窮・梅沢・聖語・敦Ⅱ・道蔵〕と一致し、古活字版等と異なる。鄭校は〔宋版〕の「猶拙人代大匠斲」（古活字版同文）を文義不完とし、〔敦Ⅱ〕「通考」等を根拠に「猶拙夫代大匠斲木」に作るべしとする。王校も〔敦Ⅱ〕等に拠り「木」字を補っている。

㉑同、同文下注（下30ウ6a 1503）

■代天殺者〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・慶Ⅰ・大東・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕
■□□斂□〔書陵・杏Ⅱ・梅沢・武内・東大〕
夫□□□□〔無窮〕

「通考」は、句頭に「夫」字が有り、〔無窮〕と一致し、古活字版等諸本と異なる。鄭校は、衍字と見做す。

㉒同、同文下注（下30ウ6b 1504）

■失■紀綱〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ〕
則□■□綱〔無窮〕
■■□其□綱〔東急〕
■■■■■〔道蔵〕

「通考」は、句頭に「則」字が有り、〔無窮〕と一致し、古活字版等諸本とは異なる。鄭校は此の異同について言及はない。

㉓貪損第七十五経文「民之飢以其上食税之多」下注（下31オ1b 1512）

以其君上税食下■太多也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・敦Ⅱ・治要〕
□□□□□□□之□□□〔東洋〕

□□□□食税□■□□□〔道蔵〕
（大太の異同、文末「也」字の有無は不問）

「通考」は「下太」の間に「之」が有り、〔東洋〕と一致し、古活字版等と相違する。鄭校は、此の異同にも触れていない。

㉔同、経文「是以難治」下注（下31オ4b 1525）

情僞■難治■也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東急・治要〕
□□□□有□□□〔斯Ⅱ〕
□□□□■■■□□□〔聖語・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕
□□□□□□□之□□〔東洋〕
■■■□□□□□□□者□〔無窮〕

「通考」は句末「者也」に作り、〔無窮〕と一致する。古活字版等は「者」字が無い。〔東洋〕の「之」左旁には見消ち（青筆）が有る。

㉕任信第七十八経文「正言若反」下注（下33ウ2b 1640）

以■爲反言也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・斯Ⅰ〕
□■□□□■□□□□□□■□□□□所□□□□□□□〔宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕
〔無窮・東急〕

「通考」は「以爲」間に「所」が有り、〔無窮・東急〕と一致し、古活字版等とは異なっている。鄭校は「所」を衍字と見做している。

㉖獨立第八十経文「小國寡民」下注（下34オ4a 1670）

■猶以爲小〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・斯Ⅱ・梅沢・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要〕
獨■□□□少〔筑波・弘文・大東〕
□□□□□□□

「通考」は「興」字を「與」に作り、古活字版等〔無窮〕を除く諸本と相違する。〔無窮〕は「与」で同字である。鄭校は字形の近似に因る譌と校勘しているが、此れも断定は慎まれる。

㉙同、経文「雖有舟轝無所乗之」下注（下34ウ1a 1694）

清靜無為〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・無窮・足利・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・武内・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・道蔵・敦Ⅱ・治要〕
□浄□□〔東大・世徳〕
静清□□〔筑波・弘文・大東〕

「通考」は「清靜」を「清淨」に作り、〔東大・世徳（浄作淨）〕と一致し、古活字版等諸本と異なる。

㉚顯質第八十一経文「美言不信」下注（下35オ2b 1724）

■餝僞多空虚也〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ・治要〕
好□□□□□□〔無窮〕

「通考」は「餝」字の上に「好」字が有り、〔無窮〕と一致し、古活字版等諸本と相違する。鄭校は、「好」は衍字と見做す。〔無窮〕との一致を考慮すれば、断定は慎まれる。

㉛同、経文「博者不知」下注（下35オ5a 1740）

博者■多見聞■〔活Ⅰ・活Ⅱ・陽Ⅰ・書陵・杏Ⅱ・足利・筑波・弘文・斯Ⅱ・梅沢・慶Ⅰ・大東・武内・東大・東洋・聖語・東急・斯Ⅰ・宋版・世徳・道蔵・敦Ⅱ〕
□□謂□□□也〔無窮〕

「通考」は「者多」の間に「謂」が有り、〔無窮〕と一致し、古活字版等諸本とは相違している。

以上のように、三十一箇所に及ぶ古活字版との異同が認められる。どれも古活字版以外の何れかの本とは一致しており、「通考」の単純な誤刻とは考えられず、別本文との相承関係が想定され得る異同と判断される。

上述した通り「通考」経注本文は、古活字版、特に〔活Ⅱ〕と非常に近い関係にある。其の一致吻合する側面を捉えれば、底本として〔活Ⅱ〕を想定することが最も妥当と思える。しかし、此処で示されたように、古活字版と相違し他の本とは一致している異文も少なくはないという、背反した側面にも留意される。此の事実に則すれば、古活字版のみに専ら依拠した本ではないことは明らかであろう。また、三十一の異同個所において、「通考」と全て一致する伝本も存在しない。但、〔無窮〕との一致が際立っていることに注目される。

「通考」所掲経本注本の底本

『老子経通考』に標掲された経本注本の底本が何本であったのかは、陳氏自序にも、闕名撰の加点跋文にも記されておらず、序跋等記事文面から直接的には窺知することはできない。しか

し、本書が撰述された江戸前期寛文年間当時行われた河上公注本として、伝写本、古活字版、及び舶載の明刊本があげられ、藍本は、当然、その何れかに求められる。

渡来明人の撰述ではあるが、在日殆ど半世紀を経た著者最晩年の所為であり、著者が拠用した河上公注本として、本邦に於ける伝来本が想定されても支障は無い。本書に冠せられた「老子経序」が、本邦所伝の本に特有の序文であることは、此の想定を存立させる有力な根拠となろう。そして、刊本としての普及性を念頭に置くならば、其の内で古活字版が、最も可能性の有る候補と考えらる。管見の限りではあるが諸本の異同を検証した結果として、明刊本「世徳」との較差は大きく、伝来の古鈔本諸本と比較しても、予想に違わず、古活字版と極めて近接した関係にあることが明らかになった。

「通考」の経注本文が整定されるに際して、或る特定の一本に依拠したのか、或いは複数の本が参校されたのか、或る一本を主底本として、別の一本若しくは数本が参校されたのか、種々推測されるが、管見伝本の範囲で校勘した限りでは、何れの場合であったのか論証することは難しい。古活字版の内、特に異植字版「活Ⅱ」と極緊密な関係に在ることは慥かとなったが、一方で両本間の異同も少なくはなく、古活字版とは相違しながら、別の伝本と一致している三十一の異文の事例が指摘された。本書「通考」と一致する伝本は異文に拠ってまちまちであるが、特に「無窮」と同文である場合が二〇例と群を抜いて多い事が注目される。また、⑩の異同は古活字版、古鈔本の伝来本とは相違し、「宋版・世徳・道蔵」との一致を示している点で異例である。此れは、明刊本「世徳」が参校されたのではなく、当時、「世徳」等と同文の古鈔本が伝存し、その文が採られたと考えるべきであろう。以上の事例を含め総合して推量するならば、少なくとも「活Ⅱ」の転写本である可能性は否定され、古活字版以外の本が参照されたことは認めなければならない。或る特定の一本が底本であったと仮定すれば、古活字版に極めて近似した、現存する古鈔本の内では「無窮」に近い伝写本が、嘗て存在したことが想定されなければならない。

要するに、「通考」所掲の経注本文は、古活字版、特にその異植字版とごく近接した関係にありながらも、それを直接の底本とするのではなく、当時遺存していた伝写本の影響を受けた本文である。その影響を及ぼした本の中には、「無窮」に近い、現在失伝している本が含まれなければならないであろう。若し、

特定の一本が底本とされたのであれば、その本は、古活字版に近く、且つ「無窮」にも親近な関係にある伝写本でなければならない。従って、古活字版以後の本文として、「通考」もまた「天理」と同様に、古活字版及びそれと親近な関係にある伝本群内の一本として位置づけることができるであろう。

要約

古活字版以後の河上公注本として、「天理」即ち闕名者撰『老子道徳経河上公解〔抄〕』（存道経三十七章）及び、「通考」即ち明陳元贇注『老子道徳経』（序題『老子経通考』）両書の標掲経注本文を取り上げ、古活字版本文との関係を検討してきた。前者は、寛永四年（一六二七）の成立書写にかかり、古活字版刊行後、差程年代の開きは無く、後者は寛文一〇年（一六七〇）の自序成書、延寳八年（一六八〇）の刊行で、古活字版の稀覯性が未だ生じていないと思われる江戸前期に当たる。その故に、何れも、古活字版が底本である蓋然性は高いと予想された。それと共に、実は、古活字版との関係如何の問題と関連し、河上公注本伝流史にあって、本邦伝来の古鈔本の系統を引く本文であることの立証が、期待されていたのである。

本文異同の検証の結果、予想通り、両本ともに、他の伝来諸本と比較して、古活字版、特にその異植字版との極めて近い関係が顕かとなった。しかし、一方で、底本あるいは直接の祖本とは見做されない程の異同も確認された。此の事実に拠り、古活字版、「天理」、「通考」を含み、古活字版、「天理」、「通考」それぞれの底本をも含み、さらに現在は逸失した類似の本文を持つ伝写本をも含み、本邦伝来本の伝系の中に在って、錯綜した本文系統を集約するかの如き互いに近接した本文を持つ伝本の群類が想定された。其の伝本群に内包される本として、古活字版と「天理」、「通考」との近縁な関係が改めて認識されるのである。更に言うなれば、「通考」は、近世唯一の河上公注本の流布本として、本邦所伝本文の命脈を保ち、後世に繋いだ。『老子』伝流史に於ける特筆されるべき事実であり、その意義は甚大であったと言えよう。

注

1　武内義雄「河上公老子唐本攷」（本稿上注1参照）三明刊本の二系、吉岡義豊『道教経典史論』（東京　道教刊行会　一九五五）第一編第七章六徽宗の万寿道蔵（『吉岡義豊著作集』第三巻　東京　五月書房　一九八八　改版所収）参照。又、王卡『老子道徳経河上公章句』（北京　中華書局　一九九三）付録三老子道徳経河上公章句版本提要、は「匡字減筆、避宋太祖諱、當係從北宋政和刊舊道藏翻刻、其篇第近古、勝於四部叢刊影宋本」と記す。尚、武内は明世徳堂刊本の系統を論じ、明の道蔵本に基づくと仮定し、明蔵が宋蔵に出るは明瞭で、宋蔵は宋建安虞氏刊本と近似するはずであるから、世徳堂本は宋建安虞氏刊本と同系であると述べている。後に、武内は『老子の研究』（本稿上注1参照）第五章道徳経の研究方針、三河上公注の経本、において中国で刊行された河上公注本を、道蔵本、宋建安虞氏本、纂図互注本の三種に区別し、その内、道蔵本が最も古い形を存していると推定した。此の想定に異論は無いが、「諸本異同表」から帰納されることは、「宋版」と「世徳」との近似が明白である一方で、「道蔵」との懸隔は、古鈔本諸本と同程度に大きい事実である（附表8参照）。「世徳」が、「道蔵」に基づくとの仮定は成立しないと考えられる。「道蔵」の本文系統の考察は今後の大きな課題であろう。

2　楠山春樹『老子傳説の研究』（東京　創文社　一九七九）前編老子河上公注の研究第三章河上公注の成立第三節原本河上公注一、を参照。

3　王弼注本としては、「老子道徳經二巻　（魏）王弼注　清紀昀等校清乾隆四〇年（一七七五）序刊（武英殿）木活　武英殿聚珍版」を通行本と見做し、その影印本である「民国五九年（一九七〇）序台北藝文印書館刊無求備齋老子集成續編所収本」を使用する。王本テキストの校勘は未だ充分に行われていないようで、諸本間の異同について具に言及することは難しい。次の校勘を参照した。

武内義雄「老子の研究（下）道徳經析義」―『老子の研究』（東京　改造社　一九二七・六）『全集』第五巻老子篇収載―

波多野太郎「老子王注校正三巻同補遺・続補」―『老子道徳經研究』（東京　国書刊行会　一九七九・一）所収―

蔣錫昌『老子校詁』（四川　成都古籍書店　一九八八・九）影印

一九三七年商務印書館刊鉛印本

4　虞齋口義本の本文は、原則として「老子虞齋口義二巻　宋林希逸撰　闕名者点　寛永四（一六二七）刊（京　安田安昌）　覆（元和）刊古活字版」に拠る。昭和五一年（一九七六）古典研究会刊の影印本（『和刻本諸子大成』第九輯所収）を使用した。

5　島邦男『老子校正』　東京　汲古書院発売　一九七三・一〇

6　道徳眞經玄德纂疏二〇巻　唐玄宗注疏　漢河上公・嚴（遵）・唐李榮注　成玄英疏　唐強思齊編　民国一三（一九二四）刊（上海　涵芬樓）影印明正統刊道蔵本　道蔵第四〇七―四一三冊　に拠る。同書首に「道德眞經玄德纂序」（「乾德二年（九二〇）庚辰降聖節戊申日廣成先生光祿大夫尚書戸部侍郎上柱國蔡國公杜光庭序」）を冠す。各巻巻頭内題に接し「唐玄宗御註并疏／河上公　嚴君平　李榮註／西華法師成玄英疏／濠陽強思齊纂」と題してある。杜光庭序に「弘農強思齊字默越濠陽人也（略）期以譚講之力、少報聖明之恩、手纘所講道德二經疏、採諸家之善者、明皇御註爲宗。蓋取乎文約而義該、詞捷而理當者、勒成二十巻（略）題曰太上老君道德經玄德纂疏」（句点は私設）と。序の年紀前蜀乾德二年（九二〇）を撰述書成年と考えてよいであろう。

7　武内義雄「唐広明元年刻老子道德経に就いて」（『支那學』第二巻五号　一九二二）、『老子原始』（東京　弘文堂　一九二六・一〇）第二章　老子伝本攷上、四　二種河上公本の関係（以上『全集』第五巻老子篇収載）、及び同『老子』（東京　岩波書店　一九三八・三、岩波文庫、『全集』第六巻諸子篇一収載）「はしがき」参照。

8　本稿で言う「その他の助字」とは、旧来的に実字に対する虚字として認識されてきた文字の内、省略可能な補助的な文字のことで、近代文法の品詞としての厳密な定義に従うものではない。

9　河上公注老子の宋刊本には、他に次の二種が現存している。
①音註河上公老子道德經　二巻　〔漢〕河上公章句　題〔宋〕呂祖謙重校　〔南宋〕刊（麻沙　劉通判宅仰高堂）
②纂圖附釋文重言互註老子道德經　二巻　題漢河上公章句　〔南宋〕刊（〔建安〕）　巾箱本
①は、本稿上注30参照。
②は、台北国立中央図書館蔵の一冊、無求備齋老子集成初編に影印されている（同本外題に「纂圖互注老子道德經」とあり、扉裏の刊記に「宋刊纂圖互注五子本景印」とあるのは誤り）。書名冠称のとおり、首に「老子車制圖」が冠され、章句末に、『経典釈文』を取捨した音釈及び、「重言」「互註」と標記し、同書内の他の個所に見える関連文辞、又、別書に見える関係記事を参照引載した、言わば新編本である。後に流布した纂圖互注六子本の先蹤をなす坊刻本であるが、章句内容、配置体裁の面で、なお旧態を保っている。『中国訪書志』『宋元旧本書経眼録』『滂喜斎蔵書記』に著録。
又、宋末に刊行され、元明にかけて覆刻が繰り返されて通行した六子本の纂圖互註老子道德經が数本現存しているが、従来、宋刊、或いは元刊とされてきた本は〔明初〕または〔明前期〕の覆元刊本と鑑定され、宋刊、元刊そのものは未だ確認されていない。此の纂圖互註本は、「宋版」とは、注の配置、内容にわたって、構成上でも大きく様相を異にし、「河上公章句註釋」と題してあるが、テキスト系統上は、別本と見做され、此処で一律に扱う事は適当でない。

10　助字の多寡が伝本系統の別と深く関わる点について、夙に、武内義雄の指摘が有る（「唐広明元年刻老子道德経に就いて」）。武内は「世德」に助辞が少ないのは、江南本（河北本に対して助辞が多いとされる）に拠りながら其の助辞が刪略された結果と推定している。その当否について論証するには、唐碑、敦煌写本、道蔵本を含めた更に綿密な比讐校勘が必要であろう。

11　『老子道德經序訣』は『舊唐書經籍志』『唐書藝文志』に「二巻葛洪撰」として著録。佚書であったが、敦煌本の出現を機に、武内義雄によって初めて復元がなされた。其の全文が『老子原始』第二章老子伝本攷上、二節河上公本の来歴に、後に岩波文庫『老子』の附録として掲載されている。（共に『全集』巻五に収載）。又、大淵忍爾博士は、S七五・P二五八四を底本とし、その他の出土本、道蔵資料を網羅して校合した定本を提供された（『道教史の研究』〈一九六四・三〉第三編三章）。その全文は内容から五段に分けられている（武内義雄は此の第四・五段を一段とし、四段に分けられた）。武内義雄「道德經の注釈書解題」（『老子の研究』〈東京　改造社　一九二七・六〉第七章）、福井康順「老子道德經序訣の形成」（『東洋思想史研究』書籍文物流通会　一九六〇・三〈著作集2〉）、楠山春樹「概説　敦煌本道德經類（本文・注釈・解題）」（『道家思想と道教』　東京　平河出版社　一九九二・七）参照。

12　楠山春樹「本邦旧鈔本『老子河上公注』の序について」（『道家思想と道教』所載）

13　武内義雄『老子の研究』第五章三節河上公注の経本

14　阿部隆一「金沢文庫蔵鎌倉鈔本周易注疏其他雑抄と老子述義の佚文」（『田山方南先生華甲記念論文集』同記念会発行　一九六三・一〇、『遺稿集』第二巻収載）
納富常天「東国仏教における外典の研究と受容三―称名寺湛睿を中心として―」（『金沢文庫研究』二二巻四号通巻二三九号　一九七六・六）
高橋美由紀「伊勢神道の形成と度会行忠―『大元神一秘書』の成立をめぐって―」（『日本思想史学』一二号）
深野孝治「賈大隠著『老子述義』について―附『老子述義』輯佚稿―」（『大正大学大学院研究論集』第一四号　一九九〇・二）

15　この間の事情については本稿上注22所掲の拙稿等参照。

16　『老子経通考』は、日本に於ける撰述書であって、漢籍としては異例に属する。撰注者陳元贇が明人である意味で漢籍と見做されるが、

陳氏は日本在住が永く、尾張藩での事績によって、帰化日本人と考えるならば、準漢籍国書と見做されよう。『國書總目録』に著録される所以であろう。

17 此のことの一端を窺知できる伝本として、東北大学附属図書館蔵の写本一冊が挙げられる。同本は、「無窮」の転写か、其れと祖本を同じくする。天文五年書写並加点奥書本の伝写本で、書写奥書は無いが、書写年代は江戸時代中期以後に下ると見做される。本稿上「対校諸本略解題」6参照。また、東洋文庫蔵古活字版二本の内の一本には、元和八年（一六二二）の清家門弟道順自筆の朱墨の加点に加え、青筆で文化四年（一八〇七）藤原憲（号、山陰）自筆の「世徳」との校合書入れが見られる。

18 江戸時代に於ける河上公注本の渡来に就いて、最も注目されるのは、「世徳」即ち明嘉靖一二年（一五三二）世徳堂顧春刊六子全書本であろう（本稿上「対校諸本略解題」27参照）。

『御文庫目録』利の部寛永一七年（一六四〇）の項に「六子全書」が著録され、世徳堂刊本と推測されるが、その本の所在は確認出来ない。

内閣文庫蔵の林家本一〇冊は桐陰書屋の覆刻本であるが、讀耕齋靖（萬治四年〈一六六一〉没）の旧蔵で、後、享和三年（一八〇三）昌平坂学問所に収蔵されている。

『舶載書目』第八冊に「六子全書八本六十巻」が著録され、其の記載により該書が世徳堂本六子全書であり、『商舶齎来書目』の記載と合わせ考えれば、寶永七年（一七一〇）がその渡来の年である事が判明する。

宮内庁書陵部蔵の三九冊（桐陰書屋覆刻本）は明人謝肇淛（在杭）の旧蔵書で、江戸時代に於ける舶載書である。

名古屋市蓬左文庫蔵本は、『老子道徳經』一冊と『南華眞經』六冊の六子全書零本（桐陰書屋覆刻本）である。

内閣文庫所蔵の林家本『老子道徳經』一冊は六子全書零本。それにはには明和七年（一七七〇）林龍潭（節）の加点並びに一本・古本との校合の書入れが見られる。

又、宮内庁書陵部蔵の古活字版の校合書入れの標記に見える「唐刊」とは、「世徳」のようであり、東洋文庫蔵の古活字版にも「世徳」との校合書入れが見えることは上記の通りである。

世徳堂本の他にも明萬暦一〇年（一五八二）金陵胡東塘刊六子全書（広島市立中央図書館浅野文庫蔵）の舶載が知られ、所収の『老子道徳經』は河上公注である。

清嘉慶九年（一八〇四）姑蘇王氏聚文堂刊の『九子全書』所収の『道徳經評註』は河上公章句本で、『十子全書』所収本はその後印である。幕末に舶載され流布したようで、伝存本は多い。詳細は、注20参照。

19 江戸時代に舶載された老子明清刊本による和刻本とその底本の伝存状況は寡聞の限りでは次の如くである。

太上老子道徳經 二巻附老氏聖紀図一巻 〔明〕何道全注
〔明〕刊 唐 大
二冊東北大学附属図書館蔵 二冊関西大学附属図書館蔵（内藤文庫） 二冊内閣文庫蔵（島田翰旧蔵）（毛利高標旧蔵） 二冊尊経閣文庫蔵 一冊東京大学総合図書館蔵（南葵文庫、森枳園、大槻如電旧蔵） 一冊都立中央図書館蔵（井上文庫、附欠）

同 （題簽「無垢子注老子經」）〔江戸前期〕刊 翻〔明〕刊本 闕名者点
五冊東京大学総合図書館蔵（書題簽） 和 大
尊経閣文庫蔵 合三冊慶應義塾図書館蔵 五冊 二
冊静嘉堂文庫蔵（田中頼庸旧蔵、元文二年識語、書入本）

又 （改題「老子經注解」）寶永六（一七〇八）修（大坂 野村長兵衛） 和 大
四冊蓬左文庫蔵

老子道徳經解 二巻 明釋德清撰
明刊（玉溪菩提庵） 一冊 未見、『（台北）国立中央図書館善本書目』に拠る、伝来本の所在未詳

同

（外題「老子經義解」）二巻首一巻　明釋德清撰
（江戸前期）刊（京）長谷川六兵衛　和　大
四冊大東文化大学図書館蔵（高島文庫）二
冊無窮会図書館蔵（平沼文庫、内田遠湖旧蔵、
書入本）四冊佐賀県立図書館蔵（鍋島家旧
蔵）一冊京都大学附属図書館蔵　一冊東京
大学総合図書館蔵（南葵文庫、大槻如電旧蔵）
館蔵（井上文庫、書入本）合一冊天理図書館蔵　合一冊都立中央図書

又

後印（京）上村次郎右衛門）　和　大
四冊刈谷市立図書館蔵　合一冊無窮会図書館
蔵（神習文庫）二冊筑波大学附属図書館蔵

老子翼

三巻　明焦竑撰　王元貞校
明萬暦一六（一五八八）序刊　唐　大
三冊宮内庁書陵部蔵（紅葉山文庫本）二冊
蓬左文庫蔵（荘子翼八巻四冊と合一帙、寛永
六年買本）

又

修（梅墅石渠閣）　唐　半
三冊京都大学文学部蔵

同

（明末）刊　覆明萬暦一六序年刊本　唐　大
三冊内閣文庫蔵（林羅山旧蔵）二冊都立中
央図書館蔵（井上文庫、書入本）

同

老荘翼註之一
（明末）刊（長庚館）　覆明萬暦一六年序刊本唐　大
三冊尊經閣文庫蔵　三冊東京大学総合図書館
蔵（南葵文庫、大槻如電旧蔵）三冊無窮会図
書館蔵（織田文庫）三冊無窮会図書館蔵
（神習文庫、井上頼囶旧蔵）三冊無窮会図書
館蔵（天淵文庫、森枳園旧蔵、書入本）

（外題「老子翼註」）六巻　明焦竑撰　王元貞校（小
出永安）点
（承応二（一六五三））刊（京）（小嶋市郎右衛門）
翻明萬暦一六年序刊本　老荘翼之一　和　大
六冊斯道文庫蔵（安井文庫、安井息軒自筆書
入）六冊静嘉堂文庫蔵（中村敬宇旧蔵）六
冊九州大学中央図書館蔵（書入本）六冊京

又

都大学人文科学研究所蔵　合三冊神宮文庫蔵
（宮崎文庫）六冊天理図書館蔵　六冊尊經閣
文庫蔵　六冊大東文化大学図書館蔵（高島文
庫）

寛延四（一七五一）修（京　梅村三郎兵衛）
六冊斯道文庫蔵（浜野文庫）四冊宮城県図　和　大
書館蔵（半田文庫、欠首二巻）

又

通修
合三冊東京大学総合図書館蔵（南葵文庫、海　和　大
保漁村自筆書入本）

又

通修
六冊慶應義塾図書館蔵（星文庫）六冊東北　和　大
大学附属図書館蔵（狩野文庫）三冊大東文
化大学図書館蔵（高島文庫）

又

後印（京　勝村治右衛門）　和　大
六冊無窮会図書館蔵（平沼文庫、内田遠湖旧
蔵）

又

後印（京　勝村治右衛門）　和　大
六冊国会図書館蔵

新刻眉公陳先生評註老子雋　明陳繼儒評　張鼐校
（明末）刊（師儉堂蕭氏）　鐫眉
公陳先生評選荘子南華經雋四巻と合一帙　唐　大
一冊斯道文庫蔵

同

（明末）刊（蕭鳴盛）　五子雋所収　覆（明末）師
儉堂蕭氏刊本　唐　大
一冊内閣文庫蔵（高野山釈迦文院旧蔵）

老子辯

（外題「陳眉公老子辯」）二巻　明陳繼儒撰　張鼐
訂（小）幡龍埜（玉斧）校
明和七（一七七〇）刊（京　小幡宗左衛門）　翻
（明末）蕭氏刊五子雋本　和　大
二冊慶應義塾図書館蔵　二冊京都大学人文科
学研究所蔵（書入本）二冊筑波大学附属図

書館蔵（書入本）一冊大阪府立中之島図書館蔵一冊無窮会図書館蔵（平沼文庫、内田遠湖旧蔵）合一冊国会図書館蔵一冊東京大学総合図書館蔵（南葵文庫、大槻如電旧蔵）一冊東北大学附属図書館蔵（書入本）一冊都立中央図書館蔵（井上文庫）

老子道徳経攷異　二巻　清畢沅撰

清乾隆四八（一七八三）刊（畢氏経訓堂）（経訓堂叢書）所収　唐大一冊内閣文庫蔵（昌平坂学問所本）一冊内閣文庫蔵（昌平坂学問所本、文化元年受入れ）二冊都立中央図書館蔵（特別買上文庫）

又　〔後印〕経訓堂二十一種叢書所収　唐大一冊慶應義塾図書館蔵（安西雲煙旧蔵）

同　天保四（一八三三）刊（官版）翻経訓堂叢書本　和大二冊内閣文庫蔵（昌平坂学問所本、天保四年受入）二冊内閣文庫蔵（昌平坂学問所本、天保五年受入）二冊大東文化大学図書館蔵（高島文庫、飯田藩堀氏旧蔵）

又　後印（江戸　出雲寺萬次郎）二冊東京大学総合図書館蔵（南葵文庫、和島田大篁村旧蔵）二冊東北大学附属図書館蔵　二冊天理図書館蔵

又　後印（江戸　山城屋佐兵衛）二冊国会図書館蔵　二冊静嘉堂文庫蔵　和二冊大都立中央図書館蔵（井上文庫）

又　後印　二冊斯道文庫蔵（安井文庫）二冊無窮会図書館蔵（平沼文庫、川合槃山旧蔵）二冊大阪府立中之島図書館蔵　二冊合一冊東京大学総合図書館蔵（森鴎外旧蔵）二冊宮内庁書陵部蔵　二冊大東文化大学図書館蔵（高島文庫）

管見の限りでは次のようである。

道徳経評註　二巻首目一巻　漢河上公章句　明歸有光批閲　文震孟訂正　清嘉慶九（一八〇四）刊同一二（一八〇七）印（姑蘇〔王氏〕聚文堂）九子全書所収　唐大一冊内閣文庫蔵（昌平坂学問所本、嘉永六年受入）

又　〔後印〕（姑蘇〔王氏〕聚文堂）十子全書所収　唐大一冊静嘉堂文庫蔵（緑静堂旧蔵）一冊無窮会図書館蔵（平沼文庫、川合槃山旧蔵）一冊大東文化大学図書館蔵（高島文庫、単行）

渡来の年代は明らかでないが、「天保一四年（一八四三）卯臨時拂落札帳」に「十子全書　弐部／六堂各六冊／百九十匁　重野や／百八十六匁　長ヲカ／百三十八匁六分　安田や」と、弘化四歳（一八四七）未正月作成の『午壱番船書籍元賑』に「十子全書　二部各六套」、嘉永元年（一八四八）申十月作成の『申壱番船書籍元賑』に「十子全書　一部六包」、嘉永三年戊五月作成『酉五番船書籍元賑』に「十子全書　二部各四包」の記録が残っている（以上、大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』参照）。尚、内閣文庫蔵の『九子全書』二三冊は昌平坂学問所嘉永六年新収の書である。

21　武内義雄「河上公老子唐本攷」四、本邦伝来の諸本（『全集』第五巻老子篇収載）に『老子経通考』の伝本系統について、次のような簡潔な言及がある。「体裁は全く河上公本の旧形を改めたれども、其の内容は世徳堂本及び纂図互注本と同じからずして、活字本と一致せり」「元賛の拠れる底本は我邦所伝ものにして彼の土の刻本に本づくにあらず」と。本稿は此の博士の高察を、やや細部に及んで追認し、少しく補足するものである。

22　『老子経通考』の刊行、印行の次第は、現存伝本から判明する限り、以下の如くである。

老子道徳經

（題簽・序題「老子經通考」）四巻　漢河上公章句
明陳元贇注　闕名者点
延宝八（一六八〇）刊（京　板木屋久兵衛）和大
四冊慶應義塾大学図書館蔵　四冊神宮文庫蔵
四冊大東文化大学図書館蔵（高島文庫）
附陳元贇傳（附）梁容若撰
民国五四（一九六五）刊（台北　藝文印書館）
影印延宝八年京板木屋久兵衛刊本　序並上本二四
丁影印大坂西爽堂修本　無求備齋老子集成初編所
収　唐　中二冊

又　同

寶永二（一七〇五）修（京　富倉太兵衛）
四冊静嘉堂文庫蔵（書入本）四冊無窮会図
書館蔵（三宅真軒旧蔵）四冊合一冊東京大
学総合図書館蔵　四冊名古屋市蓬左文庫蔵
四冊刈谷図書館蔵　二冊刈谷図書館蔵（書入
本）二冊筑波大学附属図書館蔵　二冊九州
大学文学部中国哲学研究室蔵　合二冊祐徳稲
荷神社蔵（書入本）　合二冊天理図書館蔵
合一冊天理図書館蔵（伊藤東涯手沢本）

又

〔後印〕加点書跋無し
二冊合一冊国立国会図書館蔵

又

〔題簽「老子道徳經通考」〕
〔通修〕（大坂　西爽堂）
四冊無窮会図書館蔵（神習文庫　井上頼囲旧
蔵、書入本）四冊筑波大学附属図書館蔵
四冊名古屋市鶴舞中央図書館蔵

又

〔後印〕（大坂　西爽堂辻本久兵衛）
合三冊筑波大学附属図書館蔵（林泰輔旧蔵、
書入本）四冊大阪府立中之島図書館蔵　四
冊大阪府立中之島図書館蔵　四冊天理図書館
蔵（書入本）

又

〔後印〕（大坂　星文堂浅野弥兵衛）
合一冊東北大学附属図書館蔵（狩野文庫）
二冊刈谷図書館蔵　二冊都立中央図書館蔵
（井上文庫）

又

（題簽改刻「老子經通考」）
〔後印〕

又

四冊静嘉堂文庫蔵　合二冊叡山文庫（理性院）
蔵
昭和五一（一九七六）刊（東京　汲古書院）影
印静嘉堂文庫蔵延寶八年刊寶永二年修後印本
刻本諸子大成第九輯所収　B5和

又

〔通修〕（京　天王寺屋市郎兵衛）
二冊筑波大学附属図書館蔵

又

〔通修〕（京　尚徳堂堺屋儀兵衛・尚書堂堺屋仁兵
衛）
四冊合一冊東京大学総合図書館蔵（南葵文庫）

その外、愛知学芸大学附属図書館、早稲田大学附属図書館所蔵本が知られるが未見。

江戸時代書林の出版書籍目録を検索すると、延寶三年（一六七五）京毛利文八編刊『今古書籍題林』及びその増補改訂版である貞享二年（一六八五）京西村市良右衛門等修『改正広益書籍目録』に「、三　同（老子）河上公註」と、元禄五年（一六九二）京永田調兵衛等刊『広益書籍目録』に「四　同河上公註」と、元禄一二年（一六九九）刊京永田調兵衛等刊『新版増補書籍目録』に「四　同河上公注」と、元禄九年（一六九六）河内屋利兵衛刊『増益書籍目録大全』及び其の増補版である寶永六年（一七〇九）京丸屋源兵衛修本に「四版木ヤ久　同河上公註　四匁」（振り仮名省略）と、また、同書正徳五年（一七一五）京丸屋源兵衛修本に「四版木ヤ久　同河上公註　六匁」（振り仮名省略）と著録されている。

江戸時代に刊行された老子河上公注本は「通考」以外に考えられないのであるから、これらに著録された「老子河上公注」は同書に他ならないであろう。しかし、此処に示した伝本調査の結果と相応しない著録が認められる。

その著しい矛盾は、延寶三年刊の『今古書籍題林』に著録されていることである。初印本と見られる現存伝本には巻尾の加点跋後に延寶八年九月の紀年月があり、その年を以て刊行年とされている。『今古書籍題

林』の記載に従うならば、刊年は延寶三年以前に遡り、初印本と見做された伝本は延寶八年の後印ということになろう。但、所見の延寶三年刊『古今書籍題林』が延寶八年以後の後印修本である可能性も否定できない。本書の成立は、自序により寛文一〇年（一六七〇）と見做され、延寶八年刊行とすれば、その間の年月の開きが有りすぎるようにも思われるが、暫く、これまでの伝本調査の結果を尊重し、延寶八年を刊年と見做して今後の調査に期待したい。

二つ目の矛盾は、『増益書籍目録大全』の寶永六年及び正徳五年の修訂本に版元として「板木ヤ久」の名が見えることである。「通考」の第一次修本として上記の如く寶永二年修本が知られる。その管見に入れる伝本は全て、加点書跋末の紀年の「延寶八庚申」を削り、「寶永二乙酉」と、「下立賣通千本西へ入町／板木屋／久」を削り「一条通富倉太」と改修されている。従って、現在知られている伝本からは、京富倉太兵衛の寶永二年修本と判断せざるを得ない。此の鑑定が正しければ、寶永六年及び正徳五年の修訂本『増益書籍目録大全』の版元「板木ヤ久」との記載は、修訂の遺漏ということになろう。しかし、版行者名はその儘で紀年のみ「寶永二乙酉」と改められた本が存在すれば、版権が富倉に移行したのは正徳五年以降と考える事も出来る。この点に就いても暫く伝本調査した限りの結果に従うが、なお、博捜検討する必要性を感じる。

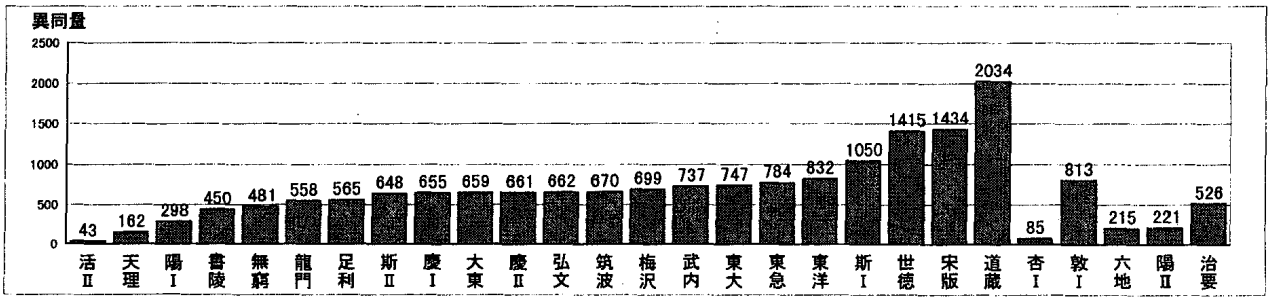
何れにしても、本書は江戸時代中期以後も、京都の板木屋久兵衛から富倉太兵衛へ、次いで大坂の辻本久兵衛、淺野彌兵衛、更に京都の天王寺屋市郎兵衛、堺屋儀兵衛・堺屋仁兵衛と版権者を変えながら、幕末に及び、河上公注本唯一の通行本として、その命脈を保ち続けた。

23　陳元贇の経歴事績については、小松原濤『陳元贇の研究』（東京雄山閣　一九六二・八）に詳しい。また、梁容若「陳元贇傳」（無求備齋老子集成初編所収本末に付す）が有る。

24　武内義雄は、河上公本と王弼本との関係を考證する中で、「繩繩不可名」の「繩」字に対する『經典釋文』の「河上本作繩」の校記を取り上げ、「繩繩」に関しては両本に違いは無い点を指摘し、「王・河の差は只だ一兮字の有無に過ぎず」と述べる（『老子原始』第三章老子伝本攷下、四河上公本と王弼本との関係）。此の所説は、鄭校また朱謙之『老子校釋』にも引証されている。また、島邦男『老子校正』は、「兮」字が無い現行王本を『永楽大典』に拠って「繩繩兮」と校正（武英殿版校記に「永楽大典繩繩下有兮字」と）、逆に河上公本は敦煌本、景福碑、道蔵本に「兮」字が有るのには拠らずに「繩繩」と校正している。

附表１　（活Ⅰと諸本との異同量　巻上）

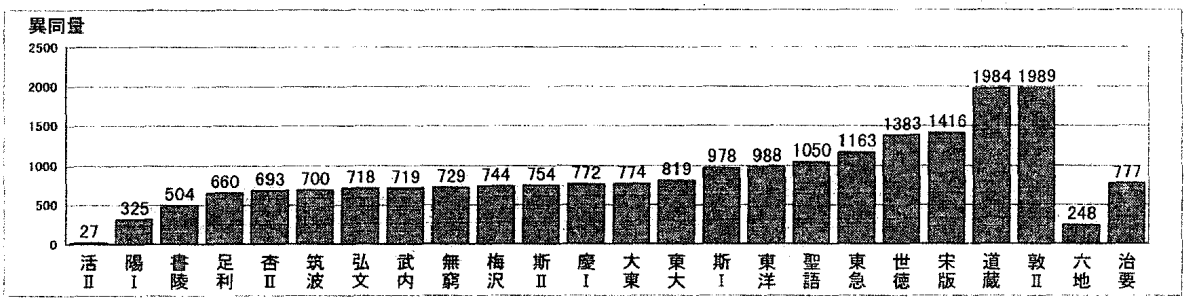
章次	活Ⅱ	天理	陽Ⅰ	書陵	無窮	龍門	足利	斯Ⅱ	慶Ⅰ	大東	慶Ⅱ	弘文	筑波	梅沢	武内	東大	東急	東洋	斯Ⅰ	世徳	宋版	道蔵	杏Ⅰ	敦Ⅰ	六地	陽Ⅱ	治要
1	2	8	6	18	27	16	27	37	31	30	50	39	19	28	36	24	33	23	38	50	47	61	16	—	4	3	—
2	0	4	13	11	9	16	9	26	14	13	10	13	9	11	17	12	28	13	29	31	29	39	—	—	6	4	12
3	0	1	5	11	10	13	14	13	17	19	8	16	11	19	15	15	18	25	32	40	41	36	5	12	7	5	44
4	0	2	4	7	7	7	15	14	8	8	13	9	6	16	13	11	17	17	21	39	41	31	8	18	4	3	—
5	1	2	1	5	9	9	9	11	14	13	7	10	9	20	12	10	14	18	16	17	21	28	7	22	3	5	9
6	3	2	3	12	10	9	16	14	17	16	11	14	9	19	13	11	17	13	15	35	28	49	13	38	3	5	—
7	1	0	6	5	5	11	6	4	8	10	15	8	12	11	11	11	10	6	8	18	17	29	—	25	5	6	—
8	0	0	8	11	12	18	12	13	15	16	9	15	18	14	11	13	16	10	21	15	19	21	0	39	4	5	—
9	2	2	3	7	11	10	11	10	11	10	6	15	12	13	6	6	9	13	12	13	13	19	8	23	3	4	16
10	0	2	11	16	13	27	27	23	20	18	23	43	24	27	23	31	26	22	42	59	66	75	12	87	7	6	—
11	0	13	5	10	10	15	14	13	15	20	16	15	18	12	21	18	16	17	22	37	38	60	—	38	8	8	—
12	0	2	2	5	3	6	8	5	4	4	9	10	7	2	5	11	8	6	5	19	19	34	—	27	3	3	14
13	0	4	14	15	15	15	18	23	21	21	14	27	18	27	21	24	17	20	31	57	60	83	—	63	6	11	—
14	0	13	28	26	33	26	36	29	47	49	39	39	48	34	49	47	38	43	50	64	63	104	—	100	10	8	—
15	0	3	20	33	27	31	33	29	30	26	27	32	31	38	34	32	43	35	38	44	45	78	—	82	9	10	—
16	0	6	8	16	26	20	21	29	29	31	24	20	36	36	24	29	27	37	38	63	62	86	—	78	6	8	—
17	3	5	7	18	8	18	10	18	11	11	15	12	16	12	19	16	21	17	33	34	37	49	—	49	6	4	17
18	0	2	1	7	5	4	4	6	6	6	9	8	9	10	5	9	14	11	10	34	31	49	—	28	5	7	—
19	8	12	6	12	19	12	14	14	25	25	21	11	25	27	27	23	26	31	28	49	50	59	—	54	5	4	36
20	0	6	15	16	22	26	25	30	26	26	31	26	37	47	33	35	53	44	66	72	70	112	—	30	12	20	—
21	1	2	8	10	5	16	11	19	16	15	22	13	14	8	8	10	5	12	24	32	34	61	—	—	0	0	—
22	2	6	6	11	16	13	16	15	16	17	28	20	18	24	21	21	21	25	37	35	41	61	—	—	7	6	47
23	0	8	3	6	9	8	6	12	10	8	9	14	9	26	14	19	21	15	18	40	40	73	—	—	8	3	24
24	2	2	10	11	9	13	15	16	15	16	9	15	13	12	16	15	21	22	15	32	32	47	—	—	6	4	24
25	3	2	30	20	29	35	16	28	36	32	31	21	28	24	40	44	40	40	56	63	67	76	—	—	6	5	33
26	0	8	0	5	3	6	13	14	6	5	7	5	5	12	9	8	13	12	13	22	21	39	—	—	3	3	29
27	4	4	7	12	13	19	11	19	20	17	19	12	17	19	20	27	19	30	45	59	57	56	—	—	9	7	38
28	0	10	13	12	15	16	7	20	17	24	26	32	33	26	38	42	37	45	52	62	64	76	—	—	9	7	33
29	0	3	6	12	15	12	10	15	11	11	15	12	10	9	20	18	18	24	27	25	26	45	—	—	5	6	11
30	2	2	4	12	15	13	18	16	18	21	16	16	17	13	13	19	11	24	21	29	27	41	—	—	5	5	39
31	3	3	12	9	8	10	23	30	28	30	23	21	36	23	41	44	41	49	58	66	64	117	—	—	5	9	68
32	2	2	8	9	9	17	21	13	15	16	14	14	15	20	25	18	21	23	19	22	24	49	2	—	7	10	—
33	2	2	4	5	3	7	8	9	12	10	11	13	12	6	8	12	9	18	23	26	27	42	5	—	3	3	26
34	0	4	7	15	18	21	9	20	19	21	28	19	17	15	16	15	12	26	36	38	40	46	7	—	6	5	—
35	0	3	7	13	13	18	19	18	17	19	22	23	18	12	21	16	16	17	22	28	28	45	—	—	5	4	—
36	0	7	2	10	6	6	13	8	8	8	6	10	15	9	6	8	7	13	8	16	14	27	0	—	6	6	—
37	2	5	5	17	14	19	20	15	22	17	18	20	19	18	26	23	21	16	21	30	31	31	2	—	9	9	6
異同量	43	162	298	450	481	558	565	648	655	659	661	662	670	699	737	747	784	832	1050	1415	1434	2034	85	813	215	221	526



※附表１～４は本稿上に掲載した分を一部訂正して再掲する

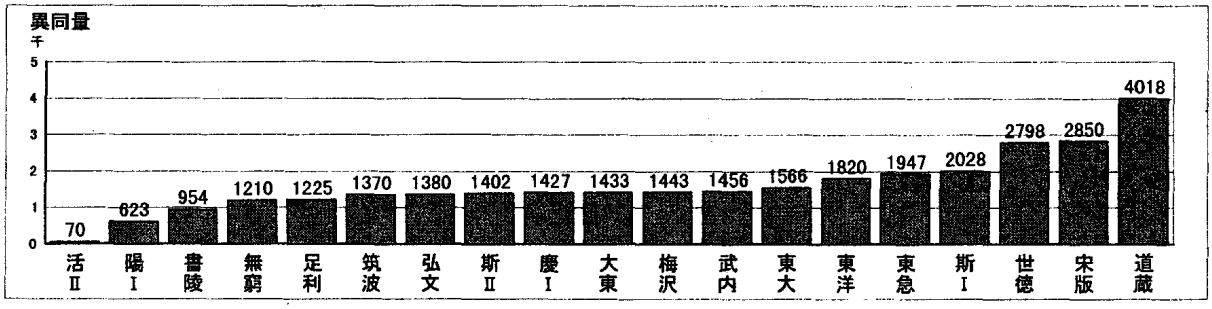
附表２　（活Ⅰと諸本との異同量　巻下）

章次	活Ⅱ	陽Ⅰ	書陵	足利	杏Ⅱ	筑波	弘文	武内	無窮	梅沢	斯Ⅱ	慶Ⅰ	大東	東大	斯Ⅰ	東洋	聖語	東急	世徳	宋版	道蔵	敦Ⅱ	六地	治要
38	0	14	12	4	31	19	26	37	32	16	28	26	24	43	44	41	44	72	60	60	73	—	7	41
39	0	21	28	48	40	43	44	47	42	32	42	58	57	52	50	50	53	63	70	69	76	39	13	76
40	0	4	9	7	11	11	9	14	3	9	12	14	15	14	14	14	14	15	16	18	19	29	6	—
41	0	16	22	24	20	26	15	21	12	32	22	21	21	24	24	33	25	25	38	43	52	56	6	—
42	2	9	17	11	17	14	12	16	19	16	16	14	13	16	26	23	24	30	38	42	63	48	3	26
43	0	13	11	11	14	20	14	13	20	7	22	22	20	15	20	12	16	16	19	24	36	35	9	18
44	0	1	7	15	5	12	13	4	12	10	8	13	10	6	7	6	7	15	18	15	30	31	3	10
45	2	11	10	17	26	25	17	27	13	21	22	28	23	24	24	30	24	32	26	29	40	61	4	20
46	2	2	5	7	7	5	3	7	11	5	6	7	6	10	12	9	10	16	13	14	19	31	4	14
47	0	2	10	6	6	4	4	8	10	13	4	8	9	15	14	15	14	16	21	23	19	21	3	28
48	0	8	11	10	9	10	13	9	9	12	8	14	14	14	15	17	15	18	18	20	28	33	6	23
49	2	17	18	19	21	22	16	12	9	33	18	23	21	19	20	26	20	32	30	31	36	63	6	14
50	2	6	6	17	15	14	15	15	23	14	19	18	19	19	19	15	19	27	45	50	53	58	7	—
51	0	5	7	14	14	18	16	11	14	20	28	17	17	19	12	22	12	19	26	27	35	38	3	0
52	0	10	8	11	13	13	12	12	20	23	17	16	14	21	28	23	27	29	44	42	48	57	4	—
53	0	10	14	24	22	28	23	22	17	22	27	22	20	23	19	27	20	36	36	40	40	51	3	37
54	0	5	7	12	8	8	14	13	7	10	12	9	7	13	17	19	15	27	24	28	40	50	3	27
55	1	2	8	13	13	15	13	11	21	14	12	14	17	13	21	17	21	25	33	36	50	60	5	0
56	2	8	10	18	16	14	18	19	15	19	8	13	14	15	35	27	37	30	42	46	61	47	3	0
57	2	17	19	14	19	11	16	19	17	15	17	21	20	24	28	36	30	29	50	44	61	57	10	61
58	0	4	3	14	12	12	14	10	21	24	10	13	13	13	21	22	21	38	35	32	58	69	4	24
59	4	8	13	19	9	16	19	10	14	13	15	15	19	16	23	26	25	26	32	31	33	49	7	—
60	0	3	5	6	10	11	11	9	13	8	24	11	8	16	16	8	16	36	24	30	55	45	3	17
61	0	8	14	14	14	12	13	17	11	12	18	13	13	16	25	21	25	39	34	38	63	41	5	—
62	0	10	17	24	22	25	25	18	15	26	24	23	27	26	20	30	35	34	42	43	54	57	7	25
63	0	2	8	7	5	8	15	10	6	14	9	17	13	11	7	7	12	8	17	10	16	44	11	18
64	4	19	29	38	38	39	45	47	42	38	37	49	48	45	60	56	46	57	56	56	81	84	16	67
65	0	4	11	14	19	20	19	11	15	14	20	16	17	11	24	21	34	24	35	34	44	64	5	18
66	0	7	6	16	17	14	14	23	17	25	14	17	18	17	25	19	22	15	44	43	47	44	3	15
67	0	10	17	29	15	22	28	29	22	38	22	21	21	25	48	35	56	33	53	51	87	95	9	40
68	0	1	3	4	6	8	12	7	4	4	6	10	8	5	13	13	20	13	16	18	30	28	3	—
69	0	13	21	14	22	17	20	27	11	21	25	23	20	26	21	26	39	25	25	23	48	67	6	12
70	1	8	17	16	16	13	18	11	24	17	21	15	16	14	16	19	18	15	22	26	31	28	8	21
71	0	5	8	13	12	11	9	9	9	12	13	14	14	12	9	15	16	7	14	13	40	17	7	—
72	0	1	3	10	6	13	15	9	12	9	14	16	18	9	19	19	14	13	25	25	41	33	5	—
73	0	4	9	13	16	9	15	15	27	14	20	8	14	15	25	24	24	24	26	26	26	41	4	11
74	0	11	14	12	22	14	16	19	25	14	16	11	14	19	23	21	40	15	32	30	90	45	5	14
75	0	3	7	13	10	14	12	13	17	15	23	12	15	10	19	17	27	16	30	25	26	30	4	26
76	0	2	8	6	6	13	11	7	9	7	5	6	11	23	12	11	3	11	12	12	22	28	5	—
77	0	0	4	4	13	7	6	8	12	13	5	5	6	8	8	22	15	27	17	17	53	30	3	—
78	1	2	10	19	18	20	16	12	11	17	15	12	17	23	25	22	24	30	40	45	55	42	4	—
79	2	9	17	29	22	18	18	22	21	16	22	27	23	19	14	22	16	23	13	14	23	27	5	18
80	0	3	9	11	20	18	18	25	30	18	15	23	23	26	29	27	27	30	35	35	43	62	6	45
81	0	7	12	13	16	14	16	14	15	12	13	17	17	15	27	23	28	32	37	38	39	54	5	11
異同量	27	325	504	660	693	700	718	719	729	744	754	772	774	819	978	988	1050	1163	1383	1416	1984	1989	248	777



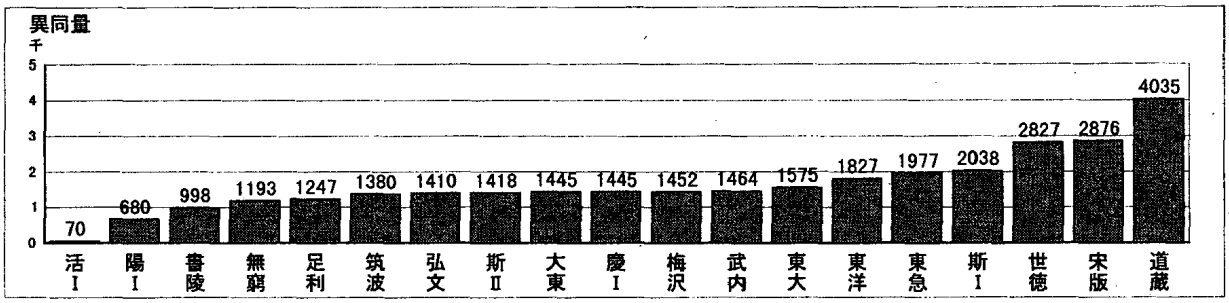
附表３　（活Ⅰと諸本との異同量　巻上下）

	活Ⅱ	陽Ⅰ	書陵	無窮	足利	筑波	弘文	斯Ⅱ	慶Ⅰ	大東	梅沢	武内	東大	東洋	東急	斯Ⅰ	世徳	宋版	道蔵
巻上	43	298	450	481	565	670	662	648	655	659	699	737	747	832	784	1050	1415	1434	2034
巻下	27	325	504	729	660	700	718	754	772	774	744	719	819	988	1163	978	1383	1416	1984
異同量	70	623	954	1210	1225	1370	1380	1402	1427	1433	1443	1456	1566	1820	1947	2028	2798	2850	4018



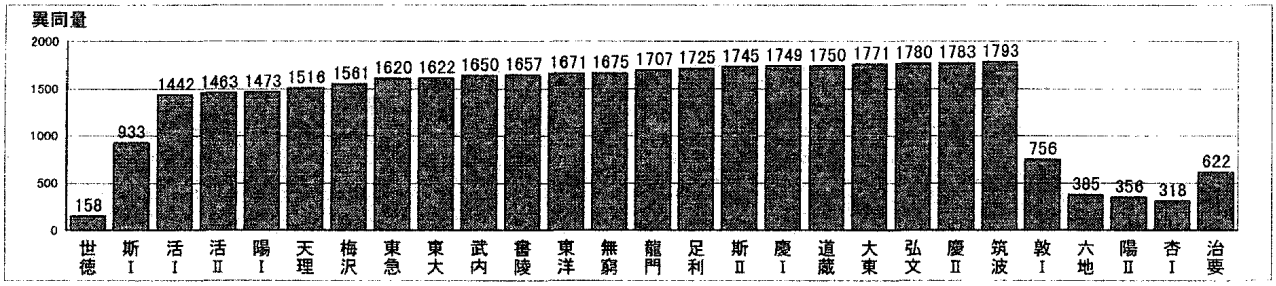
附表４　（活Ⅱと諸本との異同量　巻上下）

	活Ⅰ	陽Ⅰ	書陵	無窮	足利	筑波	弘文	斯Ⅱ	大東	慶Ⅰ	梅沢	武内	東大	東洋	東急	斯Ⅰ	世徳	宋版	道蔵
巻上	43	336	479	477	578	677	677	659	672	668	705	744	757	839	800	1060	1439	1456	2050
巻下	27	344	519	716	669	703	733	759	773	777	747	720	818	988	1177	978	1388	1420	1985
異同量	70	680	998	1193	1247	1380	1410	1418	1445	1445	1452	1464	1575	1827	1977	2038	2827	2876	4035



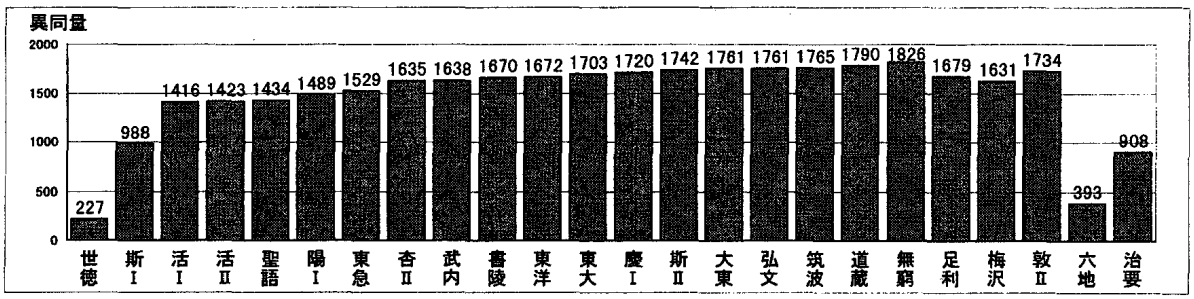
附表6　（宋版と諸本との異同量　巻上）

章次	世徳	斯Ⅰ	活Ⅰ	活Ⅱ	陽Ⅰ	天理	梅沢	東急	東大	武内	書陵	東洋	無窮	龍門	足利	斯Ⅱ	慶Ⅰ	道蔵	大東	弘文	慶Ⅱ	筑波	敦Ⅰ	六地	陽Ⅱ	杏Ⅰ	治要
1	11	36	47	49	48	55	48	49	59	72	54	64	60	54	55	69	69	63	68	64	76	65	—	9	8	46	—
2	4	16	29	29	34	30	36	37	31	36	34	29	34	31	34	45	39	32	40	38	37	32	—	18	16	—	10
3	1	17	41	41	40	40	40	39	40	46	40	42	47	44	49	48	50	30	52	47	47	46	8	11	9	34	46
4	5	20	41	41	39	42	41	40	38	32	40	36	46	40	52	55	43	29	43	46	40	41	29	9	8	45	—
5	5	5	21	22	20	19	23	23	19	21	24	21	26	26	24	28	29	25	30	27	24	26	19	5	3	24	12
6	11	17	28	31	25	30	27	27	29	29	32	25	30	27	30	28	27	43	26	30	27	29	32	7	5	27	—
7	5	11	17	18	17	17	26	25	24	24	20	19	22	24	20	21	21	27	25	25	26	27	20	4	7	—	—
8	4	6	19	19	21	19	29	25	24	22	26	19	31	29	31	22	26	16	26	34	25	35	30	7	8	1	—
9	2	5	13	14	10	11	10	10	11	15	18	18	14	17	18	15	18	12	17	16	15	23	16	4	3	15	11
10	13	35	68	68	58	70	72	76	68	65	74	62	74	75	73	68	65	78	65	91	69	74	96	22	21	47	—
11	6	26	38	38	39	43	42	40	42	43	45	45	46	48	48	45	47	45	50	43	50	46	42	8	8	—	—
12	0	20	19	19	21	17	21	25	19	22	22	23	22	23	27	24	23	17	23	23	20	26	20	3	3	—	24
13	3	46	60	60	61	60	62	72	58	63	68	64	65	62	68	65	67	61	67	73	62	64	46	17	15	—	—
14	2	49	64	64	83	73	69	77	84	89	75	84	86	73	89	82	99	82	99	93	87	96	84	18	16	—	—
15	5	34	45	45	62	43	70	72	59	62	63	63	63	70	68	62	68	71	66	66	65	67	78	14	13	—	—
16	3	48	62	62	67	67	64	54	65	67	73	71	70	73	66	66	67	86	68	66	74	76	75	12	11	—	—
17	5	22	37	40	34	38	39	36	41	37	47	36	45	45	39	45	40	44	40	41	42	39	48	12	10	—	10
18	5	26	32	32	33	34	31	32	35	37	38	40	37	36	36	36	38	32	38	40	38	39	24	9	7	—	—
19	1	29	50	52	50	54	55	54	50	50	54	51	57	53	56	56	56	42	56	55	59	61	53	5	4	—	45
20	6	45	70	70	71	68	74	86	84	80	71	85	74	79	78	75	77	69	77	73	74	82	36	21	25	—	—
21	3	26	36	37	39	38	38	41	37	39	40	37	37	47	39	45	43	55	42	41	52	44	—	7	4	—	—
22	6	40	41	42	37	43	42	41	37	41	44	39	47	44	44	40	43	52	42	47	57	46	—	4	3	—	59
23	0	45	40	40	43	48	46	43	43	40	46	49	47	48	46	48	44	77	48	50	49	49	—	13	9	—	26
24	6	23	32	34	32	34	36	41	41	42	33	48	39	35	40	42	37	39	38	41	35	41	—	8	7	—	30
25	8	39	67	70	75	65	67	75	75	83	79	79	78	84	69	75	81	72	79	78	84	82	—	8	3	—	57
26	3	16	21	21	21	28	29	30	25	26	26	23	24	27	34	34	27	40	26	26	28	22	—	8	8	—	28
27	4	28	57	57	62	57	58	54	62	59	61	67	62	70	63	66	68	53	70	61	64	68	—	25	23	—	36
28	7	30	64	64	62	74	67	80	78	73	67	75	64	69	67	69	66	76	73	77	77	76	—	9	9	—	38
29	1	11	26	26	29	27	25	34	32	34	35	34	35	35	34	39	35	28	35	32	39	34	—	7	4	—	21
30	4	24	27	29	31	29	32	38	40	34	39	43	34	39	36	36	39	35	42	37	43	38	—	9	9	—	40
31	4	44	66	65	69	67	61	55	85	81	72	83	68	72	86	94	88	90	93	85	85	86	—	22	28	—	89
32	3	20	24	26	28	26	34	37	34	32	29	35	29	35	41	33	33	50	35	32	34	35	—	8	11	8	—
33	1	15	27	27	29	27	25	27	28	26	31	30	29	31	28	31	30	39	28	33	31	34	—	5	5	27	27
34	2	22	40	40	4	44	48	50	44	45	52	47	57	56	49	52	56	45	56	57	63	53	—	12	11	39	—
35	4	10	28	28	31	29	30	26	32	33	29	37	27	32	33	34	31	39	33	36	36	32	—	5	4	—	—
36	2	6	14	14	12	21	19	13	18	16	20	23	16	16	23	18	18	25	18	20	16	25	—	6	6	2	—
37	3	21	31	29	36	29	25	36	31	34	36	25	33	38	32	34	41	31	37	36	33	34	—	14	12	3	13
異同量	158	933	1442	1463	1473	1516	1561	1620	1622	1650	1657	1671	1675	1707	1725	1745	1749	1750	1771	1780	1783	1793	756	385	356	318	622



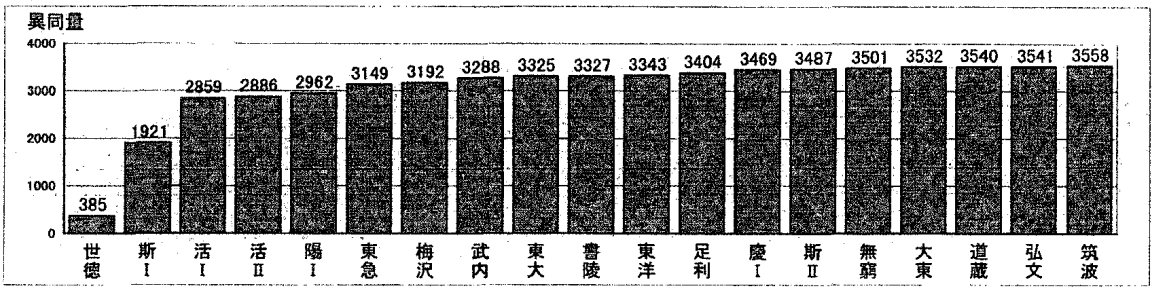
附表７　（宋版と諸本との異同量　巻下）

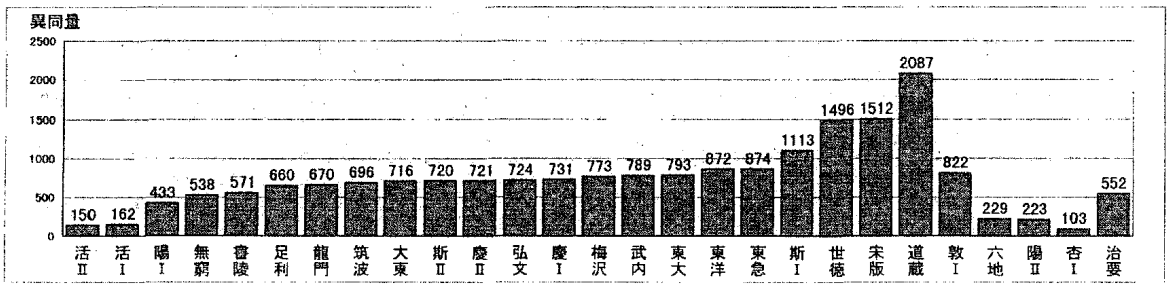
章次	世德	斯Ⅰ	活Ⅰ	活Ⅱ	聖語	陽Ⅰ	東急	杏Ⅱ	武内	書陵	東洋	東大	慶Ⅰ	斯Ⅱ	大東	弘文	筑波	道蔵	無窮	足利	梅沢	敦Ⅱ	六地	治要
38	0	50	60	60	54	69	60	62	60	66	58	66	60	57	58	59	68	62	69	20	39	—	16	46
39	7	82	69	69	84	79	76	78	89	80	80	98	88	80	88	78	80	78	92	82	60	29	24	74
40	2	9	18	18	9	14	25	21	20	23	20	18	24	24	22	23	21	20	21	21	19	27	6	—
41	5	31	43	43	30	49	42	33	40	55	38	42	51	47	52	52	56	38	47	55	53	42	12	—
42	6	24	42	42	24	47	42	47	48	47	47	48	46	48	45	52	48	61	47	49	42	41	6	34
43	10	22	24	24	24	25	31	26	25	33	24	27	34	33	36	32	37	41	44	35	29	33	11	28
44	3	16	15	15	12	15	22	18	19	21	17	21	25	20	23	24	25	34	21	23	20	29	3	21
45	4	24	29	27	24	30	41	34	40	35	39	39	36	38	34	38	37	40	38	34	42	54	4	39
46	1	10	14	16	8	14	13	14	13	14	13	16	14	13	13	16	14	23	20	16	13	26	6	15
47	8	17	23	23	17	23	21	28	29	30	30	28	29	25	30	27	27	29	31	25	24	24	8	33
48	7	11	20	20	11	19	31	20	20	30	21	24	21	21	22	28	23	27	26	24	29	23	8	20
49	1	20	31	29	16	36	23	38	29	37	33	36	38	35	36	39	39	12	33	36	48	38	10	9
50	11	43	50	51	43	54	44	56	59	54	59	57	64	65	65	57	60	45	59	65	60	57	17	—
51	3	21	27	27	21	28	22	29	27	30	34	36	30	41	30	29	33	17	28	27	30	32	4	8
52	6	30	42	42	29	46	30	53	48	48	49	45	52	49	50	44	53	31	58	45	42	40	11	—
53	10	41	40	40	42	46	37	44	44	52	47	45	42	46	42	46	46	43	45	51	50	39	7	35
54	6	27	28	28	29	27	39	30	31	27	33	32	33	34	31	38	36	40	29	32	30	50	9	25
55	10	31	36	36	32	37	47	42	39	43	42	40	46	41	48	44	47	46	44	44	43	59	11	—
56	10	23	46	48	25	46	32	46	41	47	47	45	47	46	48	52	48	48	45	44	51	34	7	—
57	10	30	44	46	32	49	48	51	49	53	60	56	51	45	50	50	47	52	51	46	53	55	11	71
58	11	19	32	32	19	32	36	36	34	35	34	37	38	40	41	36	44	53	45	36	44	56	8	19
59	7	15	31	35	13	32	25	36	33	34	39	35	38	40	44	34	44	16	41	33	35	34	5	—
60	6	22	30	30	22	31	41	34	31	35	30	38	33	40	32	37	33	48	38	36	36	47	10	29
61	4	14	38	38	14	35	35	44	44	43	42	43	37	40	39	41	42	52	38	42	37	32	8	—
62	7	27	43	43	41	41	41	49	45	48	45	49	54	53	58	60	58	51	48	55	45	45	10	19
63	9	7	10	10	18	10	12	13	16	16	13	16	21	19	21	23	18	18	14	17	16	42	11	19
64	8	28	56	56	64	55	73	58	61	55	67	57	73	69	66	79	63	65	82	72	62	60	15	74
65	9	23	34	34	51	38	47	42	38	45	44	38	43	50	45	49	45	46	48	47	39	64	9	30
66	3	42	43	43	51	44	42	51	53	45	49	47	51	49	52	50	50	42	55	51	50	49	7	24
67	6	33	51	51	79	49	52	62	66	56	57	62	62	58	64	63	67	69	67	62	69	79	12	36
68	2	13	18	18	31	19	23	24	23	21	25	19	24	22	26	30	26	32	22	22	22	30	9	—
69	2	14	23	23	51	30	26	37	40	32	35	39	38	40	33	37	31	40	24	31	38	55	6	23
70	4	20	26	25	32	24	25	32	27	33	27	30	29	35	30	34	29	39	39	32	27	32	10	27
71	3	6	13	13	25	14	12	21	18	17	18	17	19	22	21	22	22	36	18	22	21	12	5	—
72	0	21	25	25	26	26	30	27	28	28	36	30	34	32	36	31	31	36	35	31	30	34	5	—
73	2	11	26	26	42	28	28	34	33	35	34	35	26	34	32	35	29	32	49	33	30	29	5	15
74	2	17	30	30	56	32	37	39	45	38	47	45	37	34	40	38	40	81	47	34	40	53	11	23
75	5	11	25	25	36	28	23	31	34	32	35	31	33	48	36	33	35	21	40	38	27	25	10	40
76	4	4	12	12	15	10	18	18	11	16	15	26	18	17	23	23	25	30	21	18	19	28	5	—
77	0	9	17	17	27	17	30	28	25	21	33	25	22	22	23	23	24	51	29	21	24	28	7	—
78	5	20	45	44	46	43	39	46	52	47	47	57	48	55	53	50	54	52	50	52	48	33	16	—
79	1	8	14	16	24	19	21	26	29	27	26	23	27	26	23	11	18	15	25	33	20	27	5	17
80	4	25	35	35	50	38	49	43	43	40	42	45	42	42	52	47	47	39	52	42	37	49	7	44
81	3	17	38	38	35	41	38	34	39	46	41	40	42	47	48	47	45	39	51	45	38	59	6	11
異同量	227	988	1416	1423	1434	1489	1529	1635	1638	1670	1672	1703	1720	1742	1761	1761	1765	1790	1826	1679	1631	1734	393	908



附表８　（宋版と諸本との異同量　巻上下）

	世徳	斯Ⅰ	活Ⅰ	活Ⅱ	陽Ⅰ	東急	梅沢	武内	東大	書陵	東洋	足利	慶Ⅰ	斯Ⅱ	無窮	大東	道蔵	弘文	筑波
巻上	158	933	1442	1463	1473	1620	1561	1650	1622	1657	1671	1725	1749	1745	1675	1771	1750	1780	1793
巻下	227	988	1417	1423	1489	1529	1631	1638	1703	1670	1672	1679	1720	1742	1826	1761	1790	1761	1765
異同量	385	1921	2859	2886	2962	3149	3192	3288	3325	3327	3343	3404	3469	3487	3501	3532	3540	3541	3558



附表９　（天理と諸本との異同量）

章次	活Ⅱ	活Ⅰ	陽Ⅰ	無窮	書陵	足利	龍門	筑波	大東	斯Ⅱ	慶Ⅱ	弘文	慶Ⅰ	梅沢	武内	東大	東洋	東急	斯Ⅰ	世徳	宋版	道蔵	敦Ⅰ	六地	陽Ⅱ	杏Ⅰ	治要
1	6	8	14	31	26	35	24	23	34	41	58	47	35	36	40	32	31	41	46	58	55	61	—	4	3	20	—
2	4	4	13	7	13	7	16	9	17	23	14	13	16	11	17	12	13	28	29	31	29	38	—	7	7	—	10
3	1	1	6	11	12	15	14	12	20	14	9	15	18	20	16	14	26	19	31	39	40	35	12	7	5	6	45
4	2	2	6	9	9	17	9	8	18	16	15	11	10	18	15	13	19	19	23	41	43	33	18	4	3	10	—
5	3	2	3	11	7	11	1	11	15	13	9	12	16	18	10	8	16	12	14	15	19	30	24	4	4	9	11
6	1	2	5	8	14	18	11	11	18	16	13	16	19	17	11	9	11	15	17	37	30	47	36	3	5	15	—
7	1	0	6	5	5	6	11	12	10	4	15	8	8	11	11	11	6	10	8	18	17	29	25	5	6	—	—
8	0	0	8	12	11	12	18	18	16	13	9	15	15	14	11	13	10	16	21	15	19	21	39	4	5	0	—
9	3	2	1	9	9	13	12	14	12	10	6	15	13	11	8	4	15	7	10	11	11	17	21	4	3	10	16
10	2	2	13	16	18	29	29	26	20	25	25	45	22	29	25	33	24	28	44	63	70	77	92	7	6	12	—
11	13	13	18	22	23	22	28	28	30	26	26	28	27	25	30	31	27	29	27	42	43	57	43	8	8	—	—
12	2	2	4	5	7	10	8	9	6	7	11	12	6	4	7	13	8	10	7	17	17	32	25	3	3	—	15
13	4	4	18	19	19	22	19	18	25	23	18	27	25	31	25	28	24	21	35	57	60	83	59	6	11	—	—
14	13	13	38	42	35	43	33	54	59	34	39	42	57	41	55	52	46	50	55	74	72	111	103	10	8	—	—
15	3	3	21	28	34	34	33	28	27	30	28	33	31	35	31	29	32	40	35	42	43	76	79	11	8	—	—
16	6	6	14	25	21	26	25	34	26	34	23	23	30	40	30	30	42	32	42	69	68	92	83	9	9	—	—
17	4	5	12	7	23	15	23	15	14	21	18	15	14	17	22	19	14	26	28	35	38	46	48	6	4	—	22
18	2	2	3	7	9	6	6	11	8	8	11	10	8	12	7	11	13	16	12	36	33	51	30	5	7	—	—
19	4	12	14	9	14	12	18	19	19	12	19	9	19	23	21	21	25	26	28	53	54	63	54	5	4	—	39
20	6	6	15	23	16	27	22	31	22	28	25	24	22	47	31	31	40	51	64	70	68	111	31	13	21	—	—
21	3	2	10	7	12	13	18	16	17	21	24	15	18	10	6	8	10	7	26	34	36	63	—	0	0	—	—
22	8	6	12	18	17	22	19	14	15	19	26	18	20	30	21	21	25	27	41	39	43	65	—	7	6	—	48
23	8	8	11	17	14	14	16	17	16	16	18	20	18	32	22	27	23	29	26	48	48	78	—	8	3	—	26
24	0	2	12	7	13	17	15	15	18	18	11	17	17	14	18	17	24	23	17	34	34	45	—	6	4	—	26
25	5	2	32	31	22	18	37	30	30	30	33	23	34	26	42	46	42	38	54	61	65	74	—	6	5	—	33
26	8	8	8	11	13	21	14	13	13	22	15	13	14	18	15	14	18	19	21	30	29	47	—	3	3	—	33
27	0	4	11	9	12	7	19	13	13	15	19	8	16	15	16	23	26	19	41	59	57	58	—	9	7	—	36
28	10	10	23	23	16	17	26	27	18	24	20	34	25	36	40	42	45	47	60	72	74	86	—	9	7	—	35
29	3	3	7	16	13	11	13	11	12	16	18	13	12	10	21	19	25	19	28	26	27	46	—	5	6	—	12
30	4	2	6	13	14	16	15	15	19	14	14	14	16	11	11	17	22	9	23	31	29	43	—	7	3	—	41
31	4	3	13	9	10	24	11	37	27	31	24	22	25	24	42	45	50	42	59	67	65	118	—	7	11	—	70
32	0	2	10	7	11	19	19	13	18	11	16	12	17	18	27	20	25	19	21	24	26	50	—	7	10	—	—
33	0	2	6	5	7	10	9	12	12	11	11	15	14	6	10	12	18	9	23	26	27	42	—	3	3	7	26
34	4	4	11	19	19	13	25	17	21	24	28	23	21	19	18	17	28	16	40	42	44	50	—	6	5	11	—
35	3	3	10	10	16	22	19	15	16	17	21	20	18	13	20	15	16	19	23	29	29	47	—	4	5	—	—
36	7	7	9	11	15	18	11	20	13	13	11	15	13	14	13	15	18	14	15	23	21	32	—	5	5	0	—
37	3	5	10	19	22	18	24	20	22	20	21	22	22	17	24	21	15	22	19	28	29	33	—	12	10	3	8
異同量	150	162	433	538	571	660	670	696	716	720	721	724	731	773	789	793	872	874	1113	1496	1512	2087	822	229	223	103	552